

わたしはカミナリ

おびやん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『わたしはカミナリー』

高校三年。最後のインターハイを目前に、わたしは挫折した。

人生も青春もお先真っ暗と思われた矢先にわたしの前に現れたのは、自分を『鬼』だという金髪灼眼の美女、星熊勇儀。

そんな奇妙な出会いをきっかけに、わたしの日常に紛れ込んできた鬼、鬼、そして鬼のオンパレード。その内わたしのおでこにまでいきよき鬼の角が生え始めて――

わたしの日常、どこいっちゃったんでしょか？

◆登場人物イラスト

鳴無響子

鬼人正邪

ミヨシさん

双子（オルガ&マヤ）

→NEW!

書いてる人のTwitter: @undercover | 117

## 目次

1 『わたしはカミナリ』	
1 『鳴無キヨーコときさらぎ駅の怪(上)』	1
2 『鳴無キヨーコときさらぎ駅の怪(下)』	14
3 『猫と双子と弁当と(上)』	33
4 『猫と双子と弁当と(下)』	49
5 『ファストフード・スローアライバル(上)』	62
6 『ファストフード・スローアライバル(下)』	73
7 『夕の街ゆく鬼たちは(上)』	89
8 『夕の街ゆく鬼たちは(下)』	103
9 『よいこの限界(上)』	122
10 『よいこの限界(下)』	138
11 『憤怒(上)』	157
12 『憤怒(下)』	173
2 『私はアマノジャク』	
1 『カラの財布と消えたクラスメート(上)』	190
2 『カラの財布と消えたクラスメート(下)』	201
3 『アマノジャク様、存分に客人をもてなす(上)』	217
4 『アマノジャク様、存分に双子をもてなす(下)』	229
5 『鬼人正邪と旧校舎王国(上)』	252
6 『鬼人正邪と旧校舎王国(下)』	266
7 『願い星が堕ちる速度(上)』	277
8 『願い星が堕ちる速度(下)』	291
9 『虚飾(上)』	309
10 『虚飾(中)』	324

1 1 『虚飾（下）』	341
1 2 『意地と勝手と正邪のゆくえ（上）』	358
1 3 『意地と勝手と正邪のゆくえ（下）』	371
3 『ワタシはノロワレ／ボクはイツワリ』	
序章 『それは世界を置き去りにする速度』	388

1 『わたしはカミナリ』

1 『鳴無キヨーコときささらぎ駅の怪（上）』

何処からともなく噴き出した黒煙は、瞬く間に夜の通りを覆い尽くした。もうもうと渦巻く黒いヴェールの中。青白い電光が瞬く。ぼち、ぼち、と空気を引き裂く鋭い放電音。鉛のように重く立ち込めるそれは、煙というより、意志を持った黒雲のようであった。

「絶対に諦めたりしない。してやらない」

爛々と輝く瞳は瑠璃の深青。夜空を駆けるイナズマの色。黒雲の中から姿を現したそれは血塗れで、おそらくは女で。しかし、逆立つ髪にあらわたとなった額から天を貫くようにそそり立つ二本の角が、彼女が限りなく人間に近く、同時にどうしようもないくらいヒトを超越してしまった存在だということ物語っている。

「確かにわたしはポンコツだ。それでも、確かに夢を見てしまったんだ」

鬼面のごとき憤怒の表情を浮かべた彼女の手には一振りのカタナ。雨混じりの夜風に吹かれてゆらり佇むその姿はもはや鬼。蛇のように彼女の全身を這い回る電光が空気を砂糖のように甘く苦く焦がしていく。突風にブレザーのスカートが舞い上がる。その太ももに描かれたスマイリーが、縫われた口をぐつとゆがめて『敵』を威圧した。

『ぐるぐる』

生物の規格外と対峙するのは、また、『鬼』である。月光に濡れたような銀の毛並みを持つ、巨大な狗<sup>イヌ</sup>。低く唸って女に眈める燃えた瞳。その頭部にも、山羊のごとき振じれ角が毛皮の間から顔を見せていた。

「ここからが、わたしの責任。夢を見て、夢を見させた私の、覚悟の戦いだ」

肉体的なスケールの大きさは、人の外の理に生きる者同士の戦いにおいて意味を成さない。だから大狗が侮ることはなく、女の凜とした眼差しに恐怖が混じることもない。両者から放たれる殺意と戦意が

せめぎあい、雨霞みの戦場に充満していく。

「来い、わんころ。わたしはもう、お前からも夢からも逃げたりはしない」

破れた足と、敗れた夢が。この瞬間、胸の中で白熱している。女に宿ったその力は、まさにカミナリのごとく激しく儂い。空を駆ければ消えるというのに、光を放てば尽きるというのに。それを知って、彼女は尚叫ぶ。

「わたしは」

雷神が力強く地を蹴る。たった一步で世界を変えた鬼。その名は――



「あの、センパイ？ キョーコ先輩ですよ。どうしちゃったんですか？」

かつて学校イチの元気印だった生徒がしだれ柳のように背を丸めて校門を出て行くのを、一人の生徒が呼び止めた。

「え？ ああ、ひさしぶり」

にわか雨の明けた夕空。水はけの悪い舗装路にできた大小の水溜りを踏み荒らすのは、ジャージヤトレーニングウェアに身を包んだ女生徒たちだ。短く切った黒髪を揺らして振り向いた“キョーコ先輩”は、ごった返した生徒達を掻き分けて後輩がやってくるのを見守る。

「どうしたの、暗いよ？」

「あはは。そんなことないよ。考え事してただけ」

「むー。ホント？ キョーコ先輩が考えゴトお？」

“キョーコ先輩”――オトナシ鳴無響子は後輩のいぶかりを笑ってやり過ごそうとしながら、自然と彼女の視線が自分の右足に下りていくのを感じていた。陸上経験者らしく、張りのある健康的な太股に幾重にも巻かれた包帯。若干の居心地の悪さを感じながら、やっぱリスカートを折ったりするもんじゃないなあ、としみじみする。

「その。事故とか故障とかで辛いこととか、あると思うけど。いつだって部室に来ていいんだからね」

「うん。ありがと。きつと遊びにいくから」

「約束だからね。あーもう、こつちもこつちで追い込みかかって、最近結構病んでる子多くてさ。キョーコちゃんが居てくれないと、癒し要素が足りないだよねえ」

子供のように、後輩はぎゅつと抱きついてくる。甘ったるい制汗剤の香りに包まれながら、キョーコは後輩のつむじをぐりぐり揉んでやる。

「たまんねえよお。オツパイでけえなあ。柔らかいなあ」

「おじさんクサイこと言うなあ。もうすぐ部活、始まつちやうよ?」

「もうちよつと……ってワケにもいかないか。新しいブチョー、アレだもんね」

苦い笑みを残して、後輩は手を振りながら部室棟のほうへと駆けていく。それを見送るキョーコの表情も、これ以上ないくらい苦々しい。

「ダメだよ。そういうの」

結局言えなかつた言葉を呟いて踵を返すと、近くの住宅街から漂ってくる夕餉を支度する香りが腹の底をくすぐった。しかし学園の敷地内にはカラスが鳴くから帰りましょ、とはいかない別世界が広がっている。駐輪場には朝の配置のまま銀輪がひしめきあい、授業中よりも生徒の動きが激しい。右を向けば筋トレ、左を向けば走り込み。これが文武両道を謳う名門女子高『T女学院』における日常だった。まして今は七月末のインターハイを射程に捉えた時期。生徒達は一層騒がしくなる。

「大会、か」

極彩色のユニフォームの中。ぼつねんと立つキョーコのブラウスは虚しくなるくらい白い。

「困ったな……」

その白さは、包帯の白さ。

生気の抜けきった表情で足を見下ろしていたキョーコの肩を、叩いたものがいた。

「お待たせ」

「どひゃーッ!?」

「ぐあっ!?」

キョーコの白さは、雑踏の中で相当目立つに違いない。だから校門に車を回した迎え役はすぐにキョーコを見つけてくることが出来たわけだし、すぐに声を掛けることができた。問題は親愛の情を込めた渾身の肩ポンが、完全なる不意打ちとして決まってしまったこと。

「いつ、たああ。何をするんだ。これが親友にすることか」

「こ、コツチのセリフ。それ、わたしが言いたいコトだから!」

キョーコの後頭部に顎を打ち据えられた美人は、切れ長の目尻に涙を浮かべて抗議する。吾妻昂<sup>アスマ スバル</sup>。キョーコとは十年來の付き合いがある親友だ。

「とりあえず……乗りなよ」

「あ、ありがとう」

しきりに顎をさするスバルの愛車は白い軽トラック。特別に車通学を許された彼女が助手席の戸を開け、足の不自由なキョーコに手を貸して乗せてやる間、周囲の生徒達からの視線はもっぱら彼女たちに集中していた。

「ふふ。なんだか興奮しないかい?」

「わたしは、ちよつと居辛いかも」

「悪くないだろう。私たちの仲の良さ、もつと見せつけて行こうじゃないか」

スバルが免許を取ったのも、車を買ったのも、すべてはキョーコのため。キョーコはスバルの寄せる友情に一日として感謝を忘れたことはない。

「ふふ。うふふ。気持ちいいな、キョーコ。ふふ」

ただし、時折その友情が行き過ぎるきらいがあるのが玉に瑕なのだ。



「当てるやろうか」

スバルにとって一日のメインディッシュはキョーコの送迎。授業も部活も言ってしまうえば前菜のようなもので、焦れによってキョーコ



との一時を甘美にする以外の意味は持っていないようだった。

「……………当てるって、何を」

しかし今日ときたらどうだ。心血を注いだハンドルさばきで抜群の乗り心地を保障してやってもダンスの相手は浮かない顔。垂れ流しにしていたラジオをオフにして、まじまじと助手席のキョーコを見つめる。

「キョーコ、お前さ」

「あ、信号青になったよ」

肩を竦めて、スバルはアクセルを踏み込んだ。軽トラックは緩やかにカーブを描いて駅前の大きなスクランブル交差点に滑り込む。

「それで？」

「危ないよ。前見なきや、前。あそこのおばあさん、これから渡るのかな……………」

話題転換を図るキョーコは、あからさまに挙動不審だ。

「正直に話してくれよ」

とうとう車まで降りようとしたキョーコの前でドアをロックするピンが下りる。スバルは地獄の閻魔のように鋭い眼差しを向けた。

「チツルの奴だな？」

「ち、違うよ」

「また憎まれ口を叩かれたんだろ？」

「そんなことないよ。何も無い」

「いいから言ってみろ。何を言われたんだ？」

「……………部外者が部室にいます、士気が落ちるって。あ、でもね、悪いのはやっぱりわた、ひゃっ!？」

乱暴なまでの急ブレーキに、軽トラックの車体が前につんのめった。

「あの恩知らずめ。私がいじめ殺してやろうか」

前後から浴びせられるクラクションをもともせず、スバルは地の底から響くような声で呟いた。ハンドルを握る手は、怒りからの強張りて真っ白になっている。

「チヅルちゃんは正しいよ。わたし、なるべく部室に寄らないようにするから」

「その必要はない。後で説教しとくよ」

話し合いで終わる気がしない。スバルの価値観は、全てがキョーコという存在に繋がっている。彼女は良かれと思うがゆえの行動なのだろうが、陸上部に新しい抗争の火種を蒔いてしまったキョーコは、胃の縮まる思いで膝の上の握りこぶしを見つめる。

「ねえ、チヅルちゃんと仲良くできない？」

チヅル。オオホリチヅル大堀千鶴。二年生にして、生徒会長と陸上部の部長を兼任する才女。かつてキョーコがスパイクの履き方を教えてやった彼女との間には深い溝があり、そしてその溝はキョーコ原理主義者のスバルとの溝でもある。そして恐ろしいことに、その深さは日々更新中であった。

「いいかキョーコ。あんはなくそみたいな奴の言葉に耳を貸すな」

窓枠に肘をつき、キョーコは逃げるように町並みを見つめる。

「……………うん。頑張る」

「頑張るって何をだよ」

「先輩として、出来ることをしてあげたい。チヅルちゃん今大変だろうから」

キョーコの人差し指が太股の包帯の縫い目をなぞる。太股の上でうごめく白い指はひどく官能的だったが、今のスバルの頭は苛立ちと怒りで満たされていた。

「部長のわたしが急に抜けたりしたから。部活と生徒会で、あの子きつと、クタクタだよ」

「あいつは私たちの敵だ。敵なら勝手に潰れればいいじゃないか」

「スーパールーちゃん。敵とか味方とか、そういうのはダメだよ」

急に動きのキレを取り戻したキョーコが、ズビシと音を立てて鼻先に三本指を突きつけてくる。

「うああ。勘弁してくれー!」

長い付き合いの仲で何百回と聞かされてきた文句がこの後に続くことを予期して、スバルは思わずハンドルに額を押し付けた。

「よいこ三原則！」

例えキョーコに刺されても笑って許す自信があったが、これだけは耐え難い。怒りに取って代わって、こめかみをキツツキが突くような頭痛がスバルを襲っていた。

「ひとつ『よいこは決して怒ったりしてはいけない』、ふたつ『よいこは決して人前で泣いちゃいけない』、みつっ——」

「——みつっ『良い子は決して困っている人を見捨てない』だろ？」

「うん。えへへ、よく出来ました」

ウンザリ顔で言葉を遮ったにも関わらず、キョーコは得意顔でスバルの頭を撫でる。

「やれやれ。出たな、伝家の宝刀」

本当に本当に、ウンザリしているのだが。それでもキョーコが褒めてくれるのは嬉しいので、スバルは大人しくされるがままになる。

「そう。大事な約束。わたしと、サキちゃんとの」

「……………サキ先輩とは連絡ついたのか？」

スバルはキョーコが取り出したケータイを一瞥する。赤いレザーのケースに収まった携帯。その待ち受け画面に映るプラチナブロンドの女が、キョーコの肩を抱いて笑いかけている。

「ううん。ゼンゼン」

「そうだよな……………あれは、戻ってくるような人じゃないから」

紅坂<sup>ベニザカ</sup>咲<sup>サキ</sup>を天才と讃えるか、奇人狂人と声を潜めるかは、未だにT女学院の中でも意見が割れている。しかしその境はいつだって紙一重だし、少なからず彼女が天才としての側面をもっていることを疑うものはいない。

『やあ。……、やってる？』

最初に彼女が出没したのは、当時廃部の危機に立たされていた陸上部だった。フラリとやってきてフワリと入部届けを出した直後から始まったそれは、快進撃と言うよりは大量虐殺だった。新記録の樹立に次ぐ樹立。競技会の選手リストから破竹の勢いで一位を叩き落とした彼女は、たった一代でT女学院を陸上の名門校に仕立て上げた。

『それじゃ。後は諸々頼んだからね。おねいちゃんは行く！』

そしてある日を境に、やはりフラリと蒸発。去り際の全力ダツシユひとつ取つても、恐ろしい好タイムを残していった。

「そんなルール、テキトーなサキ先輩が適当に決めただけだろ」

サキとキョーコは、それはそれは仲睦まじい師弟だった。世間一般からすれば、睦まじすぎるといふほどに。

「テキトーじゃないよ。これは絆なの」

「だったらその三原則を決めたサキ先輩は？ 今一番困ってるキョーコを放つて何をしているんだ？」

吐き捨てて、スバルは路肩に車を寄せる。軽トラはいつの間にか駅前の喧騒とは無縁の路地に入り込んでいた。ここまで溜め込んだ毒気を抜くようにスバルが背伸びをしていると、くすくすという笑い声が彼女の耳朵をくすぐった。

「なんだよ」

「なんか、嬉しいなって」

助手席から身を乗り出して、キョーコはスバルの頭を抱く。

「なっ、おいっ……！」

緩めたブラウスの襟元から覗いた肌着の白さに、スバルは思わず息を呑んでいた。

「確かに今は色々大変だけど、わたしは結構幸せだよ。スバルちゃん、わたしのことを真剣に考えてくれるから」

「ひきよう者め」

真っ赤になったまま、ふんすと鼻息を吹いてスバルは唇をとがらせる。

「なんだよ、もう。人がせつかく真面目になってるのに」

キョーコはドアのロックを外す。ここから五分ほど歩けばキョーコが寝泊りする下宿屋がある。

「家までまだ少しある。乗せていこうか？」

「心配しないで。体はもう十分休ませたし、そろそろ復帰目指して頑張らなきゃね」

「復帰か」

スバルは何か言いたげだったが、結局かぶりを振って言葉を呑ん

だ。

「手、貸すよ」

乗ったときと同じようにキョーコを手助けしたスバルは、湿ったアスファルトにキョーコが両足を着いた後も、繋いだままの手をじっと見つめていた。

「なあに？」

「も、もう一度だけっ」

意を決した表情でスバルが両手を広げる。

「……ダメ、かな」

その意図を察して、キョーコは苦笑する。その姿がテディベアみたいで面白かったというのもあったかもしれない。

「いいよ。はい、どうぞ」

抱きしめてやると、スバルの吐息がキョーコの胸元を温めた。無愛想で評判のスバルが、こうして自分にだけ弱いところを見せてくれるのは正直嬉しい。嬉しいのだが、ちよつとばかり長いし、恥ずかしいし、だんだん蒸し暑くなってきた。

「あの一、スバルさん？ 満足した？」

「ご、ごめんー！」

慌てて離れたスバルは、それでも少し名残惜しそうだった。

「明日も迎えに行く」

「うん。助かってます」

愛嬌のある後ろ姿に1度ハザードランプを灯らせて、軽トラが路地の角に姿を消す。手を振って見送ったキョーコも、ややあつて路地の出口へと歩き始めた。もちろん下宿とは正反対の方向だが、それでいい。チツルの言葉やスバルのこと。あてどもなくブラつきながら、あてどもないことを考えたい気分だった。



キョーコの住むK市の空は狭い。特に夏場はとろけるような夕日の下、酔った蜘蛛が作った巣のように入り組んだ電線のシルエツトが黒々と茜空にかかる。K市で電車といえばもっぱら路面電車のことだ。路上に点在するコンクリートの浮島は、その発着駅だった。

「やった。すぐだね」

庇ひさしとベンチだけのシンプルすぎる駅。庇の支柱に据え付けられた  
マルバでんてつ  
“円葉電鉄”と刻印されたプレートをキョーコが指でなぞっている  
と、すぐにベージュとあずき色、そして錆の斑に彩られた路面電車が  
やってきた。

「故障っていうんなら、部品でも持ってきて直せばよかつたんだけ  
どね」

帰宅時だというのに車内はガラ空きの貸切状態。人の目も無いの  
で、キョーコは右腿の包帯を解き始める。そこに現れたのは醜く引き  
つった傷口だ。キョーコが今も人生の下り坂を、谷底を目掛けて転げ  
落ち続けているという、目の逸らしような現実。

「あはは。何かいいことあったのかな？」

滑らかな柔肌に刻まれたグロテスクな半円形の傷口は、見ように  
よっては笑っているように見えなくもない。

「落書きしちゃうぞ。それぞれ」

急にそんなものが自分の体に刻まれていることが何となく許せな  
くなって。ほとんど衝動的に、ペンで傷口を黒くなぞっていった。最  
後に目を描き加えて完成したスマイリーマークを、キョーコはしげし  
げと眺めた。

「ねえキミ、教えてほしいことがあるんだけど」

そこでキョーコは顔を上げ、車内を見渡す。やはり無人だ。虚しい  
くらい、空っぽだ。膝に目を戻して傷口の両端を掴むと、軽く引つ  
張って「むうむう」と真似事と言うのも微妙な腹話術をやってみる。  
「そっか。その口じゃあ喋れないよねえ。じゃあ聞いていてくれるだ  
けでもいいんだけど」

へらへら笑っていたキョーコの顔が、一気に崩れた。喉の奥からこ  
み上げてきた熱い塊が目玉を後ろからぐいぐい押しこめる。膝に置  
いたバッグに顔を埋めて嗚咽を堪えるうちに、必死の指先がケータイ  
を握っていた。

「わたしの」

サキは、どこにいるのだろうか。キョーコのことなど忘れてしまっ

たのだろうか。

「わたしの青春は終わっちゃったのかな」

高校三年。夏。何もかも失った。

「会いたいよ、サキちゃん」

路面電車は結局一人も乗せることなく、トンネルへと差し掛かった。日の光が遮られ、首筋がひんやりとする。心地よい冷房と、適度な揺れ。それらに体を預ける内、キョーコは強烈な睡魔に襲われる。どうせ居眠りしたって構いやしない。市電は環状線。進んでいるように見えても、結局ぐるぐると同じところを回り続けてどこへも行けない。キョーコだって同じだ。



「えくしよいつ」

キョーコは肌寒さに目を覚ました。なにやら複雑怪奇でこちゃこちゃ色が交じり合った夢を見たような気がするが、霞がかったように思い出せない。

「そんなことより、(こ)、(ど)？」

寝起きで頭がぼんやりしているのを差し引いても理解しがたい風景が広がっていた。今まで体を横たえていたベンチから立ち上がる。髪も制服も、霧を吹かれたようにしっとり湿っていることに気付く。背後にそびえる木造の駅舎は市電のそれと比べれば立派なものだが、古い。朽ちていると言っても過言ではない。

「圏外……」

ここまで不気味な状況では殆どお約束のような気がしたので、キョーコはさして気落ちせずライトをホームの外へと向ける。スキと枯れ葉に包まれて、錆び付いたレールが横たわっていた。

「落ち着こう。わたしは電車に乗ってて、考え事してて」  
うとうとして、目を閉じて。

「だからこれは、夢？」

夢は授業の合間に数え切れないほど見てきたが、ここまでのリアリティを感じたことはない。

『きょろぎ駅』

腐食して、穴の開いた看板から辛うじて駅名を拾い上げる。市電の駅にそんなものはない。唾然と開いた口で雨水を受け入れているうちに、冷え切った足のスマイリーがシクシク痛みだした。風に舞い上がるスカートの下で、スマイリーは笑っている。キョーコの困惑を、その不運のあまりを。

——これは紛れもない現実だぜ。

彼の口は縫い合わせられていたが、キョーコはその言葉を確かに聞いたような気がした。

「寒い、なあ」

痛みも冷えも、耐え難いものとなってきたのでキョーコは駅の中に避難することにした。思ったよりも長い間雨風の下に転がされていたようで、歩くたびに節々がギシリと音を立てた。

「だれ」

不意に、駅舎の中に視線を感じた。

「ひっ！」

その源を探して、キョーコはひしゃげた悲鳴を上げる。赤い目。熟しきったほおずきのように真っ赤な二つの瞳が、駅舎のガラス戸の向こうからキョーコを見つめていた。それが間を置かずして闇に溶け込むように消えていった後も、キョーコは凍りついたように動くことができなかった。戸にかけた手が、小刻みに震えている。アレは、人なのか？ それとも？

「は入ります、よ？」

駅舎の外と中、どちらが安全なのだろう。少し考えて、結局キョーコは後者を選ぶ。外の暗闇の中に何が潜んでいるか分からないし、中に何が潜んでいるにせよ、その正体を確かめた方がいい気がする。それに、そろそろ寒さが限界だった。

「入るからね」

返事には期待していない。薄明りの中、キョーコのローファーは慎重に板目を踏み分けた。床板は軽く爪先を載せただけで軋む。戦前からあってもおかしくないダルマストーブや、積み上げられた用途の



分らないガラクタを支えているのが不思議なくらい、穴だらけの床はガタがきていた。

「おーいー！」

暗がりにはキョーコは呼びかける。少し待って、もう一度。そこでようやくキョーコの肩から力が抜けた。兎にも角にも風が当たらない分、寒さが和らぐ。そして緊張も。

すっかり弛緩したキョーコがグリーンの上張りつきのソファに腰掛けた瞬間、煙幕のように埃が舞い上がり、得体の知れない黒虫の大群がソファの隙間という隙間から這い出して床板の隙間へと潜り込んでいった。

「うああ、サイアクだよっ、ごほっ、うへっ」

涙目で逃げ遅れの一匹をブラウスの襟から弾き落とす。芋虫とも百足とも判別つかない、とにかく人を不快にさせるためだけに生まれてきたような黒い虫は身をくねらせてあちこち逃げ回ったので、ちくちくした脚が肌をさする感覚にキョーコは気が遠くなりかける。胸ポケットに潜り込もうとしたその尻尾をようやく捕まえて投げ捨てようとして、キョーコはそれを見つけた。

「え」

駅舎のドアが勢いよく開いた。とたんに強い風と銃弾のような勢いの雨粒が吹き付けてくる。だが、得体の知れない虫が激しく悶えながら黒い煙となって霧散するのも、何もかも。キョーコがその後ろ姿を見た瞬間、どうでもいいことになってしまった。

「——サキ、ちゃん？」

白いワンピースの後姿。風にあおられたプラチナブロンドの隙間から束の間に露わとなった口元は、笑っているように見えた。

## 2 『鳴無キョーコとききさらぎ駅の怪（下）』

「お願い、待ってー！」

駅を出て走り出せば、石つぶてのように硬い雨粒が全身を打ち付けてくる。月も星もない無明の空の下で、明かりらしい明かりと言えれば、手元のケータイが放つ頼りないライトだけだ。それでもサキを追いかけるキョーコには、彼女の後姿だけがはつきりと見える。

「サキちゃん。ずっと待っていたんだよ。ずっと、探してたんだ！」

雨になびくプラチナブロード。模範生徒という肩書がついて回った彼女がすっかり脱色して登校してきたあの日のことを、キョーコは今でも思い出せる。セツケンの匂いも、体の柔らかさも、何一つ忘れていない。だというのに、サキの後ろ姿はどうしようもなく遠く霞んでいるのだ。

「速いよ、サキちゃん。速すぎるよ……っ！」

肺も脚も、爆発しそうだ。サキが速いだけではない。キョーコが遅すぎる。

「ついておいで。キョーコちゃんなら出来るから」

自分の発する喘ぎ声の間に聞こえたのは、果たしてサキの声だったのだろうか。キョーコにはもう、何も分からない。

「話したいことが沢山あるの。言えなかったことが沢山あるの」

これが現実かどうかも、何故自分が泣いているのかも、分からないのだ。出来るのは壊れた体に走れという命令を下し続けることだけ。

「あうっ」

それも長くは続かない。太股の傷に錐をねじ込まれたような痛みを感じた瞬間、キョーコは脚をもつれさせ、前のめりに転がっていた。ろくに受身も取れずに顔面を擦りむきながら、砂利と血と、涙を味わう。

「あなたが消えたのは……わたしが、カミナリになれなかったから？」

サキの姿をした幻影は、かつてのように手を差し伸べてはくれない。

「わたしは、よいこになれなかったのかな」

見捨てられた。キョーコは地面を這って、慈悲を乞うように諸手を伸ばす。幻影はスキの穂のように闇の中に散って、消えていった。キョーコはどうすることもできないで、うずくまる。胸の中に、ぼっかりと虚無が口を開けていた。



どれくらい、じっとしていたのだろう。

「ぐるる」

風と雨に翻られるままだったキョーコを現実に取り戻したのは、背後から放たれた気配だった。

例えるなら生ぬるく、えづくような香りの風。未だかつて味わったことのない違和感の正体が自分に対する明確な殺意であることを悟った瞬間、闇の中から白刃が飛び出した。

「痛ッ!」

とっさに飛び上がろうとしたキョーコの脚に痛みの棘トゲが刺さる。濡れて滑る石畳の上に体を叩きつけられたが、結果的にそれは正解だった。

切り裂かれた黒髪が一束舞う。キョーコの首筋をかすめていったものは月光のように輝く銀の毛並みだった。

「い……イヌ?」

キョーコの背ほどもある刃渡りのカタナを啜え、軽自動車ほどもあるうかという体軀を誇ってはいたものの、それは間違いなく、イヌ狗だ。「おん」

碧の眼をすつと細め、大狗は身を低く屈める。その大口に、冗談のように長い野太刀を咥えている。

「じよ、冗談だよ。ホラ、おねえさんお菓子持つてるよ、は、はは——ひいつ!」

得物が木の棒ならば、まだ好意的に解釈する余地があった。しかし残念ながら大狗が「とってこい」をしたいわけでないことは明らかだ。またも

キョーコの首筋を狙った刃が、しゃがんだ彼女の頬を僅かに裂いて通り過ぎる。

「ぐるぐるう」

「あ、ひゃっー!」

赤い血の色は嘘をつかない。これは現実で、間違いなくキョーコは命の瀬戸際に立たされている。

脚の痛みも忘れて脱兎のごとく駆け出したキョーコを尻目に、大狗は優雅なほど緩慢な仕草で毛をつくろうと、闇の空に高く飛び上がる。野獣にはありえない冷静さを見せ付けながら、銀の死神は獲物を狩り立てる。

「逃げなきや、殺されちゃう」

石柱の影に隠れて、キョーコは息を潜める。

「ここにいれば大丈夫。きつと、絶対」

闇に少しづつ慣れてきた目に見えるのは、無数の石柱の輪郭だった。無我夢中で逃げ続けるうちに奇妙な場所に迷い込んだようだが、運はほんの少し、キョーコに味方したのかもしれない。こうして物陰で息を殺していれば、あの犬もそうやすやすと彼女を見つけることはできない。

「あ——あ?!」

そんな甘い考えをあざ笑うように、キョーコの顔のすぐ横から刃の切っ先が飛び出した。

「るるる。うるるる」

石柱がぐらりと揺れる。刃を軸に石の塊を引きずり倒すなんて、カタナの強度も、それを振るう大狗の怪力も異常と言うほかない。辛うじて岩陰から滑り出したキョーコの背を、粉々に砕けた柱の破片が叩く。

「どい、どい」

すぐに来ると思われた追撃は、しかし、いつまで待っても襲ってこない。

あたりを見回したキョーコの前で、銀の尻尾が石柱の物陰に消えていった。直後、轟音を立ててその柱が斜に切断される。その隣の柱も、そのまた隣の柱も。間を置いて、背後で数本の石柱が崩れ落ちる。

「やだ」

あれほど心強かった石の柱は、今では殺人者の隠れ蓑でしかない。「やめて。ねえ、お願いだから！」

言葉くらいでアレが手を休めるはずがないのはキョーコには分かっている。だが、叫ばないと気がへんになりそうだった。あの大狗は遊んでいる。恐怖でという檻で獲物を閉じ込めて、弱っていく姿をじっと観察しているのだ。

やがて視界の中で最後の柱が切り倒された直後、不気味なまでの静寂があたりを満たした。

「うるるる」

唸り声だけが聞こえる。

「るるる」

雨に濡れた床を肉球が擦る音。生臭い血のにおい。音と気配だけが、ぐるぐると回っている。

「うわああっ！」

緊張が極限に達した瞬間、闇の中から大きな赤い口が飛び出してきた。すっかり身が竦んだキョーコを苦もなく地面に押さえ込み、大狗はカタナの柄を吐き捨てた。キョーコの鼻先で、シユレッツダーの刃のように立ち並ぶ牙が火花を散らす。食べる気なのだ、キョーコを。

「や、やだよっ、やめろよ！」

降ってくるどろどろの涎が首筋を濡らす。溺れそうだ。

「いやだ、お願い。死にたくない——助けてよ、サキちゃん！」

「ぎゃうんっ」

捕食者の愉悦に歪んだ大狗の顔が、大きくひしゃげた。キョーコを粉々に引きちぎるはずだった大顎が目の前で粉碎されていく。歯茎が裂け、弾け跳んだ牙がキョーコの額をかすめる。真っ赤な血の帯を引きながら大狗が闇の中へ跳んでいく姿が、妙にゆっくりとキョーコの眼に焼きつく。

「御呼びに預かり堂々参上ッ！」

あまりに大きすぎるものを、人は瞬時に認識できないという。

「怪力乱神を操る最強の悪鬼、ホシグマ ユウギ星熊勇儀サマたあ、あたしのことさ!!」

目の前のものが、正にそれだ。剛拳一撃で大狗すら粉碎した怪力の

持ち主はキョーコの前で大見得を切って見せる。大木のような足が地面を踏み鳴らすと、地球が揺れたような気がした。

「迷子かい？　こんなところに迷い込むなんて、あんた、本当に人間？」

「あ、あの……あの、その、あのう……」

巨人と話した経験はキョーコにない。しどろもどろで、言葉を探した。

「サキちゃん、ですか」

大柄な人影が首を捻ったのが、辛うじて分かった。

「違うね。あたしの名前は星熊勇儀。さつきも名乗ったろう」

「その声、女の、人？」

「そうだよ。これでも結構自信あるんだけど。分からないかい？」

雷鳴のような笑い声が降ってきた。

彼女がしゃがみ込んできて初めて分かる。美人だ。固化化した炎のような、熱く、危うげに研ぎ澄まされた美貌がキョーコの心を驚掴みにしていた。

「ゆー、ぎゅー」

「そうそう。あたしは勇儀サマ。ヨロシクな」

傷ひとつない滑らかな頬に夢見心地で触れる。

「おい、もう。くすぐりたいよ」

身をくねらすが、勇儀はキョーコを振り払おうとはしなかった。勇儀の頬を撫で上げたキョーコの指が金の髪を梳き、額にそり立つ赤い角に触れる。

「……っの」

「鬼だからね」

キョーコは困惑していた。どうして自分は、目の前の女にサキの姿を重ねているのだろうか、と。

「あなたは」

「おっと！」

衝撃。

「——ち」

一瞬で胸の内から酸素がすべて吐き出され、濡れた石舞台をごろごろ転げながらキョーコは激しく咳き込んだ。雨と一緒に彼女の頬に飛び散った液体は生温かく、錆の臭いがする。

「ありやりや。そいつはただのカタナじゃないみたいだね」

勇儀に突き飛ばされなければ首が飛んでいた。キョーコの代わりに一太刀受けた勇儀の右腕。スプリングラーのような勢いで、真っ赤な鮮血と共に、黒い煙が噴き出している。

「その腕、わたしのせいで」

「そんなワケがないだろう。あたしは鬼だよ。偶然さね、偶然」

殺気を漲らせた鬼が飛び掛ってくる。口の周りに血がこびり付いていたが、顎も牙も、元通りだ。

「あんたは自分の心配だけしてな。いいね！」

首筋に噛り付こうとした大狗の口に右拳を突き立てた勇儀は、食い込む牙もお構いなしで足元の石畳に豪快に叩きつける。大きく陥没した地面から、血飛沫が噴き上がった。

「さあ逃げなッ、ほらもつと急いで！」

「は、はいっ！」

どこへ、とも。いつまで、とも。勇儀は細かいことを言わなかったので、キョーコはひた走る。足を引きずりながら走って走って、

「はれ？」

何度か石柱の荒野を振り返るうちに、ゆっくりと岩盤が持ち上がってきていることに気付いた。足を止めたキョーコがあんぐり口を開いて見守る間に、岩盤はほとんど垂直に立ち上がっていく。

「むおおお」

腹の底を揺さぶるような地響きと共に聞こえるのは勇儀のうなり声だった。地面を引っぺがすだけでは飽き足らず、卓袱台返しにしてやろうというのか。

「あ、あわっ、あわわわわ!!」

なんたる怪力。なんたる乱神ぶり。なんて、無い語彙を絞っている時間はない。

「ううううおおおおりやああああッ!!」

岩の塊が、飛んだ。その真っ白な岩肌に、キョーコの走馬灯が映りこむ。避難の暇すらなかった。陸上部のエースはもはや形無し。迫りくる岩雪崩の中に、キョーコはあつという間に呑み込まれて消えた。



「いたた……」

生きていたのは奇跡と言っても過言ではない。岩と瓦礫の雪崩から何とか逃れたキョーコは、いくつか纏まって建っていた廃屋の中に身を隠していた。ライトで照らしたブラウスはあちらこちらがほつれ、うっすら血を滲ませている。

「こんな時、サキちゃんならどうするのかな」

あの女傑なら、むしろ地獄の方がうまくやっていける気がした。針山の上でいびきをかく姿を想像すると、少しだけ笑えた。

「サキちゃん」

降りしきる雨の中に、まだあの幻影は彷徨っているのだろうか。

——ざり、ざり。

雨音に耳を澄ませていると足音に気付いた。

——ざり、ず、ざり。

二本足の足音は、ゆっくり、ゆっくりと近づいてくる。

キョーコは意を決して、廃屋の戸の向こうへ呼びかけた。

「サキちゃん？」

「あん。だから違うって言ったろ」

聞き覚えのある燃えるような声が返ってきた。

「勇儀、さん？」

「そうだよ。サキちゃんとやらじゃなくて悪かったね」

戸を開けようとして、血の臭いに気付く。廃屋の中に入ってきた勇儀は一目で分かる重症だった。

「その、腕」

「はは。まあ——見事に一本取られたって感じかね」

それは勝ち負けの一本なのか、それとも肘から先がなくなった右腕のことを言っているのだろうか。



「あ、でも勘違いするんじゃないよ。あたしは負けぢやない。三本勝負でいこう。うん、今決めた」

「そういうのいいですから。早く、こっちに座ってください」

キョーコは勇儀に肩を貸して、廃材の山に座らせてやる。ぎよっとするほど、体が軽い。雲に届くと思われた巨体はキョーコの頭ひとつ上まで縮み、腕の傷口からは止め処なく血が溢れている。

「傷つくねえ」

勇儀は命の恩人だ。素人目にも絶望的な怪我をしていたが、絶対に死なせるわけにはいかない。ブレザーのリボンを解いて腕の傷口を縛り始めたキョーコを、勇儀は不思議そうに眺めていた。

「随分おかしなもんを着ているじゃないか。動き辛くないのかい？」

血の気の引いた顔で、勇儀は笑う。キョーコには彼女の神経が理解できない。彼女は心の底から今の状況を楽しんでいた。

「……ヘンなのは、勇儀の方だと思っただけど」

「んー、そうかなあ」

頬をかく勇儀の左腕。鉄の塊のような手かせの下で、ちりちりと千切れた鎖が揺れている。

「これからどうするの？」

「あなたのお蔭で血も止まったし、あのワン公ともう一本相撲を取ってくるかね」

「ダメだよ！ 今度こそ死んじゃうって！」

「あんだ、あたしが負けると思ってるのかい？」

勇儀の眼差しが刃物のような剣呑さを帯びる。彼女は本気で、あの怪物と第二ラウンドを繰り広げるつもりだった。

「行かせないから」

腰を上げようとした勇儀の前に、キョーコが立ちはだかる。

「あたしを止められると思ってるのかい」

ぐ、とキョーコは言葉に詰まる。深手を負っているとはいえ勇儀は鬼。叩いてこねてキョーコをハンバーグに変身させるくらい朝飯前なのだ。

「じゃ、じゃあね、着いていく。戦うって言うなら、引きずられてでも

着いていく。足手まといだよ、大変だよ」

「なんだいあんたは。肝っ玉が大きいのか小さいのか、はつきりできないのかい」

それでも思うところはあったのだろう。キョーコを力で除けようとした手を結局引つ込めた勇儀は、再びむつつりと座り込んだ。

「……やられっぱなしじゃ悔しいだろう」

「勝ち負けって、そんなに大事なこと？」

「そうだね。あたしには他に何も無いんだ」

再びキョーコが黙り込むと、大砲のような雷鳴が廃屋をビリビリと揺すった。

「負けたら何も残せない。死ぬより残酷だよ」

ぐつと唇を噛むと、塞がりかけの傷口から血が染み出してくる。せめて勇儀と同じ鉄の味を感じながら、キョーコはおもむろに口を開いた。

「わたしも怖いんだ」

「あたし残酷だつて言った。怖いだなんて言つてないもん」

「走れなくなることが、本当に怖い」

様子のおかしいキョーコを不審に思った勇儀が、その顔を覗き込む。吸い込まれそうな瞳の奥底で青い何かがきらめいている。

「鬼の中にも仏がいると言うものだしねえ」

残された腕で、キョーコの肩を抱く。雨に濡れた体は小刻みに震えていた。

「勇儀ねえさんが、話くらいなら聞いてやる。ただし嘘はナシだ」



「わたしね、頭はイマイチだけど足だけは速くて。そのおかげでいい学校に入れたんだ」

「大したもんじゃないか。親兄弟もさぞ喜んだろ」

「はは。だったら良かったんだけどね。あんまり家族と上手くいったいから」

はぐらかすような笑顔を浮かべたキョーコの隣で、勇儀は傷口を縛り直す。

「でも足ぶつ壊しちゃって。走れなくなっちゃった」

破れたスカートの下。キョーコの左腿のスマイリーが困ったように笑っている。

「筋肉とか腱とかよく分からないけれど、とにかく足がグチャグチャで。切らないで済んだだけマシだって、お医者には言われた」

「ふうん。どうしてそんなことに？」

「事故。どこかの誰かが私をはねて、そのままどこかに行っちゃった」「そいつが憎くならないかい？」

「うん……ううん、よく分からないな。考えたくない」

一呼吸置いて、キョーコは顔を上げる。

「よいこだから。怒ったり恨んだりして、濁りたくない」

「よいこ、ねえ」

誇らしげなのに、キョーコが苦しげなのはどうしてなのだろうか。勇儀は気になったが、黙って話に耳を傾け続けた。

「わたしは諦めたわけじゃないから。医者や皆が決めた場所はゴールなんかじゃない。燃えて燃えてみつともなくあがいて、燃え尽きて無くなる瞬間まで夢を追いかけていたい」

足を喪ったキョーコと、腕を失った勇儀。

「わたしが怖いのは中途半端で投げ出してしまうことだ」

相手に自分の姿を重ねたキョーコの弁には、自然と熱が入っていた。

「勇儀はまだまだ走れるよ。こんな下らない場所をゴールにするなんて、それこそ負けだよ。大敗北だ」

「あたしの意地は、下らないかい」

「うん。下らない。笑っちゃうね。ははん」

笑い飛ばしてやってからキョーコは思い出す。殆ど挑発同然の発破をかけた相手が大陸をひっくり返すような鬼であることを。

「あのですね！ この口がつい生意気を申し上げちゃいましたけど、別にさっきの恩を忘れたとかじゃあひやあー！」

床にひれ伏して必死の弁解をするキョーコに、大きな手が差し伸べられた。

「あ、あ、あれ？」

自分の頭がスイカの如く爆砕するヴィジョンに二度目の走馬灯の再生が始まったが、キョーコに触れた手は思いの他優しい。くつくつという漏れ出るような勇儀の哄笑は、すぐに鼓膜を殴りつけるような爆笑に取って代わられる。

「ちよ、ちよつと、あの怪物が近くににいるから！」

「これが笑わずにいられるかい」

あまりの大声に廃屋はグラグラと揺れ、天上から降り注ぐ塵と埃の中でキョーコは耳鳴りに耐えなければいけなかった。

「何百年も生きてきた鬼が、小娘の説教ひとつで心変わりしちゃうなんて。なあ？」

「じゃ、じゃあ！」

「地獄のお供が鬼なら、あんたも文句ないだろ？」

勇儀が差し出した手を握って、キョーコは彼女を立たせた。

「わたし、キョーコ。鳴無響子」

「そうか。じゃあキョーコ、肩借りるよ。ああ、それと」

廃屋を一步出ると、再び雨と風が二人を苛んだ。二人ともズタズタでボロボロだが、構わない。たったひとり外の暗闇に放りだされるよりは数段頼もしく、そして温かい。

「いい名前じゃないか」

勇儀に対して、キョーコは微笑んでみる。なんだか、随分久しぶりに笑ったような気がした。

「ありがとう」



二人三脚で石畳の道を歩く。

足は、キョーコがこの世界で目覚めた駅を目指していた。

「で、あんたが度々口にするサキちゃんって誰なんだい」

キョーコが黙ってケータイの画面を見せると、勇儀は声を上げた。

「こりやあべつぴんじやないか」

「古臭い言い方するね」

「ふんだ。古臭い女で悪かったな」

口を尖らせた勇儀の顔を、キョーコはじっと見つめる。

「ちよつと勇儀に似てるかも」

「じゃあやつぱりいい女だ。間違いない」

空が唸り声をあげ、二人は東の間口をつぐんだ。

「よいこナンタラつてのは？」

「よいこ三原則。サキちゃんが作ったルール。よいこは怒らない、泣かない、困っている人を見捨てない」

状況が状況なので、さすがのキョーコも短縮版で説明する。

「で、それを忠実に守っているキョーコちゃんはどんなご褒美を待ってるんだ？」

「ご褒美？」

「決め事は、きちんと守ったご褒美があるから存在するのさ。あたしが前暮らしていた所でもそうだった。こつちも変わらないだろ？」

「うん……サキちゃんにまた会える。かも」

「なるほど。そりやしつかり守ってやんないとな」

駅のぼんやりした灯りが見えてきたころに、勇儀が足を止めた。二、三步たたらを踏んで立ち止まったキョーコにもそれが見え始めた。

「ちよつとばかり、マズいね」

「ずちやり。」

支え合って歩く二人の前方、何かがいる。こちらへ、やってくる。

「ずちや。」

あたりの闇がひときわ深くわだかまったように、胡乱なモヤが形を成すのは、辛うじてヒトの形。その体は周囲のわずかな光すら吸収しているようだ。

「びちや。」

そのの湿った足音はどんどん増えてくる。

「びしや、ずちや、どちや、ぐちや——」

その頭に当たるであろう場所には昆虫の複眼めいた赤い眼と、同じく赤い光を放つ短い角が生えているだけ。角。この状況でそれを目にすると、どうしても鬼という単語が頭に浮かんだ。

「あたしの同族だと思っよ。なんというか、妙に人間クサイ感じがするけどね」

キョーコの疑問が口を突く前に、勇儀が答えてくれた。

「あれ、見える？」

「見えなくても聞こえてるさ」

錆びついたレールの上を騒々しく滑ってくる路面電車。駅に向かっていている。久方ぶりに見る人工の光が目染みた。

「後ろだ！」

助かる、という安堵がキョーコの集中を殺いでしまった。気を取られた瞬間、数体の『影鬼』が群れから飛び出してきた。瞬く間に勇儀の拳を叩きこまれ、空中で文字通り霧散する。

「っ、あたしの体ならもつとビシつとしろつての」

体に凄んでも、黒鬼を殴り潰した拳の痛みは消えない。勇儀にこれ以上戦わせることはできなかった。出口を目の前にして、二人はじりじりと後退を強いられる。

「はな、してー！」

キョーコに掴み掛った影鬼を、なんとか振り払う。だがその拍子にケータイがポケットから零れ落ちた。

「あっ!？」

伸ばした手の指先に弾かれて、ケータイは更に遠くへ。液晶が輝きを一度放って、石畳の上を滑っていく。影鬼の一体がケータイを拾い上げると、顔の高さに持ち上げてしげしげと眺めはじめる。

「返してー！」

「いいからここは退くよ」

「だって、あれはサキちゃんの」

キョーコの声に、ケータイを持つ影鬼が視線を上げた。煙の塊でしかない影鬼だが一斉に額の角からぱちぱちと火花を散らした。顔も声もないそれが、下卑た笑いを浮かべているように見えて仕方がない。

「キョーコ、だめだ！」

勇儀を下ろして、キョーコは影鬼に向かって一步踏み出す。

「ねえ、お願いだから返して。じやないと」

キョーコの頭上、にわかには灯った明かりが上空に渦巻く雲の輪郭を白く映し出した。

「かみなり、か？」

そんなことに意識を向けられるほどの余裕がキョーコには残されていなかった。ケータイ片手にどんどん影鬼は下がっていく。必死で追いかけるキョーコは、自分が群れのド真ん中に誘い込まれているなど、気にも留めなかった。

「返せッ!!」

キョーコの怒号に反応した影鬼が一齐に飛び掛かった。

血と肉の饗宴を予感した勇儀は、ほんの一瞬、キョーコに覆いかぶさる影を見た。影鬼たちとは違う。赤い瞳と白銀の髪を持つ、何者かの姿。

「お前、は？」

『私は——』

青白い閃光が縦横に駆け抜けた。飛び散ったのは血と肉ではなく、光と暴風。キョーコに手を出した黒鬼達は見えない爪で引き裂かれるようにバラバラになり、断末魔も許されず霧散した。

「わたし、一体」

座り込んだキョーコの周囲で、岩が焼けている。赤黒く煮えたぎる爪痕が周囲に刻まれていた。

「あたしが聞きたいくらいだ」

強大な力の余韻のように青白く輝き続ける両手を見下ろすだけとなったキョーコを、勇儀の咳ばらいが現実に戻した。

「なににせよ助かったよ。ついでに起こしちゃくれないかい？」

「ご、ごめん！」

「いいさ。ほら。大事なモンだろ」

勇儀に手渡されたケータイを、東の間キョーコは大事そうに抱きしめた。

「おい、キョーコ、悪いが」

感傷に浸る暇などない。

影鬼たちには恐怖感の持ち合わせは無いようだった。キョーコが吹き飛ばした空白を埋める様に、更に多くの鬼が雲霞のごとく押し寄せてくる。おまけに、影鬼の中に白い物まで見える。あの大狗が影鬼を撫で斬りにしながらこちらへと向かってくるのだ。

「おやおや。出たね」

「わたし、戦う」

「逃げるんだよー！」

「でも」

「よいこなんだろ。戦うだの倒すだの、物騒なコト言ってるんじゃないよ」

石畳を一步一步踏みしめるごとに足の傷が酷くなっていくのが分かる。ほとんど無我夢中で走ってる最中、何度も影鬼たちの爪がブラウスの背中を引っ搔いたのが分かった。

「はあっ、はあっ、ひいっ」

殆ど身を倒れこむように駅舎に転がり込んだキョーコを乗り越えて、勇儀が近くの瓦礫を横倒しにする。塞がれた入り口からは、間髪入れずに無数の打楽器を打ち鳴らすような音が響き始めた。

「おわっ」

瓦礫の隙間から例のカタナが突っ込まれ、キョーコの目先数センチで切っ先を乱舞させる。とっさに彼女の襟首を勇儀が掴みあげていなければ串刺しだった。

「どきどき」

今度はぎりぎりと言を立てながら路面電車のドアが閉まっていくところだ。素早く飛び出した勇儀がスキマに体を挟み込み、ドアをこじ開ける。

「キョーコ、早くー！」

いつまで待ってもやってこないキョーコの姿を探す。彼女は駅舎の中ほどでうずくまっていた。

「あはは、足が」

腐り果てた床板がついに限界を迎えてしまった。運悪く板を踏み抜いたキョーコの左足が膝下まで呑み込まれている。焦って引き抜



こうとすればするほど周りの板も軋み、より深く彼女を深遠へと誘い込んだ。

「クソ、破られるか!」

瓦礫を叩く音がどんどん強くなる。壁に亀裂が走り、割れた窓の外には赤い瞳がぎっしり並んでいた。

「行つて」

「何言つてんだい、あんた」

「わたしはダイジョウブ。あの力でババーつてやつつけて、次の電車で追いかけるから」

声も、笑顔も震えていた。それでも彼女は自分を置いて行けと言つてのけたのだ。

勇儀は傷だらけの己の体を一瞬だけ見た。見て、頷いた。

「あんた、もう一度走るのが夢だつて言つたね」

乱暴に電車の扉をこじ開け、勇儀はふらつく足で駅舎へ戻る。一歩ごとに血が流れた。一歩ごとに体のどこかが壊れていった。自分という存在が消えていく。それでも彼女は笑つてキョーコの襟首を掴んだ。

「困つてるやつを見捨てちゃいけない。だろ?」

「それは、よいこのルールだよッ!」

電車のドアの隙間に狙いを定め、暴れるキョーコを振りかぶる。

「鬼は悪者だ」

会心のシュートだった。キョーコの体は見事に閉じつつあるドアのスキマに吸い込まれ、残された左腕でガッツポーズを決めた勇儀は、迫りくる鬼の群れに向き直る。

「協調性なんてモンも無いから仲間内で奪つただの殺したただのも日常茶飯事だ。これまでずっとそうだったし、これから先も鬼が団結することは無いだろう。奇跡でも起きなきやね」

駅舎のバリケードがドアごと吹き飛んだ。

「だからかな。最後くらい、宿命つてやつに抗いたくなつたのは」

幾千とも幾万とも。駅に向かつて殺到する影鬼の数のあまり、黒い大地がうねるように見える。それを見据える勇儀は穏やかだった。

そのありえないほどの落ち着きが、否応無しに勇儀の覚悟をキョーコに叩き付ける。鬼らしい不敵な笑みは、背後のキョーコと目の前に待ち構える運命のあぎとの両方に向けられていた。

「勇儀——ゆうぎー」

星の輝きのような軌跡を残して勇儀は跳ぶ。たった一つの拳が影鬼たちの間で火の粉を振りまく。その度に何十という単位で鬼たちが消し飛び、勇儀の鮮血が宙に幾重にも弧を描いた。

「一緒に逃げようって言ったじゃないか！ 嘘は嫌いなんだから！」

「やめな、キョーコ」

影鬼の中から現れた巨大な一体が勇儀目掛けて丸太のような豪腕を振り下ろす。受け止めた勇儀と力が伯仲したように見えたのは一瞬だけ。すぐ彼女の全身が爆ぜ、赤い霧がさあつと立ち昇った。

「あんたに涙は似合わない」

尚も容赦を見せない黒い鬼達が、勇儀の全身に牙を、爪を突き立てる。その姿がとうとう黒い鬼達に覆われ、うごめく影の塊と化した時になってようやく電車が甲高い音を響かせて動き始めた。

「勇儀……わたし、こんなの酷いよ」

駅が遠ざかっていくのを見て、糸が切れた人形のようにキョーコは座席の上に四肢を投げ出した。全身を疲労感と眠気が襲っている。ここで目蓋を閉じれば、きっと自分の住む町に帰れるのだという予感があった。

——ずん。

目を閉じようとした刹那、明らかにレールと車輪によるものではない揺れが電車を襲った。

「あ、ゆ、勇儀、なの？」

断続的な揺れに混じって聞えるのは、きゅ、きゅう、と何かがガラスを擦る音。返事はなかったが、苦しげで今にも消え入りそうなりズムを聞いているうちに、キョーコは音の主を確信していた。

「待って。今開けるー」

あれが本当に勇儀なら、きつと電車にしがみついているだけで精一杯のはず。勇気と気力を振り絞って、キョーコは立ち上がる。

「ぐるる」

しかし、窓際に立ったキョーコを待ち構えていたのは身に覚えのある唸り声と、殺気だけだった。

耳障りな音を立ててガラスの向こうから刃が突き立つ。間一髪で身を屈めたキョーコを放つて、鋭利すぎる刃が真横に走っていく。窓も窓枠も紙キレのように引き裂いて、あれは、電車を“開ける”つもりなのだ。まるで缶詰のように。

「ぐるるるるう、うるるる」

電車の屋根が前半分引つpegがされ、再び豪雨と暴風がキョーコの頬をなぶる。

「お前」

黒い空を背負って悠然と見下ろす大狗を視界に収めたとき、不思議とキョーコが恐れを抱くことはなかった。

「お前だけは許さない」

代わりに芽生えたのは赤黒い怒り。身を焦がす憤怒。

「ぶっ倒す。ボコボコにして、二度と立てないようにしてやる！」

大狗が顔を大きく歪める。笑っている。嗤っている。だが構ったことではない。キョーコには剥き出しの柔らかい拳しかない。それも構ったことではない。何があっても、たとえ刺し違えてでも、勇儀の命を弄んだ大狗を屠る。おおよそよいこが持つてはいけない感情を、肯定する。

「来いー」

キョーコの指先が青白く光る。後はただ、この力の奔流を解き放つだけだ。

「よいこが怒るんじゃないよ」

その輝きが極限に達しようとしたとき、炎のように熱い声がキョーコの頬を張った。

「怒るのも泣くのも、鬼がやる。だからあんたは、笑ってろ」

「グ——がああッ！」

大狗の背後からにゅつと伸びた手が、その顔面を鷲掴みにする。

「あんたの夢が、叶いますように」

満身創痍の勇儀は、高らかに笑って電車の上から身を躍らせた。漆黒の荒野を、一人と一匹がもつれ合いながら転げていく。勇儀を蹴つて飛び上がった大狗が、空中で蜻蛉のように身を翻す。そのの唾えたカタナが過たず勇儀の胸を刺し貫いた瞬間、今度こそキョーコは意識を失っていた。

第一話『鳴無キョーコときさらぎ駅の怪』 おわり

### 3 『猫と双子と弁当と（上）』

寝て起きて鏡を見れば、おろし金にかけられたような顔がそこにある。

「いつ、たたあ……」

顔を洗って水気をふき取ると鈍い痛みが走る。それは顔だけではない。ダサイという概念を具現化したような小豆色のジャージの袖を捲り上げれば二の腕は切り傷とアザだらけ。シャツの下も、下着の中も同じ具合だ。初夏を感じさせる日差しだけが清々しく、ゾンビじみた彼女の顔を照らしている。

「夢じゃないか。そりゃあ、そうだよね」

きさらぎ駅。影のような鬼たち。白い大狗。カタナと雷。星熊勇儀と名乗る鬼。傷の一つ一つは、あの奇想天外な出来事の動かぬ証拠だ。

「わたし、どうすればいいんだろ」

気が滅入りそうな顔を相手に会話しているうちに、キョーコは手元の歯ブラシに歯磨き粉を山とひねり出していた。

「わ。勿体ない」

なんとか中身を戻そうと悪戦苦闘するキョーコに近づくと足音。

「よう、キョーコちゃん」

やってきたのはぼさぼさの長髪を一筋に結った中年の男。

紺色のドテラとサラシに色あせたジーンズという自由人ファッションで固めた姿には、どこか仙人じみた趣さえ漂っている。いつの間にかこの下宿屋にやってきて自由人生活を営み始めた彼は周囲にカザマフウタロウ風間風太郎と名乗っていた。

下宿は流しも風呂も共同だ。だから、住人たちはこうして毎朝顔を合わせることになる。

「ん。おふあようございまふ」

身振りで応じつつ、キョーコは口をゆすいだ。なんだろうがいしても、『影鬼』たちとのみ合いでこさえた口の中の傷でハミガキ粉がピンク色に染まる。

「そのカッコ、どうした?」

「制服汚しちやつて。替えが全部クリーニング中なんですよ。はは」  
キョーコの足下には口を固く結ばれたビニール袋が置かれている。  
赤く染まったブラウスを目ざとく見つけて風間が目を細めた。

「それ血?　　どうかひでえ顔だな」

「そんなにですか」

流石に女の子にそれはどうかと思われたが、実際キョーコの顔は気の早いハロウィンムードに模様替えされていたので何も言えない。  
誤魔化し笑いを浮かべて、キョーコは頬の絆創膏をぽりぽり搔いた。

「実は昨日転んじやつて」

「お、珍しいな。ウソついたっしょ」

吐き慣れない嘘は当然即座に看破された。

「ち、違いますよ。ホント。わたし、足こんなんだから。転んで、先に階段があつて」

「ほお、頑張るねえ。ますます珍しい」

紙やすりみたいな無精ひげをさすりながら風間が訝る。にんまりと歪められた目元から放たれるのは、なんともなんとも、居心地の悪さを感じる視線であった。

「な、なんででしょうか」

「ファイトクラブつて映画知ってる?」

意地張りの限界に達したキョーコが洗いざらいぶちまける寸前で、  
風間が妙な名前を口にした。

「映画、ですか?　昔テレビでやってた番組じゃなくて?」

「いんや。ブラッド・ピットが出てるやつさ」

例に漏れず、昨夜も深酒したのだろう。全身からツンとするアルコール臭を立ち昇らせる風間は二日酔いの最中か。それとも未だに酔いが抜けていないのかもしれない。

「うーんとな、むさっ苦しい野郎どもが集まって、夜な夜な殴り合ったり爆発したりする映画なんだけど」

「それ本当に面白いんですか?」

「どうかな。俺、何観ても面白いつて思っちゃうし」

風間を先頭に急な階段を降りる。

平安時代に大工が打ち付けたままのような古い床板がギシギシ軋む音に混じって聞こえてくるのは、騒がしい足音とはじける様な子供たちの声だった。

「でもタイラーってヤツが超カッコいいのは間違いないね。これ、ブラピが演<sup>や</sup>ってるんだけどさ」

廊下に出た二人は壁に背を付ける。ユニフォーム姿の少年たちがバタバタ走ってきて、キョーコの前でペコリと頭を下げた。

「おはよう、ネーチャン」

「うん、おはよ。今日は練習？ 頑張ってるね」

「お、おう。任せとけよ、なあ、アツシ」

「試合、近い……がんばる」

キョーコに見つめられた少年たちは、赤くなった顔を隠すように帽子を目深に被って駆け出した。その背中に、風間が声を張り上げる。

「おいカンタ、アツシ、ローカ走んな。それと、俺を無視するな」

「うるせえプーターロー！」

「ぶざま」

「コラ戻ってこいガキ共！ 懇切丁寧にネチネチ礼儀ってモノを叩き込んでやる！」

子供は風の子とはよく言うもので、風間が拳を振り上げ終わるころには、彼らは食堂のドアの隙間に転がり込んでいた。

「ま、あの元気が有れば一日中しごいてやっても大丈夫そうだな」

肩をすぼめる風間の隣でキョーコが玄関に目を向けると、可愛らしい大きさのスパイクシューズが何足も脱ぎ捨てられていた。

「次こそはカーディナルの連中をペチャンコにしてやるからな。キョーコちゃんよ、応援頼むぜ」

「はい。その時はおべんと持つていきますね」

カーディナルこと『西商店街カーディナル』の名前は風間の率いる子供野球チーム『南町サンダース』の歴史を語る上で外せない。歴史とはサンダース連敗の歴史であり、星条旗が一枚織れるほど白星を集めてなお諦めの悪さを発揮する風間の歴史でもある。

「にしし、ここで勝てれば倍率三十倍だぜ。困ったなあ、百円でウイスキーが買えちまう」

何故そこまで子供たちを勝たせてあげたいかと言えば、ウラには大人の事情が見え隠れしている訳で。風間とはそういう、社会の不純物を煮詰めて作った煮ごりのような男なのだった。

「今日の練習はとびきりハードだぜい。ビシバシやっちゃうぜ、ビシバシ」

「あんまりムチャさせないで下さい。体壊したらタイヘンですよ」

「男はワークアウトより自己破壊だよ。タイラーだつてそう言うてる」

とにかく勢いはある名言をぶち上げて力瘤を作る風間の横で、キョーコはげんなりする。風間の野球チームに保護者から苦情は来ないのだろうか。

「で、ファイトクラブなんだけどな。最初は順風満帆なのよ。それがいつしか、徐々に雲行きが怪しくなってくる」

「はあ。どんな風にでしょ」

「もともとは深夜に集まって殴り合うだけのクラブを使って、タイラーが何か不穏なことを企み始めている。ヤツの尻尾を掴むため、主人公は全米を駆けずり回ることになるんだが」

そこで急に黙り込むと、風間はわざとらしい笑みを浮かべて見せる。

「風間、さん？ なんですか、どうなるんですか？」

「後は自分の目で確かめてくれ。諸々の事情でおっちゃんからはこれ以上詳しく言えん」

「え、ええー！ ひどいですよ!?!」

こんなの生殺しもいいところだ。朝食前に消化不良を起こしたキョーコを尻目に、風間はずんずん進んでいく。ガムテープで補強されたドアを開ければ、そこは食堂だ。

「映画はエンターテイメント。聞いただけじゃなくて、観て、感じなきやあ」

風間の言うことは至言かもしれない。だが、それが意地悪のオマケ



とあつては素直に受け入れる気になれない。むくれっ面のキョーコが炊飯器からご飯をよそうのを、彼は面白おかしそうに見ていた。「にしても、今日も大盛況だねえ」

十畳ほどの食堂は満員御礼状態だ。芋を洗うような混雑の中、おかずを乗せたお盆を頭に、二人は空席を探す。

「ミヨシさん、誰でも捕まえて来ちゃいますからね」

「あの子、人に飯食わせんのが好きだからなあ」

ボロ下宿屋『早稲川荘』の朝はいつでも騒がしいものだが、実際にここに部屋を借りているのはキョーコと風間の二人だけだ。

「よう、カザマ。それとキョーコちゃん」

「あ、お——はようございま——ぎゃあー!」

仙人のごとき幽玄な雰囲気を纏う老人が現れて、通り過ぎざまにキョーコの胸を鷲掴みにしていった。大胆過ぎてむしろ清々しいくらいの手際を披露すると、悪戯っぽい笑みを残して彼は人ごみに消える。

「びっくりしたあ」

「あのエロジジイめ。出禁にしてやろうか」

大人も子供もおねーさんも、くたびれた朝帰りのリーマンやお水の姐さんですら。相手が誰であろうが、腹を空かせていれば腹いっぱい飯を振舞う。お代は感謝の言葉で結構です——というのがミヨシさん、つまりこのオーナーの方針なのだった。

「キョーコちゃんもキョーコちゃんだぜ。どこの世界に乳揉まれてビツクリで済ます女子高生がいるんだ。どこに」

人でごった返す食堂の中でも聞こえるほど大きなため息をついて、空いた席を風間が示す。仲良く並んで腰を下ろすと、また彼の映画談義が再開した。

「なあ、映画の濡れ場とか平気で見られるタイプ?」

「又、ヌレ……?」

「ファイトクラブは結構エゲつないんだわ。何よりラストシーンは衝撃だったね。いやあ、まさかサブリミナルでちん——つてえ!」

いかがわしい方向に話を持って行こうとした風間の脳天にげんこ

つが突き刺さった。ぐりぐりとねじ込むような拳に、彼は潰されるようにテーブルの上へばっついていく。

「おはようございます、ミヨシさん」

拳の持ち主こそ、この『早稲川荘』の寮母、ミヨシであった。

健康的な褐色の肌をした美女は軽く小首をかしげて微笑む。白雪のような髪が彼女の額を滑ると、前髪に隠れていたダークグレーの瞳が露わになった。

「相変わらずいいの持つてるじゃねえか。お陰で目が覚めたぜ……！」

眉を吊り上げたミヨシが、頭を押さえる風間に人差し指を突きつける。来るもの拒まずの早稲川荘の門戸とは正反対に、彼女の口はいつでも堅く閉ざされている。『ミヨシさん』にしても、いつかの入居者が適当に呼んだ名前がそのまま定着したものらしい。

沈黙の美人は自分の分のごはんを大盛りに盛りまくって卓に着くと、風間に目配せしてわずかに顎をしゃくる。

「ありや『よく噛んで食べ』かな」

『何の話？』じゃないかと思うんですけど」

ミヨシが頷きつつキョーコを指差した。

「ああ、ファイトクラブ」

ボディランゲージのお返しとばかりに、風間がポンと手を打ってみせた。こうしてミヨシの意を汲むすべを、入居者たちは自然と身に着けていくものだった。

「つまり、俺が稀代の超傑作映画を例えに何を言いたいかというとな」

風間はタクアンを一枚つまみあげる。

「キョーコちゃんがいこ教の敬虔な信者だつてのは分かる。けどな、十代の鬱憤てのはどうやって溜まってくもんさ。そだろ？ ええ？」

小憎らしい笑みを浮かべて弁舌を振るうカザマがタクアンをつまんだ箸をびゅんびゅん左右に振るもので、キョーコとミヨシの視線もそれを追って食卓を右へ左へ。

「溜まったら溜まった分だけどつかでガス抜きするしかあるまいよ。そういうワケで、キョーコちゃんが秘密の決闘クラブを開き、夜な夜な荒くれ者たちとの殴り合いに興じているに違いないと名探偵力ザマは推理したわけさ」

「違います」

即答だった。

「いや、でもさ、違うにしてももうちょっと間とか含みとか」

「よいこは怒っちゃダメ。困っている人を見捨てちゃダメ。ましてや人を困らせるなんてもつてのほかです。三原則は絶対なんですよ」

ふんす、とキョーコが鼻息を吹いた。

「ほんつと、マジメなのね」

「お前もキョーコを見習って、少しは大人になったらどうだ」

上目遣いのジト目が風間を突き刺した。

「お、出やがったなメスガキ！」

いつからキョーコの隣に潜り込んでいたのだろうか。ずずず、と音を立てて味噌汁をすすったスバルを目視した瞬間、風間はしゃもじと鍋のフタを手に戦闘態勢に移行する。

「やれやれ。相変わらず騒がしいオジサンだ」

対するスバルも静かにハシを構えた。

「なんなら今日こそ決着つけようか」

「こちとら元からそのつもりだぜ！」

早稲川荘、朝の風物詩が始まった。皆巻き添えを恐れて食器ごとテーブルを避難するくらいで、止めに入る者はいない。

「このケダモノが。お前みたいのがキョーコと同じ屋根の下で寝起きしているだって？ 考えるだけで寒気がする」

「ごちやごちやうるさいクソガキめ。で、何だ。次は俺にキョーコちゃんの爪アカでも煎じて飲めって言うのか？」

「お前にそんな高級品をやってたまるか。隅のホコリでも煎じて飲んでろ」

「ンだとお」

徐々にヒートアップしていく喧嘩祭りを前にして、よいこを自負す

るキョーコまでもが、笑って卵焼きをつついていた。

「ゴハン冷めちゃうよ。食べようよ」

「キョーコ、なんかヘンなこと考えてるだろ」

「ああ、間違いねえな」

当人たちは絶対に認めないだろうが、キョーコの目に親と子ほども離れた二人のケンカは微笑ましく映る。つかず離れず、水と油。その二つは振れば振るほどよく混ざるものだ。

「おいバルたん。聞いてんんだろ、おい」

微笑みかけるキョーコに、うつとりと見入っていたスバルは我に返った。

「バル、タン、だ?」

「最近のガキは知らんのか、ウルトラマンを」

「知ってる。知ってるけど」

カザマがスバルをキチンとした名前で呼んだことは、未だかつて、ない。

「ばるたん、今日もキョーコのウンテンシユカー?」

昔懐かしい宇宙人の名の響きは妙に気に入られたらしい。周りの子供たちからも囁し立てられ、スバルはよろよるとキョーコの右肩にもたれかかった。

「キョーコ、風間が私にいぢわるをするんだ」

そこが毎朝のスバルの定位置であった。慣れとは恐ろしいもので、キョーコの首筋に頬ずりして甘いため息を漏らすスバルを妙に思うものは、この場にはいない。

「もー。食事中だつてば」

と言いつつスバルという重荷を右肩にぶら下げたまま器用に箸を扱うキョーコの反応にも慣れが見える。

「相変わらず仲がよろしいこつて」

スバルにとって重要な朝の儀式へと、ニヤニヤ笑って風間が水を差す。ムツとしたスバルが睨み付ける先で、彼は無精ひげをなせた。

「当たり前だ。悪いように見えるのか、お前には」

「いいや。むしろ良すぎるくらいと思うがね。夫婦かってんだ」

「そうだろうとも。許されるのなら結婚したいくらいだ。というか今すぐ結婚しよう。キョーコ、愛してる」

「あはは。じゃ、そのうちね」

笑ってスバルを押しのと、キョーコは牛乳を一気に飲み干した。

ニブい故に仕方がないのだが、スバルの愛の告白を冗談としか思っていないキョーコの返しは、冷淡と言えば冷淡であった。

「そっか。じゃあ待つよ」

「うわ、カワイソ」

悲しいくらい素直すぎる返事も慣れたものである。茶化す風間は一瞥するに抑えて、スバルは腕時計に目を落とした。

「キョーコ、時間」

「あ、うん。ごちそうさま」

「ごちそうさまでした」

キョーコにならって、隣のスバルも手を合わせる。

「む」

微笑みかけるミヨシの動作を目にして、スバルが首をひねる。早稲川荘に染まり切っていないスバルにミヨシのボディランゲージは高度過ぎる。

「あれはおそらく『おそまつさまでした』の構えだと思えます」

ドヤ、と胸を張るキョーコに、笑ってミヨシが弁当箱を押し付けた。

「ああ、今のは私にも分かった」

「『いいからさっさと行け』だな」



「ならいいけど。私は、そんなに頼りない女かい」

スバルの口調には納得しないものがあつたが、キョーコは強引にでも彼女をあの一件から遠ざけておきたいと考えていた。

「ごめん。でもこれは大丈夫なヤツだから。わたし一人でなんとかできる」

朝起きて、寮を出て、スバルの車に乗って学校を目指している間中、ずっと白い大狗の姿が脳裏にあつた。

「よい、三原則もほどほどにな。困ったら、いつでも助けに行くから」  
「ありがとう」

登校路の生徒たちの間を縫ってトボトボと駐車場を目指す軽トラックを見送っているときョーコの胸がチクリと痛んだが、同時にあの血なまぐさい非日常に親友を巻き込まずに済んでよかったという安堵もあった。

きさらぎ駅での出来事がウソだったと言われれば当事者のきョーコですら信じてしまいたい。それだったらどんなに楽だろうか。だがカタナを振るう大狗にたつぷりと刻み付けられた死の実感と恐怖が、それを許しはしない。

「勇儀、無事だよね」

同時にピンチを救ってくれた謎の恩人の存在感も増していく。

身代わりになってきョーコを逃がしてくれた勇儀が今も窮地に立たされているだろうことは想像に難くない。だというのに打つ手なしのまま自分だけがこうして日常生活を続けていくことが、もどかしくて仕方なかった。

弁当袋をプラプラ揺らして歩いていたきョーコは早足の生徒たちをぐんぐん呑み込んでいく昇降口に背を向け、グラウンドを挟んで反対側。雑木林の向こうに目を馳せた。白い板壁に黒いトタンで葺かれた木造の旧校舎が、朝の光景を恨めしげに見つめている。疎まれ、静かに朽ちて忘れ去られていくだけのソレのありようは、きョーコにとって、あまりに寂しすぎるように感じられた。

「おはよ。今日もいい天気だね」

どこか同情的に呟いたきョーコが周りに目を移すと、すっかり生徒たちは校舎に収まり、きョーコはひとりぽつねんと立ち尽くしていた。

だからこそ、人気の失せた雑木林にそれを見つけることができた。もこもこと動く奇妙な毛玉の塊を。普段なら遠巻きに観察するにとどめるところだったが、昨日のアレやコレやの後で、きョーコは多少のことで物怖じする気になれなかった。

「くああ」

好奇心の突き動かすままにグラウンドを横切って近寄ってみると、何とそれがあくびまでした。

「お前、何か用か？」

おまけに喋った。

「あ、あの……ええと。どちら様？」

「ていうかいい加減暑いわ。散れ散れ野良猫ども！」

一か所にぎっちり固まって寝ていた猫たちが、いつせいに駆けだした。猫玉がほどけていくにつれ、芝生に大の字になって寝ていたものの姿が現れていく。

一晩の毛布となってくれた彼らを感慨もなく蹴散らしつつ、勢いつけて立ち上がった少女はゴテゴテとリボンで彩られたドレスめいた衣装にこびりついた毛玉を叩き落としていった。

「やっぱり野宿じゃ全然寝た気がしないな。ほら、お前も出て行け」

悲しいくらいスカスカなドレスの胸元に潜り込んでいた子猫もつまみ出して、少女はようやくキョーコに向き直った。日暮れの水平線のような薄い橙色の瞳が好奇と警戒を湛えてキョーコを貫いてくる。

負けじとキョーコも同じ感情を持って少女を観察していた。奇妙な装束よりも目を惹いたのは埃と垢にまみれた彼女の黒髪だ。黒髪と言っても白や赤に染め抜かれた房が無秩序に垂らされたものであったが。

「そんなに私のカツコが珍しいかい」

何より、こめかみのあたりから左右によつきり突き出た小ぶりな角がキョーコの視線を釘付けにした。

「角が」

それまでヘラヘラと笑っていた少女が、急に薄ら寒い微笑を浮かべてキョーコを見据えた。

「見えるのか」

「そりゃあ、こんなところに生えていたら」

思わずキョーコが伸ばした手を振り払って、少女は一層警戒を強めた。

「見えるんだな」

よくないことを言ってしまったらしいことに、ようやく気付いた。何かがおかしい。何かが起こり始めている。茫然と首を振りながらキョーコは兆候を感じ取っていた。非日常の、兆候を。

「どこから来た？」

静かに戦慄するキョーコの周りを、薄汚れた少女はぐるぐる回った。獲物を追い詰めた野犬のようだ。

「幻想郷の生まれってワケでもなさそうだな。かといってただの現代人でもない」

幻想郷。現代。謎の文句が不穏にキョーコの心をくすぐった。ただ、なぜか敵意満々で臨戦態勢の少女は悠長な会話に応じてくれる雰囲気ではない。

「あなたも鬼なの？」

「お前は本当に人間か？」

キョーコがかすれた声でようやく絞った質問を、少女は一笑に伏した。

「さて困ったな。私はお前を知らない。お前も私を知らない。でも、お互いに何か不気味なものを感じてはいる」

緊張感でキョーコの指先がしびれてきた。睨み合いが永遠に続くかとも思われた刹那、少女は、ふっと脱力した。

「実は私はその、ちよつと追われていてき。しばらくここを隠れ家にしたんだ。それだけなんだ」

追われている。

「お前はただ、私を見なかったってことにしてくれればいい」

少女の薄汚れた身なりを改めて見れば、それが嘘かどうかはすぐに分かった。途端、キョーコは彼女のことを放ってはおけないという気持ちになった。

「あの、何かできることってある？」

「いいよ。そつとしておいてくれ」

「でも困ってるみたいだし」

「寄るなつてば。うつとおしい」

どんなに邪険にされても、キョーコは少女にまわりつく。少女も



苛立ちを募らせていく。

「何か下心でもあるんだろ、お前」

「違うの。わたし助けになりたくて。あのね、よいこ三原則っていうのがあって……」

「はあ？」

熱気にやられたのか、少女がふらりと揺れた。キョーコはとっさに少女に向かって駆け出した。はず、だった。

「よいこだは何だか知らないがね」

だが。

「無私で誰かを助けようってヤツに限って、大抵裏腹に何かを隠しているものさ」

まるで距離感が“ひっくり返ってしまった”ようだった。呆気に取られてキョーコは一步もその場を動けず立ち尽くし、少女は小馬鹿にした笑いを浮かべてその姿を見つめている。

「お前みたいのが一番得体が知れないよ」

前触れなく旧校舎の入り口を守る南京錠が吹き飛んだ。新たな主を迎え入れるように自ら開いていく戸を背に、少女は敵意を叩きつけてくる。

「一步でも追ってきてみる。生きて帰さない」

旧校舎の中に渦巻く粘り気のある闇に少女が吸い込まれていくのを、キョーコはただ呆けたように見送ることしかできなかった。

始業のチャイムが鳴り響いた頃になって、ようやくキョーコは自分がチャンスを見逃してしまったことに気付かされたのだった。

「ああもうー」

しかしもう、遅いものは遅いのである。

少女が鬼であるというのなら、勇儀に至る手がかりを握っていたかもしれないというのに。自責の念が珍しく苛立ちの声をキョーコにあげさせた。

「そこは立ち入り禁止のはずです」

汗ばみ始めたキョーコの背中に声がかけられたのは、ちょうどその時だった。

「あ、おはよう。チヅルちゃん」

頭脳明晰、容姿端麗。二年生の大堀千鶴オオホリチヅルは絵にかいたような優等生キャラであった。

生徒会長と陸上部部長の二足のわらじを平然と履きこなす超人であり、トラックで短距離を駆ける時も、教師がなかなか首を縦に振らない案件を強引に実行するときも、翼が生えたように行動が早い鳥人でもある。

「また遅刻ですか」

「あはは、面目ないです。チヅルちゃんも遅刻？ 珍しいね」

そんな些細な言葉遊びにも顔をしかめるほどの生真面目さが、完璧超人のチヅルの欠点だ。

「あなたと一緒にしないでください」

そして彼女は陸上部の元部長であるキョーコを静かに憎悪してもいた。

赤縁のメガネの向こうから軽蔑の眼差しを容赦なく放って寄越すと、チヅルはキョーコを尻目にずんずんと旧校舎の方へと歩いていった。

「最近よく鍵をこじ開けて侵入する不逞の輩がいるんです」

裏側から弾けたように壊れた南京錠を手にチヅルは振り返る。

「何か知りませんか？」

知っているも何も、下手人とさつきまで話していた。

困った様子の少女を庇ってやりたいが、こうも度々嘘を口にしてはよいこが廃るので、無言のまま強張った表情だけで「知らないよ」とチヅルに訴えかけていると、じりじりとルーペで焼き殺されるアリンコのような気分になっていく。

「まあいいでしょう。じきに警備員を雇うつもりですから」

ルーペ、もとい眼鏡の位置を治すとチヅルは「おうう」と小さく唸っておもむろに胃のあたりを押さえた。

「ち、チヅルちゃん？」

「大丈夫です。また学園の予算が削られると思って、胃痛がただけです」

チヅルは若くして、苦労人の片りんを見せつつあった。

「……………とにかく今日もミーティングがあつて、メンバーを選抜しなきゃいけないんです。インターハイ、締切が近いでしょう?」

何も言い返さずに頷くだけのキョーコ。彼女のダサイあずき色のジャージに包まれた足を、チヅルはずっと見つめていた。

「本気で復帰できると?」

「ん」

「まあ、無理はしないことですね」

力強く頷くキョーコから視線を振り切るようにチヅルは踵を返した。

「頑張つて。応援してるから」

キョーコの言葉には打算も皮肉もなかった。

それを知つてか知らずか。チヅルの足取りが淀んだのは一瞬だった。それですら熱気漂うグラウンドの蜃気楼に過ぎなかったのかもしれない。

「あつ、お弁当」

我に返ると今日一番のお楽しみがいつの間にか無くなつていることに気付いて、キョーコはきよろきよろあたりを見渡した。



「年頃の女つてのはどうしてこう、面倒くさくなるんだろうねえ」

旧校舎の屋根の上からキョーコたちのやりとりを見下ろしていた少女は、かすめとつた弁当箱の中身を猛然と平らげながら呟いた。

「こらっ、だーめ。ダメだつつの。これは私んだ」

さっそくあたりに集い始めた野良猫たちがおこぼれをねだつて少女の足下にまわりついてくるが、彼女はうざったそうに彼らを除けるばかり。

「ぐおっ」

数日ぶりの食事に舌鼓を打っていると、一匹の猫が少女の背中に飛び掛かり、鋭い爪を容赦なくズブリと突き刺してきた。

「お、お前、よくもー」

しかしつぎつぎと飛び掛かられ、猫津波に下敷きにされた少女の手

からとうとう弁当箱が転げ落ちる。反乱であった。猫の乱である。  
「くそっ、おい、タコさんウインナーはやらんぞ！ あああ、やめろー  
！」

猫たちが去った後に残されたのは空の弁当箱だけだ。アルミ製の  
弁当箱はすっかり奇麗に舐めつくされ、厳しい夏の日差しを少女の顔  
面に丸ごと反射するほどだった。

倒れ伏したまま、少女は自分の境遇に思いをはせる。追手に怯え、  
廃墟に身を隠し、野良猫を枕に眠り、その寢床に食事を横取りされる。  
こんな生活が、いつまで続くのだろうか。

「……みじめだなあ」

我知らず漏らした少女の呟きを聞き届けるものはいなかった。

#### 4 『猫と双子と弁当と（下）』

「ねえねえ、キョーコ先輩ったらあ」

寄りかかっってきた後輩に差し出されたタッチパッドと飲み物を半ば心ここにあらずで受け取って、キョーコは液晶の上にタッチペンを彷徨わせた。

「もお。センパイ時間かけすぎですよ」

「う——ん。ゴメンねー」

陸上部の後輩たちからのサプライズパーティ。

授業が終わるなりアーケード街のカラオケに連行されて始まったそれはパーティというにもささやか過ぎる宴だったが、かつての教え子たちが未だに自分を慕ってくれているという事実は嬉しかった。「最近の曲、知らなくて」

結局タッチパッドを隣の後輩にパスして、代わりに大盛りのポテトの山から一本をつまむ。

「キョーコ、何かあったのかい？」

変わって流れ始めたのはヒットチャートの頂点の君臨するアイドルソングだ。

多少の気取りを見せながらもアップテンポで煌びやかなミュージックラインを歌い上げる歯切れのよい彼女の歌声はよく似合っている。表現にこだわらないなら、上手い。

「キョーコ？」

皆がノリノリで合いの手を入れる中でも、スバルの二度目の問いかけはキョーコの耳に届いた。

「ああ、うん」

「ウンじゃなくて。なんか、元気ないぞ」

嬉しいのに、楽しいのに、何故だろうか。

この、小骨が喉に突き刺さったような違和感は。

「なんでもない」

「最近こころでウワサになってる二人組、知ってる？」

「キョーコそういう時、絶対何かあるだろ」

「ウワサ？」

「そう。ストリートライブっつーの？」

「ゼンゼンないよ。そういうのじゃ」

「それがすっごい上手いのなんのって。いろんなギョーカイ人が血眼で探してるって」

「ウソつくなよ。私とキョーコの仲だろ」

歌い疲れていち段落ついた後輩たちの会話の間を縫うように、スバルの言葉が通ってくる。それに何も無い何も無いと返しつつ、キョーコのノドに引つかかった小骨はいつしか犬の大腿骨くらいのサイズに膨れ上がっていた。

「その。ここに来た時から、みんなに聞かなきやって思ってたんだけど」

疑念は、もっと大きく。

まだ引き返せるぞと脳の一部が警告していたが、理性は否定した。彼女はよいこなのだ。

「——今日って、ミーティングの日だったよね」  
言った。

キョーコ以外の全員が示し合わせたように、同じタイミングで目を見あわせていた。

「センパイったら、また勘違いじゃないですか？」

「ううん。聞いた。今朝。部長から」

空気が、ねっとり重くなった。

「あー、それは……ですね」

全てを聞くまでもなく、後輩の言葉の歯切れの悪さからすべてを察する。

さつきまで冷房は十分に効いていたというのに、キョーコの首筋は嫌な汗にじっとり濡れ始めている。

「いいよ。私が答える。なんか歌ってて」

「え、えええ、この状況ですか？」

「できるよね。副部長サマの命令なんだからさ」

絞れば脂汗でバケツ一杯を満タンにできるような錯覚を覚える

キョーコに対して、ボイコットの主犯格は汗の一つもかいてはいない。

近くの下級生にマイクを押し付けるようにして立ち上がると、依然として柔和に微笑んだまま、キョーコの前まで悠然と歩んできた。

「だって私、チヅルのこと、嫌いだからさ」

そのたった一言で、キョーコは完全に言葉を無くした。

「言っていることと悪いことがある。キョーコにひどい言葉を吐くあいつを、私は許せない。だから、ちよつとイジワルしてみただけさ」  
「せ、センパイ。でも」

「キミたちだってフマンがあるからサボったんだろ、部活」

「……確かに、チヅルさんはイチイチ言い方にトゲがあるっつか、いい感じはしないですけど」

「ま、ドクサイシヤっぽいよねー」

「で、でも。チヅルちゃんが部長なんだよ。みんなが部長に逆らってたなら、部活なんて——」

「キョーコ先輩が部長してたところが、一番楽しかったです」

それまでマイクを握らされたままにうつむいていた後輩のもとに、全員が視線を注いだ。

「今は、ただただ走ってるだけです」

パーティー用の部屋に据え付けられた大液晶から放たれる、アイドルソングのケバケバしい映像ときらびやかな音色はこの状況にミスマッチ極まりなく、かえって彼女の言葉の深刻さを強調しているようだった。

「あ、う」

喉の奥に乾いた砂を詰め込まれたようだった。前部長として何か言ってるべきなのか。いや、もう何も言う権利はないのか。

——悪いのは、本当に私たちだけなんですか？——

視線だけで訴えかけてくる彼女たちを前にすると、誰が正しく、誰が間違っているのか分からなくなってしまう。もちろんチヅルのや

り方に問題はあるのかもしれないが、彼女が問題そのものではないよ  
うな気がする。

「あいつがキョーコを部活から追い出したんだ。そうだろ？」

「スバルちゃん」

「うん。なんだい？」

結局ロクなことを言えないままに、キョーコはいたたまれない空気が  
が充満するばかりとなった個室に背を向けていた。

「キョーコ？」

きつと、親友はコレを悪いとも思っていないのだろう。前部長がチ  
ヅルから投げかけられる辛辣に心を痛めているだろうと考え、行動で  
報いてやった。ただそれだけのことなのだろう。

「——わたし、帰る。少し、気分、悪い」

だから、喉元までせりあがった言葉を何とか飲み下して、一步目を  
踏み出す。

冷房代をケチっているのか、カラオケ屋の廊下に充満した夏の熱気が  
キョーコの背中にへばりついてくるようだった。



「あ、おい、キョーコ！」

「あーあ、行っちゃいましたねー」

弾丸じみた勢いで個室を飛び出していこうとするスバル。

タイムを計測すればさぞかしい数字を叩きだしてくれただろう  
が、賢明な後輩は彼女の肩に手を置いて止めることを選んだ。

「今はほつとしいた方がいいですつてば。もつと嫌われちゃいます  
よー」

「嫌う……キョーコが……私を……?」

「いいからスバルせんぱい、なんか気晴らしに歌いませよー」

「そつとしときなつて。センパイ、きつとしばらくあんだから」

スバルは先ほどまでキョーコの前に立っていた時とは打って変  
わって、陸に打ち上げられたナマコのようにぐでりとテーブルにもた  
れた。

「嫌われた……キョーコに……何が良くなかったというんだ……」



やがてごつごつとテーブルに頭をぶつけて懺悔のリズムを取り始めたスバルをよそに、後輩たちはさっさとテンション高く次の曲を入力し始めるのであった。



——がっかりだよッ！——

と、あの場でスバルに叩き付けてやったら、彼女はどんな顔をしただろうか。

「おい、キョーコ！」

カラオケ屋の廊下に響いたスバルの声に振り返ることはせず、キョーコは受付の店員に愛想を返す習慣も忘れて湿った熱気が充満する大通りに出た。しばらく帰宅ラッシュでごった返す通りをイノシシのように直進し続けてから、自分の影法師が地面を滑る速さに、吹きこぼれかける心の熱量に気づいた。

「がっかり、だよ」

小声で吐いた。

煮えたぎる鉛のような言葉は、バスタブの排水溝に吸い込まれていく髪の毛のようにわずかなあがき見せて、キョーコの胸の中にととうとう納まった。

少しだけ我に返ると、きつと自分がよいこらしくない顔をしているのだろうかと思った。こんなんじゃないやダメだとぴしぴしほっぺを叩いてみるのだが、効果のほどは怪しい。

「ダメだな。ダメダメだ、わたし」

駅前広場まで歩くと、ベンチに腰を落ち着ける。

「チヅルちゃん、困ってるだろな」

様子を見に行かなきゃ——と腰を数センチ浮かせて、やめる。

決して来ない部員を一人で待ち続ける彼女のところへずけずけ入って行つて「誰も来ないからお帰りよ」と叩き付けるのか。

それはあの子のプライドを傷つけるだけだ。最悪手だ。

(戻って説教でもしてみる?)

が、部長を辞めた今、何の力もない。慕われていても、騒げばただのうるさい部外者でしかないのだ。

頭上では夏祭りに向けて飾り付けられた提灯たちが本番を待つ夕風に揺れている。いい打開策でも思いついたら電球に光が点つたりするだろうか。なんて突拍子の無いユーモアに乾いた笑いを漏らすことも今は難しい。

目頭を押さえて、キョーコは瞼を落としてみる。考える人のまねをするだけでアイディアが浮かべば苦勞はないが、頭がちよつとだけよくなったような気はするのだ。

当然、気がするだけなのだ。

視覚を閉じ、動くことをやめると、雑踏が遠のいた。

聞こえない音が聞こえてくる。自分の鼓動だとか、呼吸に合わせて肺腑が膨らんで、しばんを繰り返す音だとか。

ここまでどつぷりと彼女が何かに集中するのは、珍しいことだった。

やがて神経を走る信号の音すら遠のけば。

キョーコの聴覚は完全な沈黙の中に放り出された。

上下感覚すら失ってしばらく虚空を漂った彼女を抱きとめたのは、遠く黒雲が渦巻くような、ごごごという腹を底から浮かすような音だった。外界の音を遮断して、暗闇に吞まれたキョーコの意識の中で際限なく反響を繰り返す。

——何か、ひどくわお巨きなものが近づいてくる。

と、感じた。

——何が？

と、いう問いに答える語彙はキョーコの紙風船大の脳味噌にはふくまれていない。

ただ、きつとこれは聞こえない音と同じものだ。

だれもが聞こえているけれど、誰もが聞こえていなかったことにしているものだ。

イケないものだと直感する。よいこの中には、決してあつてはいけないものだと。

よいこセンサーが危険信号を発し始めるが、キョーコの意識はすでに巨大な渦に巻き込まれる木の葉のように、自身の内側に広がる暗黒へ

と深く深く抗いがたく引き込まれていくのであった。



最初、雹でも降り出したかと思った。

ようやく戻ってきた現実の体の感覚。首筋の汗とミカンの皮のよ  
うな夕日が今夏であることを思い出させ、花火か爆竹かとも考えた  
が、ここは駅前広場。大交差点の近くにのっそり構えた交番がそれを  
許しはしないだろう。

「ありがとうございますましたー！」

顔を上げるなり、綺麗な二重奏がキョーコの耳朶を打った。

音の出所を探して見つけたのは黒山の人だかり。見るからに熱気  
に浮かされた集団に万雷の拍手を浴びせかけられる二人が身に着け  
た衣装と、髪や光彩が纏う鮮やかな色彩は一瞬でキョーコの視線を釘  
付けにした。

「この炎天下の往来で足を止め、このマヤとオルガの他愛ない芸に拍  
手まで送ってください、K市の皆様には、まこと感謝の極みでござい  
ます」

きれいにウエーブした濃い桃マゼンタの髪を揺らして、マヤ、と名乗る少女  
は用意してあったであろう口上をつらつらと述べる。

「つきましては皆様のお優しさに、不肖カミンスカ姉妹、もう縋りたい  
ところでございまして。よろしければ。ええ、お気持ちで結構なので  
す！」

すつ、と。

マヤの後ろから歩み出てきたオルガが小首をかしげて屈託のない  
笑みを見せる。

咲き誇るヒマワリのような髪を短く切った上に結っているせいで  
少年とも見紛う出で立ちであったが、姉妹、という言葉の表す通り、二  
人の顔の造詣は瓜二つであった。

「でもマヤ的には期待を隠せません」

「正直オルガ的にもワクワクが止まりません」

そんな『カミンスカ姉妹』が可愛らしく微笑み合って取り出したの

は花柄の風呂敷だ。その裾が広がり切る瞬間には、既に聴衆の手は懐に入っていた。

「おひねりくださいいな!!」

それが合図だった。

—— ああ、お金が空から降ってくるなんて本当にあるんだ。

夕日を受けてキラキラ輝く小銭の雨を見ながら、キョーコはのんきに考えていた。

よく見れば小銭だけじゃない。カドに折られたお札だったり、お札そのもので小銭が包まれていたり。

「ありがとうございます！　ありがとうございます！」

パンツパンに膨れ上がった風呂敷を苦勞して縛り上げるオルガを背後に、マヤはもう一度、四方に深々と頭を下げた。

「皆様のお気持ちで私たち、胸がいっぱいです！」

「というかフトコロが」

「くら」

結局気が抜けたようにお金のシャワーを見続けていたが、キョーコにはオルガの眩きと、それを諫めるマヤの声が聞こえた——ような気がした。

焼けたマンホールの上に置かれた氷のように、あれだけの聴衆がするすると解散していくに従い、キョーコは違和感を覚え始めていく。あまりに滞りがなすぎなのだ。それこそ集団行動の演目でも見せられているように。むしろ、キョーコとしてはそちらに拍手を送りたくらいに。まるでせき止めていた川の流れを解き放つてやったように、去っていく聴衆の動きにも表情にも、双子の「芸」に対する余韻も感動も残されてはいなかったからだ。

『最近こころでウワサになってる二人組、知ってる?』

「あ」

『そう。ストリートライブっつーの?』

何も浮世離れしたような二人組。

その姿を凝視することしばらく。ようやくカラオケ屋での他愛のない会話に二人が繋がった。

そしてキョーコの琥珀色の瞳とマゼンタの視線を交錯させた少女もまた、キョーコと同じ形に口を開けていたのであった。

「オルガちゃん」

「ん？」

マヤに手招きされたオルガもキョーコを視線に収めると「はーん」といった顔で米袋ほどに膨れ上がった小銭袋を軽々背負いあげると、ステップでもふむような足取りで。

うっかり両替所を襲った銀行強盗のように風呂敷をちやりちやり鳴らし、ステージに立つような風変わりな衣装に、殊更風変わりな髪と瞳。そんな二人に雑踏は無関心を決め込むばかり。

「お姉さま」「お姉さん」

間違いないく面倒ゴトのタネである。

最近よく巻き込まれるからよくわかる。

(逃げようかな)

と迷っている間に二人はキョーコの前までやってきて屈託ない笑みを向けてくる。

「お気持ち、まだですよね!」

お気持ちを要求されたのは鳴無響子、生まれて初めての経験である。

「あー、えーつとね」

というか優しいめの恐喝であった。

「……………ぼおつとしてたから、聴いてなかった」

「ええーツ!!?」

恐喝に屈してられるほどキョーコの財布の紐は緩くないのだ。その結果、姉妹はだいぶショックを受けたようだったが。

「そっか。残念です」

「次はちゃんと聴いてくださいね」

意外や意外。二人はそれ以上食い下がろうとはせず、落胆のため息一つをキョーコへの置き土産にくるりんぱと踵を返しただけだった。

「仕方ない。次いつか、マヤちゃん」

「うん。なるべく人が多いところに行きましょう」

「どこだろね」

「私たち、土地勘ありませんものねえ」

悪意はないと分かっているが、二人の会話を聞いているとなんだか申し訳なくなってくる。

「あのさ、二人とも」

罪悪感で引き留めたわけではない。

二人が振り返ると、キョーコはそれ以上の言葉を忘れてしまった。そのくらい、衝撃だった。そして、自分自身が彼女たちを呼び止めた理由を、キョーコは逆の順序で理解した。

「ん。なーに？」

「どうかしましたか？」

夕日に型抜きされた二人のシルエットは重く、厚く。

ビルの間を吹き抜けてきた夕風が吹きあげる二人の前髪は反り立つ巨大な角にも似て。

まるで、星熊勇儀に初めて出会った時のような異様な存在感を、彼女たちの中にも感じ取った故に。

「おなか、減ってない？」

何より、その笑顔の空虚さに。



カミンスカと姓を名乗る少女たちは姉妹というか、正確には双子であるらしかった。

「へんなヒトだよね、キョーコお姉さんってむぐぐ」

マヤはオルガの言葉を遮って、彼女の口の周りを紙ナプキンでぬぐってやる。

姉妹が夕食を馳走になった相手にこれ以上の無礼をぶちかますことを阻止しなかったのか、それとも夕暮れを越して電飾の冴える宵闇の時間帯、シヨウウインドー状態の窓際席で、ソースまみれの口元を晒すんじゃないよということなのか。

「ヘンというより、あまりお見掛けしないタイプのお方だと思います」それはオブラートに包んだ「へんな子」である。キョーコは苦笑するに反応を留めて、ポテトをかじる。バーガーはない。ポテト(S)

だ。なぜ貧しきが富めるものに夕食を供しているのか。足元に無造作に突っ込まれた風呂敷の中身を考えればおかしな状況である。

おまけに弁当を盗まれたキョーコは昼食抜き。

気を抜けば暴れ出す腹の虫をジャージの上からぐっと抑え込んで、キョーコはポテトの塩気を可能な限り時間をかけて味わう。

「それ同じコトじゃんか」

「違います。断じて」

オルガがマヤの思いやりを粉々にブチ砕く。

キョーコが彼女たちを呼び止め、ファストフード店で夕食を奢ることになってから、かれこれ半時間ほどか。

鏡写しの双子であるが、マヤは天真爛漫なオルガに比べてだいぶしつかりと「お姉さん」している。

「すいませーん！」

そして、オルガも決してマヤに劣っているというワケではなく、

「オレンジジュースと」

「あ——じゃあ私も同じので」

「コーラね。オレンジとコーラで」

空気を読みまくり、打たれる前に引っこんでしまう杭のようなマヤの意をしつかり汲んで代弁してやるのだった。

「ありがとうございます」

「いいっていいって。家族同士なんだしサ」

「違います。夕食をぐ馳走してくれるお姉さまに言ったのです」

軽い晚餐はいつの間にか飲み放題食べ放題に変わっていた。キョーコは静かに肩を落とす。

（まあ、いいんだけどサ）

あの熱気の中で一瞬寒気を感じるような、虚ろな笑みは、もうない。（安心したかな。ちよつと）

彼女たちが何者であろうと、あんな顔をした子供たちを放っておくことなどよいこのしていいことじゃない。

店内の照明がマヤの持った紙コップの中身の減りを映し出す。音ひとつ立てずに上品にコーラを吸い尽くすと、ちゅぱ、と微かに水音

を立ててストローを離す。

「オルガちゃんのはオマケ」

その口元をへの字に曲げて隣のオルガに見せた後、彼女はキョーコに向けて居住まいを正した。つられて、オルガも膝をそろえる。

言うべきか言うまいか。彼女たちの鮮やかな虹彩は、逡巡の色ですらはつきりと陰りを落としてしまう。

何か来るな、とキョーコも身構えた。

「どうして？」

二度目の二重奏。だった。

「どうして。って？」

「私たちは見ての通りお金に困ったりはしてません」

「僕たちだけで生きていけないほど、弱くもない」

どうして、と。それから二人はもう一度美しい二重奏を響かせた。

「お待ちせしましたー」

そこに丁度店員が持ってきたコーラとオレンジジュースが差し出され、双子は視線そのままに、ストローを啜える。営業スマイルで去っていく店員に、これほどまでのありがたみを感じたのは生まれて初めてかもしれない。

「そうだねえ」

キョーコには僅かな執行猶予が与えられた。

あの空っぽな表情のこと、と答えるのは気が引けた。そう答えてもおそらく、正解の半分といったところだろう。

もつと、根本的なことを聞かれている。答えを探すように指先を彷徨わせて、先の一本が最後のポテトであることに気づいた。

「二人が、他の人たちとは違っているように見えたから」

最初の一步の重みに、十三階段が軋みを上げた。

「違う？」「どこが？」

鮮やかな色彩が、絵の具を流したように揺れる。

雰囲気は剣呑ではない。彼女たちはただただ気になるから聞き返してくる。それだけだ。

「なんだか、最近二人みたいな子とよく会うんだ。だから、どうしても



気になって」

「私たちみたいなの？」「気になったって？」

べつに、階段の果てに絞首刑が待っているわけではない。本当なら一段抜かしてガンガン処刑台をよじ登って『鬼なの？』と聞いてしまえば済む問題だ。それをあと一歩で押しとどめているのは、今朝の薄汚れた、名も知れぬ鬼とのやりとりである。

「あ、それ私のコーラですよ」

「少しくらいいいじゃんさあ」

「オルガちゃんの少しは、少しじゃないじゃないですか！」

きゆうくつなシートの上で押し合いへし合いする双子の姿は、あくまで年相応の少女たちとしてキョーコの目に映る。この双子はなんというか、キョーコにとって好ましかった。

だからなるべく、何かの勘違いの末に敵対、なんて結末は願っていない。

だが、それでも。だ。

「聞きたいことがあるの」

キョーコは星熊勇儀を救いたい。今どこに彼女がいて、何をしているのか知りたい。彼女に至るための手がかりなら、どんな犠牲でも払う覚悟はある。

「キミたちは——キミたちも、鬼なの？」

第二話『猫と双子と弁当と』 おわり

## 5 『ファストフード・スローアライバル（上）』

目の前の双子が目を見開き、顔を見合わせ、そして再びキョーコへと視線を戻すまで、歯医者者の待ち合いにでも詰め込まれたような気分でキョーコは待ち続けた。

油と塩粒に塗れた指を見て、ポテトの容器がすでに空であることを思い出し、どこへやっついていいかわからず、それを空中でぶらぶらさせたまま、最悪の状況に備える。

やはりよした方が良かっただろうか。

キョーコの覚悟は早くもくじけていた。

旧校舎の鬼の一件を改めて顧みれば、彼女たちにとって正体を見破られることは、トンデモなくマズいことなのかもしれない。

——追ってきたら命はない。

あの鬼にそう叩き付けられた時の怖気には、背骨を引っこ抜いて氷の棒を突っ込まれたような異質な雰囲気があった。

未だかつて——いや、一度だけあったか。あの「きさらぎ駅」で勇儀とキョーコを襲ってきた大狗が目にしたような、純粋な敵意が。

「オルガちゃん」

マヤがわずかに身を乗り出してくる。オルガが、その横顔をうかがう。

「うん」

最悪の状況——を考えると、キョーコは無駄と知りつつ身を固くした。

疲れ切ったサラリーマンや塾帰りの学生、制服姿の男女でごったがえすファストフード店の、この席だけが、一秒と一秒との隙間にコンクリートを流し込まれたように鈍く時間が流れているような錯覚を覚える。

「な、なんか、よくない事、聞いちゃった、かな」

止まる。キョーコはそう、感じた。

時間が止まる。彼女の全神経が集中する先、マヤの唇。

タイムラプスで撮影されたつぼみの開花じみて、形のいい唇が開ききるのを、キョーコは固唾が己の喉を滑り落ちていく音を聞きながら、待つ。

「あの、えっと」

ああ、地獄の門が開く。

次の瞬間カミンスカ姉妹の口からは虹色のレーザーが吐き出され、余計な詮索をした小娘の頭を吹っ飛ばすのだ。無辜の市民たちを巻き添えに。そんな大罪を背負って死んだキョーコはきつと地獄行きだ。

閻魔サマが説教好きで情に厚い美少女なんていう可能性は世の中曲り間違ってもあり得ないのですぐさま実刑判決だろう。そして身ぐるみはがされたキョーコは業火の前に並ばされ、筋骨隆々の世紀末覇者みたいな閻魔大王は嬉しそうに目を細め、地獄の獄卒に命じるのだ。

『ごんがり焼いておくれ』  
と。

「ほらね？」

しかし妄想の世界を驀進するキョーコの予想を裏切り、地獄門から吐き出されたものは余りにもトーンの軽い一言なのであった。

「思った通りお姉さまは珍しい方。でしよう？」

「そーだね。やっぱちょっとヘンだけど」

じゅじゅじゅ、と音を立ててオルガがジュースをすすりあげると、その後ろ頭をマヤがひっぱたいた。いい音がした。

「いったあ!？」

「オルガ、お下品。あと失礼」

「あ、あの。えっと」

「お姉さんの言ったとおりだよ」

「ボクたち、この国だと怪異とか。妖怪とか」

「そういわれる中でも特に鬼と、呼ばれるのが私たちなのです」

なんなのだろうか、この肩透かし感は。

「はあ」

空気が抜けた風船のような気分で、キョーコは返事をする。すばやくテーブルの下を潜り抜けてきたオルガがキョーコの膝の上にとっかかり腰を下ろしている。だっこの体勢だ。

「お姉さんみたいな鋭いヒト、たまにいますよ」

そのままもしやもしやと彼女がキョーコの頭を揉みだすのにも口々に反応できないくらい、緊張の糸がほつれ切ってしまっていた。

「ちよっと、オルガちゃん」

「んー、待っててね」

尚も額をもみもみされているキョーコには、彼女が何をしたいのかわからなくわかる。

「わたしは鬼じゃないよ。たぶん」

「うーん。そうは言えども、お姉さんからはどことなくアヤシイ気配がですね」

オルガはキョーコの角を探すことをやめて、あずき色のジャージの胸ぐらをつかみ上げると、ためらいなく鼻を押し付ける。

奇行の連発にさすがに周囲の注意が集まりだす中、彼女の頭越しに、向かいに座ったままのマヤが目で謝った。

「お金ずつと握っていると手からお金のニオイするじゃないですか。あんな感じの」

「移り香です」

「そう。ウツリガ的なのがお姉さんからプンプンするんですよ。くんくん」

鬼の移り香というものがあるのなら、キョーコにとって心当たりがあまりすぎるくらいあった。

「最近よく鬼に会ったからなあ」

全員が鬼と自称したわけではないが、明らかに尋常でない存在となら、かなり交流があった。

「たぶん、それだと思っ」

「会ったって……どのくらい?」

「たぶん二人か三人くらい?」

「うひゃー、お姉さん、よく無事だったね」

「だよねえ」

言われるまでもなく、五体満足でこうしていられるのはキョーコ一人の力によるものではない。

座り心地がいいのかキョーコは膝の上でうとうとし始めたオルガを抱いた。ひまわり色の髪からはシャンプーと汗の混じった甘い香りがして、キョーコは東の間サキ先輩のことを思い出す。

「ボク、重くなーい？」

「ん。だいじよぶ」

妖怪とか怪異とか、難しい漢字を使つて書くんだろってことくらいしか分からないが。きっと、彼女たちの温厚さは特別なものなのだろう。

「ごめんなさい。オルガちゃん、甘えんぼで」

「別に甘えちゃいけないけど」

いちわるに笑つて、オルガはマヤを見返つた。

「本当はマヤちゃんもこうしたいいくせに」

「お姉さまがメイワクがつてます」

双子の会話はキョーコの意識を素通りしていく。

旧校舎に潜む鬼からの警告、そして、「きさらぎ駅」で大狗と影鬼たちから助けてくれた星熊勇儀のことを。

そう、勇儀。

「ねえ、君たち、星熊勇儀つて鬼のこと、何か知らない？」

何故この瞬間まで忘れていたのだろうか。

しかしキョーコの質問に、双子の鬼たちは「分からない」と言葉短く答えただけだった。

「そっか。そう、だよね」

無理もない。カミンスカがどこの国の姓かは知らないが、ひよつとすると地球の反対側から来たばかりかもしれない相手である。

ホシグマ、なんて風変わりな名前を知っている人間が一体この地球上にどれだけいるのやら、とキョーコは天井を見上げる。

「ごめんなさい。力になれなくて。ただ」

そこで言いづらそうに口をつぐんだマヤがテーブルに視線を落と

した。

「ただ、鬼が身の回りに集まってきたんなら、気を付けたほうがいいよ」

「気を付けるって、どういう風に？」

「わかんない。ただ、これから何が起こっても驚かないこと。かな」

キョーコの胸元に頭を預けていたオルガが、ねむたそうな眼を薄く開いてマヤの言葉をつづけた。

「ま、ボクたちが言うなよってカンジだよね」

「そういえば、二人はどうしてK市に？」

「えっとね」

むくりとオルガが体を起こし、テーブルの下に滑り込んでいった。そうして並んで座ったマヤがオルガと交わす表情には、はつきりと迷いが見て取れた。

「ま、大丈夫じゃない？」

対するオルガは首をすくめて三杯目のコーラを注文したくらいだ。

「お姉さんがなんか知ってれば儲けものだし」

「そうね。そうなんだけど」

「そんなに言いづらいの？」

「というか、私たちですら妙な感じがするというか。現実味がないというか」

キョーコもオルガも相変わらずの態度を保つばかり。

やがて、観念したようにマヤはため息した。磨き込まれたテーブルに移り込む彼女の憂い顔が、くもりの中に消える。

「結構傷つくんで『何それ』みたいな顔しません？」

「しないしない。だって鬼とか妖怪とかヘンなのたくさん見てきたし」

「ヘンでゴメンね！」

ふんだ、とわざわざ口に出したオルガがわざとらしく音を立ておかわりのジュースを一瞬で飲み干した。マヤはオルガの無作法についてあれこれ言うことはせず、コップの底の形にテーブルの上に残った水滴を撫ぜながら、やはりためらいがちに口を開いた。

「鬼の王様に会いに来たんです」

「鬼の、王さまあ？」

思わず素っ頓狂な声を漏らすキョーコに「むう」とマヤが唇を尖らせた。

「ほら、やっぱりそんな顔するじゃないですか！」

「うーん。だってさあ」

鬼は乱暴で協調性がない生き物だ、と。当の鬼である星熊勇儀はキョーコに語って聞かせたものである。

それを纏め上げる首領がいるのならよほどの変人か、乱暴者か、あるいは両方でしかない。鬼の王が君臨するというのなら、K市はとつくの昔に修羅の国と化していたに違いない。

「でもそいつ、確かに何十年も前からこの町にいるんだって。それに、そいつが生きていようが死んでいようが、それはボク、たち、の——」  
聞きなれぬ単語に、それ以上の掘り下げを試みることはできなかった。

「いらっしやいませー」

なんの前触れもなく『彼女』が入ってきた瞬間、明らかに周囲の空気が一変したからだ。

かつ、かつ、かつ、と高らかに踵をタイルに鳴らし、明らかに彼女たちをめぐって近づく足音が、三人に自然と口をつぐませていた。  
か、つ。

足音のペースが緩まるにつれ、キョーコの背後に向けられた双子の視線が、上がっていく。やがてキョーコの座るシートの背もたれにかけられた、細く、しなやかな指。

「あなた、T女の生徒さんですわよね」

その指先に僅かな体重がかけると、きゆう、と。シートは小動物の悲鳴にも似た音を発した。

「あ、はい。何でしょ」

顔を上げれば、豊かな銀髪が藤棚の藤のように垂れていた。気づけば店は静かになっている。その理由がキョーコの傍に立つ女性であることは間違いない。巨大なトランクケースでも、見慣れない制服に

でもなく。ただただ、その、月の光を帯びたような銀色に、言葉を発する機能を奪われてしまっていた。

「あ、あの。ガイコクの方ですか……?」

なんとかキョーコが声を発すると、女性は碧眼を細めて微笑む。頭の芯が痺れるような、不思議な魅力というか、魔力があつた。

「ふふ。やあねえ。別に、カツアゲをしにきたわけではなくってよ」

「か、カツ、え?」

シトラスのような爽やか香りは、香水だろうか。それとも、女自身の体から発せられるものだろうか。自然と香りの源を嗅ぎ辿つたキョーコは、不意に顔をしかめた。

「どうか、なさいましたか?」

「あ、いいえ。ゴメンナサイ。それで、どうしました? なにか、お困りですか?」

赤茶く、錆びた異臭。

それはキョーコが慌てて頭を振るうちに、柑橘の香りに覆い隠されていった。

「わたくし、どうやら迷子になってしまったようです」

「は?」「まいご?」

双子がこんがらがった視線を向ける先で、女はきまり悪げに顔をそむけた。



風間は下宿屋の門前に据えられた長イスに腰かけていた。

駅前アーケードの遠い喧噪をBGMにはぐれ虫のごとくタバコをふかす中年フリーターの顔は虚無的で、自嘲に歪む頬元にはバンソークーが張り付けられ、鼻の穴には固まった血の染みたティッシュが詰め込まれていた。

「ちくしょう、また負けちゃった」

因縁抱える二つのチーム、『南町サンダース』と『西商店街カーディナル』の激戦は、泥芋を泥沼で洗うようなドロ仕合の末に大差を付けられたサンダースの敗北に終わった。

『あー、今日も負けちゃったー』



『帰りにケンジンとこ寄ってこーぜー』

『カントクー、早くスシ行きましようよー、スシい』

もことから、食い意地の張った子供エサで釣って結成したようなチームだ。試合後のマウンドで背中から怒気をスチームのように発散しているのが風間だけというのが、また敗北の虚しさを煽り立てた。

『カザマあ、その薄汚れたドテラもそろそろ質に入れなきやいけないんじゃないかあ』

帰り際にカーディナルの監督を務める八百屋オヤジに掛けられた一言が致命的だった。

『あゝあ!』

『あ、カントクが怒った』

鬼のような形相で風間が振り返ると、チーム関係なく子供たちがはやし立てた。風間がドテラを脱ぎ捨て、子供たちは乱闘ほんばんの予感にエキサイトする。

『おい、いぶちゃんー!』

しかし、その日は勝手が違っていた。八百屋のオヤジは応戦のために上着を脱ぎ捨てビール腹を晒すかわりに、ベンチに向かって顎をしやくったのだった。

『はいよお、ボスう』

ろれつの回らない声がベンチの奥の暗がりから放たれた。

ふらりふらりとおぼつかない足取りでやってくるのは、最近ふらりと現れてカーディナルの助監督の座に収まった少女。子供たちは『いぶちゃん』と、彼女を呼んでいた。

『出番ね。出番。うっへへ』

千鳥足が一步進むごとに、酒の匂いがぶんと強くなる。

カーディナルのマークが入った赤いキャップにスタジヤンを身に纏った少女は、それまでひとまとめにしていた後ろ髪を無造作に解いた。その背は、風間の腰ほどもない。

『いぶちゃん、やるならボディにしときな』

『うん。分かったよ』

現に風間の前にやってきた少女は、敵手の顔を確認するのにほとん

ど真上を向かなければいけないかったくらいだ。

『よろしくう。お手柔らかにねえ』

それだけの身長差に物怖じする様子もない少女が、いつそう口角を吊り上げると鋭い鬼齒が真上の陽を反射してキラリと光る。底知れぬ強敵とのバトルの予感に、風間の体を武者震いが駆け抜ける。

『お、おう。いいぜ。俺は大人だから、優しくしてやるよ』

いや、やっぱりブルただけだったかもしれない。



「草野球チームでプロの助っ人とかオトナゲないにも程があるだろうが、クソ」

結局試合がコールドなら、乱闘も風間のコールド負けに終始したのであった。

「おーいて」

結局フェイスもぶん殴られ、戦いがヒートアップするうちに騒ぎは商店街中に波及。両チームとも一か月の試合停止を喰らって帰ってきてみれば下宿屋の灯は消えており、案の定正面玄関の引き戸はミヨシらしくキツチリ施錠されている。

「むおおおお」

それが力づくで開くはずもなく。体は疲れ果て、頭は困り果て。そんな状態で二階の自分の部屋を見上げて見れば、なんと窓の間に僅かな隙間があるではないか。

—— おお、ここままで不運が重なればさすがにイイコトの一つくらいあるじゃねえか。

なんて思つて木製の壁を指先の力でよじ登り、雨どい伝いに窓を指したまではいいものの、そこは築年数不明の下宿屋。

雨どいは風間の浅知恵をあざ笑うような音を立ててアツサリ外れ、数秒後に目を覚ました風間は自分が干からびたカエルのような姿でアスファルトの上に伸びていることに気づいたのであった。

そうして自分の部屋に戻ろうと思つても戻れそうにないので、風間は完全に考えることをやめた。路地裏のホタル族としてミヨシの帰りを待つだけのオブジェと化す道を選んだのだった。

そんなこんなで日も高いうちに帰ってきたカザマが足元に吸殻山脈を築き上げるころにはとつぷり日も暮れていた。

で、至る現在。

ようやく路地の曲がり角からミヨシのつつかけたサンダルの足音が聞こえてきた時には一日の大半を使い潰していた。

「おい、ミヨっちゃんよお」

待たされた苛立ちからつい負け試合の怒りを彼女にぶつけるところであつたが、路地の角から彼女が完全に姿を現すにつれて——正確には、彼女に肩を借りる形でここまで歩いてきたものが街灯の灯かりの下にはつきり見えてくるにつれ、それどころでないのが理解できた。

「その子、どつたの」

ミヨシは頭を振る。こんな時でも、彼女はかたくなに口をつぐんだままだった。

「おいおいおい、こんなところで拾ってきたんだって」

尚も黙して語らないミヨシの隣で、それが大儀そうに頭をもたげた。

燃える稲穂のような黄金の髪から、固まった血のかけらがばらばらと落ちる。

「よお。さっそくメイワクかけてるよ」

謳うような、叫ぶような、不思議な熱を帯びた声だった。

「ヤバそうだな。代わるから、カギ、開けてくれ」

カザマに領いたミヨシが、氷細工でも扱うように、慎重に女の体を預けてくる。その理由はすぐに分かった。風間とも並ぼうというほどの身長にも関わらず、彼女の体は軽すぎる。足りな過ぎた、と言い換えてもいい。

「おねーさん、戦争でもしてきたのか？」

「……ハハ。そうだったかもしれないねえ」

眠たげに瞬きしていた女が、風間の軽口に力なく笑って咳き込む。

本来その口元を覆っていたはずの右腕は肘先から鋭利な刃物で斬り落とされたようにすつぱりと失われ、残された左目だけが深い疲労

を訴えかけてくる。腕の傷にも右目にも包帯が巻かれ、一応の処置は  
されているようだった。

「これ、ミヨっちゃんか？」

血で指先がぬめるのか、鍵開けに苦心するミヨシから答えはない。

ただ風間の素人目にも包帯の結び目は古く、ここまでのすつたもんだで風間の鼻から吹っ飛んだティッシュ以上に、包帯に染みた血は黒  
ずんでいた。

(……こりゃ、どこの誰の仕業なんだか)

口には出さず、風間は内心で吐き捨てていた。

「まあ、ケガ人同士、仲良くしようや」

女は見ただけで重傷であることが分かるが、「なんとかかなりそう」ではあることも分かる。いつものペースに戻ってみせた風間が名乗ると、隻眼の大女も口元を緩めた。

「ああ。よろしく。あたしは——星熊勇儀、ってんだ」

風間の握手に応じようとして右肘の先がないことを思い出した勇儀が豪快な笑い声を漏らすと、丁度鍵を開けたミヨシが戻ってくるところだった。

## 6 『ファストフード・スローアライバル（下）』

「頭おかしいんじゃない——いたあつ」

銀髪の少女——二階堂アンリにかいどうと名乗った——が話し終えるなりオルガが鋭くつつこんだ。活気を取り戻したファストフード店内に、マヤがオルガの後頭部をひっぱたいた音が高らかに響く。

「失礼しちやいますわ」

キョーコも、正直なところオルガに同感だ。

県外の高校からやってきたというアンリの辿った一日の足取りは、文字通り常軌を逸したものであった。

「いいですか。もう一度最初からわたしくしの正当性を証明しますから」

「や。いらぬです。もう十分分かりましたから」

マヤがすばやくストップに入るが、相手は聞いてくれない。

この日T女学院を目指して彼女が意気揚々と出発したのが午後二時。

「予定通りならオリエンテーションに余裕しゃくしゃく間に合うはずだったのですが」

停留所を間違つて途中下車。

通行人から手書きの地図と共に「そんな遠くないよ」という言質をとった彼女は駅に戻るより目的地に直接歩いて向かうという選択を下す。

「まったく。あんな善良そうな通行人Aみたいな顔しておいて悪の手先だなんて」

非の打ちどころのない善良な市民である。二階堂アンリという一匹の方向音痴の怪物をK市に解き放った罪はたしかにある。の、かもしれないが。

「そのうちT女学院と書かれたご立派な立札を見付けたので、そこがT女学院だと思ったのですが」

「それがT女学院です」

いきなりゴールインである。キョーコでさえ鈍い頭痛を覚えてい

た。

「でも誰も生徒さんがいませんのよっ。」

頬をぷうつと膨らませて、アンリは乱暴に背もたれに体を預けた。ばぶうつ、と派手な音を立ててシートにうずまった彼女は自分の正当性を一ミリも疑ってはいない様子。

「歴史ある旧校舎を見学するのも楽しみでしたのに、ニセモノ掴まされるだなんて。失礼しちゃいます」

「それが旧校舎ですってば」

捻った首が一回転するような行動。呻くような答え。

「あたりを見ると雑木林が見えて、向こうにもそれらしいものが見えたのですが」

「それは今の校舎です。大正解です」

「なんでそれらしいのに確認しなかったワケ？」

「オルガちゃん、頼むからこれ以上刺激しないでったら」

木を隠すなら林の中。などと、一見理解できるようで全く理解できない理論を振りかざし、本当のT女学院をニセモノと決め付けた彼女はぶんすかと大又で駅方向へ。

「なんでですか」

「ひよつとして行き過ぎたかとも思いましたので。引き返せばきつと見えてくるはず、だと」

「はあ」

当然だが来た道を戻れば駅があるだけである。結局、アンリは塩にもまれるキュウリの如く雑踏にもみくちゃにされながらここまで大荷物をつ引っ張って戻ってきたという。

「話には聞いていましたが、本当、都会は怖いところですよわね」

「ボクはお姉さんが怖いです」

オルガの言葉にうなずきこそしないが、それはマヤもキョーコも、心の中に思い浮かべたセリフであった。

「ケータイのナビ機能とか使ってもダメだったんです？」

『『すまほ』のような』はいてく』は受け付けませんの』

つまり学院に連絡を取ることもせず、今、ということになるのか。

「じゃ、じゃあアンリちゃんに学校を案内してくれる人って」

「この瞬間まで待ちっぱなしではなくて？」

「お姉さま、それは、ちよつと……」

非難するような一同の気配に気づいて、アンリはじたばたと苦しい弁解を始める。

が、ここまでのやり取りで彼女がどうしようもない方向音痴であることは証明済みであった。

「だ、だって都会は久しぶりなんですものっ！　じ、時刻表とかっ、曲がり角とかっ、いっぺんに理解しろだなんて非人間的な要求だとは思わなくてっ!？」

非人間的な方向音痴である。

「うわっ、ゴメン、銀のお姉さん！」

そんなふうにはわちやわちやしていた時である。

代わりに学園に連絡してやろうかと考えていたキョーコがケータイの画面から目を上げると、アンリが、慌てた様子のオルガを手で制するところだった。

「よろしくつてよ。あまりお気になさらないで」

オルガの手にはいつの間にかお替りのハンバーガーが握られ、アンリの襟にべっちよりとソースが塗ったくらわれている。アンリはあくまで微笑みを絶やさない。

「すぐにT女の制服が届くでしょう？　そうしたら捨てる他ありませんもの」

「編入は夏休み明けから？」

「そうだったのですけれど。無理を言わせていただいて、来週からT女の二年生ですわ」

後輩なんだね、とキョーコが言うと、アンリは笑う。バラの花弁が開いていくような、可憐な微笑みだった。

「テストの際はぜひお力添えくださいね。センパイ」

特に『センパイ』の部分強調した後、『お姉さま』の方がしっくりときまして？　と、アンリは冗談めかして笑った。

「うーん。わたし、ベンキョー駄目だからなあ」

「あら。ご謙遜なんてなさらないで。T女といえは東北難関校の筆頭ですのに。この編入にも前の学長にだいぶお口添えを頂かなくてはなりませんでしたのよ?」

そうなのだが。キョーコは太腿のスマイリーを指先でなぞる。

スポーツ推薦枠で入ったキョーコとしては、今の複雑な状況をどう説明していいものか、東の間言葉に詰まる。

「うーん、取れないや」

「まったく、オルガちゃんってば」

必死にブラウスの汚れを取ってやろうと悪戦苦闘するオルガの頭を、アンリは撫で続ける。

「あちやあ、もう染みになっちゃってるかも」

「クリーニング代、弁償させてください。全部小銭ですけど」

「ですから、お気になさらないで」

オルガが立ち上がった一瞬。その胸がアンリの視線を遮った一瞬、彼女の橙色の瞳が、キョーコに目くばせした。今までオルガが熱心に拭いていたソースの下から現れた、真っ黒に乾いた染み。

今日昨日でついたものではない。そのくすみ切った茶褐色が、やけに鮮やかな色としてキョーコの網膜に焼き付いた。

「——まあ、いけない。もうこんな時間」

彼女の手首によく似合う、繊細なシルバーの腕時計に目を落としてアンリは立ち上がった。キョーコが教えてやったT女行きの電鉄が発車するまで、あと三分とない。

「じゃ、次は学校で会おうね!」

「はい。ごきげんよう」

「ばいばーい」

「さようなら」

「はい。お二人も。次はお歌、聴かせてくださいね」

慌ただしく駆けていく彼女のトランクが曲がり角でソファにぶつかった拍子に、細長い包みがほどけて転がった。ごろん、ごろんとアンバランスながら転がり続けたそれが、キョーコの前までやってくと音もなく止まった。



紫色の布地を荒縄で縛っただけのものだが、それらの古び方を見れば、こんなところに転がしたままにしておいていいものでないことは明白だ。

「待ってアンリちゃん。おとしもの」

よいこでなくても、大半の人間ならそうするだろう。

席を立ち上がったキョーコの声に振り返ったアンリの顔には驚きと、そして、なぜか焦りが浮かんでいた。

「キョーコ様！」

布地に、正確にはその下にある何かに、キョーコの手はほとんど吸い付くように触れていた。



人間の体は。

人間の体は、伸筋よりも屈筋が多い。

伸筋は伸び、屈筋は縮む働きをする。ここではその程度の理解でかまわない。

つまりほとんどのパーツはだらりと垂れている状態よりも、何かを掴んでいる状態の方が自然ということだ。

映画で高压線に触った悪役がそのまま真っ黒に焼き尽くされるのを見て、大半の観衆は思うに違いない。

「いや、離せよ」と。

だがそれは残酷な注文だ。全身の神経系統をギタープレイのように無茶苦茶にかき鳴らす高压電流は、当然筋肉にも伝わる。結果、犠牲者は「離さない」のではなく、屈筋の暴走によって「離せない」ままに死んでいくことになるのだ。

「うあっ!？」

キョーコの体にも、同じことが起こっていた。『それ』が帯びた余りの高压電流によって硬直した指先は一瞬で炭化し、前腕——上腕と皮をはち切れさせ、むき出しの赤い肉はすぐに黒く焼けていく。陶器を擦り合わせるような異音は強烈に収縮する筋肉が自らの骨を粉砕する音だ。

【ねえ、キョーコちゃん】

もはや光しか見えない。目の中で稲妻が躍っている。

【この線からあの線。これが、私たちの世界なんだよ】

だが大岩をすり合わせるような声——もはや轟音であった——は、キョーコの意識に直接突き刺さってくる。それは厳めしくも、優しくキョーコの脳髓を切り裂いていく。

【50 m。私にとっては4秒。キョーコちゃんにとっては6秒あるかないか】

ひとときわ激しい光を発した『それ』が解けた。崩れ行く骨の隙間で髓が炎を吹きあげる。

【この速度を変えることはできない。それがこの世界のルールだから】

「——わたしの」

腕の燃えカスの中を何かが激しくのたうちながら駆け上ってくる。それは蛇だ。焼けただれた鉄の流れが遺志を持ち、まるで蛇のようにキョーコの腕を心臓めがけて駆け上ってくる。

【それをできるのだとすれば。それを可能とできるのなら。それは】  
「いや——わたし——は——」

蛇が心臓に巻き付いた。全身の血液が沸騰する。のに、キョーコの思考は氷の如く凍てつき、灰と化した唇が炎と共に言葉を吐き出す。

【それは、とんでもない業だ<sup>ゴウ</sup>】

目の前に、『それ』がある。

「わたしは」

「キョーコ様！」



「キョーコ様。キョーコ様ったら？」

雷鳴のような己の名前を呼ぶ声に我に返ると、キョーコは、アンリの腕の中にいた。

「あっ——はっ——はあ——!?!」

不安げに見下ろしてくるアンリの、碧い瞳が近い。

「ぐ、ごめんー！」

「いきなりしりもちをつかれて。驚きましたのよっ。」

包みはそのままの姿で床に転がり、慌てて持ち上げてみた右腕は、全くの無傷でそこにある。恐る恐る腕を動かせば、問題なく関節は曲がる。怪物が肉を突き破って飛び出してくるなんてことはない。あれだけの痛みも嘘のようになくなっていく。

キョーコは肉が焼ける匂いまで幻覚したというのに。

「お姉さま、汗、ひどいです」

激しい動悸と、鼻先から滴り落ちる脂汗だけが、あの千年にも匹敵する一秒の苦痛を証明するものだった。それを、アンリがハンカチで拭ってくれる。やはり柑橘のすがすがしい香りが漂った。

「お客さまっ…」

「あ、ああ。ごめんなさい。ごめんなさい。なんでもないんです」

訝ってやってきた店員を追い返すと、その手を掴んで双子が引つ張り起こしてくれる。

「大丈夫、ですから」

嘘もいいところだ。学校指定のシャツは絞ればコップ一杯の汗が採れるだろう。そこに天井に据え付けられた冷房の風が直当たりするものだから、立っているだけで眩暈がぶり返してくる。

「ありがとう」

どうにもフラつくキョーコの体をアンリが支えて席を立てば、双子が入口のトビラを観音開きにして待っていてくれる。大丈夫大丈夫と連呼しながらも気を抜けば力が抜けそうな体を引きずる身としては彼女たちの助力はありがたかった。



揺れる提灯を眺めるうちに、具合の悪さは夜風に吹かれて飛んで行ってしまったようだ。

「ん。もう大丈夫」

「ホントですかあ？」

ここまで大丈夫を連呼されると、逆に怪しい。マヤはあからさまに訝った。

「今度はホント。大丈夫な大丈夫だから！」

「それならいいのですけれど」

「うん。アンリちゃんもアリガトね」

三人に礼を言つて立ち上がる。並んで歩くうち、キョーコの歩みは三人とは別方向に向き始めた。

「じゃ、お願いするね」

「うん」「はい」

結局のところ、方向音痴の後始末を双子が請け負う形になった。明日はバイトもある。聞けば丁度学院方面に宿をとつていているというこゝとで、キョーコは素直に双子たちの好意に甘えることにした。

「じゃーねー!」

駅前広場からアーケードに至る大交差点で一度振り返つて、三人に手を振る。一人は電鉄待ちの列をなぎ倒す勢いで、もう一人はそれを諫めつつ手を振り返してきた。

「アンリちゃんも、ガッコーで待つてるからー!!」

最後に続いた三人目が、大荷物を脇に、瀟洒に頭を下げて見せる。その姿がターミナルに滑り込んできた電鉄の車体に隠れて、キョーコはようやく踵を返す。

「遅くなっちゃったなあ」

ようやく夜の町から家に帰るもの、逆にこれから夜の町に繰り出すもの。足を止めれば瞬く間に翻弄されてしまいそうな人の流れを半ば無意識に避けて歩きつつ、キョーコの頭の中は別れ際にオルガの発した一言を何度もリピートしていた。

『お姉さん。ちよつと』

『ん。なあに?』

『焼いておきたいお節介があるんだ』

床に転がったキョーコを助け起こす瞬間に、オルガが耳打ちする。

『銀色のお姉さん、どうしてお姉さんに声を掛けたんだと思う?』

『どうして? 私にT女の生徒だから?』

オルガの手がキョーコの手を握った。その力の強さに顔を上げたキョーコは、オルガの視線が秘めた、形容できない重みに、束の間圧倒されていた。

『気を付けてね。この町はもう、普通じゃない』

ジャージについた土ぼこりを払ってやりながらさりげなく紙幣をキョーコの指の間に差し込んで、オルガは頬を緩めた。

『ごはん、たのしかった』

その時はオルガの言葉の意味を理解できなかった。大小の交差点を信号待ちして八百屋の角を曲がったキョーコは一変して人気のない細い路地から路地を這った。

「おっとと」

思いがけず目の前に現れた大きな水たまりをとっさに飛び越えたキョーコは、疼く太腿をさすった。

ジャージと薄汚れたスニーカーなら水たまりをイチイチ避けて歩く必要がないから楽でいい。替えのきかないブレザーをダメにしたときはそれなりに絶望的な気分になったものだったが、怪我の功名というやつだろうか。

(二階堂、アンリちゃん、か)

学校指定のTシャツにジャージ。今日は一日中この格好で過ごしていた。にもかかわらず、何故制服すら届いていないアンリは店に入るなり一直線に彼女たちの元を目指してきたのだろう。

『あなた、T女の生徒さんですわよね?』と。

時間は夕暮れ時。店内でゴった返す学生たちの中にはキチンとブレザーのスカートとブラウス、リボンで学園の夏の装いに身を包んだ女の子たちも沢山いたというのに。

銀色の。

まるで、月の光を集めたような。

おかしなお嬢様言葉を使って、うふふと笑う異邦の美少女。

だがその姿形を思い出そうとすればするほど、蘇ってくるものは彼女の柑橘の香水などではなく、赤茶にざらついた、鼻をつく悪臭ではないのだ。

『ごきげんよう、キョーコ様』

口の周りを朱に濡らした彼女が、雨の中に立っている。

不意に彼女の背中が気球のように膨れ上がり、ブラウスの生地が爆ぜる。きれいな銀髪はいつしかごわついた剛毛となって彼女の全身

を覆う。

豪雨に泡立つ地面に彼女は両の掌をつく。膨張し続ける筋肉の重みを支えるためだ。

『——うるる』

何度振り払おうとしても、そのイメージは脳のひだにこびりついてくる。

「違う。違う違う。そんなワケ。何考えてんだ」

「お前はちよつと過敏になりすぎているだけだ、とキョーコは必死に言い聞かせる。

本当に、色々、なんて言葉じゃあ片付かないくらいたくさんのことがあったのだ。得体が知れないと言えばオルガやマヤも同じはずで、そんな忠告を馬鹿正直に信じるからこそ、間違いかもしれないのに。

あの怪物たちは勇儀のおかげで今も「きさらぎ駅」に閉じ込められているハズで。一生に一度あるかないかの不幸でキョーコはそこに足を踏み入れてしまっただけで。それが今後、自分たちの「アタリマエ」を脅かすなんてことはあり得ないのだ。

これまでが、そうであったように。

(そうでしょう。そうだよね)

言い聞かせる。いや、言い聞かせなければ。路地の石塀に手をついて、キョーコはぶり返してきた動悸と体の火照りを収めようと必死になる。

(明日はバイトを休もう。電鉄に乗って、またあの駅に行つて)

額の汗をぬぐって、キョーコは足元の水たまりを見つめる。黒い柱のように聳えるキョーコの像の背後で、ちようど月は分厚い雲の影に隠れていくところだ。

(それで、勇儀を連れて帰る。それで終わり。全部)

一生に一度あるかないかの危険に、今度は自ら足を踏み入れる。

それが非日常を喚ぶものだとしても、勇儀が「よいこ」で賭したその命を、今度はキョーコの「よいこ」で救ってやらなければいけない、と思う。

角を曲がって前を向けば、下宿屋があつた。キョーコの頭がどつぷ

り考え事に浸っている間も、三年間同じ道を行き来してきた足は自動的にそこを指して動いていたのだ。

「ああ、おかえり。いいところに」

門前にしゃがんでいた風間がのそりと体を起こす。

「ただい——ま!?!」

塵と埃に塗れた彼の風体よりもキョーコの目を惹いたのは、二階の一室の、開け放たれた窓からもうもうと立ち上る煙だった。

「カザマさんっ!」

「いや、俺の寝タバコとかじゃないかんね」

キョーコのにらみを受けて、風間がぶんぶんと首を横に振った。去年の「不幸な事故」でキョーコたちに口酸っぱく注意されてから、確かに風間は寝酒寝タバコといった悪癖とはスツパリ縁を切ったはずだった。

「じゃあなんです、アレは」

「ソージだよ。大掃除」

風間の言葉にキョーコがよくよく目を凝らせば、今やK駅前アーケードの上空を席卷する黒雲かとも見紛うものは埃である。目を地面に落として肩をすくめる風間を見れば、彼のぼろ雑巾じみた風体にも納得がいった。

築年数不明。行政のチェックをあの手この手でかわし続ける幽霊のような下宿屋、「早稲川荘」。その開かずの一室が、今解き放たれようとしている——!

その事実には、キョーコは表情を輝かせた。

「新しい人、入るんですか!?!」

「そゆこと」

タバコの火を路面でもみ消して、風間は頭巾をかぶりなおす。

「会いたい?」

「もちろん!」

無精ひげにホコリを纏わりつかせた男は、今や正面玄関からもごうごうと煙を吐き出す下宿屋めがけて顎をしゃくって見せた。



「思ったより、キチンとしているものですわね」

四畳半のど真ん中にトランクケースを降ろして、アンリはベッドの柔らかさを確かめ始めた。

「高い入寮費を払わされた甲斐があったものですわ」

「T女は深刻な予算不足でして。判を押した以上、ご理解していただけたものかと」

「や、や。いけなくってよ。勘違いしちゃあ」

あくまで瀟洒に笑って否定するアンリ。本当に、悪気はないのだろう。その悪びれの無さにささくれ立つ我が心は余裕を欠いているだけだ、とチヅルは自分に言い聞かせる。

今日は、いろいろ、あったから。

「にしても生徒会長自ら案内なんて、恐れ入りますわ」

「丁度学校に残る用事があったものですから」

「お噂はかねがね。名門校の生徒会長と、常勝陸上部の部長、二足の草鞋を履きこなす生徒会長さんにこうしてお会いできて、光栄ですことよ」

そうしてアンリが唐突にとつたのはひざまずくような動作。面食らったチヅルは、思わず後ずさっていた。

「いやだわ。少し、大仰でしたわね」

絵本やマンガのお姫様の仕草だ。当人も冗談のつもりでやったのだろうが、たとえブラウスにスカートといった一般女子高生の風体であつてもサマになるあたり、二階堂アンリという少女は相当に浮世離れしている。

「それにしても部員皆様でカラオケなんて、仲がよろしくって結構ですわね」

「え」

チヅルのメガネのフレームを飾る柳眉がわずかに曇った。

「迷子になっている間に少しばかりおカラオケ屋の店員さんに道をお尋ねしたのですが。その時、ここの陸上部のジャージ姿が見えましたの」

それは本当に一瞬の変化であつたが、真昼の影法師のようにつつと



立っていたチヅルがわずかに揺らいだのを、アンリは見逃さなかった。

「そう——ですか」

「あら。ご存じありませんでした？」

「いえ」

ポケットからケータイを取り出すのにチヅルが手こずるさまを、アンリはただ見ていた。

「それではライン教えますので」

「ああ、わたくしケータイは持っておりませんの」

「……………では生徒科と私個人の電話番号を教えておきますので」

メガネのレンズが液晶の明かりを反射し、わずかな間を置いてアンリを見据えたとき、チヅルの表情に走った動揺はすっかりなりを潜めていた。

「困ったことがあったら、気軽に相談してください。同じ二年ですし、クラスも一緒になれるよう、便宜を図っておきますから」

電話番号を書きなぐったメモを渡す所作は、ほとんど押し付けるようなものだったが。

「ああ、最後に一つお願いが」

「なんです？」

「明かり、落としてくださいます？ その方が落ち着きますの」

ぱちん、と照明のスイッチが切られる音はそのまま二人の間に張られた糸が切れる音でもあったようで。気持ち早足にチヅルが出て行くのを音で知って、アンリは四畳半の真ん中にごろりと転がった。

「ふふ。頑張りますのね」

カーテンも物干し竿もかけられていない窓から見える上限の月は、まるで巨大な獣が噛みついた饅頭のような。あと数日も経てば、綺麗な満月を拝めるであろう。

フローリングに目を落とせば、そこは月面だ。

きれいに着飾っても築二十年は伊達ではない。フローリング材に刻み込まれたクレーターのような大小の傷跡。モノクロームの世界。まるで、アポロの月面着陸映像を見ているようで。

「ふ」

傷跡をなぞっていた彼女の指先が、例の細長い包みにたどり着いた。

微笑で頬を彩ったアンリはむくりと上体を起こし、包みに施された擦り切れ寸前の荒縄を解いていく。

「今度は逃げないでくださいましね」

袋から床の上に滑り出て乾いた音を立てたのは鞆だった。

本来そこに収まるべき刃はなく、碧眼の先には光も影も吸い込んでしまうような、深い虚無が広がっているばかりで。

月明かりの下、深淵を覗き込むアンリの頬に張り付いた笑みは耳元まで裂け、今や彼女の美貌を真つ二つに裂かんばかりだった。

「ふふ、うふふ。うふ——ガ」

キョーコの汗をぬぐってやったハンカチを取り出して、アンリはそれを鼻づらに強く押し付ける。哄笑は、いつしか、絞るような唸り声へと変わっていった。



「とにかく元気な女でさ」

ガタピシ廊下を軋ませながら、風間は食堂を手で示した。二階からは常に怪獣が暴れまわるような音が聞こえてくる。おびたらしい埃が降り注ぐ。

「上でミヨっちゃんが頑張ってる」

風間が肩をすぼめる。

「その新しい人、どんな人なんですか」

「血まみれでミヨっちゃんに運び込まれてさ」

「待って。血まみれって大丈夫なんですか？」

「覚えてないの一点張り。それからグースカ寝始めて。できつき起きたと思ったら」

朝のように、風間は食堂の扉を開けてキョーコに入るよう促した。もちろん中には惨敗を喫した南町サンダースの少年たちが詰め込まれているわけではなく。

「コレだよ」

たった一人の女が座布団の上に陣取り、ちゃぶ台に所狭しと並べられた食事を片っ端から平らげていく。箸はあつたが、箸置きの上に寝っぱなしである。遠めに大きな女は、食堂にも渦巻く埃などお構いなしに素手で料理を掻き込んでいく。

「あん？」

束の間その手が止まり、緋色の瞳が二人を顧みた。

「なんだかアチコチ無くなってんだけどさ、本人はこの通り不自由はしてないみたいで。明日明後日にでもケーサツ行つて——」

キョーコの耳はもはや風間の言葉など聞いてはいなかった。

「んで確か名前が」

「おい、おい、カザマつつあん。体はこの通りだが口はきけるんだぜ。自己紹介くらい、あたしにさせてくれよ。あたしは」

「星熊勇儀」

「あ？」「お？」

キョーコの声は、震えていた。

「お、おい。キョーちゃ」

風間を押しつけて、ほとんど体当たりするように、大女の背中にキョーコは縋り付いていた。女がっんのめり、衝撃でちゃぶ台が倒れ、食器と食事が、床にぶちまけられる。

「勇儀っ、わたしっ、わたしねっ、あなたをあそこに置き去りにして、ずっと——」

まるで恋の告白だな、なんて。

何か言おうとすればするほど詰まってしまう胸を押さえながら、キョーコは女の背中にはたはたと落ちて染みを作る自分の涙を見つめた。

「勇儀！」

「あんなあ」

おもむろに振り向く女は、大儀そうにため息ついた。

ふっと吹いただけのため息が、キョーコにとっては頭から氷水を浴びせられたようで。

「え？」

「なあ、おい。あんた。勝手にアツくなつてるとこ悪いけど」

頭をかきかき立ち上がる様は、あの日から何も変わらないというのに。目の前に立つ女の隻眼を覗いて、キョーコはすべてを悟ってしまった。

その背後から得心いかな顔で見つめてくる風間と、何事かと降りてきたミヨシ。同じ床の上に立っているはずなのに、キョーコだけが別の世界にはじき飛ばされてしまったようで。

そして、星熊勇儀。

その姿はあの日から何も変わらないというのに。

「随分気安いじゃないか。あたし、あんたのこと、なーんも知らないんだけどねえ」

二人の間から、とても大切なものが失われてしまったのだということ。

第3話 「ファストフード・スローアライバル」 おわり

## 7 『夕の街ゆく鬼たちは（上）』

その日、朝の静寂に別れを告げたものは。

遅刻の帳尻合わせに路地裏を強引に走り抜けていくトラックの騒音でもなく、下宿屋の前を駆けていく小学生の一団でもなく、電線で点呼を始めたスズメとカラスたちの鳴き声でもなく。

「で、なんだっけ？」

「あの……勇儀がね、その、岩を、持ち上げてね……」

「岩って、どのくらいの大きさだい？」

「……………運動場くらいのこと……かな……………」

しりすぼみになっていくキョーコの説明を遮って「ぶはははは」という大爆笑が居間をつんざき、窓枠をガタガタ揺らし、木造のボロ下宿をシェイクする。

「なあゆっぴー、そろそろ笑うの、やめてやれって」

腹を抑えて畳の上に転がった『ゆっぴー』、つまり星熊勇儀は、ひいひいとあえぎながら、尚笑う。

食卓めがけてぱらぱらと天井から降り注ぐ塵を受けていた新聞を除けたミヨシが、頷くことで風間に同意した。

「だってあたし、自分の名前以外思い出せないんだぜ。そこに、この小娘、えーと」

「…………キョーコ。鳴無響子」

唐突な星熊勇儀との再会をキョーコが喜んでいられたのは、ほんの数分間のことであつた。

「そう。キョーコちゃんの御伽話が面白くってさあ」

きさらぎ駅から戻ってきた彼女は、自分の名前以外のすべてを忘れていた。キョーコと過ごした命懸けの一夜も、そこで感じた絆も、リセットが掛けられ。

こうしてキョーコは爆笑の十字砲火に逢っている。

「ゆ、ゆっぴー」

風間の制止には、キョーコを助けてやろうという声音がまったくない。

キョーコはぐるぐるかき混ぜ続けた納豆をごはんと一緒に口に放り込み、みそ汁で胃袋に流し込む。味がしない。

「見ろよこんなによお、マジメな顔で……くっ」

キョーコは黙って出汁巻き卵を口に運ぶ。

そこまで聞いてこれからの展開がだいたい分かっていた。大好きなミヨシさんの料理だったが、今朝はずいぶん薄味に思える。

「ぶうえっへっへっへっへッ!! ダメだわ。三メートル越えのゆっぴーとか、想像するだけで、げっははハッ!!」

「んで角ついてんだっけ?」

新聞をくるくる筒状に丸めて額にくっつけて見せると、

「こんなん?」

勇儀がまた笑い声を上げる。

数日前に「あたしは鬼なんだよ」と言った本人とは思えない。

キョーコは胸の中で例の正体不明のモヤモヤが広がっていくのを感じながら、うつむく。

「わかさぎ姫だっけ?」

「きさらぎ駅です」

なんだかんだで面白がるだけの風間と勇儀からばんばん背中を叩かれるにつれ、キョーコの背は古釘のようにぐにやぐにや前傾していく。ミヨシといえば、その様子をおろおろと見守ることしかできないようだった。

「ほら見ろよコレ。この、どこに角があるってんだい」

わざわざ包帯を解いて、勇儀は額を見せる。キョーコは言葉に詰まることしかできない。折れた名残とか派手な傷跡があるとかではなく、本当に何も無いのだ。

「な。認めちまえよ。あんたの負けをさ」

「そりゃ——ない——けど、も——!!」

あの出来事は、間違いなくあったのだ。簡単に引き下がれないキョーコの言葉は、自然と熱を帯び始めていた。

「わたし、ウソなんてつかないから!」

「ま。確かにキョーコちゃんはそのういうデマカセ言うタイプじゃない

わな」

キョーコが顔を真っ赤にするほど、勇儀に残された片目は喜色を帯びていった。

「どうして信じてくれないの」

「どうして証拠もなしに昨日会ったばかりの小娘を信じなきやいけないんだい？」

間髪入れずに戻ってきたカウンターパンチがキョーコの口を縫い付けた。

「証拠？」

「そう。まずは証拠見せてみなよ、証拠をさ」

尋常でない振り返り血を浴びた制服はとつくに処分してしまった。あの「きさらぎ駅」と大鬼の星熊勇儀の存在を示すものは、何一つ残ってはいない。

「ないの？」

「ないけど、でもー！」

「こつちも大変だね。小娘のたわごとにつき合ってる余裕はないのさ」

「あの、ミヨシさん」

キョーコは助けを求めるようにミヨシを見る。

彼女はほんの少し揺れる瞳を伏せて、かぶりを振る。意図はうまく読み取れない。すっかり突き放された気分でキョーコは立ち上がる  
と、

「今日、バイトで遅くなりますから。それだけです」

と、蚊の鳴くような声で絞り出して食堂を後にした。

「帰ってくるまでもう少し、ハナシ練り込んどけよな」

「ッ」

勇儀の容赦ない追い打ちが背中をえぐった。

「そんなこと、しないから」

極力押し殺した声で、一度だけキョーコは振り向いた。

「本当の本当にウソなんてついてない」

キョーコは壁際に置いてあったバッグを取り上げる。

その場の誰もがキョーコの自制心に感心するほど、食堂と廊下を隔てるフスマはしめやかに閉ざされた。

「——なんだよ。ちよつと遊んだらマジになっちゃってさ」

玄関の引き戸がやけに静かに閉まる気配を確かめてから、ようやく勇儀が口を開いた。風間はすぐに同意も否定もせず、ただ肩をすぼめる。

「いや、でも、マジでさ。お前笑い過ぎだし言い過ぎだつつの」

「お前さんも笑ってたじゃないかい」

「まあな」

勇儀の大暴れでちやぶ台のそこかしこに散らばった箸を拾い集めながら風間が頷いた。

「あたしだって趣味で記憶喪失やってるワケじゃあないのサ」

「それも知ってる。だけどキョーコちゃんはゆっぴーの名前を知ってた」

言つとくが俺は教えてないぞ。風間は言つて、座布団を枕にごろりと畳の上に寝転がった。ミヨシはミヨシで洗いものに没頭しているようで、なんのアクションもしてよこさない。

「何者か知らんけど……あたしはあいつの話、到底信じられない」

白っぼく日焼けしたちやぶ台の上に肘をついて、勇儀は呟く。

「なーんか、わくわくしないねえ」

風間が屁で肯定した。



やはりこの町はおかしい。

逃げ込んだのは、間違いだっただろうか。

「あひいっ」

白銀の閃光が横走りに首筋を狙って走る。

間一髪で斬首を逃れた小鬼は酒屋裏の路地に置かれたビールケースをなぎ倒し、続く縦一閃の太刀筋がそれらを造作もなく両断するのを尻目に、なんとか立ち上がる。

「おおおおお、お前、私が鬼人正邪サマと知って刃ア向けてんだろくなあ!?!」



すりむいた膝からじわじわと血がにじんでくる。

もとは純白であったらうワンピースに新しい染みを広げながら、旧校舎の小鬼——鬼人正邪は栄養失調の体にムチ打って再び駆け出した。

「誰の差し金だ!」

鉄製のゴミ箱。放置された空き瓶。錆びた工具。何を拭いたかわからないチリ紙まで手当たり次第に投げつけてやったが、その結果は変わらない。

「——か? それとも——か? わかった。——の——だろ!?!」

正邪の口からは奇妙奇天烈な名前がぽんぽんと吐き出されるが、そのほとんどは喘鳴ぜんめいにまぎれて定かではない。

「——じゃないとなると、あの底意地悪い——だろ。そうだろ? 違う? クソ。心当たりが多すぎてよくわかんないよな!!」

それも如何なものか。

T女学院旧校舎の怪人こと鬼人正邪は薄暗い路地をひた走る。アーケード街こそ広く明るく、警察の目も届いているが、それはあくまで表の話。

「ンだよこれ」

正邪の驚きももつともだろう。

一本間違った通りに入れば都市開発から取り残された廃墟や、シャツターを締め切って夜を待つ居酒屋や、許可を取っているのかも定かではないかがわしい店が立ち並ぶ。

細く生温く湿った路地がどこまでも続く、K市の盲腸のような区画に彼女は追いついてられていた。

「——チ。袋小路か」

どん詰まりに待っていた壁を殴りつける正邪の背後から、湿った足音が響く。だが諦めと意地の悪さにおいて、彼女の前に出るものはない。

「こんなんで終わったと思うなよ」

明かりと言えば、ビルの隙間から僅かに見える空だけ。

監獄じみた薄暗さの中で、正邪の身に起こりつつある異変は一目瞭

然だ。

「見せてやる」

彼女の輪郭が黄金色の光を放つ。得体のしれない力の解放に、肅々と彼女の首をはねる予定にあった追っ手は歩調を鈍らせた。正邪の頬を裂く笑みが深まる。

追いつめたはずのものが王手を洩り。追いつめられたはずのものが、王手をかける。

その見事な逆転。それこそが――

「私の能力は」

くるり。天を差した正邪の指が円を描く。

ぞわり。呼び覚まされた力に正邪の黒髪が逆立つ。

「ひっくりかえす」

我に返った追っ手が刃を振るう。

「ハ」

が、それは髪一束を断って落とすに終わり、正邪は鬼歯をむき出しに、追手を嘲った。

「一生吠えてろ、そこで」

控えめに言っても奇妙な光景だった。

彼女だけだ。正邪だけがこの世界の重力から解き放たれたように、ビルの壁面に薄い影を落としながら空へと落ちていく。

「じゃあな、ぶあーつかー」

砲弾のような勢いでビルの陰りから飛び出た彼女は、数秒夏の空を舞う。数秒間にも満たろうか。この飛翔は切り札だ。時間が無い。目に入った中で最も手近な雑居ビルの屋上めがけて、彼女はさらに加速する。

ぷつん、と。

時間が切れた。

見えないワイヤーが切られたように、真夏の飛翔は唐突に終わりを遂げた。

ささやかな重力への叛逆はんぎやくのツケとして、彼女は体勢を整える時間も与えられず、ほとんど脳天からビルの屋上へと叩き付けられた。

「ふぐえっ」

頭が割れる。視界に星が散る。

彼女はコンクリートの床をごろごろ転がった。

(奴は?)

痛みにあえぐのは後だ。

恐る恐る屋上の手すりから身を乗り出した正邪が見たものはビルの谷間に渦巻く黒々とした闇でしかなく、追手の姿は消えていた。

「ざまあみやがれ」

登ってくる様子の無い追っ手に改めて勝ち誇ると、正邪はよろよろとエアコンの室外機に寄り掛かった。

年代物の室外機が轟音を上げて頑張っている。正邪の体も同じ具合だ。爆発寸前の肺腑が、ぼろぼろの体をなんとか冷やしてやろうと最大限に稼働している。

「昔はよかった、な」

このワケのわからない外の世界に放り出されて二月と経たないのに、なんて年寄り臭いことを言うようになったのだろう、と正邪は苦笑する。

昔はいくらでも走れたし、いつまでも飛んでいられた。

『手段は問わない。生死も問わない。奴を捕らえろ。どんな褒章でも取らせよう!』

それは黄金の時代。

悪が正しく悪でいられた世界のはなし。

『我が名は正邪! 生まれもつてのアマノジャクだ!!』

だがそれは過去の栄光。

今や彼女たちのちからの大半は取り上げられ、静かに消える運命が待ち受けるのみ。

イカサマを武器にたった一人で一つの世界を相手取った驚天動地のトリックスターは、今こうして人知れず野垂れ死のうとしている。

「……………昔は、よかった」

更に深い感傷に浸ろうとした時だった。大きな影法師が、正邪の影を呑み込んだのは。

ひやりとしたのは影の内に入ったからか。それとも。

「あ？」

疑問符の無駄遣いだ。

どうやってかビルをよじ登り、音もなく室外機の上に飛び乗り、正邪の背後を完全に捉えたのが何者なのか。そして、影法師が構える――正確には口に唾える得物によって、直後何がなされるのか。

(まずい。しくじった)

その時、正邪はどうなってしまふのか。

(落ち着け、慣れてんだろ、ここのうの)

そうだ。私はただのちっぽけな妖怪じゃない。

鬼人正邪というオオモノだ。と、自分に言い聞かせる。こんな状況、脳味噌を紐解けば今まで数えきれないほど直面し、生き延びてきた。

——そうだろうか？

「ふっ」

だから、あえて。笑う。

残り少ない力を指先に込めて、首筋に添える。直後、太刀の一閃が彼女の首元めがけて迸り――薄皮を裂く寸前で奇妙な軌道を描いて反れた。

「——うるる？」

追っ手が初めて困惑に声を上げた。正邪が鬼歯を剥く。

切断されたのは正邪の頸椎ではなく室外機であった。

高速で回転するファンが軸から解き放たれ、無数の破片をあたりにまき散らしながら明後日の方向へ飛んでいく。

「かかったなアホが！」

当の小鬼は再び飛翔し、降り立った手すりの上で危うくバランスを取っていた。

一方、自らの意思を完全に離れた獲物によって振り回された追っ手は完全に体制を崩し、立ち上がろうと四本の足を必死にバタつかせていた。

「私の力はひっくり返す。重力だろうが、お前の太刀筋だろうが、関係

ない！」

尚も正邪に対する殺意を萎えさせないそれは、人の形をしていなかった。

——狗。

鬼人正邪を執拗に追い立てていたのは家ほどの大きさもある狗の怪異であった。

「——ぐるる」

銀の炎じみたたてがみにまわりついた破片をふるふると払って、大狗は正邪を見据える。燃える両眼の上から突き出たものは、間違いなく角だ。

「お。怒ったなあ」

あくまで相手を小馬鹿にする姿勢を崩さず、正邪は鳥のように両手を広げた。しかし、今度は飛翔のためではない。

「じゃな」

そのまま背中から落ちる。

またまた正邪を捉えそこなった刃がスチール製の手すりを葱ネギか何かのように易々と切り裂くのが見える。

（当たらなければ問題なし、だ）

自分に言い聞かせて、高速で目の前を過ぎ去るビルの外壁に手を伸ばす。細かな凹凸に覆われた壁はおろし金じみて正邪の指先を摺り潰し、爪が剥けて飛んでいく。

「ぐあつ」

手は瞬く間に血染めになったが、それでもわずかに落下の衝撃を殺す役割を果たしてくれた。

（大丈夫だ。問題ない）

アスファルトに叩き付けられた正邪の体はゴムマリのようにバウンドした。着地のついでに体のどこかで骨が数本折れたようだが、まったく問題ない。遠のく意識を力ずくで引きずり戻し、正邪はよろよろ立ち上がる。

問題は屋上から迷うことなく正邪めがけて飛び降りてくる大狗の存在だ。

「ちいっ」

また、地面を転がる。

正邪は鼻先を掠めた刃に映る、恐怖にひきつった己の顔が見えたような気がした。

「どうしたバカ犬」

「——ぐう」

だが当たらなければ素振りと変わらない。

剣風の後押しされるように正邪はほんの一瞬重力をひっくり返し、宙返りに空を舞う。

「当ててみな。骨のひとつもくれてやる」

どうせ体の中はバキバキに折れている。一本二本くれてやっても問題はない。とにかく、今は首が繋がったままにしなくては。

——咆哮。

路地と鼓膜をビリビリ震わせる遠吠え。

振り返る余裕もないまま、正邪は駆けだした。

ガス欠の飛行機のような無様な跳躍を何度も繰り返す。路面のわずかなへこみにすら足をとられそうになる。

（もう一步。路地一本だろ。頑張れよ、私！）

見覚えのある路地を正邪は駆け始めていた。ゴミあさりでさんざん世話になった通りだ。ここを越えれば大路に転がり出ることができきる。

（人混みに紛れて、こいつをやり過ぎすんだ！）

騒ぎになろうが巻き添えが出ようがお構いなし。それが鬼人正邪という存在なのだ。

「ははっ」

後ろを見て、正邪は思わず嘲笑した。

あの巨体でこの通路を抜けるのはさぞ大義に違いない。人々の生活圏により近いこの場所には通路のあちこちに障害物が積まれている。ゴミ箱やビールケースなんてかわいいものだ。

「ぐんぐん」

ましてや長い刀を真一文字に啞えていては。

正邪の視線の先には壁際にいつから立てかけてあったかもわからないバイクの横つ面に見事に刀を引っかけた大狗。

(妙な芸を仕込まれてはいるが、しよせんは獣みたいだな)

と内心馬鹿にしていられたのは一秒もあつただろうか。軽々と持ち上がったいく車体に、正邪は敵の意図を理解してしまった。

「やば」

あいつは引つかかったのではない。引っかけたのだ。

牙を剥いたイヌ科の口はもともと笑っているように見えるものの、突き刺したバイクごとカタナを振りかぶった瞬間、そいつは確実に笑っていた。

ように、正邪には見えた。

がきゅ。

カタナとバイクが別れを告げる音。

オイルを血のように吹き出しながらバイクが飛んだ。

それはバイクの製造者が全く想定しない使い方ではあつたものの、この状況において最適な利用法であつた。

「な——にいつ!」

予想外の攻撃だ。

火花と砕いた壁面をまき散らしながらやってくる地獄の剛速球が正邪に迫る!

路地の壁に体を寄せる? 伏せてやり過ぎす? ——わずかに足を止めればすぐさま追いつかれる。

では能力を發揮して空高く飛翔するか——ダメだ。不意も打たずにフワフワ浮いていたら今度こそ斬られる。

(しやあないな)

正邪は残り少ない力をかき集める。指先に黄金色の灯を纏う。ひっくり返すのだ。迫る鉄塊をはじき返し、ヤツの鼻ヅラにお見舞いする。

「ぐ」

が、それすら甘い考えだつた。バイクは、純粹に重さと勢いで正邪の能力を圧倒した。

バイクは僅かに軌道を逸らして正邪の肩を直撃した。ボーリングのピンのように、正邪は路面を滑る。背骨を打ち砕かれる感覚。尖った部品の一つ一つが体をえぐる不快感。見方を変えれば軽い交通事故故レベルの衝撃だ。

「ぐああ、クソ、ふざけんな！」

立てるのが不思議でならない。

そして不思議とは長続きしない。

あつという間に足をもつれさせて倒れ込んだ正邪に、大狗はゆつくり迫る。バイクの残骸を踏み越え、口にくわえた刃の刃先を壁面にこすりつけながら。

「お前、お前——どこの誰が雇ったのかはわからないけどな」

刃先の散らす火花が大狗の異形を不気味に浮かび上がらせる。

正邪は、なおも這つて逃げる。三叉路の壁まで這つて逃げてのけると、尚も絶望の見えない瞳で、大狗を睨んだ。

「八つ裂きになったって頭を下げてやるもんか。私は死なない。絶対、こんなところで」

それだけだ。

それだけが鬼人正邪の矜持だ。それでいい、と彼女は笑う。

「絶対に、絶対に。もつともつとお前らを困らせて——うおっ!?!」

驚きの声が上がったのも無理はない。

彼女の口上を待たずして、壁が正邪を呑み込んだのだ。

薄汚れた周囲の壁と完全に同化していたそれは扉であった。外見に反して正邪が軽く体重をかけたただけでするりと開き、彼女を中へと誘った。

からん。ころん。

中は別世界だった。

香ばしい香り。レコードのノイズ。涼しげな音と、涼しい空気が正邪を抱き留めた。

「あら」

「おや」

中には男と女。



なんの前触れもなくドアベルを叩き鳴らして転がり込んだ正邪に二人の視線が集中する。

「珍客到来、だな」

窓際の席に陣取る男がアイマスク代わりにしていた文庫本を顔面からのけて、西日に目を細めた。差し込む陽に無精ひげがきらきら輝いている。

「おい、バルバル、なんかワケアリっぽいの来たぞ」

「ああ。そうみたいだな」

よく磨き込まれたカウンターの後ろから声が返ってきた。

「それとヘンな名前で呼ぶの、いい加減やめろよな」

ため息一つして、女はカップを流しに置いた。

「外？」

彼女は

エプロンで濡れた手を拭きながら、彼女は入口へのドアへと歩み寄る。

からん。

途端、すらりとした彼女の手がするりと真鍮のドアノブへと延び、待ち構えていた凶刃がしやらりと斬って落とされる。

どつ。

——と。彼女の首が音を立てて床に転がった。

「どうした？」

「いいや。何も」

なんてことは一切なく。

「ほら。怖いお化けはまだいるか？」

子供扱いされても怒りより安堵が勝った。

「はあ。ああ。いや」

岩塩を透かしたような薄茜色の西日が、呆れ笑いを浮かべたスバルの黒髪を染める。

大路に至る道が近いのか、路面電車がレールを滑る高い音と、信号待ちのトラックの、獲物をお預けされた猛獣のような低いエンジン音が聞こえてくる。

それだけだ。

ドアの外にあつたものはそれだけ。K市の日常。

「暑気に浮かされてヘンなものでも見たんじゃないか」

窓際の男がヘラヘラ笑いながら文庫本を開きなおした。

「無理もない。今日はまだこんなに暑いんだ」

スバルは無残にぶつた切られた首の断面を晒す代わりに、きれいな顔に僅かな困惑と、正邪の有様に対する呆れを浮かべる。

「ああ、そう、か。なら、いいんだ」

生き延びた。

そう実感した途端に心臓でせき止められていた疲労が全身に流れ出し、正邪はロクな返事もできないまま床にひっくり返った。冷えたフローリングと冷房が心地よい。

「さて、お客様？」

つぶれたカエルのような姿で床に伸びた正邪に、スバルは無駄のない動きでおしぼりを差し出した。

「ようこそいらっしやいました。脱兎珈琲へ」

ダットコーヒー

## 8 『夕の街ゆく鬼たちは（下）』

誰であれK市にしばらく住むと、脱兎珈琲という名を自然に耳にするものだった。

K市駅前のアーケードから枝分かれした小道の、その梢の先の先、半ば都市という怪物に取り込まれるような形で存在するという喫茶店は、知る人ぞ知る隠れ家的名店であった。ーなんて生易しいものではなく、口さがなく言ってしまうえば迷店であり、奇店であり、怪店であり。その奇怪さについての噂を市井から掬い上げれば、

曰く、入るものはいても出てくるものは皆無であるとか。

曰く、そこはK市の闇に潜む怪異たちのたまり場なのだとか。

曰く、客が店を探すのではなく、店が客を探して市内を彷徨しているのだとか。

曰く、少し前にK市全域の新聞部を裏から牛耳る謎のブン屋集団が総力を結集して探したが徒労に終わったとか。

荒唐無稽な噂に枚挙はなかった。

このあたりで話がややこしくなりがちなのこの店について夢のない事実を明かしてしまうなら、十数年来の歴史を持つ老舗が都市再開発計画に見過ごされ、気づけばこんなシャッター通りの奥に佇む羽目になつていた、というだけのことだった。

「お疲れ様です」

「おう。今日もよろしく。って、あ？」

目印は暗がりには茫とした光を放つ青い四角看板。

ノスタルジイの香りを漂わせるキーコーヒーのロゴの脇を抜けて扉を押し開けたキョーコを迎えたのは涼しげなウエルカムベルと、年季の入ったカウンターの向こうで所在無さげにしていた風間の営業トーンの声であった。

「よく来たなあ、このガキ」

しかし風間の接客スマイルは一瞬で崩壊した。

有刺鉄線を叩きつけるような険のある声はキョーコに向けられたものではない。彼女の手をにぎって、ただただちよこんとそこにい

る、年端もいかなない少女に向けられたものだった。ドレスとも和服ともつかない独特なワンピースと、血のように赤い瞳が印象的だ。

「ちよつと、風間さん。話が」

肩をいからせてカウンターへと入っていったキョーコが、風間からエプロンをもぎ取った。

「子供相手に何してくれてるんですか」

「いやーこいつと知り合いだったの？」

「駅前で道を聞かれたんです」

「あのさ、こいつは」

「いいから、話を聞く！」

「はい」

「ちよつと待っててね」

少女は小鳥のように首をかしげる。ツヤのある亜麻色の長い髪が、外の暑気でも汗ひとつつかかない少女の額をしゃらりと流れる。どうやらちよつと待ってってくれるらしい。

「この子と今日会う約束、しましたよね」

「したね」

「場所、ここだって言いましたよね」

「言ったね」

「道順、教えましたか」

「ううん」

「風間さんッ!!」

悪びれのない風間の様子に、キョーコが眉を吊り上げた。

「この子、半日近く迷子になってたんですよ！」

「やったー」

「やってない！」

「だってこいつ嫌いなんだもん。好きなかだけ困ればいいんだゲへへ」  
「相手は子供じゃないですか、熱中症にでもなったらどうするんですかー！」

「子供じゃないっつーの」

鈴を震わすような、澄んだ声であった。

「え？」

「あ？」

きゅぽん。

ここへやってきて初めて口を開いた少女は、腰にぶら下げている瓢箪の栓を抜くなり、呆気に取られる二人を前にぐいつとあおつて見せる。滝のような勢いで透明な液体が彼女の口元へと注がれていく。

「アレって水ですかね」

「そう見えるのか」

せいぜい郵便ポストくらいの背丈の少女から、さつと香気が立ち昇る。今まで手を引いていた時は少女特有の綿菓子のようなにおいにするくらいだったのだが。今のソレは違う。髪から、肌から、日本人なら誰もが嗅ぎ覚えのあるにおいが染み出してきていた。

「げぼふう」

と、かわいげの無いげつぶにあわせて強烈な酒気が霧のように辺りを取り巻いた。

「ほら、こいつ放っておいていいのか、よいこちゃん」

「おあーっ！」

風間が最後まで言う必要もなく、大声を上げたキョーコは小走りに少女のところまで歩いていくと、未だ呆然とする彼女から瓢箪を取り上げた。口の部分に鼻を近づけて、鼻を刺すようなアルコールに彼女は顔をしかめる。

「これお酒じゃん！」

「なんだよ！ 返せよ！」

「未成年！ ダメ！ お酒！ 絶対！」

「それと酒と、どういう関係があるんだよ！」

「大有りだよ！」

ぴよんぴよん飛び跳ねて酒の奪回を図る少女と意地でも返すもんかというキョーコがくちやくちやになっていると、風間は肩をすぼめて見せた。

「分かったろ？ こいつはこーい奴なのよ」

キョーコに仕事を簡単に引きついで、風間はカウンター席に腰掛け

る。「帰るとき、ちゃんと私の酒を返せよな」その隣にイスひとつ分空けて、少女はやや難儀しながら背の高いイスによじ登った。

「何ゆえに距離を取る」

「あんたの真横とか、イヤだ」

瓢箪の一件もあつてか、彼女は露骨に不機嫌だ。

「年頃の娘かよ」

「年頃の娘だろうがよ」

「冗談は背丈にくらいに留めとけ」

「あ？」

「あのー、ずっと気になってたんですけど」

キョーコがおずおずと口を開いた。二人の視線を見つめ返しつつ、改めてオッサンと幼女によつて開かれようとしている捉えようのない会合に疑問符しか浮かばない。

「二人は、どういう関係なんです？」

「え？ あー、カザマが私のこと紹介してよ」

「なんで俺がわざわざ」

「私は見学で忙しいのだ」

言つて、少女はサイフォンの観察に戻る。彼女の様子をしばらく見つめて、風間は疲れたように深々とため息をついた。

「このチビ例の助監督。名前は伊吹萃香<sup>いぶきすいか</sup>。草野球チームで。ほら、カーディナルの」

最低限の情報だけ告げて、風間はキョーコの視線に気づく。

決まり悪げに顔面の絆創膏を指先で撫ぜる。日雇いで鍛えられた肉体を誇る彼が萃香にド惨敗を喫したと、つい昨日に口にしたばかりであった。

「まー今は肩書きだけなんだケド」

派手な場外乱闘のおかげで向こう一ヶ月の試合禁止。商店街を駆け抜けた人間台風たちに下された処罰についてはキョーコも耳にしていた。

「どっかのバカが乱闘騒ぎ起こしてくれたせいでさー」

その片割れである萃香がカウンターのの上にでろりと伸びた。

「売られた喧嘩を買った奴にも責任あるだろうが」

「うつわ。何その暴論」

しかし数日前の騒ぎに関しては萃香も負い目がないわけではない。嬉々として乱闘を始めた彼女が我に帰った時既に遅し。荒れ放題となつた商店街と飲み屋の電飾看板に頭から貫通した姿でぐったりした風間を見て、彼女は他人事のように言い放つたのである。

『あーあ、やっちゃったよ』  
と。

「そういえばずっと気になってたんだけど、なにソレ」

もとから後悔などしないタチらしく、萃香の興味はさつきと別のところへ移っていった。

「ん。コレはね、サイフォンっていうんだよ」

「さいほん？」

それはこぼこぽという耳心地のいい音を立てていた。

「知らない？ あ、喫茶店とか、初めてだよね」

喫茶店よりも研究室の戸棚の方が据わりのよさそうな、一見して奇妙な物体は。木製の台座の上にてビーカーじみたガラスの容器二つが組み合い、さらにその中には鉄製のチェーンやフィルター、そして挽きたてのコーヒー豆が見える。

「ん。はじめて」

「そっか。全部の店でこの道具を使うんじゃないんだけど。ここ、見ての通りお客さん少ないでしょう？」

「そうみたいだね」

そもそも辿り着ける客がない。苦笑する間もキョーコはその間も休まず手を動かす。

下側のビーカーに溜まった湯が十分に沸騰した頃合を見計らって、キョーコは二つの容器をしっかりと組み合わせる。やがて熱湯は重力に逆らって上のビーカーへと昇っていく。フィルターを濡らす水の動きを追っていた萃香が「おおお」と声を上げた。

「なんだそれ、魔法か！」

「魔法じゃありません」

しかし抽出されたコーヒーをかき混ぜる姿は、確かに大釜の前の魔女じみてもいた。

「大変なここまでたどり着いたお客さんには、せめて一杯一杯楽しんで、おいしいコーヒーを飲んでもらえたらなー、なんて店長に言ったらね、コレ買ってくれたの」

て言っても腕前の方はまだまだただなだけれどね、と苦笑してキョーコは温めておいたカップにコーヒーを注いだ。ひつつは風間、ひつつは味見用、そしてもうひとつは、

「はい、キミもどうぞ」

「ふえ。でもお金もってないぞ」

「サービスだから。気にしないで」

純粹無垢すぎる萃香の反応にくすくす笑いながらキョーコはヘラでコーヒーをかき混ぜ続けた。未だに魔法だ手妻だと目を輝かせる萃香の頭をぐしゃぐしゃ撫でながら、風間はいつものニヤついた笑みを浮かべた。

「なにかと面倒で悪いね。こいつ、結構なド田舎生まれでさ」

「田舎じゃないって。あと気安くアタマさわんな」

「アレだろ、お前いたところ、河童とか天狗とか出るんだろ？」

「お前田舎をバカにしすぎだろ」

「じゃあ出なかったのか？」

「……まあ河童はいた。そういえば天狗もいたな」

「聞いて驚け。まず都会にその手の連中は出ない」

「マジか」

「あと魔法や術なんてないし、ハタチ以下は酒飲んじゃダメだ。少なくともお前みたいハタチ以下に見えるヤツは面倒な思いすること請け合いだ。あと夜出歩いてもワリと安全」

「なんてタイクツな世界なんだ」

思わず怪訝の視線を向けるキョーコを傍に、風間はかかか、と笑いを漏らす。

「ああ。冗談だよ。内輪ネタってやつ。いや、やっぱりマジかな」

「どつちだよ」



「近頃は色々変わった。お前が一番よく知ってるだろう？」

小さく鼻を鳴らして、萃香は手元のコーヒーカープに向き合った。深刻な表情だった。困っているようだった。単に風間の軽口に愛想を尽かしたというわけではなく、目の前のコーヒーをどうすればいいか、純粹にわからないようだった。

「キョーコ」

「ん？」

「いただきます。でいいのかな。その、私初めてだから、味とか分からないかもだけど」

「うん。召し上がれ」

言われてすぐに口を付けようとはしない。香りを嗅いだり、ふうふうと吹いているところを見ると、萃香は猫舌なのかもしれない。それを微笑ましそうに見守っていたキョーコだったが、にわかには表情をこわばらせると、そつと風間に耳打ちする。

「風間さん。今日、スバルちゃんは……？」

「店長は奥」

無精ひげまみれの顎で、カウンター奥の扉を彼はしゃくる。

「そですか」

キョーコは思わず安堵の息をつく。

今朝はいつもキョーコにべつたりのスバルが朝食の席に顔を出さなかった上、キョーコはそれを分かっていたように電鉄に乗って学校へ。二人の間に何かがあったのは誰の目にも明らかだった。

「さつきケガした野良猫が転がり込んでな。今手当てしてる」

だけど根掘り葉掘りしないのがいい男の条件さ、と風間は内心うそぶいただけだった。

「ネコ？」

ここまで二人とのやり取りに耳を傾けていて分からなかったが、確かに裏手に通じるドアの向こうから響いてくるどつすんばったんを聞く限り、そうとう賑やかにやっているようだった。

「そ。ちよつとばかし手がかかるな、ありや」



ついに我慢の限界に達した正邪は風呂場から飛び出していった。

「うつきやあああ」

風間は物事を控えめに表現する天才であった。

猫、もとい浮浪児、もとい鬼人正邪はニンジャもかくやという動きでかさかさど壁を這い上がり、天井の片隅に張り付く。べしやり。という湿った衣服の音が後を追ってきた。

「やってくれたな、このやろ」

風呂桶に突き落とされたスバルが唸るように言う。二人ともぐしよぬれだった。

「やりやがったのはお前だお前。こちとら襲われるかとー」

「誰がお前みたいなの貧相なの相手にするか」

隠すものも隠さずにへばりついたままの正邪からスバルは目を逸らす。心底嫌そうだった。

「お、お、お、お前も誰かのやとわれか。そうだろ、そうなんだろう!」

「お前なんか知らん」

「はん。隠したってこの正邪様にはお見通しなんだからな。お前も、あのおっさんも、外の犬ころも、みんなグルだったってえわけだ」

「いや、だから知らないって」

「やっぱり面倒くさいな、こいつ。」

仏心なんか見せずに蹴り出しときやよかつたなとスバルが思っていると、それを凶星の沈黙と取ってか、得意顔で正邪がするする降りてくる。

大狗には相当痛めつけられたが、正邪の人ならざる生命力が今も身体の修復を続けていた。このくらい動き回る分には問題なさそうだった。

「だが残念だったな。この正邪サマが心を許したところで捕まえる気だったかトドメを刺す気だったかモニョモニョする気だったかは知らん。が、この正邪サマは勘が鋭いのだ。颯爽とこの場を後にすぶふお」

彼女が颯爽と全裸のまま駆け出した先には一枚のドア。

それに力ギがかかっていることも確かめずに突撃していった正邪

はピンボールの玉のように跳ね返され、自分でびしょぬれにした床でスリップした。トドメとばかりに陶製の洗面台の角に後頭部を叩き付けると、派手に音を立てて床に転がる。

「お、おのれー、抜け目のない」

「いやここ内カギだから。おっさんとかに見られたら困るのはそつちだろ」

頭を抑えたまま丸くなった正邪に、スバルはバスタオルを掛けてやった。

「私をどうするつもりだ!」

「どうもしない。こっちはお前の名前なんて知らないし、何をしてきたのかも知らない。興味もない。傷だらけで転がり込んできたから善意半分の哀れみ半分で助けてやっただけだ」

「……ほ、本当にこの、正邪サマをご存じないってえのか」

「知らん」

「悪逆非道にして不可能をひっくり返すトリックスター。神話の天邪鬼、鬼人正邪を、本当に知らないっていうのか」

「よく恥ずかしげもなくツラツラと言えたもんだ。でも知らん」

「なん、だと……」

なぜか急に意気消沈していく正邪を起こして、スバルは救急箱を下ろした。

「言つとくけど、めっちゃくちや沁みるからな」

それからは静かなものだった。

ぱっくり開いた傷口を消毒する間も、きつめに包帯を巻いてやる間も、ぼろぼろのワンピースの代わりにスバルが自分の古着を無理やり着せてやる間も、正邪は完全に脱力しきった様子でスバルを眺めていた。

「しかし、それでも私は恐ろしいだろう」

蚊の鳴くような声で正邪は問うた。

ややあって、かすかな笑い声が漏れる。それがスバルの答えだった。

「いいや」

「私は誰もが恐れるだー大ー大、大悪党なんだぞ」

「裏口開けとくから、落ち着いたらそつちから出てけよ」

にべもなく会話を打ち切り、絆創膏を手当ての仕上げに額に貼ってやると、スバルはその場に正邪を残して立ち上がった。

「お、おい。どこ行くんだ」

「こう見えて仕事がある。いつまでもお前に構っちゃいられないんだ」

「わ、私を残していくと大変なことになるぞつ、家中の明かりつけっぱなしにしたりとか、日めくりカレンダーを一日おきにめくつちやつたりとか、ゴミ箱の中身ぶちまけたりとかー」

「悪いな」

くすり。

「お前に構ってるほど、皆暇じゃないんだ」

薄い笑みを浮かべてスバルは去った。取り残された正邪はへたりと座り込む。そこにぽっかり穴が開いたような気がして、シャツの胸元を握り締めた。

「なん……だ。それ」

分からない。分からないまま、正邪はよろよろと立ち上がる。



「出直せバカザマ。5：5とかワリに合わないから。7：3だね」

コーヒーがお気に召した様子の萃香はそこでカップを口元に運んで間を置くと、目つき鋭く風間を睨み付けた。

「もちろん百万歩譲歩してだかな。ありがたく思いやがれ」

「バカ言え。元はといえば喧嘩を大事にしたのはそつちだろうが。半々つたら半々。これ以上は譲らねえ」

「元の元はといえばお前が付けたイチャモンが火種だろうがばーか。じゃあ6：4で手を打つてやるよ。お前が、今、ここで、犬のモノマネして見せたらだけどね」

「ぐぬぬ、背に腹は変えられねえ」

「ええつ、その選択肢をとるんですか!？」

謹慎期間中の練習場所の使用権をめぐるの交渉は平行線を辿つ

ていた。

「キョーコ、おかわり」

「はいいただきます」

「なあチビ、お前おかわりはいいけどカネあんのか？」

「ん。ないよ？」

「おいおいこいつ文無しだぞ！」

「だからサービスですってば。当店は最初のお客様からはお代を頂かない方針ですのー」

いたずらっぽく笑ってポットを持ち上げてみせるキョーコの前で、打って変わって深刻な顔で萃香はカウンターに突っ伏した。

「す、萃香ちゃん？」

「やつぱり先立つものは必要だよあなあー」

「お前、前はどうかやって生活してたワケ？」

「金子なんて持ったこともなかったわ。酔った勢いで畑から野菜ちよろまかしたり、時間があつたら一日呑みながら釣りしたり。いつつもどこかで宴会してるからさ、そこに紛れ込んだり。あー、できることなら帰りたい」

どちらかというとかと理由をつけて酒を飲んでるだけのよう  
な気がしないでもない。よいこととしてキョーコは看過していいもの  
かと悩む部分もあつたが、とりあえずは萃香の窮状が気になった。

「お父さんとお母さんに電話してあげよっか」

「いや。だから私、そういう歳じゃないんだよ」

まず親なんているのかどうか、と。言つて彼女はカップに息を吹き  
かける。

「あ……あー、じゃあ、その、泊まらせてくれそうなたもダチに連絡取  
るとか」

「いや、そもそもなくなつたんだわ。私の暮らしてたトコ。知り合い  
バラバラになつちやつてさあ。マブダチがいるつて聞いてこの町に  
来たんだけど、見つからないし」

かすかにかかつていたレコードのノイズが大きく聞こえるほど、沈  
黙が色濃く漂つた。

萃香は時間が止まったようになって店の中で悠々とカツプを傾ける。封を切られたシュガースティックの殻が転がるソーサーの上にそれを戻してから、彼女はきよとんとしたようすでテーブルに集った面々を見回した。

「あれ、どうしちゃったの?」

「急に重い話されるとな、普通な、こういう風に引くもんなんだよ」

「ひくって?」

「めっちゃ白けるってこと」

もつともこの場でヒいたのは風間だけであり、一方からは怒涛の勢いで間違った方向に突き進もうとしているよいこの気配がひしひしと伝わってくるのだが。

「風間さん、わたし、この子」

「スポーツ奨学金だっけ? 打ち切られるんだろ」

二年半も同じ寮で寝起きしてきた風間にはキョーコの考えなど手に取るように分かる。なので、ロクでもない考えにはさっさと釘を刺しておくことにした。

「こんなクソチビだってな、イヌネコじゃあねえんだよ。キョーコちゃんが面倒見切れなくなっても、俺あ絶対に手出ししないからな」

「そんなの覚悟の上です。がんばりますから」

「よいのなら」

そこまで言って、風間は頭痛がしたかのように眉間を押さえた。どうしてこの子はこうも融通が利かないのだ。

「いいか、よいのなら。よいこのままでいたいなら。首突っ込むのは自分の力でどうにか出来る問題だけにしろ」

「そ、それ。どういうことですかっ」

「キョーコ」

くい、と萃香がキョーコの袖を引いた。

「気持ちありがたいよ。でも私は貸しを作らない主義なんだ。カネは自分で稼ぐ」

「なんだ、エライな、お前」

「つーことでカザマ、実入りのいい稼ぎ口あったら教えろ?」

「やっぱエラくないわ」

どう見ても子供の萃香にできる仕事ってなんだろう。キョーコが真剣に考えていると、風間は「いくつかある」と呟き、すぐに「けどな」を付け足した。

「ビジネスにはチャンススつてのがあるんだよ。へべれけのお前じゃあ目の前にそいつがぶら下がってても気づきもしねえだろ。へマされると俺の信頼にも関わる」

「いいから。何かあったらいの一発で教えてよ」

半ば無理やりナプキンに連絡先を書きとめさせると、萃香は席を立った。いつの間に取り戻したのか、その手には例の瓢箪が握られている。

「カネが出来たらまた来るよ。この店も、店員さんも。あと珈琲、気に入った」

「ふふ。今度は辿り着けるかな」

キョーコに見送られて出て行くときに、彼女は嬉しそうに笑って言うてくれた。反射的に、子供にするようにその頭を撫でていたが、彼女はこそばゆそうにするだけで、文句が飛んでくることはなかった。

「寝泊りする場所はあるみたいだし、大丈夫だろ」

萃香が暮れの町に去っていく。背後でやり取りを見守っていた風間が言った。

「はい」

「まあなんだ。結局、練習場所の取り分も決められず仕舞いだっとな。ちよくちよく顔も合わせるだろうし、マジでやばそうだったらおっさんも動くからさ」

「すみません。わたし色々、生意気言っちゃって」

「そんなことあねえよ」

そこから二人は定位置に戻る。キョーコはカウンターへ。風間は文庫本を手にぶらぶらとテーブル席へ。今日も今日とて、待てど暮らせどこの魔窟に客が来る様子はない。

「暇ですねえ」

「そうだなあ」

表通りの店で忙しくするのも悪くないが、脱兎珈琲の店内を流れる水あめのようにゆるりとした時間を過ごすのが好きだ。極稀に迷い込んだか、それとも執念で嗅ぎつけたか、この店を訪れる客たちとの交流を楽しむのがキョーコの楽しみだった。たいてい曲者揃いで、皆置き土産のように面白い逸話をこの店に残していくのだった。

「萃香ちゃん、変わってるけどかわいい子でしたね」

「相変わらずキョーコちゃんはチョロいなあ」

「ちよろい、ですか？」

「おっさんはキョーコちゃんの将来が心配だよ」

長く引つ込んだままだった「店長」が戻ってきたのは、そんな時だった。

「悪い、長くなつ、た……」

乾かしたばかりでの髪で戻ってきたスバルとキョーコの視線がち合う。どちらが先

「お疲れ、スバルちゃん」

「あ、ああ。そっか。今日、バイトだったか」

関節からギコギコ音がしそうな動きでカウンターまでやってくると、スバルは店内を一望した。いつもと何ら代わり映えしない。彼女が唯一両親から受け継いだ遺産は、今日も開店休業状態でそこにある。

「なにか、手伝えることは残ってるかい？」

「あ、あーと、えーと。じゃあ、カップ洗っておくから。うん、カウンター周りの掃除、お願いしちやおうかな」

「わかった」

バケツとモップを手に戻ってきたスバルは黙々と作業に取り掛かる。流しの水音とモップが栗皮色のフローリングを擦る音。時折風間がページをめくる。レコードはA面のまま二週目に入った。人数が増えた割に、店内の静寂は増していた。

「その……気まずい、ね」

「……うん。そうだな」



なおさら気まずくなるようなことをキョーコが口にして、スバルが同意する。

「そうだ、ネコ!!」

不意にキョーコの上げた大声が沈黙を打ち払った。風間は紙面からふいと目をむいた顔を上げ、至近距離にいたスバルは、思わずモツプを落としかけた。

「ね、猫?」

「ケガしたネコのお世話、してたんでしょ。もう大丈夫なの?」

「あ、ああ——」

風間がどんな説明をしたのか分からないが、話がこじれそうなのでスバルは適当に合わせることにする。

「すぐ元気になって裏から出てった。ありがとうも言わない、恩知らずなヤツだったよ」

「しゃべる猫なんて、見たことないケド」

「だろいな」

「でも残念。ネコ、撫でたかったなあ」

キョーコはそこに猫の背があるように宙を撫ぜた。

「やめとけ。あれは噛むから」

「それはスバルちゃんが怖い顔してるからじゃない?」

「馬鹿にするなよ。私だって動物には優しくするさ」

「ほら、またそんな顔するから——ふふ、冗談だよ」

スバルが眉間のしわを確認して手を下げると、そこにはいつもの無防備な笑みを浮かべたキョーコがいた。

「まだ私に、笑ってくれるんだな」

今なんだろうな、と。意を決してスバルがモツプをカウンターに立てかけると、キョーコも蛇口を閉じて応じる。

「……昨日は、その。ごめん」

「うん、わたしも。皆がせっかく用意してくれたのに、台無しにしちゃった」

「チヅルのこと、なんだけど」

「うん」

「私はやっぱり、あいつが嫌いだ。キョーコが好きだから、キョーコを嫌いなあいつが嫌い」

「そっか。分かった」

「分かったって……いいのか。だって」

「だいじょぶ」

スバルを安心させてやる。こわばった身体を、鼓動を、全身で感じる。キョーコの抱擁の中で、こわばりはゆっくり解けていく。一日開けただけだというのに、この日課をずいぶん懐かしく感じる。

「時間はかかるけれど、きつとうまくやれるよ。みんな」

そう導いてあげるのが、元部長で、そしてほかでもないよいこの自分に残された仕事なんだと、キョーコは思う。

「ん」

「仲直り、しよっか」

「ん」

キョーコはスバルが満足するまで、洗いたての髪から漂うシャンプーの香りを嗅いでいた。それからややあつて身体を離して、モップを手に作業に戻るぞといったところで、スバルが思い出したように口を開いた。

「そうだ。明日はお店を休みにしようと思う」

「え。どうして?」

「そっか。夏祭りだったな」

それまで完全に存在感を忘れられていた風間が文庫本に目を落としたまま呟く。スバルは満面の笑みで、濡れるのも構わずキョーコの手を掴んだ。

「一緒に行こう。仲直り記念のデートだ」



ねぐらにしているT女学院の旧校舎まで、とうとう正邪は誰にも会わなかった。

「ただいま、我が城よ」

当然、返事は無い。

「相も変わらずホコリ高い」

「ここに決めている下駄箱の、足跡の形に埃が除けてある場所にスバルからもらった靴を丁寧に並べると、彼女は大きく胸を膨らませる。「そこにいるのは分かっているんだぞ」

返事は無い。

「ほら、私は逃げも隠れもしないしできない。見ろよ、ボロボロだ」

返事は無い。木造の旧校舎にわだかまる闇が、彼女の声を呑み込んでいくだけだ。

「コレを逃したら次のチャンスは——あだっ」

昼にこさえたタンコブが痛んだ。

下駄箱にもたれるように、正邪はごろりと昇降口に大の字に伸びる。かつては下克上を掲げ、世界ひとつを敵に回して戦った天邪鬼が、いまやこの有様だ。

「にやあ」

暗がりから現れた黒猫が、正邪の額を舐めた。ざらりとした感触。

「なんだよ、エサならもうないぞ」

数々の悪事を、彼女は少しばかり完璧にやりすぎたのかもしれない。

すべての味方は去り、あとには何が残った？

それは敵などではなかった。そうであつたら、まだよかつた。うらみとつらみを超越した先にあつたのは、無関心と忘却だけだ。それにうすうす感づきながら、今日まで逃避行ごっこを続けてきた。

『お前に構ってるほど、皆暇じゃないのさ』

あの何気ない一言が嘘で塗りたくった壁を壊すまでは。

「やめろ、うざい」

邪険にされて、尚も猫はぺろぺろと正邪を舐め上げ続ける。

「寝かせてくれよ。今日は、疲れた——あーもう」

この分では額がすりむけるまで舐められそうだった。

「なんだよ」

仕方なく正邪が身体を起こすと、既に黒猫は廊下の奥へと歩いていくところだった。一度足を止めて振り返ると、緑色の瞳で彼女を見つめてくる。ただ、静かに。ひたひたとかすかな足音を立てて廊下を進

むにつれ、物陰から猫たちが這い出してくる。

「ビビらせてくれるじゃないか」

思ったままを口にするが、猫たちは静寂でもって答えるだけだ。

進むにつれ月光が強くなる錯覚を覚える。単に目が慣れてきたのか、それとも旧校舎に秘められた魔的なものが力を増しているのか。突拍子もないアイディアを首を振ってかき消すと、猫たちがいつせいに足を止めた。

「ふにゃあ」

黒猫が、いた。

「お前、私に何を見せたいんだ？」

「にゃー」

恐る恐る、素足のまま正邪は中庭に踏み入った。

そこはちようど木造の校舎にぐるりと囲まれていて、三階建ての高さもあつてか、荒れ放題の中庭は月夜の明暗がはっきりとしていた。そしてちようど月光がしらじらと照らす一角。件の黒猫がかりかりと地面を引つ掻いている。

「にゃあ」

「掘れつてか。ここに」

せつかくきれいにしたばかりの手にため息を吹きかけると、正邪はわずかに顔を上げた。

「はん。私は気まぐれなアマノジャクだからな。付き合つてやるよ」

そこに跪いて、苔むした粗末な慰霊塔に気づく。

覚悟を決めて爪を立ててみた足元の土は奇妙なほどやわらかく、深く掘り下げるのにたいした労力は必要なかった。

「あ?」

羊羹のような掘り心地の土を掘り進める手が止まったのは、灰色の土の下から白いものが現れた時だった。

それは当然というか、骨だった。やはりというか、骨であった。必然性を感じるほどに、骨であった。慰霊塔を建てるのだ、その下にこういったものが埋まっていたとて何らおかしいことはない。

しかし、誰の？

しかし、何故？

「で、これがどうしたってワケ？」

掘り出して持ち上げれば、それはますます骨だ。

顎のないがらんだ頭の骨に人差し指を突っ込んでくるくる回しながら、正邪は中庭に集結した猫たちを眺めた。

「まったく。弁当の札だっけ言うならもうちよつとマシなものにしてほしかったな。せめてもうちよつと分かる形で——」  
にやあ。

ばたばたと、驚いたカラスの群れがねぐらを旅立っていった。

一匹や二匹でなく、今の鳴き声は斉唱だった。

「なんの、マネだ？」

見渡せば、中庭もガラスを通して見える旧校舎の中も、隙間なく光る目で埋められていた。まるでひとつのイキモノのように、彼らもともわかりやすい形で『感謝』を正邪に示して見せたのだ。

頭を垂れ、従者のようにひれ伏す猫たちを前に、正邪は呆然と頭骨を見つめる。それは確かに生きていた。血肉を失ってなお、脈動するような力のうねりを感じた。

「は、はは」

なんだ、これは。この、背筋が寒くなるくらいの僥倖げようせいは。

「ビジネスにはチャンスを、か」

盗み聞きした風間たちのやりとりを思い出しながら、正邪は笑いながら頭骨を高く掲げる。月光を受けて不気味な艶を放つ頭骨にも、正邪の頭にも、不自然な突起が見て取れた。

鬼人正邪の下克上は、まだ終わらない。

第4話『夕の街ゆく鬼たちは』 おわり

## 9 『よいこの限界（上）』

軽トラは流星となった。

「どわああああ」

ハンドルを握る風間の悲鳴。

無様なジャンプには無様な飛翔というおまけがついてきた。

車体は空中できりもみに回転し、荷台にしがみついたキョーコの天地が何度も入れ替わった。そのうちどちらが空で、どちらが水面なのかも分からなくなりーその境界を分かつものは赤い、赤い線だけになる。それはごうごうと燃え盛る橋。

「そーいや昨日おっさんが言ってたねえ。よいこには限界があるって」

独り言のように萃香が呟いた。

私の立つ場所が大地なのだと言うように、彼女が荷台から振り落とされることは決してない。重力を無視する千鳥足で、ひらりと舞ってみせる。

「誰かを助ければ誰かが傷くかもしれない。それでもあんたは行くんだね」

口を開こうとしても、肺が激しくシエイクされるおかげで声がでない。だがキョーコの表情からすべてを読み取って、萃香は鬼歯を見せ笑った。

「にしし。おっけ」

彼女はひよいよいとトラックの側面を歩いて、運転席を覗き込む。

「つーことだ風間あ、あんたも地獄の道連れだ。腹くくれえ」

「ほほほ本当に死んじまうー！」

「相変わらずダサイオッサンだねー」

トラックは放物線を描く。大雨で増水した川の、何百という馬がいつせいに走るような音が迫ってくる。飛距離は圧倒的に足りない。これでは目的の橋まで届かない。

「俺が何をした」

「よく言うだろ、因果応報って」

萃香は平時と変わらない仕草でひよいと瓢箪をあおった。

「あんた、普段の行いを見直してみたら？ 結構イジワルとかするタイプでしょ」

「バカ言え！ 神に誓ってそんなことは——」



「はい、あーげーたー」

風間はキョーコの目の前から万札をふっと取り上げた。いま正にそれを掴まんとしたキョーコの手が宙を切る。

「あつ！ ……そ、そんなあ」

とたんに瞳から輝きを失ったキョーコは膝から崩れ落ち、暗雲立ち込める目つきで恨みがましく風間を見上げてくるのだった。

「いや、教科書に載っててもいいくらい古典的な意地悪じゃんかよ。そこまで落ち込まなくても」

唸り声を上げてキョーコがゾンビのような動きで足元にすがつてくる。あまりの必死さに振り払おうとするが、吸盤で吸い付いたように離れない彼女はどんよりした表情で見上げてくるだけだ。

「今月ピンチなんです。ホント、そういうの勘弁してください」

「やるよ。くれてやるとも。ただおっちゃんの頼みを聞いてくれ。な？」

キョーコはまた唸った。

「……案内ですよね」

「そう。『勇儀さん』しばらくここに住むことになってさ。ここいらのことをサラッと教えてあげちゃってくれ」

普段はどんなお願いも二つ返事で引き受けるよいこ筆頭が、このときばかりは明らかに悩んでいた。窓際で晩酌を決め込む勇儀をちらりと見て、彼女は眉を曇らせた。

「言いにくいんですけど……わたしじゃなくて風間さんの方がいいんじゃないですか。わたしはその、色々上手くいかないんじゃないかなって」

「第一印象でしくじったくらいなんだよ。むしろ挽回のチャンスだろ。しかもお小遣いまで貰えるんだぜ」

キョーコと勇儀の間に何があったかなんて知る由も無い風間は、耳打ちで付け足す。

「つーか断れるのか?」

キョーコは黙ってちやぶ台の上にサイフをひっくり返した。茶色に変色したレシートと茶色の小銭が数枚。あとはホコリ。「おやまあ」と、風間のわざとらしい反応。どう考えても夏祭りを満喫できる額ではない。

「あー、店長からバイト代の前借りするって手もあるにはあるな?」

「……風間さんは、意地悪です」  
できるわけがない。

キョーコの勤め先は脱兎珈琲という喫茶店であり、その店長とは親友の吾妻スバルであり。何を隠そう、彼女こそ「お祭り一緒に行こうね」と約束した相手であった。その相手に当日になって「お前と遊んでやるから金貸せや」と言うのは、よいこ悪い子以前に、人として残念すぎだ。

「行つてもいいんだけどさあ」

キョーコが頭を抱えていると、酒に焼けた声が水を差した。

それまでスルメと日本酒を手に様子見に徹していた勇儀が薄笑いを浮かべていた。片手の指で瓶を支え、残りの指でイカゲソをつまむ。器用なものだ。

「遠慮すんなってば。祭りとか騒ぎとかゆっぴー大好きだろ?」

「いやあ、そうじゃなくて」

勇儀のにやけ眼の先にはキョーコがいる。何を言われるか大体分かかって、キョーコは無意識に身構えた。

「この嘘つき小娘に案内なんて勤まるのかね?」

「わっ……わたし、嘘ついてないって」

「どうだか」

顔を真っ赤にして反論するキョーコと、それをツマミにして酒のペースを上げる勇儀。波乱の幕開けに、風間は顔を覆う。

「あのね。キミ達ね」

「記憶戻らないクセに人を嘘つき呼ばわりして。ちよつとは真面目に



話を聞けないの!？」

「だからってあんたのイカれメルヘンに付き合えつてのかい。お断りだね」

「勇儀は正真正銘の鬼なんだってば。なんか、えっと、どつか遠いところから来て、わたしを助けてくれたんだ!」

「あー、おっさんのねえ、二人に仲良くなつて欲しいっていう意図をだねえ」

「ほらまた出たよオニい。だいいち、人様を鬼呼ばわりしやがつて、この小娘の親はずいぶん失礼な教育をしてくれちやつたもんだ」

「っ、だつて鬼なんだもん!」

「どこをどう見たらあたしが鬼なんかに見えるんだよ。ただの病人じゃあないか」

「鬼だ鬼だ鬼なんだ!」

收拾つかなくなりかけた会話は唐突に断ち切られた。

ちやぶ台がガタリと大きな音を立てた。思わずぎよつとして口をつぐんだ二人の目の前にはきれいに並んだ万札が二枚。背を向けて座った風間が、ぼふう、と煙の塊を噴き上げた。

「ま。楽しんでこいや」

風間が乱暴に灰皿でもみ消したタバコが末期の息のように火の粉を吹き上げる。着古したドテラの背中が、二人の目には黒山のように威圧的に映る。

「な、なんだいなんだい。行かないつては言っていないじゃあないかなあ?」

その姿にただならぬものを感じた勇儀が、さすがに空気を読んだ。「うっ、うん。あの、お金、ありがとうございます。おみやげ、買ってきますすね。お酒に合いそうな」

風間は、耳元の蚊を払うように手を振っただけだった。

二人の足音がすごすご遠ざかっていき、するすると廊下を渡り、枠が歪んだ玄関扉がスライドするぎぎぎという音にかき消されるまで、風間は火を点けるでもなくタバコを啜っていた。

「あ。畜生」

握りつぶしたタバコのパックが空であることに気づく。ドテラのポツケに予備はなし。部屋の備蓄もあらかた吸い尽くしていたような気がする。

「ミヨっちゃん、一本貸してくんない？」

台所から褐色長身の美人がひよいと顔を出して、小鳥のように首をかしげた。

「タバコ。切らしちゃってさ」

聞いた彼女は見るからに不機嫌そうに、鼻をつまんで眉間にしわを寄せて見せただけだった。

「って吸わないもんな。ジョーダンだよ。ちよつと買いに行つてくる」

こんなことならキョーコちゃん達にタバコのおつかい頼めばよかったかな、なんてことを考えながら食堂を後にする。ビーチサンダルに足をつっかけたところで、風間は背後に影法師のようにたたずむミヨシを振り返った。

「……カサ？」

ビニール傘を渡されて首をひねる彼の横を通り抜けて、ミヨシはさっさと表に出てしまう。

「知らなかったわ。こりゃあ降るぞ」

後を追って寮の前の通りに出ると、夕日に輪郭線を染められた雨雲が着々とK市の上空に集結しつつあった。

「祭りの日に限ってよく雨なんだよな。あ。分からない？ そう」

風間は思い直したように踵を返し、寮の前のベンチにふんぞり返る。どうせなら最後の一本まで吸い尽くしてから出かけることにしたらしい。

「おっさん運動会とか苦手なガキでさ。そういうときはカラリと晴れるクセに」

ミヨシはやはり、反応を返さない。風間も大した期待はしていなかった。

その間、目の前でただただ空を見上げるミヨシは今何を考えているんだろうかとか、本当は何も考えていないんじゃないかなろうか、などと

考えつつ、彼女のジーンズに包まれた形のいい尻を眺める。舐めまわすように眺める。

太鼓と喧騒が遠くから聞こえてきていた。いつか誰かが脱兎珈琲を訪れた折、「K市の裏通りに一步踏み入れれば、そこは魔境だ」とのたまったものだが、確かにそれは的を得た表現だったかもしれないが。

「曇りが嫌いってワケじゃあないが、イヤな天気だ」

だが、今日の裏通りにたちこめる静けさは別のものだ。

風間は深々と吸ったケムリを吐き出す。それはすぐにK市の空気の中へ散ってしまうが、確実にK市の大気の中に紛れ込んでゆく。こんな胡乱うろんなものが、この町の中をどれだけ漂っているのだろうか。それが思いがけず形を成す瞬間が、いつか来るのだろうか。

「ここは妙な町だが、今日はことさら妙な感じがする」

取り留めなく吐き出した言葉だったが、ミヨシは頷くことで彼に同意した。

静かに頷いた彼女は踵を返して寮へと戻っていく。そのついでにベンチの傍らに立てかけてあった傘を掴むと、風間の頭をぽこ、と殴っていった。

「あ、やっぱバレてたか」

シャツを伸ばして尻を隠すようにして戻っていく彼女を見送る風間の手元で、タバコはフィルターまで焼け落ちていた。



「約束、あるんだらう?」

「うん。でもまだまだ時間あるからね。それまでは」

勇儀は大きな体で掻き分けるようにして人ごみを歩く。キョーコは怪我人の彼女に歩調を合わせようとする。と、今度は勇儀の歩幅が大きすぎてキョーコが遅れをとる。ただでさえ人でごった返した通りをゆく二人のペースはちぐはぐだった。

「コレがバス停で、こっちが電鉄の駅です。間違えやすいんで。あとその角を曲がったところに交番があつて、向かいのラーメン屋が激マズだから気をつけてつて。あれ?」

律儀に町案内をしはじめたキョーコだったが、さつそく勇儀とはぐれてしまったことに気づいた。とはいえあれだけの大女となると、見つけ出すのは難しいことではない。十数メートル離れた場所で、彼女は無数に吊られた提灯ちようちんのひとつを手にしていた。

「きれいなものが好きなんだ」

誰にともなく、といった呟きだった。

「こう派手で、キラキラしてて、賑やかなやつ」

光るオモチャを振り回して足元を駆け抜けていく子供達を見守る眼差しは優しかった。無数の提灯と、軒を連ねたカラフルな屋台の垂れ幕が薄暮に滲んで。まるで、光の海の中にいるようだった。

「何か、思い出しました?」

その光の海が、勇儀の目には理由も知れず恋しいものに映る。

「まあ少なくとも、自分が鬼じゃなかったってことはね」

「むう」

赤と白で塗り分けられた提灯。

前後には『わらひ』の文字が踊り、祭りのマスコットキャラクターらしき絵が印刷されている。

「はは。ヘンなの」

そのキャラクターについて端的に言えば、ゆるかった。全身を覆うもじやもじやした緑の束は髪の毛にも、もずくのようにも見えた。印刷の質が悪いのとごちゃごちゃとした付属物のおかげで、まるでマリモに角と耳を生やしたような怪物物にしか見えない。

「ワッピーだね」

「なんだいそれ」

「マスコットキャラクター。わらひ祭りだから、ワッピー」

「わらひ祭りねえ」

提灯を元の場所に戻して、勇儀はキョーコを追う。

「大きな祭りなんだよ。こんな田舎町で大騒ぎするのなんか、一年で今日くらいなんだから」

「有名かい?」

「うん。東北ナントカキサイツて呼ばれてて。県外からも人来る感じ」

かな」

「キサイ？」

「奇妙なお祭りって書いて、奇祭」

「ほーん。見たところそれほどオカシな祭りって感じもしないんだけどねえ」

昔は特別な神に祈りを捧げる厳肅な儀式を伴う祭事だったという。土で器を作っていた頃から続く儀式は長い歴史の間に形骸化して今の大騒ぎに落ち着いたーというのがキョーコが居眠りの時間としている歴史の授業で奇跡的に覚えている情報であった。

「で、その特別な信仰の対象っていうのが」

「鬼だった？」

丁度、車道を山車だしが通っていくところだった。

巨大な山車を牽くのは皆厳めしい形相を貼り付けた鬼の面を被っていた。「まったく、ここに来てから鬼ばかりだね」と勇儀は肩をすぼめる。

「そう。鬼が主役のお祭りなんだよ、これ——ああ」

いきなり話と歩みとを止めるなり勝手に納得して手をぽんと打ったキョーコに、勇儀は怪訝の眼差しを向ける。

「なんだい、急にさ」

「何日か前変わった双子ちゃんに遭ったんだけど」

「なんだか話が見えないね」

そこまで口にして、キョーコは苦虫を噛み潰したような表情で再び口を開く。

「あのさ。具合でも悪いのかい」

悪化したのは具合は具合でも懐具合であった。双子は大通りでゲリラライブを敢行。通りかかったキョーコには聴いてもいない歌に「善意のおひねり」を要求。そこに遠方から到着したばかりという転校生まで現れ、なし崩し的に食事に誘うと三人でキョーコのおサイフをバリバリ食い千切りはじめて——

「なんでもない。もう治ったから」

キョーコが呻くようにして言った。

幸いにも（情けないことに）双子の片割れから幾らか返してもらったが、それでもお大尽ごつこのツケは高すぎるくらい高くついた。その結果がこのザマである。祭りの最中で後の祭りにも程があることを考えていると、勇儀の方から話の穂を接いできた。

「で、そいつらがどうしたってんだい？」

「なんでも『鬼の王様』がどうこうって言ってたんだ。たしか」

「鬼の王サマねえ」

「だからあの子達、この祭りが目当てで来たのかなー、なんて思ったりして」

「王サマがいたからには国があつたのかねえ。鬼の」

キョーコはどんどん先に進んでいく。一方で勇儀はあれはなんぞこれはなんぞと足を止めてばかり。依然として二人の歩調が揃わない。

「あん？」

とりわけ勇儀の目を惹いたのは、視界の端でぱつと弾けた銀の蝶の群れであつた。

何事かと顔を向けると、正に向かいの通りで見物人たちが散つていくところだ。一体どんな見世物やらーと見守っていると、やがて人垣の中から小柄な影が見えてくる。

「キョーコ」

足を止めて振り返るなり、キョーコも彼女達の存在に気づいたらしい。一度見たら忘れようの無い、派手な色彩の衣装に身を包んだ二人組。

「双子って、あんな感じのかい？」

彼女達もこちらに気づいたらしい。ぱあつと表情を明るくしてこちらへ駆けてくる二人組を見つめつつ、奇妙なめぐり合わせの連続にキョーコは驚いていた。

「ウン。あんな感じの子たち」



オルガの様子を見れば、鬼同士の話が上手くいったかどうかは一目瞭然だった。

「お姉さん、あのホシグマって奴すぐくムカつくんだけど！」

声を荒らげるオルガは頭から蒸気を噴き出すんじゃないかと思うくらい顔が真っ赤だ。

「うーん、やっぱり難しかったかあ」

「オルガちゃん、お姉さまがたこ焼き買ってくれましたけど」

「……食べる」

腹を立てた分だけ減ったようで、マヤに「あーん」してもらうと、タコのような顔色のままでオルガは「熱い」とだけ呟いた。

「大物の気配がぶんぶん匂うくらいなのにさ。アンタも鬼だよって言ったらムキになるんだもん」

しばらく勇儀はシャツターを下ろした店に寄りかかっていた。それが決して快い反応でないことは明らかだ。しばらくして彼女はこの騒ぎの中でも聞こえるほど大きなため息をついた。

「キョーコ、ちよつと話をしようか」

長イスが丁度空いていた。先に腰掛けた勇儀がぼん、と座面を叩く。有無を言わせぬ様子に、おずおずとキョーコが隣に座ると、双子も二人を挟むように座った。

「な、なにな……」

「子供使ってまで人をだまくらかすなんて、見下げ果てたヤツだね」

やはり双子と話をさせるのは間違いだっただけという事にキョーコは気づいた。完全に逆効果だ。

軽いめまいを感じながら、キョーコはこの場をどう乗り越えたらいいものかと考えをめぐらせた。

「ちよつと、ちよつと待って。頼むから」

しかし誰よりも早く口を開いたのはマヤであった。

「お姉さまの言っていることは本当ですよ」

「だから、えーと」

「マヤ」

「ああそうだ。で、マヤちゃんとやら。正直なところ、あんたらキョーコの奴にいくらもらったんだい？」

「お姉さまが？ お金を？」

一瞬マヤから投げかけられた視線が痛い。何が言いたいかはよく分かった。金欠はキョーコの持病だ。

「いいえ。一銭たりとも。親切にはしてもらいましたが」

「じゃあ善意のお返しに嘘の片棒担いだってトコかい？」

「違います」

「嘘つきはドロボーの始まりだよ」

「ご心配なく。これでも真っ当に稼いでいますから」

口論する二人が腰を上げた瞬間、キョーコとオルガは目配せした。「ま、こうなるよね」と金髪を短く切りそろえた少女は表情で語る。そんなのにんきに構えていいのだろうか。

「じゃあ逆に聞きますけど。どうしてあなたはお姉さまの話を信じられないんですか」

「信じる根拠がないからさ。えー、と？」

「マヤ。マヤ・カミンスカです」

「何度も聞いて悪いね。じゃあ マヤちゃんは王様に会って何をしてもらうんだい？」

「それを知ってどうするんですか」

「知りたいだけさ」

「あなたに教える義理はありません」

「おやおやボロが出たぞ」

鬼のこととなると何故これほど勇儀が頑なになるのか、キョーコには分からない。

倍はあろうかという高みから見下ろされて一見怖気づく様子の無いマヤであるが、硬く握られた拳は真っ白になっていた。

「なんですか、ボロって」

「言わないんじゃないかって、言えないんじゃないかい？」

「あなたに言いたくない。だから言わないだけです」

「はーん。ガキの遊びなんてそんなもんだよな。どした。今からくだらない理由でも考えてみるかい？」

もういい。もうやめにしよう。二人とも熱くなりすぎだ。

そんな言葉で話をさえぎるには、もう遅すぎた。



「ホントは鬼の王様がいるなんてこれっぽっちも信じちやいないんだろ?」

「ッ!」

「勇儀さん」

なんとなく勇儀がまずいことを言ったのだけはキョーコにも分かった。握り締められたマヤの拳が、みしりと音を立てたような気がしたからだ。

だが加速のついたコースターが坂を下るように、一度勢いのついた勇儀はとまらない。

「鬼の王様も、鬼の国も、ゼーんぶ作り話なんだ。認めて楽になっちゃえよ」

「違うッ!!」

空気が震えた。祭りの熱気がつかの間、しん、と静まり返った。

その視線が地面に落ちたプラスチックのトレーと、驚きを隠せないキョーコと、何事かと足を止めた人々の表情とを何度か往復した後、彼女はうつむいたまま、もごもごと口を動かした。

「王様は……います。国だって、あつたはずなんです」

消え入りそうな声。

「そうじゃなきや」最後はほとんど自分に言い聞かせるようだった。

「私達が馬鹿みたいじゃないですか」

「マヤちゃんったら」

いたって自然にベンチから立ち上がったオルガがマヤの前に跪き、こぼれたゴミを拾っていく。

「ほらほら。笑いなよって。顔が怖い怖い」

笑って。その言葉が、なぜかキョーコの胸の片隅を突く。

「……はい。ごめんね、オルガちゃん。それにお姉さま」

「マジになりすぎるのが玉に瑕なんだよねえ」

オルガがマヤの肩を抱いて体を揺するうち、彼女の表情も和らいでいった。

「ボクたち、ちよつと場所を変えて歌ってみようと思うんだけど……お姉さんたちはどうする?」

勇儀はまだ何か言いたげだったが、あえて無視してキョーコは腕時計を確認する。四人ですったもんだしているうちに、スバルとの約束の刻限に差し掛かっていた。

「やば。わたしたちも行かなきゃ」

「じゃあ途中まで一緒に行こうよ」

「勇儀さんはもう少し後ろの方を歩いてもらっていいですか」

「んだとお」



それからは比較的平和だった。

相変わらずマヤと勇儀の間に交わされる言葉には刺々しいものが含まれてはいたが。

いつのまにか頭上厚く立ち込めた雲のせいもあって薄暮の日差しが遮られると、薄暗さの中に提灯が星のように輝く。

「祭りはここからって感じだねえ」

「お酒、欲しくなってますよね」

「あんた子供だろ」

祭りの夜。もつとも夏の魔力が強くなる時間だ。

どこか熱に浮かされたようになってるのは勇儀とマヤだけではない。この後スバルと合流した後のことを考えているうち、キョーコの足取りも自然と軽くなっていく。

「お姉さん、上機嫌だね」

いつしか魔力に吞まれていた彼女はオルガにくい、と手を引かれた。

「これから友達と会うんだ。紹介したげるね」

「お姉さんのトモダチかあ。ぜったいヘンな子でしょ」

「そんなことはないですよー?」

「じゃあとつてもヘンな子?」

「ふふ。当たらずも遠からず、みたいな」

なんだかんだで心を弾ませながら、キョーコはずっと頭の片隅の醒めた部分から囁きかけてくる声を意識の外に追いやろうと必死になっ

そのときだ。足元でぽつ、と雨粒が小さな染みを作ったのは。

「雨かあ」

「本降りになると厄介だね」

「不吉なこと言わないでください」

「どっかで雨宿りしよっか」

雑踏のあちらこちらで同じような会話が聞こえてくる。雨脚が強まるにつれ、ざわめきが大きくなる。耳元の囁き声も、例外ではなく。『よーい、どん』

聞き覚えのある声に、はっとした。

鼻先で雨粒が弾けた。水の粒子がゆっくりゆっくりと、花卉のように開いていく。水の花が完全に開ききったとき、キョーコは。

(勇儀?)

異様な静けさの中にいた。

(オルガちゃん? マヤちゃん?)

皆、石像のように固まっていた。雑踏も、歩行者信号の点滅も、雨粒でさえ。完全に時間の流れの外に放り出されたキョーコの声は、音にならない。ただ、直前まで見ていた視界だけが数倍、数千倍も鮮明に網膜に焼き付いてくる。

鼻先。水の花。その水の粒子のひとつひとつが輝いた。

(あ)

奇妙な話だが、万華鏡のように映し出された輝きの正体を見た瞬間、キョーコの頭脳より先に身体がソレを理解した。理外の理に存在する、決してこの世にあり得べからざるモノを。

「逃げて!!」

あれに触れられてはいけない。

あれに関わってはいけない。

あれに見つかってはいけない。

だが、もう遅いのだ。

すでに事は起こってしまったのだ。

キョーコの叫びは雷鳴のように静寂をつんざいて、彼女の体をがんじがらめにしていた見えない鎖を粉々に引きちぎった。

足が。もう走れない、と言われた足が力強く大地を踏みしめる。つま先は牙のように。かかとは翼のように。

「キョーゴ!」

素っ頓狂な勇儀の声。三人を抱えるようにして雑踏に飛び込んでいた。

わけもわからず巻き添えでなぎ倒された人々の罵声などお構いなしに、キョーゴは今しがた自分達が立っていた場所に降り立ったモノを見る。忘れようにも、忘れられないきささらぎの怪異を。

「オオカミ……う?」

銀色の輝きを纏った大狗は、深々とタイルに突き立ったカタナを強引に引き抜く。すると瓦礫と破片があたりに飛び散って、それが低く唸って。

「うーうわああああ!!」

ようやく、人々は恐怖という感情が自分にあるということを思い出した。まるで祭りという酔いの最中に冷や水をぶっ掛けられたように。

蜘蛛の子のように散った人々の中から、さらに絶叫があがる。続いて獣のような咆哮。それからゆらゆら立ち上がってきたものは異様にひよろ長く、異様に胡乱で、いびつに人体を模倣した、影のような鬼たちだった。

『じゃ、がんばって』

キョーゴが耳元に感じていた気配が去っていった。

祭りのさなかに巨獣が文字通り降って現れ、得体のしれない怪物たちが沸いて出て。既にあたりは恐怖の坩堝るっぼと化していたが、それにトドメを刺す様に坂の上から顔を出したものがあつた。

「今日って運休とやらなんじゃなかったかい?」

とはいえ、勇儀も本気で言ったわけではないのだろう。

第一にその車体は溶岩から引っ張り出してきたように赤熱し、燃え盛っていた。長大に連結された車両の窓からは巨大な手足の骨が何本も張り出し、まるでムカデのように電鉄のレールの上を滑りながらこちらへ降りてくる。

ぎやあああ、と誰かが叫び散らして。それから人々は我先にと裏通り目掛けて詰め掛けていく。影鬼たちはふらふらと歩んでは気まぐれに彼らを捕まえていった。悲鳴が一段大きくなる。

「ぐ、うふふ」

その様子を見守っていた大狗が唸った。いや、笑ったのだ。しかも、女の声で。

「やっぱりこの町には何かあるんだね」

「ええ。そうでなくては困ります」

地獄から這い出てきたムカデが屋台の列を吹き飛ばしながら横をすり抜けていくと、キョーコたちのいる歩道にまでじりじりと熱が伝わってきた。オルガはそんなことに構う様子も無く勇儀を見上げて、

「そろそろ謝ってくれる？」

と、薄笑いを浮かべる。

目だけは笑っていないかった。

## 10 『よいこの限界(下)』

「お姉さん、逃げてー！」

双子は強かった。キョーコよりも、ずっと。

「でも、二人は!?」

「私達は大丈夫ですから。さあ」

拳に脚。それが彼女達の武器だった。それだけで雲霞のように押し寄せる影鬼たちを叩き潰し、引き裂き、吹き飛ばして。すべての動きは流れるようで、まるで映画の殺陣を見ているようだった。

「ぐるる」

大狗は放り出された山車の上で舌なめずりした。

今のところ襲ってくる様子はない、が。それは獲物を選ぶ捕食者の、一瞬の静寂に過ぎない。

「ボクたちさあ、別にお人よしで言ってるワケじゃないから」

キョーコに迫った影鬼たちを槍が貫く。コンビ二前から引き抜いたプラスチックの旗竿も、彼女達の腕力にかかれれば立派な武器になる。『アイス全品10円引き』のノボリを咲かせて、次々と影鬼が霧散していく。

「さっきのたこ焼きの借りを返してないだけ。勘違いしないでよね」

「はい。恩を返すまでお姉さまには指一本触れさせません。勘違いしないでください」

「そんなの」

そんなの、とんでもないお人よしじゃないか。胸が締め付けられるような思いで立ちすくんだキョーコを、乱暴に勇儀が引っ張った。

「逃げるよ、さあー！」

「じゃあね。お姉さん」「また会いましょう」

痛む足をもつれさせながら、キョーコは何度も何度も振り返った。笑顔で手を振る二人に大狗が襲い掛かる。間一髪で攻撃をかわした彼女達の姿が霞のようにブレて消えーそして怒涛のような雨と土煙がすべてを覆い隠した。



「また……逃げちゃったなあ」

膝の間に顔を埋めて、キョーコは蚊の鳴くような声で呟いた。

「あれで良かったんだよ」

「あんな小さな子たちを見殺しにすることが？」

「見たろ、あいつらの戦い」

命からがら逃げ込んだ脱兎珈琲の店内。ぐったりと背でカウン

ターにもたれたキョーコを尻目に、勇儀は落ち着きなく歩き回った。

「あんなの人間技じゃない。あたしらが手を出したところでなーんの

役にも立ちやしないんだよ」

「それでも」

「あん？」

「それでも、わたしにだって、出来る事はあつた筈なんだ」

青臭い。

勇儀は我知らず顔をしかめていた。

『『よいこ』でいるのはそんなに大事なことかい？』

キョーコは黙り込んだ。勇儀は鼻を鳴らし、店内を物色し始める。

「あいつらなら大丈夫さ。すばしっこいし、あたしらの何倍も強い。

きつとあの怪物もちやっちゃと片付けてくれるさ」

「そう上手く行くもんかねー」

鈴を鳴らすような声に二人は、はっとした。

「いい夜だねキョーコ。そして久しぶりー星熊」

いつからそこにいたのだろう。カギはしつかりかかっていたし、ス

バルが居候を抱え込んだという話も聞いていない。

当たり前のような顔をしてカウンターに掛けていた萃香はカウン

ターを握って勢いをつけると、腰掛けたスツールをぐるぐる回転させ

てみせた。

「つておーい。なんか反応が微妙じゃない？」

「勇儀は、その。記憶がなくなつてて」

「ああ、そうなんだ」

心配顔の萃香が一気に醒めた。

「天狗どもが心配してたよ。まあポーズだろうけど」

「て、テング？」

「あと地底の連中。連絡くらいよこせって」

ひたすらに困惑するだけの勇儀を見て、萃香はほとんど自分のこめかみを叩いた。

「ま。色々積もる話もしたかったんだけどね。しゃあないか」

「萃香ちゃんは どうしてここに？」

「珈琲飲みに来た。そしたら迷える子羊の声が！」

「ばばーん。と効果音を声に出してポーズを決める萃香だったが、微妙な反応を返すだけの二人の前で、やがて恥ずかしそうに身を縮めた。

「ま。ホントはあんたら探してここまで来たんだけどさ」

彼女の変化は顕著だった。古木の枝のようにねじれて先細った二本の巨大な角が頭から伸びている。有り余る力を戒めるように、彼女の両腕には鉄球と鎖が巻きつけられていた。

「鬼なんだね。キミも」

「そうだよー、怖いよー」

彼女はスツールの上で両手を振り上げ、「がおー」と吼えてみる。が、すぐにバランスを崩して落ちかけた。

「おっ、とと」

「ごめん。今のでけっこう台無しかも」

「だよねえ」

正直なところ、キョーコは初対面から萃香の異質さに気づいていたような気がする。

「ところであの双子なら無事だよ。なかなかいい戦いしてた」

萃香は、そこで戦いが繰り広げられているように、自分の背後の闇を親指で指した。

「けど、正直時間の問題」

キョーコが進み出る。

「今からわたしに何かできる？」

「おんや。あんたに何かできるとしても？」

面白そうに萃香は目を細める。



「できるかどうかはわからない。でも、やるんだ」

「キョーコ一人でアレ倒すのは無理だろうねー」

勢いをつけ一周、スツールに座った萃香は回る。

「一緒に逃げる。コレもつと無理。どっちかっていうとキョーコの方が足手まといだし」

もう一周回った萃香はずいといと身を乗り出した。

「どうしよっか?」

赤い瞳がくるくる回る。それが映すキョーコの葛藤を。キョーコの苦悩を楽しむように。

「戦う」

しかし、答えなんて元から用意していた。

「戦って戦って、戦って戦う」

酸欠水槽に閉じ込められた金魚のように、萃香も勇儀も口をぱくぱくさせていた。

「勝てなくていい。できるだけ長く時間を稼げば、それだけ二人は遠くまで逃げられるよね?」

何も間違ったことは言っていないと思うのだが、そうではないらしい。

「大丈夫。こんなんでも陸上やってたし。今はわりかしポンコツだけだよ」

言葉を重ねれば重ねるほど、萃香の表情は奇妙に引きつっていくのだ。だから何か見落としているなど考えて、キョーコは手を打った。

「あ、でも問題は二人のところに行く方法だよね」

小難しい顔でキョーコがこめかみをぐりぐりやり始めると、がらんとした店内に萃香の大笑いが反響した。ごんごんとカウンターに額を打ち付けるが、笑いの発作は止まらない。

「時間稼ぎ? 人間のあんたが?」

萃香は笑いつばなした。しかし、ふとその表情が消える。

「死ぬよ、あんた」

「うん。もちろん分かってる。だから出来るだけ死なないように頑張る」

そこで天井を仰ぐと、改めて萃香は大声で笑い始めた。ガラスがビリビリ鳴った。外を影鬼が徘徊していたら、一発で気づかれていただろう。

「おかしいかな」

「おかしいねえ。でも愉快だ」

こんな人間がまだいたのかとごちて、萃香は最後に残った笑いの衝動を酒で流し込んだ。

「じゃあ、いいよ。あたしが足を用意してやるよ」

「いいの？」

「ああ。久しぶりに笑わせてもらったお返しにね」

腹を抱えてよろよろ歩いていくと、萃香は備え付けの公衆電話の前に立った。今や懐かしい、ピンク地に白のラインが目立つすすけた電話機だった。

「これ、使える?」

キョーコが頷くと、萃香はしばらくこぶしを握っては開き、握っては開きを繰り返し始めた。

「じゃーん」

そうしていると数秒後、こつねんと彼女の掌に十円玉が現れた。

「それ、どこから?」

「ん。誰かのポケットから。すごいっしょ」

それを聞いてキョーコの表情が変わった。萃香はやれやれと首を引っ込める。

「あーもー。緊急だし。人命かかってるし、仕方ないよな?」

「終わったらちゃんとして返してあげてね」

「……徹底してるのね」

空っぽの電話に十円玉が転がり込む空しい音の後、ダイヤルした萃香が壁にもたれて応答を待つ。と、ここまで完全に背景扱いだった勇儀の脳みそがようやく再起動した。

「あんたが行っても無駄死にするだけだ」

「そうかもしれない」

記憶を失った勇儀にどうして腹が立って仕方なかったのか、キョー

コはようやく理解した。

「昨日今日会っただけの連中に必死になれるのだって。正直、理解できないよ」

困り人を見捨てず、決して涙は流さず、怒りを鎮めて、尚勇敢に戦う。

「名前も知らないわたしを助けてくれた人がいるんです」

鬼にその三原則をはめ込むのはおかしいことなのだと分かっている。だが、彼女は間違いなくよいこだった。

「わたしの夢のために、勝ち目の無い戦いに身を投げてくれた人がいたんだ」

燦然と輝く星のような女性は。星熊勇儀は。あの暗黒の中で確かに光明を見せてくれたのだ。

「それがあなた。星熊、勇儀」

だから、今の勇儀が許せなくなったのだろう。

「あなたがやらないなら。あなたができないなら、今度はわたしが戦う。だから、ゆつくり休んでて」

殺してやりたい。

過去の自分とやらに、勇儀は殺意を抱いた。

檻褻のような体で目覚めて、押し付けられたのは勝手な偉業。そして、その偉業が今一人の少女に命を投げ打たせようとしている。

「すぐ来るってさ。キョーコの名前出したら一発だったよ」

タイミングを計ったように萃香が受話器を置く。

「じゃあね、『ゆーぎ』」

二人の会話もこれで終わりだ。ローファーをきゅつと鳴らして、キョーコは踵を返す。

「おかしいよ」

彼女達の後ろ姿を見送る勇儀の口について出た言葉に、萃香は足を止めた。

「今のあなたにはそう見えるかい？」

ドアの隙間に消えていく萃香の眼差しには何の感情もなかった。ただ庭に投げ込まれた小石を見るように一瞥して、ふい、と顔を背け

た。軽蔑すらしていなかった。

「あたしは……だって、仕方ない、だろ……ッ！」

言葉にならないが、胸が痛い。勇儀はシャツの胸元が千切れんばかりに握り締めることしかできなかった。



土砂降りの雨音と萃香の鼻歌。そこにエンジン音が混じるまで数分も待つ必要はなかった。

「風間さん、カギ持ってたんですか」

「ん」

『脱兎珈琲』の横の路地からスバルの軽トラックがめりめりとタイヤでアスファルトを食んで出てくると、運転席に収まった風間を前にキョーコは目を丸くした。

「まあ、いろいろあるんだよ。乗んな」

「そうだ。スバルちゃん、見てませんか」

「いや。一緒にいると思ったんだが」

「そうですか……」

風間がキョーコの肩に手を置いた。彼女も頷きで返す。あの強かな親友なら上手く逃げおせていると、今は信じるしかない。

「私は後ろ。あんたもコツチ」

強引にキョーコを荷台に引っぱり上げて、萃香は運転席側のワインドローを叩いた。

「出していいよん」

「どつち」

「え？」

「だからどこに向かえばいいんだよ。おっちゃん何も聞いてねえぞ」

あー。と言っただけからしばらく膨らみのいい丸い顎をさすって、萃香はパチンと指を鳴らした。

「双子のいるところ！」

「いや、双子で知らんし」

「萃香ちゃん、途中で見たって言ってたけど」

「確かにそうなんだけどさあ。あいつら移動しながら戦ってたから」

「つつかえねーチビだなお前」

ふうふう文句を垂れる萃香を無視して風間はダツシユボードを漁る。悠長すぎるやり取りに、キョーコは気が気でない。風間は気配でそれを察したようだった。

「落ち着け。焦る気持ちには分かるが」

見透かされた恥ずかしさでキョーコが俯いていると、風間がやってきて荷台にくしゃくしゃの紙を広げた。クセがついて丸まってしまいうカドを萃香に踏ませて留めると、それがようやく色あせたK市の地図であることが分かった。

「今このへん。で、最後に双子ちゃんと別れたのがここだよな。大通りの、坂道のあたり」

脱兎珈琲の近所から指を滑らせて、風間は無精ひげをぼりぼり搔いた。

「きったね」

すかさず萃香がせせら笑った。

「うるせ。で、ケツまくって逃げに徹するならここだ。ここ。電鉄のレール沿いに坂を登って、G町を真っ直ぐ抜けるルート。ゴールはT女学院の近所だな。あそこらへんは特に空き家が多い」

「ずいぶん自信満々じゃん。根拠は？」

「あ？」

「だからさ。ほら、身を隠すならこの道とか、ここらへんとかでもよさそうじゃん。必死に逃げてんならどこに転がり込むか分からないじゃん。そんな決め付けちゃつていいワケ？」

ただ水を差そうというわけではないのだろう。萃香の言葉にも一理あった。

「私さ、双子のとこまで確実に届けてやるってキョーコと約束しちゃったんだよね」

「俺が運転するのに？」

「あんたが運転するのに」

とはいえなんだか会話に混ぜて邪魔をしたくないので、キョーコはとりあえず、うずうずしながら待つことにする。

「まず、町のこつち側はダメだろう。ここに来る途中で見たけど、なんだか煙みたいな化け物がうじゃうじゃしてやがるし」

駅方面を隠すように、風間は地図を真つ二つに折る。

そうすると巨大な大極図を描くような形をしたK市の半分がなくなり、風間の言わんとすることも何となく伝わってきた。

「川か」

萃香が瓢箪を傾けた。K市は大まかに見れば大極一―二つの勾玉をあわせたような巨大な円を象っている。どちらが陰でどちらが陽かはさておき、A川という大きく蛇行して流れる大河が市を二つに分けていた。

「ん。G町を抜ければデカイ橋が近い。ほかにも何箇所か橋は架かっているが、どれもT女を目指すなら遠回りだ」

「駅側からはあの影鬼連中が追い立ててくれる」

「そゆこと。おっさんが本気でその、双子ちゃん？ を捕まえようって思うなら、上手くボコしながらG町に追い込んで」とんとん、と風間の日焼けした指が橋を叩く「逃げ場のないここに追い込んでケリをつけるね。どんなガキかは知らんが、あの川に飛び込もうなんてバカは考えないだろ。おまけに今はこの雨のせいで大荒れだ」

「で、あいつらが捕まる前に助けると」

「そゆこと」

大雨でぐしゃぐしゃになった地図を近くのポリバケツに放り込んで、風間は肩をすくめた。

「ま。目星はあくまで俺の経験論だけどさ」

「キョーコ、どうする。決めるのはあんただよ」

考え込むまでもなかった。

今のキョーコには風間の予測が正しいという確信があった。

「お願いします」

力強く頷いたキョーコを見て、風間がぱん、と手を打った。

「よし。じゃあ急ごう」

「なんか、風間さん、驚かないんですね」

「んー？」

不意にキョーコが投げかけた問いに、風間はやはり、あごを擦りながら答えた。

「そうだな。おっちゃんくらいの歳になると分かるもんさ」

それで済ませるあたり大物なのか、それとも大雑把なだけなのか、キョーコには分からない。

運転席に戻った風間がギアを入れて車体が揺れて、少しずつスピードを上げる間。キョーコは決然とした表情で膝を抱えて荷台に座る。それを尻目に、こここそと運転席を覗き込んで、萃香が風間に問うた。「ところで風間、経験論って、あんた」

「聞くな」



「おおおおおッ!!」

大したものだ。初っ端からクライマックスだ。

「風間さん、これスバルちゃん的車じゃ」

「後で謝りやいいんだろ、後で!!」

ぼぎよお、とイイ音を立てて二、三匹ほど影鬼が跳ね飛んだ。

軽トラのワイパーは全力で作動している。土砂降りの雨を払いのけ、押しつぶした影鬼たちの体液を洗い流すために。

「曲がるぞ。曲がるぞおおお!!」

落ち着けと言った舌の根が乾かぬうちにコレである。風間という狂った頭脳を積んだ荒ぶる軽トラックは風間同様さわがしくドリフトしながら交差点に入り込み、さらに数体の影鬼をなぎ倒した。

「うわあ」

どつ、と音を立てて運転席の天井からバウンドしてきた影鬼の頭がキョーコの足の間でもう一度跳ねて、彼女のブラウスに黒い体液をぶちまけた。

もう一度バウンドして後方へ飛んだそれが、のろのろ追いつがる影鬼たちをボウリングのピンのようにぶっ倒し、生首はトマトのように爆ぜる。

「おい風間！ コレ、本当に大丈夫か！ 本当に大丈夫なんだよな!?!」

「どちやくそ急げつつったのはそっちだろうが!」

もはや真つ黒に染まった軽トラが坂道をよじ登る。放置された山車をひっくり返し、屋台の残骸を乗り越えていく。小柄と言えども四駆のパワーは侮れない。

「そつちこそ大丈夫なんだろうな」

風間がバックミラー越しに萃香を睨んだ。

「キョーコちゃんにケガさせてみる。俺はお前を許さん」

「あたしはキョーコを連れてくだけ。その後はこの子次第」

風間の気持ちはありがたい。だが、こうなることを望んだのはキョーコ自身なのだ。彼を安心させるように、努めて明るく、彼女は口を開いた。

「わたしなら、平気ですよ」

「こつちが平気じゃねえんだよ」

風間の苛立ちを代弁するようにエンジンが獣じみて唸る。地面を這っていた影鬼をぐちゃぐちゃに踏み潰した衝撃で、荷台に乗る二人は軽く跳ねた。

「おつちゃんもミヨつちゃんも、キョーコちゃんが大事なんだ」

「ねえねえ。私が冷血みたいに言うのは勝手さ。でも私だってキョー

コは大好きだよ」

「だけど背中押してんのはお前だ」

「好きだから邪魔立てなんてしたくないの」

「クソ」風間がハンドルを叩いた。「ワケわかんなくなってきたぞ」

その様子を笑って見ていた萃香だったが、やがて血相を変えて叫んだ。

「風間、前！」

「あ？ーあーあ!？」

坂を登りきった瞬間だった。

突如として雑居ビルの壁が爆発し、瓦礫の山が目前の交差点に降り注いだ。

「あんなの聞いてないぞ、おい」

もうもう立ち込める砂埃の中、赤い光の帯が鎌首をもたげた。

焼けた鉄を身につけた百足。異変の始まりに現れた頃から大分虫



らしく様変わりしていたが、地獄じみて赤黒く光る身体を見間違うはずもない。

あまりにもー大きすぎる！

「歳の功だろ、風間！」

萃香の声が飛ぶ。我に返ってハンドルを切る風間。瓦礫に押し付けられた車体が激しく火花を散らす。それでも巨体との接触は免れない。このままでは踏み潰される。

「ちったあ役に立て、チビ！」

風間が叫んだ。

「ーいいとも」

萃香を包む雰囲気、変わった。

「よつく見とくんだよキョーコ」

少女の両腕を拘束する鎖が、じやらりと音を立てた。鉄球の重しを野球ボールのように彼女が振りかぶった時、ムカデとトラックとの距離は十メートルを切っている。

「これから披露するのは究極の密度ってやつだ」

「みつ、ど？」

返事は奇妙な音だった。

大砲の弾のような鉄球が萃香の掌の中で白熱し、完璧なフォームで解き放たれた瞬間。ムチ打つような音がキョーコの鼓膜を強烈にノックした。それは空気が碎ける音。音速の壁を引き裂いた者が聞く音だ。

音速の剛球を迎え撃つ百足の顔面は焼け爛れた金属板で幾重にも補強されているーが。

「はははははッ！ 無駄無駄無駄あ!!」

鉄球は顔面を陥没させるように叩き潰し、他愛無く百足の背側へ貫通する。

夜叉のように牙を剥いて笑う萃香の前で百足はどどと倒れ、長大な身体が激しくのたうった。

「風間あー！」

「よっしやー！」

そこに生じた僅かな隙間めがけて軽トラックが滑り込む。

間一髪、トラックは落ちる胴体の下から脱出し、揺れる地面を蛇行した。

「どうだい。コレが本物の鬼の力だ」

鉄球を引き戻し、萃香は腰に手を当て胸を張る。

ぽかんと口を開きっぱなしで座り込んだキョーコの目に、その姿は仁王像のごとく大きく、雄大に映った。

「かっこいいって言え」

だが、中身はそうもいかなかったらしい。

「え。かっこいい……?」

「違う違う! もっと自然な感じでかっこいいって言って!」

「か、かっこいい……デス」

「えへへん。なんかムズ痒い」

とにかくピンチは凌げた。

後方でとぐろをまいて倒れこんだ鉄百足はピクリともしない。生きていいのか死んでいるのか。そもそも、鉄の塊にそんな概念が存在するのかはさておき、すぐに追ってくる様子は無い。

「あのさ」

キョーコが胸をなでおろした直後、風間が口を開いた。

「さつきバンって音しなかった? 気のせいか」

前言撤回かもしれない。

「頼むから気のせいだって言ってくれ」

やけに蛇行するようになったトラックの荷台を、萃香はてくてく歩いていって車体の下を覗き込んだ。

「かぎまー」

気の抜けた萃香の呼びかけに返事が来るまでしばらく時間がかった。

「……ああ」

「なんかね、車輪壊れた」

「……………ゴムんどこ?」

「うん。ズル剥け」

間。

キョーコが萃香の隣から顔を出す。剥きだしのホイールが虚しく回っている。

静かな間。

「風間さん、タイヤなくなっちゃいました」

「だあああクソおツ!!」

ようやく自らの異変を思い出したようにトラックがバランスを崩し、風間が鋭くハンドルを切る。瞬間にホイールが火を噴いた。

「おおお、すげー!」

激しく吹き上がる火花に萃香がのんきな感心をしている間にトラックは標識をへし折り、街路樹をなぎ倒しながら暴走する。

「あの化け物にやられちまったか」

熱で融けたタイヤの残りかすが吹き飛び、トラックの挙動はますます荒ぶりだす。荷台に至っては暴れ馬の背の如しだ。

「風間あ、これ結構マズいよねえ?」

振り落とされかけたキョーコを抱きとめた萃香が声を張ると、乾いた笑いととも風間が返してきた。

「言いたかないが、そうだな。こいつはもう長くは保たねえ」

「ふん。橋までは?」

「無理」

きつぱりと彼が言い切った瞬間、ざあっと視界が開けた。

G町を抜ければ今度は下り坂が待っている。橋は目と鼻の先。とはいえ虫の息のトラックではそこまで辿り着く前にお陀仏だ。

開けた視界の先には遊歩道があり、その更に先にA川がある。バケツをひっくり返したような雨のなか、荒れ狂う流れがどうどうと唸る音がキョーコの耳まで届いてきていた。

「見えるかい」

萃香に囁かれて、キョーコは、はっとした。

星の無い夜空の下。A川の真っ黒な水面に映る煌々とした輝きに。

「おっさんの見立ては正しかったみたいだね」

見えた。人間であるキョーコの目にも、豪雨の中にはつきりとそれ

は見えた。

橋は燃え盛っていた。対岸に至る道には乗り捨てられた車が積み重ねられ、天をも焦がすような業火を吹き上げている。炎の中に出口を求めて小柄な影が駆け回る。だが銀の輝きがそれを阻んで通さない。

「いた」

「風間、全力で坂道を突っ切れ」

「橋までまだまだあるんだぞ。あの流れに突っ込めば、俺達粉々だぜ」  
「私は粉々になるの得意だから。大丈夫」

冗談か本気かわからないことを言い放って彼女は橋を睨んだ。

「とにかく飛べよ。その後は私が何とかする」

軽トラがゆっくりと坂道を滑り降り始めた。風間はひたすらに前を見ている。エンジンが怪物のように吼え、キョーコは荷台のへりを掴んだ手に力をこめた。

「ずいぶん思い切りよくなったじゃないか」

「そうだろうよ」

スカスカと情け無い押し応えのブレーキから足を離して、風間はアクセルに踏み代える。タイヤはバースト。ステアリングはお飾り、ブレーキオイルは流れ尽くし、もはやこの車でマトモに動くのはたった一つだけ。

「たまにはエンジン全開で走ってみるのも悪くないさ」

この状況で「ブレーキ利かないんだもん」はカッコが悪すぎる。

腹をくくった風間がアクセルを踏み潰す。660ccの怪物が最後の疾走を開始する。影鬼の軍団がつきつきと爆ぜて消える。そして。

燃える橋が、漆黒の大河が近づく。

フェンスを破る衝撃。

放物線を描く軽トラック。

ぐるぐる回る天地と赤い境界線

やっぱり泣き言を吐く風間。

萃香の笑い声。

「ぎ。私たちはここまでだ」

トラックの高さが限界に達したときだった。小さく、しかし力強い手がキョーコの襟首を掴んだ。

「行って、見せ付けてきなよ」

萃香はピッチングの天才だった。

正確に炎の嵐吹き荒れる橋めがけて投げ込まれたキョーコが意識を失う前に見たものは赤い残光と、派手に水柱を立てて沈んでいくトラックの姿だった。



息が出来ない。

全身の激痛は芝刈り機に放り込まれたようだったし、内臓で福笑いをされたように腹の中がぐるぐるしていて落ち着かない。

「はっーはあ、げっ、ほ」

酸素だ。酸素。

身体の要求に応えるためにキョーコは深呼吸を繰り返す。

永遠とも数分ともつかない間、彼女はそれを続けた。頭がぼやける。直前まで何をしようとしていたのか、思い出せない。

「ガアア」

が、大狗の猛りにキョーコの意識は完全に覚醒した。

「マヤちゃん、こっちー!」「っ、はい!」

キョーコが折り重なった廃車の陰に身をねじ込むと、信じられない速さで二つの影が頭上を飛び越えていった。続いて大狗が。幸いにも彼女が見つかることは無かった。

「血が」

あたりに飛び散ったガラスに紛れて、赤いしずくが点々と落ちていく。

横転した大型トレーラーの下までそれは続いており、大狗が今まさにその隙間をこじ開けようとしている。

「助けなきや」

目に留まったのは、どこかのトランクから転げ落ちたボールだった。

手になじみ、そこそこ重く、一端はくぎ抜きのためには爪状になっている。見るからに威力抜群だ。怪物相手には心細いことこの上ないが、双子が逃げる時間くらいなら稼げるかもしれない。

「よし」

チャンスは一回こつきりだ。

近くのドアミラーをボールで引き寄せて大狗の居所を探る。幸いにもアレは双子を追い詰めることに夢中で、キョーコに気づいた様子はない。無防備な後頭部は完全にこちらに向けられていた。

(行け、わたし)

物音を立てないように、細心の注意を払って物陰を出たキョーコは、一歩一歩と大狗に距離を詰めながらボールを振りかぶる。

「るるるるるる」

双子の逃げ込んだトラックの下に顔面を突っ込む度、隙間は確実に広がっていく。

もつと早く。でももつと近づかなきゃ。焦りに駆られつつ、キョーコは必中の距離を指す。あと数歩。

ぱきり。

キョーコの足元でガラスが砕けた。

大狗が動きを止める。興奮と緊張が爆発して、鼻の奥がツンとした。

「こーこのおッ!!」

破れかぶれで振ったボールが、奇跡的に大狗の眉間を強打した。が、しかし。奇跡はそれ以上の奇跡でもって応報されることになる。

「う、わっ」

キョーコの体は人形のように宙を舞った。

そして衝突。橋の支柱に背中を打ち砕かれたキョーコは車のボンネットでバウンドし、ガラスの破片にまみれた路上に力なく転がった。

「ぐる、る」

大狗が目を細める。

「痛い……」

何をされたのか、まったく分からなかった。

ガラスのカーペットの上に血が滴る。誰のものかは言うまでもない。ただ、全身が痛すぎて、どこから出てきたものかは定かではないが。

「お姉さんー」「お姉さまー」

「げほっ。やあ、無事みたいでよかつー」

銀の光が走る。

「たあッー」

遺伝子に染み付いた動きがキョーコの体を突き動かした。本能で後ろへ跳んだキョーコの目の前で、殺意に満ち溢れた牙が打ち鳴らされる。アスファルトの上で足をもつれさせながら、キョーコは何とか着地する。

「……オルガちゃん、マヤちゃん。お待ちせ」

なんとという虚勢だろうと、我ながら呆れた。

「キミたちを助けに来たよ」

不意打ちは失敗。体はぐしゃぐしゃ。

とつさに踏み切った左足の踏ん張りが利かない。解けかけた包帯の下で細胞がひとつひとつ千切れて死んでいくのが分かる。どんなに集中しようと、次はないということも。

「逃げてって言ったじゃないですか！」

「そんな体でどうするんだよ!!」

悲鳴に近い双子の叫びにキョーコは思わずほくそ笑んでいた。こんなザマで歓迎されるとは思っていなかったが、予想が当たるとなかなか心に痛い。

「ゴーガッーゲッ、あ、あーあー。よし」

大狗はゲッ、ゲッ、としばらく路面に唾を吐き散らしてから、声の調子を変えた。やはりただの化け物ではない。ただの化け物がどんなものかとはかくとして。影鬼なんかとは別格であるということだけは確かだった。

「あなた、ずいぶん私と縁がありますのね？」

角を持つ狗は鼻をひくつかせながら、ゆっくりとキョーコの周りを

歩いた。

「そうかもしれないね」

「何者ですの?」

キョーコは改めてバールを構える。その姿はとても無様で、とても見ちゃあいられない。それでももここに来た。それでももここに立っている。目の前の理不尽と戦うために。

「ただのーよいこだ」

その限界を超えろというのなら、覚悟はできている。

第五話『よいこの限界』 おわり



## 11 『憤怒（上）』

大狗が身体をくねらせた。

「冗談がお上手ですね」

笑っている。少女のソプラノで喋る巨大な獣は、牙をむき出しに、血生臭い息をキョーコへと吐きかけてきた。

「よいこは帰る時間でなくて？」

「ずっと迷子を探してた」

土ぼこりと煤にまみれて、双子はじつとキョーコたちのやり取りを見守っていた。

擦り傷やアザが痛々しいことこの上ないが、何よりキョーコの胸を締め付けたのはマヤの怪我だ。だらりと垂らした左腕の指先から滴り落ちる血が、火影の中でやけに鮮やかに映る。

「それが、この子たち？」

次に大狗が啞えたカタナを見る。

野太刀ほどの大きさのソレは、きさらぎ駅で勇儀を斬ったものとは別物だとすぐ分かった。確かに名工の作なのだろうが、なんとというか、胸を締め付けるような圧力に欠けている。

「奇遇なこと。わたくしもずっとずっと、ずーっと探していましたの」キョーコの沈黙を、大狗は肯定と取ったらしい。

分厚い雨雲を見上げた大狗の目が、ほんの僅かに細められた。雲の向こうにあるはずの月に焦がれているようにも、過去に思いを馳せているようにも見える。

「それでようやく会えた。感動の再会に水を差さないでくださいまし」

一瞬で周囲に漂っていた剣呑な空気が凝固した。

大狗が胴に巻きつけた鞆から刃を走らせる様がやけにスローモーションで再生される。

しゅありいいいいいいいいいん、と背筋を凍らせる音を聴いた瞬間キョーコの全細胞が警告を発した。

水に濡れたような刃先が抜き放たれた瞬間、凝固した空気と時間が

一気に爆発する。

大狗の姿が残像を残して消えた。

反射的にキョーコはボールを握り締め、首筋と顔面をかばうように構える。

「おわあっー！」

大砲が直撃したような重み。

骨を伝った衝撃が脳を揺らす。大きくよろめいて、キョーコはぺたりと地面にはいつくばった。近くの廃車の下へとボールが滑っていく。

「あらあら。つい力みすぎたかしら」

手元を見てキョーコは絶句した。

この場で最後の頼みの綱とも呼べる最終兵器、ボール。それは未だ彼女の手に握られていたのだ。ただし、大分短くなってはいたが。

「うそ」

あまりに綺麗過ぎる切断面を呆然と眺める。

激しさを増した雨に混じって、赤く、生ぬるいしずくが彼女の掌を濡らした。どこから？ 指の又で糸をひく血液を見ているうちに、激しい痛みが額に走った。

「ぐ」

さっきの一閃。刃先はキョーコの額に触れていた。

「あら。あらあらあら。もつとよく見せて」

大狗はへたり込んだキョーコの頭に前足を乗せ、顔を覗き込む。

「たいへん。綺麗なお顔が台無し」

人間では及びもつかない速度での攻撃だった。キョーコは奇跡的に防御できたのではない。力の差を教えてやるために。恐怖と絶望にまみれる顔を見たいがために。防御させられたのだ。

「オルガちゃん、お姉さまはきつと」

マヤと繋いだ手に力をこめて、オルガは唇を噛んだ。

よいこのキョーコが武器を取り、あまつさえ戦いにきたのは勝つためではない。

「わかってる。でも、でも、ボクはイヤだ」

「でも、このままじゃお姉さまの頑張りが無駄にー」

どしやあ、と激しい音に二人は縮み上がった。

「さて。空気の読めないお子様には退場頂きました」

破片まみれで剣山のようになった地面に、キョーコは顔面から叩きつけられて倒れていた。「寝てろ」耳元で囁いて、大狗はその頭から足をどかす。

「あなた、お姉さまを……!」

「殺してはいなくなつてよ。まあ、明日からはお化粧に少し難儀するかもしれませんが」

ひたり。ひたり。

大狗が巨体をゆすつて近づいてくる。双子の前までやってくると、座つた。三メートル近い怪物が「おすわり」の姿勢で座り込んだのだ。当然、愛嬌なんて微塵もない。

「時にわたくし、らいふわーくの一環で鬼を斬ってますの」

愛嬌を振りまく気なんでもとからないのだろうか。

「ライフワークって」

「鬼とは古来から力で優劣を決めるモノでしてよ」

「少なくとも私たちはそうではありません」

「ボクたちの負けでいいよ。興味ないし」

くふふ、と笑つて大狗はカタナの柄を咥え直した。

「残念ですがそうもいきませんの。わたくしは空前絶後最強の鬼であることを証明したい」

「ご大層な夢ですね」

「それでもありませんわ。遭つた鬼を片っ端から斬っていけば、いつかは最強になれるますもの」

「ああ、話すだけ話して交渉の余地ナシつてタイプの人？」

「そうですわね」

大狗は雨粒を振り払って刃を構える。銀の輝きをもつ毛皮の内側でめきめきと隆起していく筋肉が、双子にとって最後の一撃が近いことを物語っていた。

「さて。このまま斬つても詰まりませんわ。どうぞ勇敢かつ正々堂々

と立ち向かってくださいまし。それでこそわたくしの無敵神話に華が咲くというもの」

あまりにも身勝手な神話にページが増える寸前だった。丸く見開かれた双子の視線がカタナからその背後へと移ったのを不審に思った大狗が振り向いた瞬間だった。

「ゲ」

「捕まえたぞ!!」

金属の鎖ががちりと大狗の首根っこに食いついた。

「二人とも、逃げて!」

「お前、そのまま倒れていればいいものを!」

不屈とはまさにこのことか。瓦礫の山からキョーコが引きずり出してきたものはバイクのエンジン駆動用のチェーンだった。黒い油が大狗の毛皮を染める。

例の不可思議な『自動反撃』がキョーコを跳ね飛ばす気配は無い。瞬発的な攻撃に強い反面、こういうった緩慢な締め付けに対しては効果を十分に発揮できないのかもしれない。

「くああ、この、人間、風情、め!!」

大狗は口の端から泡を吐き、のた打ち回ってキョーコを振り落とそうとする。金属のチェーンはオオカミの首筋も、キョーコの掌もずたずたに切り裂いた。それでもキョーコは離れない。幾度巨体の下敷きにされようとも、体中に破片を埋め込まれようとも。

「行って——行け!!」

キョーコの叫びに双子は雷に打たれたように飛び上がった。

「早く!」

まるでそれがあらかじめ決められた合図であったかのように、双子は同時に走り出した。

「愚物がああ!!」

カタナを噛みしめ、大狗は宙に飛び上がった。

ぐるぐると独楽のように回転しつつ、トラスを形作る鉄骨を細切れにしていく。トドメに足場を大きく切り裂いて、大狗は落下の勢いを利用してキョーコごとアスファルトに自らを叩き付けた。支えを

失った橋は大きく傾き、鋭く切断された鉄塊が二者の上に容赦なく降り注ぐ。

「逃がさない。逃がすわけには、いかない」

さすがにキョーコの手が離れたのを感じた。大狗でさえ無事ではない。

よろりと立ち上がった大狗の視線の先、十数メートル離れたところにT女学院方面へと駆けていく双子の背が見える。オルガが傷のせいで何度も倒れかけるマヤを気遣って、二人の足は遅い。

「これ以上、無様は晒せない」

毛皮の中から大狗が抜き取ったものがある。脇差だろう。

もちろん大狗が使うことを想定して、通常の太刀ほどの大きさに拵えられた代物であった。慎重に狙いをつける。一石二鳥とは行かないまでも、手負いの鬼だけは息の根を止めなければ。

「マヤ、掴んで。痛むだろうケド、頑張れ」

「は、はい」

横転したトラックの荷台に飛び乗ったオルガがマヤに手を差し伸べる。

大狗からは背中がガラ空きだ。絶好のチャンスを逃すわけにはいかない。片目は獲物に留めたまま、弓の弦を引くように身体を引き絞っていく。

（――今）

何度も足を滑らせながらマヤがトラックの上に乗らせた瞬間に大狗は自然とほくそ笑んだ。これから放つ一撃は絶対に当たるという確信があった。会心の一撃を邪魔するような何かが起きない限りは、確実に、

「どりゃあああッ!!」

気合一発。

コンクリートの破片からところどころ鉄骨が突き出した、凶悪すぎるヴィジュアルのハンマーが大狗の顔面で炸裂した。

人間風情、渾身の一撃。

大狗の顎が歪んだ。牙が折れ、口の中を散弾のように跳ね回り、頬

を突き破った。そして何より、

(アレが来ない?)

意外すぎる結果にキョーコは驚愕を隠せない。

すんなりと彼女の一撃を打ち込まれた大狗は、明らかに傷つき、血を流している。苦悶に顔を歪めることまでしている。

「貴様——あ!!」

そこで動きを止めたのが運の尽きだった。

「あっ」

今、なんて言おうとしたんだろう。

「あ」いた、で済む痛みじゃなかった。「あ」んまりだ、と嘆くにはこっちもやり過ぎていた。とはいえ「あ」やまります、なんて死んでも言う気はなかったし、「あ」あコレが人生かと言えるほど達観していない。

(わたし、なにを言おうとしたのかな)

なんてどうでもいいことを考えながら、キョーコは倒れた。

今度ばかりは立てそうに無い。キョーコの右胸からは脇差の刃先が飛び出ている。弱弱い脈動に合わせて、じわりじわりとブラウスに血が滲んだ。

「貴方、中々に忌々しい小娘でしたわね」

乱暴に脇差を引き抜いて、大狗は血の塊を吐き捨てた。

顔面の傷は既に治り始めている。キョーコは血みどろで放り出されたままだ。それが、両者の圧倒的な違いを物語っていた。

「いつから貴方達人間は、わたくしたちへの敬意を失ってしまったのでしょうかね」

大狗は踵を返し、ゆっくりと歩み始めた。

(まだだ)

まだ、あの双子は距離を稼ぎきれていない。

(まだ)

しかし身体に力は入らず、言葉の代わりに血反吐が迸った。

(ああ、終わっちゃう)

10メートル。大狗が再び銀の光を帯びていく。

『この線からあの線。これが、私たちの世界なんだ』

20メートル。雨の中で静けさに包まれる。

『50メートル。私にとっては4秒。キョーコちゃんにとっては6秒あるかないか。この速度を変えることはできない。それがこの世界のルールだから』

30メートル。寒さを感じる。大雨で、火はほとんど消えていた。

『それができるのだとすれば、それを可能とできるのなら』

40メートル。

『それは、とんでもない業だ』

50メートル。

そう。50メートル。絶対的な距離。キョーコの前に立ちほだかる、暴力的なまでに残酷な世界のルール。

だが止まらない。

こんなところでへばっていたら、彼女に追いつくことなんてできないんだ。

◆◆

「熱い」

の「あ」だったかは定かでないが。

キョーコの身体は熱を取り戻していた。

「熱いんだ」

それは、よいこには絶対あつてはいけない怒りだ。

雷雲のようにどす黒く煮えたぎる、憤怒の焦熱だ。

「まだ終わってない」

頭の中で憤怒の爆弾が弾ける。キョーコの体が動く。

「わたしね、夢があつたんだ」

豪雨の中、おまけに背後50メートル。それでも耳元で囁かれたように明瞭に、キョーコの声が大狗には聞こえた。背筋の産毛をカミソリで剃られるような錯覚に、大狗は総毛立った。

「ツー」

だから、反射的に全力で斬った。

大狗の振るう野太刀が地を擦り、爆風を吹き上げる。火炎と瓦礫に

よる破壊の波は一瞬で橋全体を舐めまわし、キョーコの身体を完全に粉砕する。

「——色々あって。諦めかけてたんだけど。とにかく、きつとあの双子ちゃんにも夢があった。と、思うんだ」

粉砕、したはずだった。

爆風が駆け抜けた橋の上は業火が盛っていた。キョーコの姿は見えない。声だけが聞こえる。頭蓋骨の中で囁かれるような声が。

「あなた、一体」

勇儀の夢は何だったのだろうか？

ふむ、とキョーコは考えて、それが忘却の彼方に消え去ってしまったことを心底惜しく思う。

「わたしの夢を命がけで支えてくれた人がいる。いや人っていうか鬼だけどき」

ごうごうと渦巻く炎の中で黒煙が形を成していく。いや、それは煙ではない。雲だ。あまりに希薄で、あまりに胡乱であったが、それは間違いなくキョーコだった。

影鬼のような姿となって顕現した『キョーコ』は青い光をちらつかせながら滔々と語り続ける。

「わたしの夢を宝物のように大事にしてくれた。わたしよりも、わたしの夢に全力だった。だから、今はわたしもあの子達の夢に全力になろうと思う」

大狗が唸り声を上げた。もはや相手はただの人間ではない。

「わたしは怒ったぞ」

雲に覆われた頭。キョーコの額に灯った青い電光が天高くゆつくりと伸びていく。

「絶対にあきらめたくない。いや、してやらない」

『キョーコ』は天を仰いだ。

「来い、わんころ。わたしはもう、お前からも夢からも逃げたりはしない」

天と共にキョーコが吼えた。

雲間から姿を現した光がキョーコを喰らう。引き裂かれた身体を



更に引き裂き、最小単位に分解する。粘土をこねるように完全にイチから鳴無響子を創りなおす。天を操る力を。音を超える俊足を。それらの力に恥じぬ雄々しき二本の角を。

「わたしは」

折られても、潰されても、焼かれても、どんなにぼろぼろにされても真っ直ぐに走り続ける。最期の瞬間まで闇に光を放つ。その姿は、嗚呼、その姿はまるで、

「わたしはカミナリ」

青白い光を放つカタナを抜き払い、最新最速の幻想は全身から激しく電光を迸らせた。



キョーコは手に宿る光を一瞥した。

間違いない。これが『普通じゃない』方のカタナだ。かつて勇儀を斬ったカタナと共にあるというのはなんとも皮肉だが、今はその重みが心強い。

「やはりあなたが」

カタナと、キョーコの姿が見えていたのはたった一瞬だった。

キョーコの周囲を包む空間が丸ごと『陥没』したように見えた直後、大狗の鼻先にキョーコの握る魔剣が触れていた。

「くっ」

そのまま背側を走り抜けるように通過。

痛みは無い。大狗の纏う月光が刃を反らした。だが、次もない。月の光が霧散していく。あの刃を受けたら終わりだ。

「本当、最後の最後でー大変なものを目覚めさせたかもしれませんわね」

『月光』の反射で空高く投げ出されたキョーコの姿を捉えて、大狗はカタナの鏢が鳴るのを感じた。間違いなくあれは強敵だ。しかし、この震えの正体が果たして喜びなのか恐れなのか、困ったことに分からない。

(あの光が消えた)

空中に幾何学的な光の筋を描きながら、キョーコは攻撃のタイミン

グを計る。

(今なら攻撃が通じる?)

「来なさい」

大狗がゆつくり太刀を収め、重心を低く沈める。一方空でも光の軌道が大きく変化する。さながら稲妻のごとく、一気にキョーコが距離を詰める!

「だからあなたは愚物なのです」

待ち構える大狗が抜いたのは野太刀ではなく、脇差の方だ。双子の命を絶つために振りかぶり、そして叶わなかった必殺の一撃を今放つ。さいわい橋の上は障害物だらけだ。音速の突撃だろうが、軌道が予想できればおそるに足らない。

「そ——何です——」

が、予想は裏切られた。音速での急旋回をキョーコはやつてのけたのだ。軌道を誤った脇差はダーツのように鉄骨の支柱に突き立った。

「——つて!」

気付けば瓦礫の間を難なく縫ったキョーコが、大きくカタナを振りかぶった姿で大狗の背後に現れるている。大狗はとっさに身体をひねり、野太刀を納めた鞘を盾のように突き出した。

ぼぎよ。

結果は鈍い音。

「が」

衝撃が脳天まで突き抜けた。大狗はごろごろ転がって、不自然な方向に首を曲げたまま、ぜいぜいと喘ぐ。気道が潰れているらしかつた。

何が起こった?

何が?

見えちやいけないものが見える。

自分の背中と、中の野太刀ごと破壊された鞘。

彼女の首は防御の衝撃で真後ろに折り曲げられていた。とはいえ致命傷ではない。キョーコの能力が不可思議な加速であれば、大狗の能力は理不尽なタフネスにある。時間をかけて再生すれば——

いや、それでは間に合わない。

「月が綺麗ですわね」

気付けば、雨雲は嘘のように消え去り、晴れ間に夜の星が覗いていた。

ソックスのつま先が露出するほど傷ついたローファーで大狗の前までやってきた人物の表情は首が回らないのと、月の逆行とで確かめようが無い。

ただ、影が。黒々とした宵闇に落ちる暗い影が握るカタナが、天頂を指していた。



刃を振りかぶり、落とす。

特に感慨は無かった。

顔に掛かった生温かいものの正体も、カタナを通して伝わってくる手ごたえも。何もかもがキョーコがよいこの限界を超えたことを告げていた。一夜の悪夢が醒めたということも。

「おいおい」

しかし。

「よいこが物騒なモノ振り回すなつての」

聞き慣れた声に堅く閉ざした目蓋を開いた瞬間、キョーコの頭から血の気が退いていった。

「どうして」

「ん。んー、心配だからさ。見にきた」

そこには大狗の死体が転がってなければいけなかったのだ。

「すいか、ちゃん……？」

「やつほ。おどろいた？」

右肩から胸の中ごろ辺りまで袈裟に切り込まれて、それでも萃香は血に染まった顔でにへにへと笑って見せる。

「嘘だ」

「いや、この通りここにいる」

「嘘だよ、こんなの」

「だから嘘じゃないつての」

ずるずると刃の上を滑って。萃香の身体がキョーコにもたれかかってくる。

女の子の匂いがした。お酒の臭みが少し漂ってきた。さらさらとした髪感触があった。ずっと抱きしめていたくなるようなぬくもりがあった。そしてそれらは、急速に失われつつあった。

「限界を超えるって、どうだった？」

「こんなの……違うよ………思ってたのと、ずっと、違う」

「そうかあ。もちよつと感動あつてもよかつただけどなあ」

キョーコが好ましく思う萃香のすべてがカタナを通してキョーコへ流れ込んでくる。土壇場でキョーコが取り出したカタナは魔剣なのだ。かつて勇儀が『ただのカタナじゃない』評したように。

「どうしたんだよコレ」

呆然とした言葉が背後から投げかけられた。

びしょびしょのドテラに、べったりと前髪をおでこに貼り付けた風間だった。四苦八苦の末に陸に上がった彼が目にしたものは、とてもじゃないが理解しがたい光景だった。

「なあキョーコちゃん、それに……なあ、何の冗談だよ」

「ごめん、なさい」

キョーコが崩れ落ちると、カタナは光の粒子となって霧散していった。

「誰が傷ついても構わない。覚悟してたんだろ？」

べったりと血に塗れた両手を見下ろす。

「ごめんなさい」

あの激憤にとりつかれていたのか。暴力に暴力で立ち向かうことを、いつから正しいと錯覚していたのか。これがよいこか。これがよいこの所業なのか。キョーコは自問する。自分の夢のために誰かを傷つける。大狗の振る舞いそのものではないか。

「なあ、おい」

萃香の手が、力なくキョーコの頬を張った。

「あんたまさか、後悔してないよね」  
「だって」

「だってじゃないよ小娘。私は嘘が嫌いなんだ。少なくとも嘘をつかれるのは嫌いだ」

助けを求めるように風間を見上げると、彼はあいまいな表情で頷いた。色々なことが起こりすぎて、まだ理解が追いついていない。そんな風だった。

「救急車、呼んだから」

「ごめんなさい」

「っ、クソ」

「風間。私あこんなんじゃないから安心しろって」

「そうじゃねえよ。ただ」

ただ、腹が立って仕方ないだけだと彼は言った。

「そうじゃないのか。よし、お前は平常運転だな」

キョーコは大丈夫だと言いつつ安らかに目を閉じていく萃香に不安を隠せない。風間は腹を立てたはいいが、どこに立てていいのかわからない。

「どうしてわたしに斬られたの?」

こういうときは寝かせちゃいけないと聞いた気がする。慌ててキョーコが問うと、そうだなあ、と言って萃香は傍らに横たわったままの大狗を見据えた。

「こいつとの勝負はついていた。んでキョーコちゃんに殺しは似合わないよなあって思ってたら、体が勝手に動いていたというか、なんとというか」

それじゃとんだ本末転倒だ。キョーコが嗚咽を堪えながら次の言葉を選んでいると、ようやく首を繋ぎ終わった大狗が立ち上がった。「せっかく私が助けてやったんだ。ここは退いとけよう」

萃香が素早く制した。

「わたくしは負けていません!!」

「負けだ。終わりだ。私も、あんたも。時代が変わるんだ。ここらでおとなしく幕を引いたらどうだい」

「わたくしはまだ戦えます。ですがその、それときたら」

血に染まった手を見つめていたキョーコが、うつろな目で大狗を見

上げる。

「たった一人斬っただけでその体たらく。どいつもこいつも滑稽すぎて笑えせんわね」

その言葉に、冷え固まりかけていた怒りが再沸騰しはじめた。

「やってやるよ」

ふらりと立ち上がったキョーコ。その指先から電光が迸り、鉤爪を形作る。

「やめとき、キョーコちゃん」

「おっちゃんもこいつに賛成だ」

風間と萃香の言葉は、まるで水の中で聞くように遠く不鮮明だ。

「できませんわよ」

「できるよ」

「よいこの誓いとやらにがんじがらめにされてる貴方では、一生、無理」

だが獣の口から吐き出される一言一句がキョーコの頭をぶん殴るようだった。

「お前が、その言葉を、口にするな」

視界が真っ赤に染まり、怒りと殺意のカクテルが腹の中でシエイクされていく。

「かぎ、ま。やめさせろ」

息も絶え絶えの萃香に言われるまま、風間は飛び出した。身体が勝手に反応しただけだ。何ができるのか分からない。そもそも彼の速さでは二人に追いつけない。

(頼むぜキョーコちゃん。よいこだろ!?)

ごう、と風が鳴った。

「あ?」

思わず天を振り仰いだ風間の上空を、大きな陰りが通り越していく。鳥ではない。飛行機でもない。スーパーマンでもない。スーパーなのはその大きさと速度で、それが橋の上に着地するまで、風間はあるぐりと口を開いて見ていることしかできなかった。

「ぐる、るう」

丸太のような豪腕が大狗の頭をわしづかみにしていた。

「離せ!!」

キョーコのカタナも腕ごと握りこまれ、ビクともしない。

「……またヘンなのが出てきやがったぞ」

腰を抜かしていることにも気付かず、風間が眩く。

全身を黒い鎧に覆われた何かだった。大狗と同等か、それ以上の威容を見せる鎧は金属製ではない。うっすら霜が降りていて、風間の顔に冷気が吹き付けてくる。そして、その兜にはやはりロー角が。

「そいつは、そいつだけはっ!!」

黒い鬼の頭。目に当たる部分に灯る青い光が激しく放電するキョーコを見据えた。

両者を拘束する黒鬼の両腕が霞んだのは、その直後だった。

「うおおおっ!!」

衝撃波に平手打ちを喰らって風間はごろごろと地面を転げた。

橋脚が悲鳴を上げる。度重なる破壊に、ついにこの橋は限界を迎えようとしていた。耳障りな音と共に大きく地面が傾き、瓦礫に押し流されるようにして萃香の身体が水中に没する。

「萃香……」

欄干に駆け寄る風間を尻目に、黒い鬼はぐったりとクレーターに横たわる二体の鬼を持ち上げ、無造作に放った。

「はあ?」

このイカれきった闖入者の行動の数々に、風間はそんな声をひねりだすことしかできなかつた。

まず大狗が水切りの石じみて水面を2、3度叩いてから水没する。続いて落ちたキョーコの身体が溜め込んだ莫大な電力が水面に放出され、泡ひとつ吹き上げることなく、彼女たちの姿は濁流の中へと消えていった。

「てめえ、えーと、何しやがる」

黒い鬼は何も言わない。ただじっと、風間を見つめ返すだけだ。

欄干から身を乗り出した風間がいくら水面に目を凝らしても、キョーコたちの姿は見えない。風間が立ち尽くしていると、足音が聞

こえてきた。異様に速い。こちらへまっすぐ向かってくる。

「風間、背中貸せ!!」

どっ。と、彼の背中を蹴って飛び上がったものがいた。隻眼の美女が、金髪を朝風に躍らせて。到底泳げる身体じゃないくせに無茶しやがってーと思う間に彼女の姿は眼下の濁流へと飲み込まれていった。

「ゆっぴー、お前……ああクソ、どいつも無茶ばっかしやがる!!」

背中に足跡のついたドテラを脱ぎ捨てて風間も川へと身を投じた。

二つ目の水柱があがった後も黒鬼はしばらく眼下の流れを見つめていたが、やがてのしのと足音を響かせて、どこかへ歩み去っていった。

「っぱあ!!」

暫くして水面が爆ぜた。

「クソ。持ちこたえろよ、萃香」

泥水を吐き出して、萃香を抱えた風間は岸边を目指した。ふと水面に視線を走らせる。しかし、彼だけだ。足もつかないような深い川で、助かったのは彼と萃香だけ。

「キョーコちゃん? ゆっぴー?」

いつになっても二人が浮かんでくることはなかった。



## 12 『憤怒（下）』

「ここ、サインして」

クレーンに吊られて、ひどく巨大でいびつなものが水中から顔を出した。

もしや海坊主ならぬ川坊主かと思いきやそれはひしやげた鉄の塊に川底の藻やゴミが絡み合ったモノである。かすかに残った白い塗装と黄色いナンバープレートが、かつてそれが軽トラックであったこと。そして、スバルの愛車であったことを物語っていた。

「うわマジかよ」

若い作業員の一人が車の惨殺体を目にして眩いた。

彼が現場責任者らしき男にヘルメットをぼこ、と殴られているのを眺めていると、朝一でスバルに電話してきた年かきの警官が口をへの字に曲げたまま言った。

「これはダメだよ、ええと」

「あづま。吾妻スバルです」

「ふーん。珍しい苗字なんだね」

「父がー遠方の出身だったらしいので」

らしい、と言ったのはスバルが物心付く前に父親が失踪したからだ。間もなくして病弱だったらしい母の魂も父を追って彷徨い出るように旅立ったので、二人の様相は親戚からの僅かな伝え聞きで知るところでしかない。

「吾妻さん。車、流されたからって放置はダメでしょ、放置は」

「……ええ。スミマセン」

「まあ高校生で免許取るのはエラいけど、ちやんとするところは、ちやんとしてね。詳しいことは後で又聞くから、それまで適当にしてて」

書類をバインダーごと突き返してやって、スバルはA川にかかる橋を見上げる。まるで怪物が踏み荒らしたような有様の橋では未だ何かが煙を噴いていて、消防隊の放水が虹をかけている。

水かさが増したままの川底には昨日の「異変」で落ちた車が山と沈んでいるはずで、スバルが授業中に呼び出されたのは単に運が悪かつ

たとしか思えない。なんだか愛車同様に吊るし上げられたようで癩だった。

「その制服、T女の学生さんスよね」

積み重なった苛立ちが顔に出ていたのだろう。スバルに睨まれて、先ほどの若い作業員は慌てたように否定した。

「あ、いや。ナンパとかじゃねっス」

「じゃあなんですか」

どんなにがんばっても、やはり言葉が刺々しくなる。

「あ、あー。昨日、ウチのツレも町行つてて。そんでこの洪水でしよう。まああいつ、ケロっとした顔で帰ってきたんですが。お互い、無事でよかったねって。そういう感じで」

じゃ、と。地雷原から撤退するように足早に去っていく彼を見るうち、どうしても説明できない違和感が疑問となつてスバルの口をついて出た。

「洪水なんてありましたっけ」

「俺ちよつと県外いつてたんで詳しいことはわかんないスけど。でも、誰も死ななくてよかったですね。あ」

車はご愁傷様でした、と彼は運ばれていく残骸に手を合わせて見せる。彼なりの配慮なのだろう。だがスバルの神経は先程からささくれ立つ一方だ。

「もういつペンブン殴られた方がいいんじゃないですか」

「え?」

「あ、いえ。お気遣い、ありがとうございます」

適当にあしらつて、スバルはケータイを取り出した。

何も変わりはない。キョーコへの発信回数が189回。返事は無い。この軽トラック惨殺事件の真犯人と思しき風間も、昨日の夜に「すまん」と題されたメールが来たきりだ。

「キョーコ」

狂おしいくらいに心配だった。

曰く「洪水」の最中にスバルはいた。装甲した百足電車が町を蹂躪し、人ならざるものの群れが人を狩って回る姿を見ている。現実が、

何かの力に捻じ曲げられている。

だがそんなこと今はどうでもいい。問題はキョーコだ。

「無事でいておくれよ」

190回目の電話をかける。彼女のカバンからは退部届の用紙が顔を出していた。



紅坂サキが陸上部の部室を最後に訪れたのは、キョーコが二年生の冬休みに偶々たまたま補習を受けた帰りだった。

「難しいなー」

数式の説明を求められてサキは眉を曇らせた。

「サキちゃんに分からない問題なんてあるんだね」

たった一人でT女学院を陸上の名門校にした怪人、紅坂サキは高次方程式がびつしり書かれた参考書を放り出して、首をひねった。

「んー、説明がねえ。ここをもにやっとすれば解けるんだけど。分からない？」

「わかんない」

「なんだろうなー。やっぱりキョーコちゃんのオツムに問題があるのかなー」

「む」

膨れる後輩を無視してぎしりとパイプイスを軋ませて伸びをする  
と、サキは窓の外に目を馳せた。

重たい雪の降りしきる日曜日のことだった。他の部活は早々に体育館へと引つ込み、場所取りに敗北した陸上部は休みだった。グラウンドは穢れ無き白の平野。部室にはサキとキョーコの二人きり。音  
とえば石油ストーブの響きだけ。

「ま。テスト失敗しても人生は続くよ。幸か不幸か、ね」

サキはパックの紅茶を一気に飲み干した。「はあ」と気の抜けた返  
事をして、キョーコは参考書のページをめくる。

どちらかが「そろそろ」と言えば崩れてしまうような、穏やかで何  
もない時間。キョーコは満ち足りていた。せんぱいもそう思っ  
てくればいいんだけど、と端正な横顔を盗み見る。

「ところで部長のイスには慣れた？」

「ひゃ」

「うん？」

まるでタイミングを計ったようにサキが口を開いたもので、思わずキョーコはソファから飛び上がった。いた。

「お。もしかして先輩の美貌に見とれちゃったりしちやつたり？」

こうしてちよつとでも隙を見せると盛り上がってくるからタチが悪い。ねえねえねえ、としつこくキョーコの視界に割り込んでくるサキを避けているうちに、いつも彼女のペースに飲み込まれてしまうのである。

「ぶぶぶ、ぶーす」

「あ。言っただな」

えい、とキョーコをソファに突き飛ばし、サキは馬乗りになる。えい、えいとじゃれ合ううちに、どちらが年上で、どちらが年下か分からなくなってきた。しまった。

「あーわかった。もうブスでいいよ。私の負けだよー」

お互いのプライドをかけたくすぐり合戦の末に、ひいひいと息を荒らげながらサキがキョーコから身体を離れた。

「それで？」

と思ったのも束の間、サキはソファにかけ直すとキョーコの肩に頭を預けた。

「三年が抜けても纏まってるかい、部長さん」

「それなりに楽しんでるよ、元部長さん」

とつてもいい後輩が入ったんです、とキョーコは微笑んだ。

「チヅルちゃんっていつって高校上がって陸上始めたコなんだけど。いやーもう、これが真面目で可愛くて可愛くてさあ。あー、見せたいなあ。自慢したいなあ」

「分かるわあ。スれてない後輩って可愛いわよねえ」

「む。意味ありげなこと言うじゃんか」

先輩後輩として、サキとキョーコはT女学院に進学する前からの付き合いだ。

中学校二年のときに放課後ぶらぶらしていたキョーコを当時一年のサキがT女まで引つ張つてきて、その日にスパイクを履かせた。次の日から高校生に混じつて本格的にトレーニングに参加するようになって、一月くらいしてから彼女は言った。

『あなたの学校、陸上部は？』

『……あります』

『なら入ったら？ あなた、いい選手になれる』

そんな馬鹿な、と正直思った。

しかし人生とは奇妙なもので、突拍子もないことに限つてとんとん拍子に進んでいく。

気付いたときには両手で数え切れないほどのトロフィーを学校に持つて帰るようになり、それらを職員室前のケースに並べているときにスポーツ推薦の話が来た。進学先はT女学院。悩むまでも無く、その場で首を縦に振った。

「ほらあ、入れた後輩は私の話も聞いちゃくれないのよねえ」

記憶に深入りしていたキョーコは、サキの声で我に返った。

「あ、なんか言つてた？」

「べつつにー」

ふい、と頬を膨らませたサキが再び窓の外へ視線を移す。丁寧にブリーチされた髪と、真っ白な肌。降りしきる雪を背景に見ていると、彼女がこのまま冬景色の中に溶けて消えてしまうのではないかと、有り得ないことながらキョーコは不安になった。

「サキちゃん」

だからだろう。

「ん？ ーん」

すこし乱暴に、唇を押し付けた。

ここに、キョーコの腕の中に、確かに彼女がいるという確証が欲しかった。サキが頬を撫でてくれる手はやはり雪のように冷たく儂く、かえつてキョーコの不安を駆り立てる。

「これでも入れた後輩？」

親友とも、恋人ともつかない関係はキョーコがT女に入学してから

ずっと続いていた。

「おこさまのキスだからってね、スれてないって証拠にはならないから」

サキの方から関係を確認するようなことはしなかったから、キョーコも自然とこの立ち位置にいることを選んだ。というよりは、妥協だ。ひよつとすると、彼女は怖かったのかもしれない。

「あー、窒息するかと思ったじゃん……」

「鼻で呼吸すればいいんじゃないかな」

「鼻息かかるの、なんかイヤでしょ」

「必死な感じがしてわたしは好きだよ?」

「やっぱリスレてない?」

あの純粹無垢なキョーコちゃんとはもう会えないのか、とサキはうなだれた。「よし」それから彼女は矢庭に立ち上がると、部室の端に据え付けられたロッカーを開いた。

「むお」

誰が呼んだか、このロッカーの名前は墓場。T女学院陸上部の暗部が解放され、室内には熟成された汗の匂いがドロリと立ち込める。壮絶なしかめつつらで振り返ったサキが、咳き込みながら訴えかけた。

「ぶちよー、これいい加減始末しなきゃだよ」

「こんなどうしようもないモノ押し付けて卒業していった先代が悪いんだよ」

「皆好き放題に突っ込んでったからなあ。どれどれ?」

白金の麗人は履いていたブーツを雑に脱ぎ捨ててスパイクを物色しはじめる。つまんではポイを数度繰り返してしっくり来たらしいものを見つけると、「えいやっ」と気合を入れて彼女は足をつっ込んだ。

「え、ちよつと?」

そんなヤバいものに足を突っ込めば、超人サキと言えども無事では済まないはずだが。

しかし彼女は何をやらせても早いもので、やめろの「や」の字をキョーコが発音する頃には、立ち上がってスパイクの履き心地を確か

めていた。

「久しぶりに走ろうと思ってね」

呆れる後輩の反応を楽しむように、彼女は笑った。



「む、無理だつてばこんな日に!」

「いや。絶好のチャンスだよ。誰もいないし」

「いられないんだよ!」

もはや吹雪になりつつあるグラウンドで、サキは無邪気に雪玉を丸めてはキョーコにぶつけてきた。

「いたっ、ちよっ、やめ」

反撃してやりたいところだが、キョーコは抱えてきた諸々の道具のおかげで手が出せない。寒さと雪玉と吹雪に耐え続けるしかないのだ。

「やめて! 死んじやうから!」

「死なない死なない。むしろ元気になるぞう!」

そんなテキトーすぎることを言いながらスイカほどもある雪玉をこしらえ終わり、それを振りかぶったところでサキは「よし」と呟いた。それまで鬼気迫る表情で丸めていた殺人大玉を放り出すと、あくまでマイペースにスタートラインへと歩いていく。

「んじやあ体も温まったし、そろそろ始めますかね」

「今の、ウォーミングアップだったんだ……」

キョーコもサキもメインは短距離走だ。雪を掻き分けてなんとかゴールラインを確認して、キョーコはやる気満々でスタートに立つサキを見る。私服に大雪。素人目にも結果は見えている。

「いつでもどうぞー!」

だがサキはやれると考えているのだろう。ストップウオッチを構えるキョーコも、正直胸の高鳴りが隠せない。彼女ならとんでもないことをしでかしてくれるような予感がしていた。

「いきますよー!」

スターターピストルが雪空に高らかに鳴り響く。

顔面を地面にこすり付けんばかりに前傾し、サキはスタートダツ

シユを切った。文字通りの爆発的な加速はさながら稲妻のごとしだ。冬の稲妻は瞬きの間に50メートルを駆け抜ける。

「ふう。どうだった？」

そのまま10メートルほど流してからサキが戻ってくる。正直、キョーコはタイムを確認するのが怖かった。とんでもないものを見てしまったような気がした。

「4秒……ジャスト……」

自分でも驚くほど、声がかすれていた。

もちろん機械測定したのではないから、精密なタイムとはいえない。だから何だという話だ。仮にキョーコの手がかじかんで1秒あまり誤差を生んだとしても世界新記録だ。

「サ、サキちゃん。世界記録が、人類が。たいへんだよ」

「うん。そっかそっか」

しかし当の本人が感動していない。むしろ納得した、と言ったほうがしっくりくる印象だった。

「これがたぶん、私の限界なんだろうな」

キョーコちゃんのベストタイムは確か6秒弱だったよね、とサキは続けた。

「うん。5秒29……」

これでも大したものだと思っていたが、サキの走りを目にした後だともうにもキョーコの記録は霞んで見えた。「ちよつと歩こう」サキに促されて、キョーコは彼女の後に続いた。

「ねえ、キョーコちゃん」

振り返って、既に雪の中に消えつつあるラインをサキは指し示した。

「この線からあの線。これが、私たちの世界なんだ」

「世界？」

「50メートル。私にとっては4秒。キョーコちゃんにとっては6秒あるかないか」

グラウンド端のテニスコートを横切って、二人は敷地を区切るフェンスまで辿り着いた。K市の灰色の雪景色を、無数の菱形が切り取っ



ている。望遠鏡を覗くように、網目のひとつにサキは顔を近づけた。「この速度を変えることはできない。それがこの世界のルールだから」

世界に与えられたのびしろを使い果たしたのだ、とサキは寂しげに呟いた。これ以上どうあがこうが、結果は変えられないのだと。

「なんかその考え、つまらないよ」

正直、スポーツをしているとそういう考えに行き着く瞬間がある。だが、サキの口からそうした諦めに似た言葉が出てくるのは許せなかった。キョーコの答えに、あははと大きな声でサキは笑った。

「そうだね、これは史上最悪のアイデアだよ」

がしやんとフェンスが鳴った。関節が白くなるくらい金網を指に食い込ませて、サキは目を瞑る。何か、形容しがたい痛みに耐えているように見えた。

「限界を超える方法があったとして」

彼女がキョーコの前でそんな顔をするのは始めてだった。

「もし、それができるのだとすれば、それを可能と出来るのなら。それは」

野望に燃える瞳で、彼女は町を見下ろす。それはそれはつまらない見世物を目にしたように。白い息をふうと吐いて、サキは薄く笑った。

「それは、とんでもない業だ」

業。

「業とは宿命だ。よい行いも、悪い行いも、いずれ全て返ってくる。私は人の限界を越えたい。だけど最後にはひどい結末が待ってる」

それを背負い込むのがとても恐ろしいのだ、と言ってサキは白い息を吐いた。びゅう、と勢いよく風が吹き付けた。

「それでも、私がかみ——なり——」

突如として轟いた雷鳴が、彼女の言葉をかき消した。

「うわ。びっくりしたね」

海側では冬にも雷が落ちるといいますが、内陸のK市では珍しいことだった。流石に目を丸くするサキの隣で、キョーコはぶつぶつと呟き

続けていた。やがて、

「……わたしはカミナリ？」

と、なんとか聞こえた声をキョーコが口にしてみる。

「なに？」

虚を突かれたような顔で、サキが聞き返した。

「わたしはカミナリ。今、言ってた」

「そうだったっけかな」

わたしはカミナリ。

「私は雷」

「そう。わたしはカミナリ」

二人で何度口にしても、不思議なフレーズだった。

それでもキョーコには何となく理解できた。サキの世界。50メートルの世界地図を稲妻のように駆け抜ける姿を見た後であったからこそ。ああ、サキせんぱいはカミナリに成りたかったのではないかと。

「業、とかは難しくよく分かんないけどさ」

少なくとも、キョーコにとってこの問題の答えはシンプルだ。高次方程式なんかよりもずっと。

「サキちゃんの重荷は、わたしの重荷。一緒に背負えば少しは軽くなるんじゃないかな」

「私が何モノになろうと、私の味方でいてくれるかい？」

迷うまでも無い。

サキをぎゅっと抱きしめて、キョーコは応える。わたしは多分本気でこの人が好きなんだな、と思った。ずっと一緒にいたいと思った。「はい。一生ついていきますよ、センパイ」

サキはキョーコの言葉を確かめるように、もう一度くちづけをした。

「おや」

「サキちゃん？」

「誰かに見られた」

サキの視線を追って、雪景色の中に目を凝らす。部室棟の陰に細身

のシルエツトが見えたような気がしたが、すぐにそれは勢いを増した吹雪によつてかき消されてしまった。

「かも、ね」

それから幾許もなく、紅坂サキは失踪した。

◆◆

「……目え、覚めたかい」

やわらかい毛布に包まれてキョーコは目を開けた。嗅ぎ慣れない洗剤の香り。全身を包む倦怠感。まだうすぼんやりとした意識の中で今しがたの夢を思い出していると、隻眼の美女はキョーコの頬をぺち、と叩いた。

「聞こえてんのかねえ、この子は」

「う、ん。きこえてる」

「そうか」

それっきり。乾いた空気の中で勇儀は座りなおしただけだった。

キョーコが起きて体を確かめてみると、見慣れない寝巻きに着替えさせられていた。すぐ傍にきちんと乾いた状態で折り畳まれた自分の制服があつたので、着替えながら勇儀に問い続ける。

「あの、萃香ちゃんは？」

「知らないね」

「どうしてゆーぎがここに？」

「さあ？」

キョーコが言えた事ではないが勇儀の表情にも疲労が色濃く残っていた。

あたりを見回す。冷蔵庫があり、掃除機があり、テレビがあり、テレビ生活に必要なものが一通り揃っている。だというのに作り物のように現実感がない。

「ここは」

「お姉さん！」「お姉さま！」

一番無事を確認したかった声の出所を確かめようとした瞬間、背骨が軋んだ。買い物を満載した袋を放り出して駆け寄ってきた双子に抱きつかれ、というかタツクルをぶちかまされたキョーコは「ぐええ」

とうめき、二人の下敷きになったまま二メートルほど床を滑った。

「よ、よかった。本当によかったよう」

「あそこに置き去りにして。なんとayingってお詫びをしたら」

「うん。大丈夫。それより、ちよつと、いやかなり、痛い……」

慌てて二人はキョーコの上から飛びのくと、床の上に正座をして居住まいを正した。そこまで畏まれた上で更に二人が深々と頭を下げてくると、また別の意味で居心地が悪くなってくる。

「ほら、マヤちゃん」

「いやオルガちゃんが」

そんな風に押し付け合いがしばらく続いた後、双子は改めて頭を下げた。

「このご恩は決して忘れません」

後ろで勇儀が鼻を鳴らした。

「それじゃあ金輪際キョーコに関わるのはやめてもらおうか」

「ちよつと、ゆーぎー」

「あんたは死んでもおかしくなかつたんだよ」

黙り込んだ三人を一瞥して、勇儀はよっこいせと腰を上げた。彼女は照明に照らされた「部屋」から飛び降りると、ひな壇のように並んだ座席の間を縫って出口へ向かう。

「ここはーそっか」

改めてぐるりと回りを見渡すと、どうやらこの場所が劇場であり、まるで舞台セットのように設えられた生活空間に自分が寝ていたことにキョーコは気付く。

「ここが二人の家なの？」

「所詮仮住まいですから」

「壁がないのは落ち着かないけどね」

なんとなくキョーコは黙った。

勇儀を連れ戻して謝らせた方がいいんじゃないかとか、今の自分にそんなことを強いる資格があるのか、とか。そんなことを考えているうちに、双子の方から止めてきた。

「どうか、勇儀さんを怒らないであげてください」

「ボクたちはただ、お姉さんたちをここに連れてきただけだから」  
彼女もキョーコも溺死寸前で川岸に打ち上げられていたという。  
またまた命を張った貸しを作りながら、それを口に出さない勇儀の  
ことがありがたくも、少しだけ憎らしくキョーコは感じる。また、助  
けられてしまった。

「ゆーぎ、待って」

舞台を飛び降り、キョーコは一度だけ双子を振り返る。

彼女達は無言のまま、笑顔で手を振っていた。



「帰らないのかい」

T女学院近くの廃劇場を出てから暫く歩いたところ、前に行く勇儀が  
口を開いた。

「正直、怖い」

数十分かそこら、ずっと同じ場所をぐるぐる回り続けていただけ  
だった。

勇儀は前を歩いていたのではなく、キョーコの決心がつくまで彼女  
を追っていたのだ。

「ゆーぎに、ひどいこと言っちゃった」

「そうかい」

「ミヨシさんにも心配かけたろうし」

「そうかい」

「風間さんの前で萃香ちゃんを斬った」

「そうかい」

キョーコが何を言っても、勇儀は何を考えているのか分からない顔  
で「そうかい」を繰り返すだけだ。鏡に話しかけているような気分にな  
ってくる。

「……わたしは、どうすればー！」

思わず声を荒らげて、キョーコは俯いた。

「あ……あの……ごめん」

繰り返しばかりなのはキョーコも同じだ。

よいこは怒っちゃいけない。よいこは泣いちゃいけない。よいこ

は困っている人を見捨てちゃいけない。昨日の自分はよいこ三原則を守っていただろうかと考える。そんなはずがない。

「ごめんなさい」

勇儀をこんな体にしたのは、元を正せば自分。よいこであることを忘れ、憤怒に駆られるまま萃香を叩き斬ったのも自分。やはり業は回る。回って回って、よいこでいるはずが、現実はひどくなる一方だ。「みんなを本当の家族みたいに思ってた。でもそれはわたしがよいこだったからで」

今のわたしが戻ったときのみんなの反応を想像すると怖いのだとキョーコは言った。

かすかに酒気をはらんだ勇儀のため息が前髪を揺らすのを感じて視線を僅かに上げると、大きな影法師が両腕を開くのが見えた。

「おいで」

「へ」

「ほら来なー来なつてば。いいから来い。おら、勇儀お姉さんが胸を貸してやる」

まごついたキョーコを強引に掴んで引き寄せ、勇儀は彼女の胸元にキョーコの頭を押し付けた。「いいかい。あたしや一度しか謝らないからな」と前置きして。

「あんたを嘘つき呼ばわりして悪かったよ」

我が耳を疑うキョーコを前にばつが悪そうにして、勇儀は更に強く胸の谷間へとキョーコの頭を押し込む。

「もがー!」

「人様の顔をじろじろ見るんじゃないよ。いいかい、あたしはあんたを信じる。こら、じたばたするな」

そうは言っても呼吸ができないのはまずい。

キョーコの抵抗をどう勘違いしたかは分からないが、まるで、むずかる子供をあやす母のように頭を撫で始める。が、こんなでは到底安らげない。

「鬼だつてことも、この体のことも、全部。「前」のあたしがキョーコを信じてこうなったんなら、きつとそれは、余程の理由があつたつて

ことなんだろう。だから「今」のあたしも、あんたに全部を賭けることに決めたよ」

そこでキョーコはようやく暴れるのをやめて、勇儀の言葉に耳を傾けることにした。苦しいのは相変わらさずだが、これから言われることは、きつと大事なことなのだ。

「二度決めたんだ。どこまでも付き合ってやる。あんたが社会を敵に回そうが世界を敵に回そうが知ったこっちゃ無い。とことんやるまでさ」

だからあの日勇儀は迷い無く飛んだのだろう。命の保障などない濁流へと。

「ぶは」

「地獄のお供が鬼なら、あんたも文句はないだろ」

ようやく締め付けから開放されたキョーコは勇儀に言っただけのことが山とあったのに、最後の台詞を耳にした瞬間、すべて吹き飛んでしまった。

「その言葉」

「あん？」

「ずっと前にもゆーぎが言ってた」

勇儀が何か言う前に「あ」とキョーコが声を上げる。視線の先にはこちらに向かって走ってくるタクシーが。そして、窓から転げ出さなければかりに身を乗り出した少女の姿があった。

「す、萃香ちゃん」

「探したよー!」

ぶんぶんと勢いよく萃香が振る腕には包帯が巻かれているが、キョーコが切り落とさんばかりに斬り込んだときに比べれば、ずっと良くなっているように見えた。

「よかったあ……」

「おっと」

安堵のあまりへたり込みそうになるキョーコを勇儀が支える。

「私は無敵だからな。そんな簡単にくたばったりしないのさ」

「川から上がったときは死ぬ死ぬ言ってたくせに」

「うるせえ馬鹿たれ。さっさと降ろせ」

「あの、ここで降りたいんだけど」

「2万5000円です」

「げっ、マジかよ……」

恐ろしい金額を告げられて、風間の顔が引きつった。

「なあミヨっちゃん、割りカン」

ミヨシはいない。ドアは既に開いていた。

「ちくしょう、また俺かよ」

泣き出しそうな顔で運賃を支払う風間を捨て置いて、萃香が全力疾走でやってくる。その後を小走りに追ってくるのはミヨシだ。

「おら、今更尻込みするんじゃないよ」

思わず勇儀の後ろに隠れようとするキョーコを押しやって、勇儀は肩をすくめた。

「でも」

「家族なんだろ。何をまごついてんだい」

頷いて、キョーコはおずおず歩み始める。

あれだけの力を得ても治らなかつた足の傷でふらつきながら。徐々にスピードを上げて走り去っていく彼女の背中を、勇儀は我知らず微笑んで見送る。

「ゆーぎ」

ふと足を止め、キョーコは振り向いた。

「かえろ。家に」

「そうだねえ」

差し出された手を取って、勇儀ものそのそと歩き始めた。こうして波乱の一夜はようやく幕を閉じた。彼女達の向かう先にはきつとずつと、輝かしい日常が待っている。



「ーそれは問屋が降ろしません。つてのが世の常でね」

旧校舎の一室で正邪はひとりごちる。

放置されていた双眼鏡から目を離し、ずらりと室内に控えた盟友たちを見渡した。ぱん、と拍手を打つなり、T女学院の生徒が一人進み



出る。

「アマノジャク様」

「うむ。くるしゅうない」

彼女の差し出したスナック菓子を豪快に食い散らかしながら正邪は馬鹿笑いした。すべてが上手く行っている。怖いくらいだ。

「星熊勇儀に伊吹萃香が揃い踏みした時はヒヤヒヤしたが、見事に自爆してくれちゃったのは僥倖僥倖」

もう片手で正邪が撫でくり回す頭骨は陽炎のように紫色のもやを漂わせている。にゅつと生えた角も相まって、禍々しいことこの上ない。

「やはり天は私に味方した。ってこったな」

「さあ皆の者！」眼下に広がる学院を、そしてK市を、正邪は睥睨して叫ぶ。

「強者が力を失い、弱者が続べる世界を創る時がついに来たのだ！」

正邪が高く頭骨を掲げると、旧校舎に集結した「弱者たち」が一斉に鬨の声を上げる。人と鳥獣とが渾然一体となったおぞましい熱狂の中で、正邪はとろとろと坂道を登っていくタクシーを見る。そこに乗っている、彼女の新しい盟友を。

「私もお前の家族に混ざっていいよな、キョーコ？」

正邪はほくそ笑んだ。

第一章『わたしはカミナリ』 おわり

## 2 『私はアマノジャク』

### 1 『カラの財布と消えたクラスメート（上）』

たとえ友人が相手でも、どう声を掛けたいものか分からなくなる時がある。

「ごきげんよう」

昼食時に気まぐれを起こし、キョーコは学食へ向かった。

T女学院には学食があり、ガラス張りの一角からそこそこ整備された雑木林が見える。久しぶりに一人でぼんやりご飯を食べるのモイイカ、と思つたのだ。

「そっちは、ごきげん……よくなさそうだね」

大混雑の学食で、なぜかその一角だけがガラ空きだった。こりやラッキーと座つてみると向かいには二階堂アンリがむつとりと座つている。空席の原因が彼女であることは明らかだった。

「笑いたいなら笑つたらいいかがですか」

すぐ否定したいところだが、言葉が詰まった。

初対面からアンリに話しかけがたい雰囲気があることは感じていた。それは仏蘭西人形じみた整った容姿だったり、奇奇怪怪なお嬢様言葉もどきだったり。T女学院に転校すると聞いたときは馴染むのに苦労しそうだなあ、とキョーコは思つたものだった。

「ケガしたの、それ？」

しかし、今日は一段と話しかけがたく、その原因はまったく別のところにあつた。



『わたしはカミナリ』

第二章・私はアマノジャク



「ええ。寮の階段から転げ落ちまして。首を」

ふんと顔を背けようとして、アンリは表情を歪めた。

「痛ーこれじゃあイヌネコですわね」

どんな落ち方をしたらそうなるのか分からなかった。

アンリの細首には包帯が巻かれ、固定用のギプスがはめられていた。そのギプスが、なんというか一回り二回り大きいのだ。彼女が言うとおりに動物の治療に使う保護具ーエリザベスカラーが想起させられた。

「あ、キョーコ先輩だ」

聞き覚えのある声にキョーコが振り返ると、ごった返した学食の人ごみを縫って、陸上部の後輩たちがやってくる。

「部長、一緒に食べていいですか？」

「ダメです」

誰よりも何よりも早く、アンリが冷淡に言い放った。

「えっ」

「ダメったらダメです」

獣のように眼光鋭くアンリが睨みつけると、彼女達はトレーを持ったまま後ずさった。

「みんなとご飯食べようよ？」

「大勢で騒ぐのは好きではありませんの」

「わたしも邪魔？」

「キョーコ様は別です」

「分かった。みんな、おいで」

「いや、わたくしは……」

若干警戒の色を見せながら近づいてくる後輩達に、キョーコはアンリを示して見せる。当の本人は未だガルガルと威嚇しているのだが、それを無視してキョーコは後輩達を席に座らせた。

「この子、二階堂アンリちゃん。ほんのちよっと前に転校してきたんだけど、まだ日本に不慣れなんだって」

「いえ、わたくし生まれも育ちも日本で」

「だからさつきみたい言葉遣い間違っちゃうこともあって。ほら、緊張してるでしょ。目つき悪いからよく誤解されちゃって大変なんだ」

「誤解じゃありません。誤解じゃ」

「とにかく、仲良くしてあげてくれないかな」

アンリの言葉をことごとく遮ってキョーコが微笑みかける頃には、すでに後輩達の好奇心は最高潮に達しようとしていた。

「二階堂さんって呼んでいい?」

「……お好きなようになさってください」

観念したようにアンリが口を開いた。

「趣味は?」

「寝ること」

「好きなものは?」

「かんぴよう巻き」

「どんな音楽聴いてるの?」

「落語とか」

「どこの国から来たの?」

「いや、だから、わたくしは日本で」

「アンリちゃん、イギリスだっけ?」

何とか馴染ませようとキョーコも必死だった。箸を握り締める手に尋常ではない力が籠っている。プラスチックの箸が砕けそうだ。

「日本語はどこで習ったの?」

「だからにほ………いえ。イギリスですわ」

「すごー!」

「異文化ー!!」

子供にもみくちやにされる犬のような顔で、アンリがこの世の終わりのようなため息をつく。恨みがましい視線はずっとキョーコに向けられていた。キョーコはそれを極力視界に入れないようにして「いただきます」とカラ揚げを口に運ぶのだった。



「殺す気ですか」

げっそりやつれたアンリが昼食にありついたのは、昼休みも半分を切った頃だった。

「大げさだなあ。友達できてよかったじゃんかあ」

「いりません。トモダチなんて。疲れるだけですわ」

言って、アンリは陸上部の生徒達に脇目を振る。

質問するだけ質問すると、彼女達は勝手に盛り上がってアンリを置いてきぼりにして想像を膨らませていった。今、彼女達は悪名高きイギリスの料理の話できやあきやあ騒いでいる。アンリが純日本産女子だとも知らずに。

「誰にも相手にされないで一人にいるのって、辛いよ」

キョーコは苦笑する。

「皆さんはそうかもしれないかもしれませんがね。ですがわたくし、そこまで軟弱でなくってよ」

「そういえば二階堂さん、部活入るの?」

「ええ。取り敢えず内申のためにも。剣術をやるので、剣道部があればと思ったのですが……どうやら廃部の憂き目にあったようで」

アンリは心底残念そうだった。

キョーコは想像してみる。板敷きの道場で道着に身を包んだアンリが竹刀や木刀を握る姿。ミスマツチと思いきや、その凛とした雰囲気と言うか、立ち姿と言うかは、なんとなくしくしくり来る。そう、アンリには大きな刃物がよく似合う。何故か。

「だったら陸上部はどう!?!」

後輩の一人に脊髄反射のような速さで聞き返されて、アンリは思わずのけぞった。

「陸上部? キョーコ様といっしょの?」

「うん。二階堂さんスポーツ得意そうだし。ね、部長?」

「だーかーら。もう部長じゃないってば」

キョーコの笑顔が引きつった。微笑ましい会話のはずが、イヤな方向に流れてきているような気がしてならなかった。

「だって、ねえ」

「まあ、ねえ」

後輩達は意味ありげな視線を交し合う。

「チヅルちゃん、苦戦してる？」

「てゆうか、苦戦してるのは私たちですよ」

「あの人命令ばっかで。なんだかコンピューターみたいなんですよ  
ねえ」

「まあ生徒会長もやってるからあんな感じになるのかなー」

「マシーン会長？」

「ウケる」

「あのさ、みんな」

後輩の口さがなさに流石に待ったをかけようとキョーコが口を開いたときだった。

「おなか一杯になっちゃいましたわ」食べ始めたばかりだというのに  
アンリは立ち上がる。後輩達が引き止める声を無視しながらキョー  
コの隣までやってくると、

「だから人に関わるのは嫌いなのです」

と、囁いて。

「躰がなってますせんわね」

人と人の間をするする縫って消えていく背中に、キョーコは返す言  
葉が無い。チヅルが悪く言われるのは、満足に引き継ぎもしてやれな  
かった自分のせいだという後ろめたさがずっとあったからだ。

「――ノジャク様ってのが旧校舎に居て、どんな願いでもかなえ  
てくれるんだって」

「なんか、ウソくさくない？」

「でも会ったっていう子沢山いるし。今日、行ってみる？」

後輩達の話は既に別のものへと移っていた。

アンリからイギリスへ。イギリスからチヅルへ。チヅルから今度  
は旧校舎の某へ。きつとあと十分もすれば彼女達はアンリのことを  
忘れてしまうのではないか。そんなことをキョーコは漠と考えた。

「あれ」

旧校舎といえば、自分も何かを忘れているような気がした。

キョーコはテーブルの木目をなぞりながら記憶を遡る。旧校舎、弁

当、少女……鬼……？

「せーんぱい、なんか、呼んでますよ」

気付いて顔を上げると、後輩達の視線がキョーコに注がれていた。ぼんやりしている間に何かがあったらしい。

——— 返しお呼び出し致します。三年A組の鳴無響子さん。三年A組の鳴無響子さん。至急職員室まで———

何が、と聞く前に天の声が答えた。割れたスピーカーの音声は間違いなくキョーコの名を呼んでいた。至急、と付けられると途端に雲行きが怪しくなってくる。

「じゃ、じゃあ行って来るよっ。あと、もしチヅルちゃんのこと何かあったら、スバルちゃんに伝えておいてくれるかなっ！」

「あ、ぶちよー……」

さつさと弁当を片付けて席を立ったキョーコに、後輩の言葉は届かなかった。

「スバルさんのこと知らないんだね、キョーコ先輩」

「うん」



職員室。

好きで入り浸る生徒はいないだろう。

白抜きの文字がどこか威圧的に見下ろしてくるプレートの下でキョーコは息を整え、何でもどんとこいやと覚悟を固める。

「たのも……失礼しまーす」

十数分後。

すっかり意気消沈して出てきたキョーコは、絶望の面持ちで手元の通達を読み返した。

「どうしょ」

どうしようもない。

キョーコの頭がすぐに結論をはじき出した。



蒸し暑い。

空気が淀んでいる。

勇儀がタオルで汗を拭った。

「こりゃあ何のマネだい、風間つつあん」

「すぐ説明する」

下宿屋の食堂に集められた面々は蒸し暑さにあえいだ。厳めしい顔でマジックを掴んだ風間と、壁に張られた模造紙。窓には暗幕が垂らされ、いくつかの卓上灯が黄色い照明で室内を照らしている。扇風機がうなりを上げているが、焼け石に水だ。

「えー。宴会じゃないのかよう」

そもそも呼ばれてもいない萃香が不満の声を上げる。風間が舌打ちだけで返答した。

「じゃあ主役も帰ってきたし、ボチボチ始めるか」

キイと音を立てて風間が照明のひとつを向けた先で、キョーコが眩しさに目を細めた。

「主役って、わたしですか？」

「そう。これから俺たちはキョーコちゃん、ひいてはこの下宿屋早稲川荘きつての大問題について作戦会議を行いたいと思う」

「わたしの……問題？」

そう言われてもキョーコには思い当たる節が無い。

いや、思い当たる節が多すぎてもはや何が何だかよく分からないのが現状なのだった。固唾をミヨシが注いでくれた麦茶と一緒に飲み下して、彼女は風間の次の言葉を待った。

「今日から早稲川荘第1食堂は、」

「いや、食堂いっこしか無いじゃないか」

勇儀の的確なツッコミを黙殺して風間は模造紙をびしりと叩いた。暗幕の隙間から差し込む光にホコリが舞う。いい加減全員がこの暑苦しい環境とノリに辟易していた。

『鳴無響子ちゃん素寒貧大脱出作戦』本部としまーす」

「へ？」

「あん？」

「うわー」

それぞれがそれぞれの反応でもってキョーコと風間を見比べた。



「はい」

「はい、キョーコちゃん」

「スカンピンってなんですか」

「いい質問だな。それはな、キョーコちゃんがホームレスもびつくりのド貧乏ってことだよ」

う、とキョーコが呻く。

「ああ、やっぱりそうなんだ」

萃香の「やっぱり」が更に追い討ちをかける。

胃のあたりを押さええてうずくまっていくな、キョーコなどお構いなしで、風間は模造紙に『キョーコちゃんIIピンボー』と書き殴る。

「キョーコちゃん、カバンの中の物、出しな」

俯いたキョーコが震える手で掴み出した通知書を勇儀と萃香が奪い取る。軽く青味を帯びた白い用紙には公益財団法人何々と物々しい名前が印字されている。「重要」の赤字が目痛い。

「えー、っと。すぽおつってのは何だい」

「そんなことも知らないのか勇儀。競技のことさ」

「奨学金……はカネくれるんだろ、要するに。でも奨めるって何を奨めてるんだい」

「そりやあスポーツを勧めるんだろうさ」

「うち、きり……打ち切りい？」

ここの反応は、キョーコが書類に目を通したときとまったく同じだった。

「うわ。これマズインじゃないかい」

「……やっぱり？」

大ピンチであること以上の理解をキョーコの脳が拒んでいた。おかげで午後の授業はいつも以上に手につかず、居眠りにすら身が入らない始末だったのだ。

「かさま、さん。どこでこの話を……」

「とあるスジ。おっさんは顔が広いんだ。と、まあ、そんなことは置いて、だ」

改めて、風間は模造紙を見つめる。

「T女の学費諸々は年二回、春と秋の支払いだ。つまり夏休みが終わるまでにウン十方を稼がなきゃキョーコちゃんは大変なことになる」  
「ふーん。大変なことって?」

完全に他人事といった風で萃香が問うた。実際他人事であるが。

「最悪退学だな。中卒おめでと、キョーコちゃん」

——うぎゃああああ。

ついに悲鳴を上げてキョーコが床の上にひっくり返った。座布団を顔に押し当てたつきり動かなくなった彼女を放置して、尚も作戦会議は続く。

「要するにだ。あたしたちで頭を捻って金儲けしようってことだろう?」

「んー、まあ言葉は選んで欲しかったが、ゆっぴーの言うとおりだな。んじや皆の衆、早速意見出してくれ」

ミヨシが、すうっと手を上げる。

「はいお月謝全額カット来ました。どうだい、キョーコちゃん」

「ダメです、それは。ダメです……よいこ的に……でも今月の支払いは、ちよつと待って欲しいです……」

すつと手を下ろしたミヨシが、すつと頷いた。

「はいはいはいはいはい」

「はいチビ」

「チビ言うな。風間、お前こないだお馬さんで大分稼いだんだってねえ」

「……お前も大概知ってるのな」

あるスジからな、と萃香は風間の真似をしてみせる。

「だからさ。あげろってワケじゃないよ。でも金が浮いてんならちよこーつと貸して、ちよこーつと待ってあげたら?」

「……まあ、俺もやぶさかじゃあないがな。あ?」

床を見ると、座布団を被ったままのキョーコがしきりにハンドサインを送っている。

「何? エックス? 違う? ダメ?」

座布団人間がこくこくと頷いた。

「風間さんはお友達です」

「あ、ここ喋るんだ」

「お友達とお金の貸し借りだけではできません。やったら終わりです。あとよいこの的にもアウトです」

「その言葉は嬉しいけどなあ」

月謝カット。足長おっさん。窃盗。

次々と模造紙の上にアイディアが書き込まれては×マークで塗りつぶされていく。それからもぽつぽつと手は拳がったが、どれもよいこの的にダメと判断され、×の海に沈んでいった。

「んお」

出るものも出尽くし、沈黙が訪れた頃になって、ようやく勇儀が手を挙げた。

「ほい、ゆっぴー」

「酒かっくらって寝る。で忘れる」

「まあ……確かに……オトナとしてはそれが一番いいような気がしてきました……」

ってそうじゃねえだろ。

風間がノリツツコミをすると、すっかり出来上がった萃香が手を叩いて笑う。

勇儀のいらへといい。このやたらと作りこまれた会場も含めて、皆結局キョーコをおもちやにしているだけなのかもしれない。

「あうう」

頼もしいと思いきやの公開処刑である。座布団を被ったままキョーコがごろごろと床を転げた。

「あー、つまりさ、道徳的にも法的にも「よいこの」にも胸張れる方法でカネ用意すりゃあいんだろ？」

見るに見かねてか、それとも百万年に一回の良心がまた起こったのか。それは定かではないが、キョーコの座布団を引っぺがしながら勇儀が口を開いた。

「でもそんな方法がどこにある」

「働きゃいいだろ。真っ当に」

その瞬間を狙ったかのようにキョーコの顔面から座布団が剥がれた。

「ああ」

全員、目から鱗といった様子だった。

「その手があつたか」

むしろ真人間なら一番にそのアイディアが浮かぶ筈なのだが。

ようやく立ち直り始めたキョーコは体を起こして、全員の顔を異星人でも見るかのように見渡した。

「どうだい、キョーコちゃんは」

「は、はい。夜なら。あと、脱兎珈琲にいかない日もまだまだありますので」

「よし。そうと決まれば職探しだ。だいたい三人くらいで働けばイけるだろ」

「え?」

風間は確かに三人、と言った。

「俺とゆっぴー、んでキョーコちゃん。みんなで稼いだ方が貯まりが早いだろ?」

「い、いやいやいや、そんなお金、受け取れませんよ」

「困っている人を見捨てないのがよいこじやないのか?」

それを持ち出されては、キョーコに断ることはできない。

「……ゆーぎも、それでいいの?」

「あたしやどこまでもキョーコに付き合うつて決めたからねえ」

「うん……ありがとうございます」

頭をわしやわしや掻いて、勇儀は落ち着き無く室内を歩き回った。おそらく照れているのだろう。

「にしても仕事なんてすぐに見つかるともんかねえ」

ケータイ片手にメモ帳をパラパラめくり始めた風間に勇儀は耳打ちした。

「心配すんなって。おっちゃんは顔が広いんだ」

早速どこかへと電話を掛けに出て行った風間の背中を見送りつつ、勇儀はなんだか不安になってくるのだった。

## 2 『カラの財布と消えたクラスメート（下）』

投光器の投げかける光の中を砂塵が舞い、重機が鋼鉄の体で地面を蹂躪する。機関銃の発砲音のごとき重音をBGMに、上腕二頭筋に玉のような汗を浮かべた男達が統制の取れた動きで行き交う。ここは紛れも無く戦場だった。

「風間の兄ちゃんよお」

ブーツの足音を響かせながらやってきた一人の男を迎えるように、砂塵のカーテンがさつと開いた。

ヘルメットの下は鬼もかくやという獰猛な顔。鋭い眼光で彼の見つめる先には二人の新兵がいた。ひとりには健康そうだがやや小柄。もう一人はがっしりした体つきであるものの、隻腕隻眼であった。二人とも女性である。

「こりや何かの冗談か？」

地獄の鬼にすごまれても、風間は涼しい顔のまま重機にもたれてタバコをふかす余裕を見せる。

「俺が自分のツラ潰すようなマネすると思うのかい？」

「ふん。おいそこの。オトナシ、キョーコ、って読むのか。お前さんだ」

「ひやいつ」

いくらなんでもそりやビビリ過ぎだろうというくらい、キョーコが地面から飛び上がった。

「歳は？」

「じゅ、じゅうはちです」

「部活は？」

「陸上部、やってました」

「ふん。体力はありそうだな」

現場で面接と聞いていたが、正に現場とは。

予め送った履歴書の内容確認のようなものだったが鬼軍曹、もとい現場監督の放つプレッシャーを受けて、本物の鬼であるキョーコの首筋を滝のように汗が流れ落ちていく。

「大体分かった。じゃあ最後に念押しするけどよ」

ヘルメットの下の眼光が一段鋭くなる。

「嬢ちゃん、T女の生徒じゃねえよな？」

「は、はぁー」

(違う違う。違うって言え)

風間が口パクで伝えてくる。

それは分かっている。そのために普段着られないとっておきの普段着で来たのだ。

しかし悲しいかな、キョーコは虫も殺せぬよいこ筆頭である。たった一言ウソを吐かせるために、ほんの数分前まで風間の演技指導を受けていたくらいだ。

「ちが」

「違うのかい」

「あ、いえ」

「どっちだよ。ええ？」

とんだ見ものである。必死に笑いを堪えながら、あるいはヒヤヒヤしつつ、勇儀と風間はキョーコの頑張りを見守ることに努める。

「ち、違いますう。わたしい、西校の生徒でえす」

指導が最悪の形で発揮された。

キョーコが妙に上ずった声で彼女なりの西校生を演じた瞬間、隣で勇儀が小さく嘖き出したのが分かった。その後も肩がぶるぶると震えている。風間も唇を噛みしめながら、鳩尾の辺りの肉をねじり上げて笑いを消そうと必死である。

「あ、あの」

ああ、やんぬるかな。必死に弁解を図ろうとするキョーコの前で、男はヘルメットを脱ぐと禿頭をほりほりと搔いた。

「ま、いいや。面倒だけ起こさなきや」

予想に反して、彼はすんなりとキョーコのウソを受け入れることにしたらしい。

「合格だ。そっちのねえちゃんもな」

「大丈夫だって。こいつら馬力が凄いんだ」

「馬力でもなんでも良いけどよ、こないだの洪水でこっちはてんやわんやなんだ。なんかへマしたら即刻クビだからな」

「あいあい。じゃ、後でな」

「ったく。さっさと着替えて作業にかかりやがれ。今も時給払ってんだからな」

鬼よりもよっぽど鬼めいた現場監督がのしのし歩いていく姿を見送って、ようやくキョーコは肩の力が抜けるのを感じた。

「いやー、立派な大根だったねえ」

「キョーコちゃんにしては頑張ったけど、酷かったな」

キョーコも酔狂でやっているわけではない。

T女学院はとにかくおかたい学校である。ごく一部の例外を除いてバイトは禁止。その例外であるキョーコがスバルの店で働いているいとやられた時でさえ正式に許可が下りるまで半月以上待たされたのだ。それに今は時間が無い。

「あああ、ウソついちゃったよおお。しかも二つもおお」

割り切つてこの場に臨んだとはいえ、よいこにはダメージが大きいイベントだった。ビルの壁に頭をぶん、とぶつけるキョーコを捨て置いて、勇儀たちは行ってしまう。

「あ、キョーコちゃんはこっちじゃなくてね」

追ってきたキョーコを、風間は回れ右させる。

「あっち。あそこ、見える?」

風間の指差す方向にはただ、混沌があった。

そこはとりわけ喧しく、熱気に満ちていた。赤鬼のような顔色と肉体を誇る男達が瓦礫を満載した麻袋を肩に背負ってはトラックに積み込んでいく。古代エジプトのピラミッド建設と説明されてもまったく違和感が無い。

「俺は一般人。ゆっぴーは怪我人。だからノーマルコース」

一方風間が親指でしゃくつた場所では例の麻袋に瓦礫を詰める作業が行われていた。これはこれで重労働なのだろうが、カオスゾーンを見た後ではお花摘みにも等しくキョーコの目に映る。

「でもキョーコちゃんスーパーパーパワーあるからさ。ハードコースで申

「請しといた」

「え、ちよ、勝手に何してくれるんですか」

「ハードはいいよー。一晩でイイ靴買えちゃうからね。おっちゃんも少し少しかつたら一緒に行くんだけどなー」

風間はキョーコのツボを心得ている。

「靴……服……!」

見る見る間に目の色を変えたキョーコが、蜜に釣られる蝶のごとくふらふらと砂塵の中に消えていく。これから行われることを考えると、灯に集う蛾に例えたほうが的確かもしれないが。

「わっかりやす」

「キョーコちゃん、休日も制服かジャージだからなあ」

キョーコが悪いのではない。貧乏が悪いのだ。

しみじみとしながら支給の作業着に着替えを済ませて合流した二人は、さっそく掘り返された瓦礫の山を崩しにかかった。暫らくした頃、風間はうけけと笑い声を洩らした。

「なんだいなんだい。気色悪い笑いしやがって」

「いや。おっちゃん実はあの作戦会議にさして期待してなかったのよ」

「あん？　じゃ、あんたはつまり」

「元から皆で働いてカネを出す。っていうプランを用意してた。あの茶番はまあ、面白そうだったし。それにキョーコちゃんいじめると反応が面白いからな」

風間は瓦礫を詰め込む手を休めず、また笑った。その人の悪さに、勇儀も呆れた笑いを浮かべるしかない。

「どりゃー!」

気合の入ってきたキョーコの掛け声が夜の街に鳴り響く。

勇儀と風間の見ている先で瓦礫をみちみちに詰め込んだ麻袋が放物線を描いてダンプカーの荷台にシュートされるなり、周囲にどよめきが走った。

「本人も大分やる気出してきてるみたいだし」

次々と空を飛ぶ麻袋を見て、二人は改めて金の力というものを痛感



させられる。「力みすぎるのも良くないけどな」と肩を竦めて、風間は白い歯を見せた。

「話がちよつくら脱線したが、要するに俺はゆっぴーの口からバイトの話が出たのが嬉しかったのさ。お前、キョーコちゃんのこと茶化してばっかだけど、それなりに真剣に考えてるんだな、つてさ」

「買いかぶりすぎだよ。ただの思い付きさね」

「そうかあ？」

「そうだよ。それに、無くした記憶の手がかりなんだ。勝手に居なくなられても困るしねえ」

「素直じゃないねえ」

勇儀は答えなかった。隣で風間がまた肩を竦めて見せる気配に少しだけ苛立ちを覚えながら、黙々と作業をこなした。キョーコほど切迫していないにしろ、生活費を自分で稼がなければいけないのは勇儀も一緒なのだ。



「ちよつと休憩取ろうぜ」

風間の声に勇儀が腕時計を見てみると四時間あまりが経っていた。知らないうちに作業に没頭していたらしい。丁度小型のシヨベルカーの近くに資材が積まれていたので、それに背中を預けるようにして座る。そしてお互い妙に小さな水筒を取り出すのだった。

「ゆっぴー、それ酒だろ」

「人のことが言えるのかい？」

「ちげえねえ」

アルコール臭い息を吐いて、二人は工事現場を見渡した。

現場の中も、外も、それそれはひどい有様だ。アスファルトはめくれ、電鉄のレールが浮いている。水道管か何かが破裂したのか、あちこち陥没した地面に水が溜まっていた。

「こないだのこと、誰かと話したか？」

勇儀は頷いた。

「野球チームのガキんちよ共と話したけど、皆口を揃えて洪水洪水つて言うばかりさ。どう思うね」

「洪水でこうはならんだろ。それに、ここら一带は過去十年以上、一度も冠水していない」

「死んだヤツだっているだろうに」

「ところがどっこい。あの翌日の新聞では死傷者ゼロときた」

思わず勇儀は風間に疑いの目を向けていた。

「言っておくが、俺が新聞書いてるわけじゃあないぜ」

「そんなバカげたことがあるかい。あの黒いのが人を襲うの、風間つつあんだって見てたんだろ？」

それだけじゃない。奇怪に変形した暴走列車や、銀色のオオカミ。キョーコと萃香の戦いに割り込んだ巨大な鬼。そのすべてを二人は目にしてきたのだ。

「ああ。お前のダイブも大したもんだったよ。だがあの黒い鬼はなんだったんだ。人を攫って、殺していたのか？ それとも何か、もつとタチの悪いことをしていたのか？」

「結局、アレが何だったのかは闇の中ってことか」

「あれが始まりだったのか、それともあれつきりだったのかってこともな。確かなことはキョーコちゃん力持ちになっちまったってことだけだ」

と、休憩を終えて二人が腰を上げた時だった。

二人の第六感が、なにか言いようの無い危機を告げていた。キョーコの悲鳴が聞こえたのはその直後だった。

「どりゃーあ？ あああああ、逃げてー!!」

とつさに頭を下げた勇儀たちのすぐ上を、びゅんと音を立てて麻袋が通過する。

間一髪だった。転がるようにして降り注ぐ資材と倒れこむ重機から逃れた二人が振り返ると、青い顔をしたキョーコが口元を押さえて立ち尽くしていた。



◆◆  
当然クビである。

安全基準ガン無視の上損害まで出してくれたキョーコはあの後こつてりしつかり絞られ、給料は当然ペア。張り切りは無に帰す結果

となった。

「そう気を落とすなって」

「トラウマになりそうです……」

昼のK市と夜のK市は異なった表情を見せる。

じりじりと町を焼いていた日が暮れるころには通りから学生や子供連れの姿が消え、酔漢や怪しげな客引きが多くなってくる。バイトを終えた風間が飲み物をキョーコに持って行ってやると、彼女はコンクリート製のオブジェの台座に座り込み、頭を抱えていた。

「やあ。待った？」

「ゆっぴー、そのツナギどうした」

「いやー、カントクに気に入られてね。明日も来いって言われたから、このまま帰ろうかなって」

そこで頭上にどんより雨雲が立ち込めるキョーコに気付いた勇儀は、何気なく言い放った。

「あんた力だけが取り柄なのにねえ」

「うう」

深く、深く傷口を抉る一言であった。

「……力だけじゃないよ」

「じゃあ他に何があるのさ。あんた勉強もイマイチじゃん」

「ゆ、ゆっぴー、今はやめてやれ」

「……体育は成績いい……よかったし。小学校まではテスト全部満点だったし」

いくらなんでも過去の栄光にすぎり過ぎである。

「それに、み、皆が助かるって言ってたんだよ」

「ああ？ あんた本当に考えるってことをしないんだねえ」

ぐに。

「あ」

それはそれは、無遠慮なわしづかみであった。

脈絡無く勇儀にふん掴まれた己の乳房を、キョーコは唇をわななかせながら見下ろしていた。その顔が次第に赤くなっていく。風間にはキョーコの頭が、除々に沸騰してゆくヤカンに見えた。

「な、ななな、ななななあ!？」

「ほおらコレだよコレ。ここばかりブクブク無駄に膨らませやがって。のーみそ行くはずの栄養までこっちに行っちまったんじゃないかい?」

「こそ、そこは関係ないじゃん。それに、ムネのことならゆるぎだって人のこと言えないんじゃないの?」

「あたしはこの通りたっぱがあるからねえ。それに走らないから邪魔にもならない。形だってあんたよりずっといいはずだ。な、風間つつあん」

「男であるおっさんにそういうコメントを求めるお前はとても残酷だ」

花も恥らう女子の乳を道端でしつこく揉みしだきながら勇儀は高らかに笑った。キョーコはといえば怒り心頭の爆発寸前である。

「これ、気にしてるんだからね……!」

「どうしてだ。乳がでかいならでかいなりに堂々としてりやあいんだよ。なあ?」

「だから俺にそういう話題を振るな。頼むから」

「まあまあ、とにかく気にするなって。大は小を兼ねるというし」

「そんな適当なこと言われたって、気にするに決まってるじゃん!」

「牛女」

「うがー!」

キョーコがまたまたよいこ三原則に抵触した瞬間、突風が閃光と共に吹き荒れた。なんだか分からないがキョーコが妙な清しさを覚えていると、矢鱈に視線を感じる。勇儀や風間だけでなく、通りかかった誰もが怪訝な顔で彼女を見つめていた。

「え、何?」

「キョーコちゃん、下、下が」

スカートの裾が何かに引っかかっていた。

それをそっと除けてみると現れたのは金属の光沢。複雑な文様の施された柄頭である。もちろん柄頭があるからには柄があるワケで、柄があれば刃がなければおかしい。そして鋭利なカタナは、キョーコ

の足元のタイルにさつくりと突き立っているのである。

「ああ。あのときのカタナ。まだあったんだ」

「い、一周回って冷静になってんじゃないよ。これ、どっから出したんだい!」

勇儀にがくがく揺さぶられてキョーコは我に返る。

「あわわ、そうだ。これ、ええと、そうだ」

キョーコはとりあえず地面から引っこ抜いてみた。

が、最悪手である。何がとりあえずか。それだけで問題が解決するはずがない。余計面倒になっただけだった。

「どうしょ、ゆーぎ、これ」

「お、落ち着きなったらー!」

抜き身のカタナを手にしたままキョーコが迫るので、切っ先を避けて勇儀は右往左往するしかない。当然彼女達の行く先々で悲鳴を上げながら群衆が割れる。当然だ。どう見ても錯乱した女子高生が刃物を振り回しているようにしか見えない。

「あ、やべえー!」

風間の声に二人が振り向いてみれば、早速騒ぎを聞きつけた警官がこちらに走ってくるではないか。顔を見合わせた三人は、誰からともなくその場から駆け出したのだった。



てんでバラバラの方向に駆け出した三人だったが、示し合わせたように人気のない神社の境内にて合流することとなった。三人は荒げた息を落ち着けつつ、しばらく何言でも地面に寝かされたカタナを見下ろしていた。

「なんで俺ら、逃げたんだらうな……」

どうしようもない雰囲気になりつつある中で風間が会話の口火を切った。が、あたりに漂うどうしようもなさには拍車がかかっただけだった。

「あのまま届け出たほうが良かったですよね」

「やましいことあ何もしてないんだ。まったく、とんだ災難だよ」

その通りだが、勇儀にその台詞を言う資格があるかは疑わしい。

眼帯隻腕の美女がツナギを着てのしほし歩いている上に、明らかに国籍不明なのである。身分証を求められただけで一発退場は逃れられまい。

「なんだいあんたら、その目は」

おまけに本人にその自覚が無いのである。尚更タチが悪かった。

「ま。警察に預けるって手はこれでナシだな」

勇儀がキョーコを小突いた。

「なんとかしな。あんたが出したんだから」

「なんとかって」

先は無我夢中だったとはいえ、このカタナは勇儀と萃香の血に塗れている。そう考えると触ることすら忌まわしくなってくる。因縁のあるカタナの柄の上で手を泳がせるだけのキョーコを更に勇儀がせつついた。

「早くしなよ。また走らされるのは御免だからね」

「う、うるさいな。わかってるよ」

観念して朱色の紐で巻かれた柄を握る。堅く結ばれた柄紐の感触。ずしりと刃の重みを感じる。が、

「戻らない?」

「戻らない」

それだけだった。

「戻らないなら?」

「持って歩くしかないね」

「こつから下宿屋までは?」

「だいたい三十分くらい歩かなきゃ」

途端に勇儀の拳がキョーコの頭に落ちた。

「使えないヤツだねえ」

このカタナ、どうやら神出であつても都合よく鬼没してくれるような代物ではないらしい。頭を抑えてキョーコが痛がっていると、

「仕方ねえ。ゆっぴー、脱げ。今すぐ」

と、混沌に混沌を注ぎ込むようなことを風間が口走るのである。

「あ、あれ……? コレなんの話でしたっけ……!?!」

「いやヘンな意味は無いから。ツナギだよ、ツナギ。何かに包んで持ってくしかないだろ」

「なんであたしが」

「お前しか着替え持っていないだよ。ホラ、あつちに便所あるから」

「あーもう、ひとつ貸しだからね」と言っただけの嫌々の渋々といった様子の勇儀が木立の奥の公衆便所へと駆けて行く。

「じゃ、おいちゃんもちよっくら用足し行ってきますかね」

そんなことを言っただけで風間までいなくなると、ついに境内にはキョーコだけになる。夜風が汗ばんだ肌に心地よかった。境内に植えられた巨大な榎の木のさざめきを聞いていると、自然「ほう」とため息が口をつく。

「なんか、疲れちゃったなー」

ここ数日は本当に忙しかった。

アンリとの再会から陸上部の不穏な状況を知ることになって。奨学金が止まった瞬間から作戦会議だバイトだ履歴書用意しろ、と。嵐のように時間が過ぎていった。

(インターハイ、か)

考える暇も無かった分、こうしてポツカリ時間に穴が開いてしまうと、どうしてもそのことを考えてしまう。さつき走って分かったが、壊れた脚は未だに言うことを聞かない。それでもキョーコは夢を捨てる気にはならなかった。

「逃げないって言っちゃったからな」

相手が何者であれ、宣言したのならそれは約束なのだ。

キョーコが決意を新たにした時だった。

——— ずっと、ずっと、ずっと、ずっと。

境内に入ってきたソレの姿を見た瞬間、キョーコは我知らず身構えていた。

燃えているように見えた。燻っているように見えた。砂利を蹴散らしながら境内を横断していくそれらの全身から、宵闇の中にも関わらず黒い煙が立ち昇っているように見えたのだ。

「誰」

——— ずずず、ぎざあ。ずずず、ぎざあ。

影は答えない。

だが、十分だった。それらが脚を止め、ぐにやりと頭をもたげてキョーコを見る。人だった。見覚えがあった。

「キミたち、どうしたの……？」

微かな光を放つ照明の下で、ようやく異形の正体分かる。昼に話をしたキョーコの後輩達だ。ただ手を繋いでいただけで異形に見えたというのもおかしな話だが、もっともおかしいのは、彼女達が目だった。

——— ぎ。

真っ黒だった。むしろ真っ暗だったのだ。

白目のない目は光を反射せず、しかしキョーコを確かに捕らえている。ぽっかりと空いた穴のような目。その深遠にいる、何か、キョーコを。

——— ずず、ぎ。ずずず、ぎざあ。

一瞬、だったのか。

それとも果て無しく長い時間、深遠を見つめていたのか。

二人組みが再びどこへともなく歩き出したとき、氷雨のように冷たい汗がキョーコの頬を伝っていた。

「悪い、遅くなった」

人数分の飲み物を抱えて戻ってきた風間は、すぐキョーコの異変に気付いたようだった。

「ありやあ知り合いか？」

「……はい。部活の。陸上部の後輩、のはずなんです。その、様子が」

「様子がおかしい、か」

ローファアを引きずるようにして歩いていく二人の背中は大分小さくなっていったが、遠目にも彼女達の異常は見て取れる。まるで昆虫かなにかが彼女達の皮を被っているように、その動きは、ぎこちないのだ。

「昼に会ったときは、むしろ元気すぎるくらいだったんですが」



キョーコはそう口にして、ひとつ心当たりがあることに気付く。

「旧校舎」

「うん？」

「旧校舎行ってくつて言っていました。たしか、のじやく様がなんとか言つて」

「アマノジャク様、だろう？」

いつからそこにいたのか。勇儀だった。彼女の汗のにおいがバツチリ染み付いたツナギをキョーコの頭に被せ、彼女はひとつ残った瞳で二人組みを睨んだ。

「ゆっぴー、知ってんの？」

「今時この界限なら子供でも知ってる噂だよ。全知全能。空前絶後。願いを言ってみるがいい、たからま忽ち叶えて進ぜよう——つてヤツらしい」

「おいおい、いくらなんでもそりゃ」  
「荒唐無稽と断じるのは簡単さ。だがね風間つつあん。あたしたちや、そういうったものをいくつ目にしてきたんだい」

風間は口をつぐむ。確かに幽霊やお化けが今更なんだと言うのだろう。現に後ろでツナギに頭を突っ込んだままもごも騒いでいるキョーコでさえ、荒唐無稽な力をその身に宿しているのだから。

「ついで」

勇儀がキョーコの手を引く。その拍子にばさりと落ちたツナギを手早くカタナに被せると、風間はタバコの箱を叩きながら様子を見守ることにした。

「ちよいと、あんたら」

勇儀たちが立ちふさがると、あいかわらずギクシャクした動きで二人は足を止めた。黒い瞳は相変わらずどこを見ているのか分からない。さあどうしたものか、と勇儀は考える。

「痛っ」

強く締められた腕の感触に顔をしかめて勇儀はキョーコを見下ろす。

心なしか顔が青かった。肩が震えている。明らかに彼女は二人に怯えていた。岩の詰まった袋を軽々投げ飛ばし、その気になれば軽く

音の壁を破れるキョーコが。

「あんた」

僅かに考えこんで、勇儀はキョーコの腕を振り払った。

「あ」

支えを失ったように、キョーコはか細い声をあげた。彼女のすぎる様な視線を感じながら、勇儀は片腕を振りかぶる。

「いいかいキョーコ」

途端に奏でられた、鼓膜を突き破るような破裂音の二重奏。

すぱぱ、と。居合いじみて隙のない見事な往復ビンタであった。

いかに鬼の力を失おうが、隻腕であろうが、彼女は未だ剛体の持ち主である。加えて二メートル近い身長から繰り出された叩くというより叩き落すようなそれは、もはや愛のビンタなどではない。殺人的威力を兼ね揃えた愛の戦術爆撃であった。

「え——ええええええええ!?!」

あまりの衝撃に二人は正反対の方向に吹っ飛んだ。

正反対の方向に吹き飛んだ一人は顔で砂利の上をスライディングし、もう一人は石灯籠に顔面から突っ込む。突然のバイオレンスな展開に付いていけないキョーコの悲鳴が、閑静な夜の神社に木霊した。

「ななな何やってるのー!?!」

「あーいうのにはこーいうのが一番効くんだよ。見てな」

「見たよ」

彼女達はぴくりとも動かない。

「あらま。おかしいねえ」

「これ、もしかするともしかするんじゃない?」

「ほら勇儀姐さんも間違いくらいするんだよ」

「するんだよ、じゃなくてさ」

いい加減死んでるんじゃないかと思えてきた頃だった。

不意に彼女達の体から黒い煙がさつと立ち昇り、櫓の木の頂上あたりでさつと夜気に散って消えた。途端に彼女達は呻き、よろよろと体を起こすと、佇むキョーコと勇儀を見て目を丸くするのであった。

「いまだ……あれ、せんぱい」

「こんな所でどうしたんですかー？」

「こんな所って言うけど、ここ、どこだか分かる？」

まだ寝惚けたような二人にキョーコが事情を説明するにつれ、二人は目を輝かせていった。そこに、ついさっきまで彼女達を支配していた不穏な影は無い。

「すごいすごい、記憶が無くなっちゃった！」

「私たち、本当にアマノジャク様に会えたんだ！」

「……どうということ？」

記憶を失うという不気味な体験をしたにも関わらず、彼女達は喜ぶばかり。釈然としない顔でキョーコが首をかしげると、興奮冷めやらぬ様子で二人は説明してくれた。

「アマノジャク様はなんでも願いを叶えてくれるんです。ただ」

「ただ、アマノジャク様に会った記憶は消えてしまう。自分が何の願いを叶えてもらったのかも忘れてしまう。だったね」

「はい。そうですけどー？」

話割って入った勇儀の存在に彼女達は困惑したようだった。勇儀が何食わぬ顔のまま「キョーコの親戚でね」と嘯くと、一応彼女達は納得した。

「へー、キョーコせんぱいって親いたんですね」

「そりゃあ人の子だし、親くらい居てもおかしくはないさ」

「言われてみると、確かに似てますよねえ」

色々失礼なやり取りがあったが、顔じゃなくて胸のあたりを見ながら親戚認定されたのがキョーコには一番辛い。

「ところで、あの、なんか顔というか全身が痛いんですけど」

「せんぱい何か知りませんか？」

「わたし知らない」

きっぱりとキョーコが言い放った。

未だに少し夢見ごこちな様子の二人に気をつけて帰るように言って、暫らくすると勇儀が口を開いた。

「あんた今日一日で大分ウソ上手くなったね」

「あんまり……よくないけど。知らないほうが幸せなことってあるよね」

勇儀と石灯笼と砂利によって二人の顔は大分怪物じみた風貌にリフォームされていた。家に帰って家族が悲鳴を上げるのが先か、鏡の前で自分が叫ぶか先か。とにかく二人がいつもの調子に戻ったようなので、キョーコは胸を撫で下ろす。

「で、どうだった？」

暗闇からタバコの火がホタルのように漂ってくる。風間だ。

「ええと、つまりだよ」

情報を整理するとT女学院の旧校舎には「アマノジャク様」という何者かが住みついている。お化けという話が一般的だが、出会った人間が記憶を失ってしまう以上、正体はわからない。会うことが出来れば願いを叶えてもらえるが、何の願いを叶えてもらったのかは忘れてしまう。

「めちやくちや胡散臭くないかい」

「右に同じく」

「わたしも」

そもそも、すべてを忘れてしまう、という時点でこの話は破綻しているのだ。

多くの怪談話がそうであるように。語り部が最終的に無事でない限り、どんなに創り込まれた話も実体験から創作へと転落する。

「だけど旧校舎には確かに何かがある」

「噂を広めたのは十中八九そいつだろうね」

ふと視線を感じて、キョーコは何気なく空を見上げた。

が、そこには誰も居ない。神社の屋根の上にきらりと光るものを見つけて目を凝らしてみると、ずらりと並んだ猫が声のひとつも上げずに、じっとキョーコたちを見つめているのであった。

第7話『カラの財布と消えたクラスメート』 おわり

### 3 『アマノジャク様、存分に客人をもてなす（上）』

どこまでもどこまでも、真紅のカーペットが続いている。それは廊下の天井に咲き誇る無数のバラから舞い降りる花卉であり、立ち並ぶ金装飾された白亜の大理石柱と相まって強烈な色彩を作り上げている。

「マヤちゃん、ボク、少し後悔してきた」

「私もそう思っていたところですよ」

小さな足でおっかなびっくり花卉の絨毯を踏みしめるのは鬼の双子だった。マヤの瞳は不安に揺れている。オルガは普段のお気楽さを取り繕ってはいたものの、マヤの腕を掴んだ手には脂汗がじつりと浮いていた。

「やっぱりお姉さんに止められた時にやめとけばよかったのかなあ」

「今更言ってもしょうがないですよ」

「だけどさあ」

うつすら霧がかった廊下は延々と続き、代わり映えのしない風景が双子の時間に対する感覚をあいまいにしていた。

ひよつとするとマズいところに足を踏み入れてしまったかもしれない——と二人は気づくが大抵そういう時は後の祭り相場が決まっている。

「出口もなくなったことですし、これはもういよいよ胸を張って前に進むしかないですね」

「よいしょ」

見え切った破滅に向かってあまりにもポジティブな開き直りを見せるマヤを横に、オルガは背負っていたバッグを下ろす。

「はい。お腹減ったでしょ」

「ありがとう」

青いパッケージのスナックバーを受け取って、マヤは小さく頷いた。ごつごつとしたチョコレートのかじりついて、二人はなんとも言えない表情を浮かべる。

「あま」

「まあ、栄養はありそうですね」

流石は双子というべきか、彼女たちはお互いの腹の虫の具合まで把握しているようだ。

やたらと奥歯に挟まるピーナッツと、上顎と下顎を接着するくらい粘り気のあるヌガーに悪戦苦闘しているとオルガが「およ」と声を上げた。

「マヤちゃん、あれ」

オルガが指で指し示したのは廊下の先。マヤが目を凝らすと、柔らかな笑みを浮かべて女性が佇んでいるのが見える。

廊下を満たす霧と闇の中に彼女がぼんやり白く浮き出て見えるのは、彼女が『お姉さん』、つまりはキョーコと同じT女学院の制服を身に着けているからだ。

「オルガ様とマヤ様ですね」

双子が進むか退くかを決めあぐねていると、よく通る声で彼女が呼びかけてきた。

「どうしてボクたちの名前を知っているの？」

思わず身構えるオルガとマヤの前に、女子生徒は全く怯まず恐れず、それどころか一層微笑みを強く顔に刻んだ。

「アマノジャク様はすべてをご存じですから」

アマノジャク様。

その名前を耳にして顔色を変えた二人を見て、女子生徒は誘うように半身で掌を闇と霧のたゆたう廊下の先へと向けた。

「こちらへどうぞ。アマノジャク様もあなた方と会えることを楽しみにされています」

言うだけ言って、彼女はさっさと歩いていってしまう。

「どうするっ？」

「行きましょう」

双子が迷ったのは一瞬だった。

もともとの無限廊下に行ってきたのはアマノジャク様に会うためだ。向こうから会いたいというのなら、着いていく他に選択肢はな

い。

「ねえ。ねえねえねえったら。おねーさん」

謎めいた女子生徒は身長でも歩幅でも双子に大きく勝る。小走りになって彼女に続きながら、まるで歩くことを学習したばかりの口ポットのようにな彼女の足取りがふらついていることにマヤは気づく。「ずばりアマノジャク様って、ナニモノ？」

おしやべりが大好きなオルガは、女子生徒の登場に警戒を深めるマヤと正反対に元気を取り戻していた。人好きのする笑顔で女子生徒の前をぴよんぴよん跳ねながら、質問を次々に投げかけていく。

「アマノジャク様のもとへ行けば分かります」

「ふーん。じゃあさ、ここってどれだけ大きいのか？ コテーシサンゼーとか大変じゃない？」

「アマノジャク様のもとへ行けば分かります」

「……………ええと。今の時間って分かる？」

「アマノジャク様のもとへ行けば分かります」

「アリガト」

少し顔色を悪くしたオルガがマヤの傍にそろそろと戻ってくる。

「なんかヤバげなんだけど」

マヤは肩を竦めることしかできない。ようやくアマノジャク様に会えると思った矢先から雲行きが怪しくなってきたのを感じる。

「行って、直接確かめるしかないでしょう。アマノジャク様が」

「アマノジャク様万歳！ 家族万歳！ 血で結ばれたすべての姉妹に、万歳！」

なにかよくないスイッチに触れてしまったのだろうか。急に大声で叫び出した女子生徒が振り返り、二人を見つめている。あまりに空っぽな微笑みと、空っぽな瞳で。

「——何者にせよ、わたし達の『ちから』は後出しが効きます。最悪の最悪の場合は大暴れして逃げることもできますから」

とはいえ、マヤも女子生徒の様子に得体の知れない恐怖を感じている。

「ねえ、ちよつといい方向に考えようよ」

相棒の緊張を解すようにオルガがふにやりと笑った。人前で芸を披露する度に浮かべる作り物の笑顔でなく、家族への親愛を込めた表情だった。

「いい方向、ですか？」

「ん。もしもアマノジャク様は」

「アマノジャク様万歳！ 家族万歳！ 血で結ばれたすべての姉妹に、万歳！」

いきなり耳元で叫ばれて、キンキン痛む耳を押さえてオルガは顔をしかめた。

「——こんな風にやかましく尊敬されているわけだし、鬼の王様の居場所くらいは知ってるんじゃないかな」

女子生徒は踵を返し、何事も無かったかのように廊下の最奥を目指して歩きはじめていた。

「もしも、さ」

少年のように短く切りそろえた金の毛先を指先でいじりながら、オルガは照れくさそうに鬼齒を覗かせて笑った。

「もしもボクたちの呪いが解けたら、マヤちゃんは何がしたい？」

呪い。

重々しい言葉を口にしたオルガの笑みの裏には、なにか言いようのない切なさが見え隠れしている。双子であるはずのマヤにも分からない感情の破片に手を触れようとして、結局マヤは途方に暮れたように頭を振った。

「……そうですね。思いきり歌う、とか」

「いいね。ホラ、前にどこかのプロダクションのおじさんから名刺貰ったじゃないか」

オレンジ色のふつくらしたカナリアがあしらわれたサイフから名刺を取り出してオルガは目を細める。何度も何度も彼女の手で撫ぜられたのだろう。本来純白だった名刺は薄く黄ばんでいた。

「無名の女の子がヒットチャート席巻、なんてどう？」

「でもあのおじさん、きっと私たちのことを忘れてますよ」

「今度は忘れられないようにしてあげればいいじゃんか。それで後ろ



盾つけて海外に進出、西でも東でも売れに売りまくって、故郷に錦を飾るっていうのはどう?」

オルガの語る遠大な計画にマヤはくすくす笑った。先ほどの陰りのある笑顔が嘘のようだ。やはり、彼女の姉妹はこうでなくてはと思う。

「それで、オルガちゃんは どうするのですか」

「およ。ボク?」

「やりたいこと。行きたいところ。オルガちゃんにも沢山あるのでしよう?」

オルガは腕組みした。唸り声をあげながら考え込んで考え込んで、最後には聞いている方が気の抜けるようなため息をついてしまう。

「わかんないや」

派手に肩透かしを食らったマヤがずっこけた。

「わ、わかんないやって。それこそわかんないんですけれど」

「ボクはマヤちゃんが幸せならそれでいいかなあ。ほら、何て言うのかな。ろまんちつく?」

「ロマンなんてありませんよ。こりゃあ予定変更です。呪いが解けたらいの一番でオルガちゃんの自分探しですからね」

「ボクのか?」

オルガはただでさえ大きな目を、目玉が転げ落ちそうなほど見開いた。

「でも悪いよ。デビュー遅れちゃう」

「何を言っているのですか」

そう言つてマヤは菌形の残るスナックバーをオルガの顔面に突きつけた。出来の悪い生徒に教師がするような、呆れ混じりの顔だった。

「夢なくして鬼も人も生きてはいられないのです。ましてや大事なオルガちゃんが自分の夢を見失っているというのなら、一肌も二肌も脱ぎましようとも」

「生きてはいけない、か」

スナックバーを受け取り、オルガは小さくかじり取る。いつの間に

か彼女が浮かべていた深刻な表情が、少しずつ和らいでいった。

「そだね。ボクも今から自分の夢を探してみようかな」

「ええ。ですから、まずはアマノジャク様に会って」

「アマノジャク様万歳！ 家族万歳！ 血で結ばれたすべての姉妹に、万歳！」

「うるさいなあ！」

「ちよつとは空気を読んでください！」

それまで完全にはいないものとして扱われていた女子生徒が大声を張り上げた瞬間、二人の鬼の堪忍袋が同時にはじけ飛んだ。

「——まあ怒ってやるな。そいつはちよつとばかり融通が利かないやつなんだ」

しかし、彼女たちの怒りはすぐにおさめられた。

耳たぶを滑りのある指で撫でるような、心地良く透き通った少女の声。彼女のたった一声で鞭打たれたように空気が引き締まったのが分かる。

「アマノジャク様万歳。 家族万歳。 血で結ばれたすべての姉妹に、万歳」

双子を取り巻く霧がさつと晴れていく。

彼女たちの前には巨大なホールがあり、そのまた先にはもつと巨大な階段がある。階段に等間隔で立ったT女学院の女生徒たちがうやうやしくかしくと、階段の上でもつともつと大きな扉が軋みを上げながら開いていく。

「私の居城へようこそ。 盛大に歓迎しよう」

天井の花から紙吹雪のように花卉が舞い散る。大扉の内側からはもうもうと白煙が階段を舐めながら流れ落ち、奥に担がれた人物を神々しく演出している。

「さあ、遠からんものは音に聞け。 近くば寄って目にも見よ。 我こそは泣く子も黙るアマノジャク。 我が名は——あ？」

ぼふう、と音を立てて煙の塊がアマノジャク様の乗った輿を包み込んだ。

「うわっ、ちよつと、これ、げエーツホ。 だっ、待って、こんなはずで

は、うへえっ」

双子からは煙の中で輿がひっくり返るのが見えた。それまで整然と並んでいた生徒たちが慌てた様子でわたわたと輿に駆け寄るが、何分視界が悪いのでビリヤードの球のように衝突を繰り返すことしかできない。

「なんだこりゃ」

流石のオルガもあきれ顔で一部始終を見守っている。もうもうと立ち込める煙幕の中からは鼻をすすする音や、悲鳴や、何かが倒れたり割れたりする音が絶え間なく聞こえてくる。

「……助けにいきましょうか」

「いやあ。でも、恥をかかせるのもアレじゃん？」

大分帰りたい気持ちがあったが、結局双子はその場に突っ立って事態が収まるのを待つことにした。

「ああ、もう。安かろう悪かろうとはこのことだな」

やがてゆっくりと晴れゆく煙幕の中から黒い大きな箱をぶら下げた少女が姿を現した時、双子の『帰りたい欲』は最高潮に達した。

「通販ってのは便利なもんだが。不良品が多すぎる」

少女は黒い箱を床に投げ出した。

黒い箱は末期の息のように煙幕を吐き出すと、それきり動かなくなってしまう。

「外の世界はうさんくさいやつばかりで困る。なあ？」

うさんくさささでは少女もひけを取らない。

ぶつけて赤くなった肘をさする少女の衣服は装飾過多のきらいらがある。

ぶてぶてと張り付けられた矢印にやたらと少女趣味なりボンをあしらわれた白いワンピースを身に着けるのは、十人町ですれ違えば十人とも振り返るような容姿の整った少女だった。

ただ、

「なあ。お前らもそう思うだろう。思うよな？」

ただ、ねじくれている。

それが、アマノジャク様に対する双子の第一印象だった。言動とい

い、服装といい、彼女からは荘厳さや神々しさよりも、ひどく屈折したものを感じる。

「きみが、『アマノジャク様』？」

「いかにも私がアマノジャク様だよ」

少女はオルガの言葉に平たい胸を張って答えるのだが、やはり尊厳と言うか、重みを感じる事ができない。いろいろな意味で軽薄な少女を前に、双子は顔を見合わせた。

「さては私のカリスマ性に恐れをなしているな」

「いや、それほど」

オルガが小さく飛び跳ねた。

明らかによくないツツコミを入れかけたオルガの腿をマヤがつねっている。万一アマノジャク様の力が本物だったとして、へそを曲げられてはたまったものではない。

「……それほどでも、あるけど」

「そうだろう、そうだろう。くふふ、私には何もかもオミトオシなのだよ」

明らかに苦し紛れのヨイショだったが、アマノジャク様には効果てきめんだった。

「ま。積もる話は私の部屋でするとしよう」

すつかり落ち着きを取り戻した生徒たちが彫像のように並ぶ大階段を登っていくアマノジャク様の後に双子は続く。

「そうだ」

階段の中頃で、アマノジャク様は思い出したように手を打った。

「改めて名乗るが私の名前は鬼人正邪。特別に気安く呼ぶことを許してやるからありがたく思え」



はなしは数時間前に遡る。

骨董ものの古下宿屋早稲川層の一室にて、キョーコは壁に背を預けていた。

むっとする熱気が立ち込めた室内で窓も開けず、明かりもつけず、肩口で切りそろえられた黒髪に垣間見えるうなじを汗がしっとり濡

らしている。

「どうしようかなあ。これ」

彼女の視線は対面の壁に立てかけられたカタナに向けられている。結局まだ勇儀の汗がこれでもかと染みだしたツナギでラツピングされたままのマヌケな姿ではあるが、研ぎ澄まされた刃の放つ妖気が却って増したようにも感じられる。

「キョーコちゃん、いるかい」

ちようどキョーコの全神経がカタナに集中した瞬間を狙ったように部屋の薄戸がノックされたので、部屋の主は驚きのあまり床から一センチばかり飛び上がった。

「お。いたいた」

ぶしつけにドアを開けて、いつものドテラを着込んだ風間が顔を出した。

早稲川荘のセキュリティは素人草野球チームの外野手並みにへばい。唯一無二の玄関を守る鍵は便所のドアに付けるような簡素なものでしかないので、四、五回捻れば簡単に開いてしまう。

「か、か、カザマさん、乙女の部屋にいきなし踏み込むなんて、どういう見ですか」

「いやあ。ノックしたぜ？」

「でも返事してなかったですよ。ああ、ビックリした」

「はいはい。悪かったね」

キョーコがよろよろと立ち直る間に風間は室内に視線を放り込んだ。目が痛くなるような風景が広がっている。

「これが乙女の部屋ねえ」

板敷きの上に敷かれたゴザの四隅は古い教科書やダンスで押さえられている。

天井から覆いもなくぶら下がった裸電球は夏の熱気の中だということに寒々しいことこの上無く、簡素過ぎるちゃぶ台や万年床を見るに、予算のない劇団の舞台セットじみている。

おおよそ乙女というファンシーな言葉とは結び付かない殺伐とした空間にうつすら漂う杏のようなキョーコの香りと壁際にかけて

た制服が無ければ、男の部屋と言われたほうが納得いく。

「うーん。絶望と貧乏のにおいがするな」

改めて鳴無王国の絶望的な財政状態に戦慄した風間を、恥ずかしそうにキョーコが部屋の外に追いやった。

「ちよつと、もういいでしょう。行きますよ」

当然のように鍵を閉めずに廊下へ出てくると、キョーコは風間と並び立って歩いた。

「今日、ゆーぎはいないんですね」

「あいつは今日も監督ン所で交通誘導のバイトだよ。ゆっぴーはデカいからよく目立つんだとさ」

色々と派手な勇儀が目立つのは別に身長のせいだけではないような気がしたが、キョーコは黙っておくことにした。

「ゆーぎが頑張ってるなら、わたしも頑張らなきゃですよね！」

と、鼻の穴を広げて言ったそばからキョーコは表情を曇らせていく。

「頑張らなきゃ。頑張らなきゃなんだけどお……」

すつくと背筋を伸ばした姿勢から徐々に前かがみになっていく姿は、猿から人類への進化の歴史を逆回しに見ているようであった。

「おいおい、浮き沈み激しすぎるだろ」

近くのブロック塀にへトへトとへばりつき、頭上にどんよりとした雨雲を漂わせ始めたキョーコの背後で風間は肩をすくめた。

「ま。気分がノらないのは分かるけどな」

風間がキョーコのもとへ持ち込んでくるバイトはどれも信じられないくらい給料が良く、しかし決して長続きすることはない。むしろ誰もが愛想

よくキョーコを迎え、もともと人当たりの良いキョーコもすぐに職場に馴染んだ。

そしてキョーコはすべてを破壊した。

「わたし、働くのヘタクソかもしれないです……」

工事現場で人をおせんべいにしかけてから薄々感づいてはいた。ビル清掃でモップを持たせれば床をぶち抜き、居酒屋ではどうやった

のか厨房が火の海と化した。

「やつぱ、体がイマイチかい」

「はい。前より不器用になったような気が」

大狗との死闘で鬼の力に目覚めてからというもの、キョーコの体調はすこぶる良い。怖いくらいに。

「今朝はうっかりバスのつり革を握りつぶすところでした」

シャープペンシルは芯がもたないのでエンピツに持ち替えた。携帯は羽で撫でるように操作しないとボタンどころか本体を握りつぶしてしまう。馬力が上がりすぎたせいで、ここ数日はまるでシヨベルカーに乗って日常生活を送っているような気分だった。

「あの、風間さん、わたしやつぱり今回のバイトは」

「すまん。俺が悪かった!!」

これ以上迷惑はかけられんとバイトを辞退しかけた瞬間、風間が猛烈な勢いで謝り始めたのだからキョーコは目を白黒させるしかない。

「え、えええ。いきなりどうしたんですか」

「おつちゃんのプロデュースが少しばかり間違っていたんだ。許してくれ。そしてもう一度だけチャンスをくれ!」

「ぶ、プロデュースって何をですか」

風間はキョーコの両肩をがっちりホールドする。

「もちろんキョーコちゃんに決まっているだろう」

紹介するバイトがことごとく失敗に終わったことが余程彼のプライドを刺激したのか、その瞳には無駄な熱量とやる気がみなぎっている。正直怖い。

「気を悪くしないで欲しいが。正直キョーコちゃんのオツムは出来がちよつとアレだ」

「はあ」

「それが例の馬鹿力を持つちまったんだから尚更たちが悪い。もうキョーコちゃんは運転手不在の上にブレーキのぶっ壊れた暴走機関車みたいなもんなんだ」

「はあ。そう言われれば、そうかもしれないです」

そこまで言って気を悪くするなという無茶振りをする風間も風間

だが、そこで素直に頷いてしまうキョーコもキョーコである。

「だがキョーコちゃんは優しいし、何より器量よし子ちゃんじゃないか。今日はその線でいこうと思う」

「線って、どの線ですか」

「大丈夫もう何も心配することはない。きつとうまくいく。絶対うまくいく」

風間は言いたいことだけ言って表通り目指して裏路地をずんずん歩いていく。それまで呆気に取られていたキョーコは小走りにその後を追った。



#### 4 『アマノジャク様、存分に双子をもてなす（下）』

二階堂アンリは転校から数日で早くも優等生の名をほしいままにしていた。

帰国子女の転校生は学業も運動も優秀そのもの。

しかし元から他者を遠ざける傾向にある彼女は、尚更に周囲との溝を深めていった。

『孤独ではありません』

アンリはすぐに反論することだろう。

『これは孤高と違いますのー!』

群れの中の一匹であることに執着したりはしない。

たいていのことを一人で出来る彼女が頭数を揃えたところで、かえって小回りが利かなくなるだけだ。

そう、たいていのことはできる。大抵、おおむね、一部を除いて。

「嘘でしょ」

今、彼女の目の前には電柱がある。

バツマークのひつかき傷は、先ほど彼女が角を曲がるときに目印として残したものだっただけだ。

「……うう。帰りたいですわ」

がつくりとうなだれたアンリの額から、汗の粒が滴り落ちた。こんな調子でかれこれ数時間、炎天下の下を彷徨っていた。

「だいいち、どうしてわたくしは同じ場所をぐるぐる回り続けているのですか。おかしいと思いませんか!?!」

アンリに怒鳴りつけられる電柱は、さぞ迷惑しているに違いない。鼻息を荒くしたまま電柱にもたれ、アンリはウナギの住処のように細くのたうった通りに目をやった。

日暮れの光の下に立ち並ぶトタンの家々、灰色の石塀、等間隔で立ち並ぶ標識と電柱——まるで方向感覚を狂わせるために存在するよくな路地だ。

「これだから田舎町は嫌いでしたよ」

さらりと町に責任を押し付けているが、原因は他にある。

アンリは度を越した方向音痴であった。

「……これじゃあ、また寮のおじさまに目をつけられてしまいますわね」

汗ばんだ肌の上に乗った腕時計へと目をやり、乾いた息を漏らす。

T女学院の学生寮は厳しいことで知られている。とりわけ、門限七時は鉄の掟であった。

「廊下の雑巾がけ、窓拭きに風呂掃除……こんなことなら届け出を出して置けばよかったかしら」

もちろんペナルティも充実している。

しかし、ただの散歩がここまで大冒険になるなど、本人含めて誰にも予想はできなかった。

「せめて今日中には戻って、なんとか言い訳しなくちゃ、ですわね」

脱水気味の体から気力を振り絞って電柱を離れたアンリは、そのまま危なっかしく左右に千鳥足を踏んだ。半日近く水分を口にしていないのだ。仕方ない。

自室の冷蔵庫で冷やしてある麦茶に思いを馳せながら顔を上げる。

「あら」

数間先の十字路の角から子供が二人連れだつて飛び出してきた。

「あの子たち、確か」

二人組は向かいの路地へと入っていく。

ぼんやりと見送っていたアンリは我に返って、その後を追う。

「お——お待ちになって！」

もつれる足で必死に走って角を覗き込んだ時、すでに、二人は後ろ姿も残さず夕闇に消えていた。

「そんなあ……あんまりですわ……」

自分の頭を殴りつけたい衝動に駆られた。

あの二人の後を追うなり話をきくなりしていれば、ようやく迷宮を脱出できる目もあったというのに。

「にしても」

気を取り直すと、不意に疑問が湧いた。

あの二人組は、おそらくアンリが知っている相手だ。二人の名前は忘れたが、鳴無響子とかいうぼんやりした、頼りにならない先輩と一緒にいる姿をよく見かける。

「子供がこんな時間に、どこへ？」

家に帰る——のではない気がする。

なにやら大荷物の詰まったりリュックを背負っていたようだし、アンリの鋭い嗅覚が二人の汗の匂いを拾うこともなかった。どこかで寝起きして、これからどこかへ向かう最中だったのではないだろうか。

しかし、双子よりも自身の体調が、今のアンリにとって最も心配するべき問題であった。

頭を振って考え事を振り落としたアンリは、まさかピンチを乗り越えるものがあるとも知らず、反対側の路地を覗き込んだ。

「あ、ああ。神様っ！」

コンビニだった。

双子がやってきた方向。すっかり夜の帳が落ちた住宅街に、店先のガラスから漏れる明かりが煌々と差している。

ほとんど無意識にショートパンツのポケットを確かめて、アンリは安堵の息をつく。よかった。財布はある。

それまでの疲弊っぷりが嘘のような軽やかな足取りで彼女はコンビニを指した。



「いらっしやいませー」

ぼんやりした雰囲気店の店員の前を風のように抜け、アンリは冷蔵庫のガラス戸に張り付いた。

「おおおおお……」

恥も外聞もかなぐり捨て、血肉にありついたゾンビのようなうめきを上げる。

結露したガラスに残った自分の人型をしばらく見詰めた後、彼女は数本の炭酸飲料を抱えてレジに向かう。

「これ、いただけます？」

例の女性店員が手間取りながら会計していくのを、アンリはもどかしい気持ちで見守った。

「以上で——円になります」

「じゃあ。ああ、細かい手持ちがありませんの。これで」

財布から札を抜き出して、アンリは店員の異常に気付いた。

彼女は慎重に慎重に缶を手にとって袋に収める。釣銭にせよそうだ。信じられないことに、一枚一枚手渡しだ。

「あの、もし」

待っていたのでは干からびてしまう。

「あ、ああ、申し訳ないです。いますぐ——ひゃあっ！」

店員の手の中で、炭酸の缶が勢いよく弾けた。

とつさに身を引いたアンリの鼻先を茶色いコーラの奔流がかすめて、床にまだら模様を描く。

「ごめんなさい、ごめんなさい、服とか髪とか、汚れませんでしたか？」

「……というか」

ようやく手元から視線を上げて、アンリは店員の顔を睨んだ。

「こんな所で何をしているのですか………キョーコ様」

「あ、あはは」真つ二つにちぎれた缶を手にしたまま、店員の制服に身を包んだキョーコは困ったように笑った「バレちゃった？」

◆◆

「どうして欲しいですか」

モップとバケツの隣に三本目の空き缶を積み重ねて、アンリはキョーコを睨みつけた。

「学校に黙っていてほしい。です」

「……まあ、そうなりますわね」

T女学院は規則に厳しい学校だ。学生寮の門限をはじめ、バイト禁止も、鉄則の一つだった。

「お願い。なんでもするからさー」

なんでも。

心惹かれるワードだったが、アンリも門限を破っている以上強く出

られない。

「わたしも、このことは黙っておくからさ。ね？」

「では、わたくし達は共犯者ということだ」

共犯者という言葉に、キョーコの眉がピクリと動いた。

圧倒的「よいこ」を自称するキョーコにとって、耳に痛い言葉なのだろう。

「これには深いワケがあつてね……」

泣きそうな顔で腕にすぎるキョーコを、アンリは邪魔そうに振り払った。

「どういうワケですか。仰ってくださいな」

「しょ、奨学金が打ち切りになつてね、学費が払えなくてね、それで、えと」

「つまりお金が無いからルールを破つてバイトをしていると。やつぱり浅いですわね」

その通りだった。

カウンターに突つ伏したキョーコを尻目に、アンリはアイスの包装を破り始めた。

「眠くなつたりしませんの？」

「なるよー。お客さん、ほとんど来ないし」

どうしても人の目に触れる接客業をお忍びのバイトとして紹介されたときは風間を恨んだものの、今ではその理由は明白だった。

「このお店、呪われてると思う？」

「残念ながら。バツチリ呪われているようですわね」

こんな住宅街のど真ん中だというのに。

二人が長々と駄弁る間、自動ドアが開くことは一度もなかった。

「ところでキョーコ様。その『ほとんど』の中に、共通の知人がいたのではなくて？」

キョーコは頷いた。

「双子ちゃんがね、ついさつき」

「ええ。名前は憶えていませんが」

「オルガちゃんとマヤちゃん。引っ越しの時に会ったじゃんか」

思い出したくもない迷子の記憶を掘り起こされて、アンリの眉間にうつすらしわが寄った。

「……あまのじやく様に会いに行くって言ってた」

アンリの心情など知らず、キョーコは続ける。

「それで行かせたんですの？ この暗い中、子供二人で？」

「止めたよ、もちろん」

「でも、あの子たちは聞かなかった」

「どうしてもって、言ってた。どうしても確かめなくちやいけないことがあるって」

確かにアンリが見かけた双子には、張りつめた雰囲気があったように思われる。

「ねえ、ウワサっていうのはさ」

床の一点をじつと見つめながら、キョーコは口を開いた。

「ウワサは、ただのウワサだよね」

「それは「アマノジャク様」のことですか？」

頷くキョーコには、元気がない。

双子を行かせてしまったことが、たまらなく心に引つかかっているようだった。

「イワシの頭も信心から。という言葉がございます」

薄青色の棒アイスを指揮棒のように振りながら、リズムを取ってアンリは呟いた。キョーコはというと口を半開きにした奇妙な表情で固まっている。

「ヒイラギイワシ。ご存じなくって？」

キョーコは知らないのではない。突拍子のない話題転換に、頭がついていけないのだ。

「節分にイワシとヒイラギの葉を玄関にさす、アレ？」

「ええ。魔除けと称して堂々と門扉に生ゴミを飾る、アレですわ」

「み……身も蓋もないね」

「ところで、実際に魚の頭と木の枝にそんな力があるとお思いですか？」

「ううん。あれは何と言うか、習慣で飾るもの、って感じじゃない」

「そう。ですが、あれが飾ってあれば、この国の人間がありがたみを感じるのも事実」

キョーコは黙って話を聞き続ける。

アマノジャク様と節分に、何の接点があるのだろうか。

「では口裂け女」

「ええ？　また話が変わっちゃうの？」

「いいから。ご存じないかしら？」

二転三転するアンリの話についていくのは、嵐の海に浮かぶ船の甲板にしがみつくようなものだ。

「えと。口が、こーんな感じになってる人？」

キョーコが口の端を引つ張り上げて見せる。

アンリの視線はかじりかけのアイスに注がれていた。「あたり」の刻印が棒に無いのを見て、彼女は肩を落とす。

「噂の発端は70年代。発祥は関東とも、ここ北陸とも言われています」

自分が生まれる二十年も昔。キョーコにとって、それはカンブリア紀と大差ない。

それでも、遠く離れた世代にさえ己の名前を刻む口裂け女という怪異は、やはり特別なのだろう。

「わたし、きれい？」

アンリが問うた。

キョーコもいくらか彼女の脈絡のなさに慣れが出てきたので、間髪入れずに答えていた。

「うん。きれいだよ」

「いちいち分かり切ったことを聞くほど、わたくし、愚かではなくつてよ」

アンリは胸を張って見せた。

「そうではなく。この怪人は、だれ彼構わず訊いてくるのだそうですわたし、きれい」と

しかし、その頬は僅かに赤い。まんざらでもないのだろう。

「じゃあ、今みたいに「きれい」って言うの？」

「これでもか」と、マスクをめくって大きく裂けた口を見せつけてくる、とか」

「じゃあじゃあ、「きれいじゃない」って答えると?」

「隠し持った鎌で襲い掛かってきます」

キョーコは絶句する。なんて傍若無人な怪異なのだろうか。

「ですが、これだけではただの怪談話」

アンリはレジのカウンターに身を乗り出して、声を潜めた。

「なんとこの口裂け女、実在したのです」

まるで、おおつぴらに話せば今にも件の怪異が陳列棚の影から出てくるとでも言いたげだった。

「実際にいた?」

「当時は大騒ぎでしたのよ。集団下校に警察の出動。果てはコスプレした愉快犯が捕まる始末」

ただの噂話がここまで広まった理由は、今日に至るまで解明されていない。

ただ、新型のウイルスのように、口裂け女は日本中で猛威を振るった。

「これは「はずれ」の棒ですわね」

アンリが掲げたアイスの棒を前に、キョーコは恐る恐る頷いた。

「百人に聞いたら、全員がキョーコ様と同じことを答えるはず。ですが、とあるへそ曲がり「これは当たりだ」と言い始めた」

次第にその嘘を信じる人数が増えたとする。

一人が十人に。その次は五十人に。そして、いつしか全員が「あたり」だと主張しはじめたら――?」

「その「はずれ」は、もはや「あたり」と変わらないのでは?」

熟練の芸人が演じるパントマイムのようなものだ。

言葉や小道具が無くとも、観客は演者の動きで頭の中に状況を創り出す。彼らの見つめる空白は、もはや空白ではない。そこにカバンやボールが確かに現れるのだ。

「イワシの頭も口裂け女も同じこと。大衆が思い描くから、そこにありがたみが生まれる。力が生まれる」



——良くも悪くも。

アンリがあえて口にしなかつた締めくくりの言葉が、キョーコには察せられた。

「それを、信仰と呼ぶこともあります」

一息ついてから、アンリはおどけた調子でアイスの棒を指し示した。

「ですからコレ、引き換えてくださらない？」

「それはダメ」

「でしょうねえ」

アンリが「はずれ」棒をへし折る音が大きく響いた。それからしばらくかの沈黙が訪れた。

「やつぱり、アマノジャク様は普通じゃないよ」

口を開いたキョーコの声には、確信めいたものがあつた。

「確かに。この短期間に、この噂の広がりには普通では在り得ないものかもしれないわね」

旧校舎のアマノジャク様。記憶と引き換えに、なんでも願いを叶えてくれる救い主。

「仮に、アマノジャク様自身が噂を広めているってことは？」

「あら」面白いおもちゃを見るように、アンリはキョーコに向ける目を細めた。「どうしてそうお思いに？」

「あれは、たぶん口裂け女とは違う。実際に生きている何かだとわたしは思う」

「根拠はありますか？」

「無いよ。なんとなく」

嘘だ。

キョーコは旧校舎を根城にする鬼人正邪という少女を知っている。

彼女と今回の騒動と、関係があるのは明白だ。

「あれやこれやと憶測を交わすのは趣味ではありませんが——いいですわ。続けてくださる？」

それでも後輩たちにした仕打ちの犯人が彼女だったと考えたくない一心が、よいこの口に嘘を吐かせていた。

「噂が広がれば、それだけ信仰つてやつも強くなる。アマノジャク様の狙いがそれだったら？ 百人に「あたり」と言わせたら、何が起るのかな」

「ふふ」

不意にアンリが笑い声を漏らした。キョーコは怪訝そうに彼女の顔を見詰める。

「申し訳ありません。キョーコ様がわたくしと同じことを考えていたものですから、つい」

アンリは決して口元を覆う手を離そうとしない。

「そうですね。あまのじゃく様が悪意ある個人にせよ、善意の聖人にせよ、このままでは——」

彼女が必死に笑いの発作を堪えているように、キョーコには見えなかった。それと、何か、どすぐろく、沸騰するような別の感情を。

「カミサマになってしまう。かも」

パチン、と手を叩いて、アンリは話を締めくくった。

「いかがでしたでしょう。二階堂、夏の夜長の怪談話。存分に背筋を冷やしていただけたのなら——あら？」

キョーコは聞いちゃいなかった。

「やつぱり、放っておけない」

冷えるどころか、彼女の中で何か、厄介なものが燃え上がり始めている気配を、アンリは嗅ぎ取った。

「わたしが行かなきゃ。行って、あの子たちを助けなきゃ」

いそいそとバイトの制服を脱ぎ始めたキョーコの目は座っている。「そ、それではわたくしこの辺りで」

踵を返したアンリの肩をむんずとキョーコが掴む。

そのまま勢いで一回転した彼女の前に、制服が突き出された。

「アンリちゃん」

「は、はい」

「人助け。お願いしてもいいよね」

「で、で、でも、わたくし、レジ打ちなんて」

「裏に店長いるから、困ったら呼んで」

自動ドアが開く暇も惜しんで戸をこじ開けると、キョーコは一度振り返った。

「よろしく」

「じゃないー」

彼女の耳にアンリの叫びが届いたかは怪しい。

白いシャツの背中が夜の闇に紛れたのを見て取って、アンリはがっくり肩を落とした。

「しばらく、外出は控えましょう」

律儀にも制服に袖を通して、アンリは今日という日を呪う。ちらりと見えた時計は示し合わせたように日付を跨ぐ瞬間で、彼女の心は尚更に重くなるのであった。



「むーふーふー」

底が抜けそうな紙袋を抱えて勇儀は夜の街を歩く。

袋の中身はすべて酒だ。

「たまないねえ。楽しみだねえ」

明日は仕事が休み。一日中酒盛りして過ごしてやる予定だ。

「お。酒のにおいが！」

瓶のこすれ合う澄んだ音色にうっとりする彼女の前に、小柄な少女がひらりと舞い降りた。

「おや。おやおやや。誰かと思えば星熊あ。やっぱりあんと酒とは切っても切れない関係ってわけだねえ」

くるり、とバレエダンサーのように身をひるがえし、少女はかわい子ぶりっ子なポーズを取って見せる。

「もちろん私も——っておい、行くな。お願い、待って！」

その隣を、勇儀はつかつか通り過ぎていく。

「なんだよう。せつかく広い現代で再会できたんだ。もっとう、あるだろう？」

「無いねえ。全く無い」

早足の勇儀を、ぶうたれつつ、萃香が追いかける。

「いい加減におしよ、あんた」

「あんたもね。いくら記憶が無いからって、トモダチに冷たくしてい  
いと思ってるワケ？」

二日酔いのような頭痛が勇儀を襲っていた。

最近萃香に付きまとわれている。昼も夜もなく、暇さえあれば、  
ちよつかいを出してくる。

「馴れ馴れしいのは好きじゃないんだよ」

「へーえ。キョーコとは上手くやってるじゃないか」

「あれは——あれは、別だ。あいつはあたしの過去を知ってる。だか  
ら、イヤイヤの、しゃあなしで」

「私だってそうだよ。星熊、昔のあんた、知りすぎるくらい知ってるも  
ん」

痛い所を突かれて、勇儀は黙り込んだ。

「あんた、私のこと嫌いだろ」

アーケードに敷き詰められたタイル。勇儀のかかどがそれを叩く  
リズムが、わずかに乱れた。

「そんなんじゃない。あたしは」

「嘘かよ。ますます昔のあんたらしくくないよ。そういうのはさ」

勇儀を追いかける足音が、束の間やんだ。

「萃香？」

ぐっと、堪えるように。じっと、待つように。

地面を見つめたまま、萃香は立ち尽くしていた。

「へへ。やっと名前で呼んでくれたね」

寂しそうだった。

彼女が鬼であるということは、もはや疑いようもない。だが、この  
瞬間、彼女が外見相応の、なんら特別な力を持たない少女として、勇  
儀の目には映った。

「……あんた」

少し考えて勇儀は地べたに紙袋を下ろした。

「少し、飲もうよ」

茶色い泡盛の瓶を取り出して見せると、萃香の表情はにわかにもる

くなくなった。



「だからさあ、言っちゃったワケ。存在自体がインチキな奴の話を信じるなって。そしたらさ、そいつ聞かないの。私の話なんて、なーんも」

萃香は鯨のように酒を飲んだ。

「ああ、そう」

萃香を誘ったことを、勇儀は後悔していた。

明日のオタノシミに買い込んだ酒をあらかじめ飲みつくした萃香は、上機嫌に自前のひょうたんをあおる。

「あんたのソレ、どうなってるのさ？」

「んー、伊吹瓢いぶきびょうのこと？」

古い住宅街の公演。

ベンチのわきに瓶のピラミッドを築いた萃香は、サツマイモの皮のような色をしたひょうたんを掲げた。

「これはねえ。呑めば飲むほどアラ不思議。無限に酒が湧き出る魔法のひょうたんなのさ。ひっく」

なら最初から使えよと呆れつつ、勇儀は感謝もする。

萃香という暴飲の化身が野放しで尚、世の中からアルコールが消えないのは、このひょうたんのおかげに違いない。

「傷の具合は？」

どうしても気になったことを、勇儀は訊いた。

「ああ、これ？ 見た目ほど痛まないから、大丈夫だよ」

萃香は片手を持ち上げて見せた。

祭りの夜にキョーコの振るうカタナで刺し貫かれた傷。少女の細腕に巻かれた包帯は、見ていて痛々しいことこの上ない。

「でも安心した」

大事そうにひょうたんを抱えたまま、萃香は呟いた。

「なんだかんだで優しいとこ、変わってないもの」

「昔といっしょで、か？」

勇儀は考える。

記憶と体の大半を失って、ミヨシの経営する下宿屋に流れ着いてから数日が経つ。それで、一向に記憶が戻る気配がない。

「そんなものに拘るのは、やめたほうが良いのかねえ」

戻りたくないのなら、戻さない方がいいのかもしれない。ならば、むしろ、

「なあ萃香。あたしは」

「しっ」

酔っているとは思えないほど鋭い動きで、萃香は勇儀の口元を塞いだ。

「あれ、見える?」

言われなくとも気づいた。

確か、オルガとマヤ。祭りの日に奇怪な大狗に追い立てられていた双子が、公園のフェンスの外を走り抜けていったのだ。

「追うよ、星熊」

「おい、ちよつと待ちなよ。なにをいきなり」

「面倒ごとの臭いがする」

包帯巻きの手で鼻の下を擦って、萃香は楽しそうに笑った。

「放っておけないだろ?」



「本当にここなのかい?」

勇儀のくしゃみが張りつめた空気を震わせた。

「間違いないよ。あいつら、ここに入っていたから」

目に見えるほど舞い散る埃が、まるで煙幕のようだった。

双子を追って十数分。キョーコの通う高校の旧校舎までたどり着いたはいいものの、そこに彼女たちの姿はなかった。

「見ろ、星熊」

萃香のもとへ、勇儀は向かう。

小鹿が歩いたような足跡がふたつ、とある教室の扉の前まで続いている。

「いいね。いち、にの、さんで行こう」

ぐでぐでに酔っ払っていたとは思えないほど張りつめた表情で、萃

香が耳打ちした。

「ああ。まかせときな」

教室の扉に手をかけ、萃香が指で合図する。

いち、にの――

「さんッ！」

勢いよく引き戸を蹴り空けて、二人は言葉を失った。

「おいおい。こりゃあ、どういうことだ」

返す言葉を持たず、萃香はただ、かぶりをふった。

「わからない。わからないけど」

勇儀の掲げた懐中電灯で、床に積もった埃が照らし出される。一対の小さな足跡は、教室の中ほどで唐突に途絶えていた。

「やな感じがするね」

あたりには、ただ、湿ったカビ臭い空気が漂っていた。



奇妙な部屋だった。

金無垢の廊下の豪華さも、真紅の大階段の威容もここにはない。ただただ、奇妙だった。

「適当に座ってくれよ。何か持ってこさせよう」

「いや。ボクたち、別に長居する気はないから」

一切が白く塗られた教室では重力が完全に狂っていた。整然と並べられた学習机とイスとが天井に張り付き、三人を見下ろしている。

「そうか。もてなし甲斐がないな」

双子と正邪のかけたソファ、そして間に挟まれた長いテーブルだけが、唯一狂った法則を無視している――のかもしれない。実際のところ天井にへばり付いているのが机なのか自分たちなのか、双子には判断できなかった。

「鬼の王様を探している、か」

双子がこの場所にきた目的を聞き終わると、正邪はソファに深く体を預けた。レザーと骨組みが大きく軋む音に、双子が面持ちを一層固くする。

「一体ソイツにどんな用があるんだ？」

双子——オルガとマヤは顔を見合わせ、ほとんど同時に首を横に振った。ややあつて、口を開いたマヤがか細い声で言った。

「それは……お答えしなければいけませんか」

「いいや。興味だよ、興味」

はぐらかすような答えだったが、別段正邪が気を悪くした様子はない。教室の隅に置かれた柱時計の振り子にシンクロするように、彼女が手にするヤスリのリズムは一定だ。

「王様。オニの王様ねえ。こっちは思春期の学生共を纏めるだけでも苦勞しているつてのに。鬼なんて年中反抗期の連中の首根っこ捕まえられるやつがいるのかね」

正邪は目をすがめる。彼女の手先でヤスリが動くたび、鮮やかに彩られた爪が刃物のような鋭い輝きを帯びていった。

「で、あんたは王様の居場所を知ってるの、それとも」

「ああ、そうだったな」

正邪は手入れ道具を机に置いて、双子を交互に見つめた。

「な、なに？」

何とも言えない、居心地の悪くなる視線だった。思わず声を上げたオルガに目を留めると、正邪はにんまりと笑って見せる。

「いや。面白いねえ、お前たちは」

もはや見慣れた薄笑いを浮かべたまま、正邪は黙り込んだ。居心地の悪い沈黙が充満した。いい加減焦れた双子が口火を切ろうとした頃合いを見計らったように、正邪は口を開いた。

「結論から言えば知らんよ、王なんて」

双子の顔に明らかな落胆の色を読み取りつつ、正邪は間髪入れずに続けた。

「とはいえ、私を頼ってきたお前らをこのまま帰したのでは全能の「あまのじゃく様」の名が廢る。そこでひとつ取引といこうじゃないか」「取引ですって?。」

正邪は微笑みと共に白い歯をこぼした。

「お前ら、私の家来になれよ」

「じよ」



「まあ聞け。損はさせないぞ」

冗談じゃない——言いかけたマヤを片手で制すると、正邪は言葉を繋ぐ。

「お前達が条件を飲むなら、王様とやらについて、こいつらを使って調べさせてやろう」

正邪が手を差し伸べる。

それまで塑像のように身動きせず控えていた女生徒の一人が歩み出て、恭しく正邪のもとにかしずいた。

「もちろんタダでこき使うつもりはない。福利厚生は充実させるし、定時にはきちんと帰らせる。最近は色々うるさいらしいからな」

「随分と優しくしてくれるんだね」

オルガはにこりともしなかつた。正邪の申し出の裏には何かがあるのは間違いないし、それを隠そうともしない。

「お前達、幻想郷を知っているか」

双子はそろって首を傾げた。

「私の故郷のようなものだと思ってくればいい。今は失われた、閉ざされた世界」

「もう無いってこと？」

「そうだ。腹立たしいこと、私より先にどこかの誰かさんがぶっ壊しやがったのさ」

そこで正邪は一度言葉を切った。うんざりした様子を演じてはいしたが、彼女の目は、故郷に思いをはせるように遠いところを見ているようだった。

「……その、幻想郷が消えた後も執念深く私を追い続けている奴らがいる。お前たちにはそいつらの相手をしてもらいたいんだ」

「あんだ、恨みを買いやすそうだもんね」

「つくづく正直な奴らだな！」

「さて」正邪はすぐに気を取り直すと、テーブルの上に手を組んで双子の出方を伺った。「どうする？」

「いやです」「お断りだ」

間髪入れず、すげない返事が飛んだ。

「一応、理由を聞かせてくれないか」

「あんたの言葉には誠実さがないからだ」

オルガの隣で、マヤが力強く頷く。正邪は気の抜けた笑みを浮かべながら、一層深くソファに埋もれた。

「いやはや、本当に正直だなあ」

「悪人の手助けなんてしたくありませんから」

「よそをあたってくれない？」

「例えばお前たちの『お姉ちゃん』とか、か？」

まさか正邪の口からその名前が出てくるとは。

思いがけずひるんだ双子を、満足した様子で正邪は見据える。

「あの人を知ってるの？」

「浅からぬ縁があつてな。それに、一度昼飯をもらったこともある」

正邪はひらりとテーブルを飛び越えた。双子が身構える。

「素直に帰す気はないってやつ？」

正邪は黙って、生徒たちに顎をしゃくった。

彼女たちが教室のドアを開け放つと、その先にはカビ臭い旧校舎の廊下が広がっていた。

「ムリヤリつてのも悪くないが、今日は気分がノらないんだ——ああ、それと」

靴のかかとを響かせてオルガに近づくと、正邪は怯む小鬼の腕を取って強引に引き寄せた。

「ちよ」

袖の上から爪が食い込んで、オルガは顔をしかめた。

「ねえ、帰してくれるんじゃないか」

「最後に誤解を解いておきたくてさ」

オルガの耳に口を寄せて、正邪は囁いた。

信じられないほど甘やかな響きのある正邪の言葉を聞いていると、まるで彼女に耳孔を舐め回されているような錯覚を覚えた。

「誤解？ あんたが悪人だって言ったこと？」

首筋の毛を逆立てつつ、オルガは平静を繕う。

「そこらへんの判断はお前らに任せるよ。私が言いたいのは誠実に

ついでのことだ。私がちゃんとしたヤツだつてことを伝えておきたくてな」

「はん」オルガは鼻を鳴らした「意外と小さいことにこだわるんだね」

「なら証拠を出してよ。あんたの言う、誠実さつてやつのは」

「いいだろう」

今や、正邪の唇はオルガの耳朶に触れそうな程近い。オルガの背後に立つマヤは、困惑した面持ちで立ち尽くしていた。

「お前は何か、嘘をついているな」

一言。

たった一言が、オルガを突き崩した。

「ふふ。その顔を見るのは二度目だな」

すっかり強張ったオルガの顔を見下ろすと、正邪はマヤを一瞥した。彼女はただ、困惑して立ち尽くしている。

「ボクはウソつきなんかじゃ」

「静かに。かわいい姉妹が怪しむぞ」

正邪の手の下でオルガの体が強張った。

「鬼の王がいないと知った時もそんな顔だったな。落ち込む姉妹の隣でうすら笑っていた。心の底から安心していた」

「あ、あんたはボクの何を知っているんだ」

「なにも。ただ、嘘の臭いには人一倍敏感でね」

正邪はそつと手を離れた。

「お前が隠し事をしていること。そこのチビにバレると困ること。そのくらいは嗅ぎ分けられる」

オルガの顔には恐怖がありありと浮かんでいる。

「だが、哀れな姉妹には黙って置いてやった。それが、私なりの誠実さつてやつだ」

「……ぼくは、そんなんじゃない……」

「無理はよくないぞお」

波が退くように、正邪の声に張りつめていた冷たさが和らいだ。

「人だろうが鬼だろうが、心のサイズは変わらない。抱えきれなくなることだつてあるだろうさ」

正邪は笑っていた。

いつもの悪鬼じみた微笑ではない。慈母のように優しく、柔らか  
に、笑っていた。

「そうなたらここに来い。その時は、お前の苦しみを、苦悩を、ひつ  
くり返してやるから」

オルガは恐ろしくなった。

正邪が自分を墮とすため、演技をしているのは明らかだ。しかし、  
そう分かって、今この瞬間にも彼女の胸の中に飛び込みたいと思い始  
めている己のことが、なによりも恐ろしい。

「その子を離してください。離して！」

縫い留められたように動けないオルガを、マヤが引きはがす。オル  
ガはよろめくように正邪から離れた。

「オルガちゃんに何を言っただんですか」

「ちよつと口説いただけさ」

「ふざけないで！ 本当のことを言っで！」

「行こう」

「でも」

「いい。ここにいると気分が悪くなる」

食って掛からんばかりのマヤを後に、オルガは血の気の引いた顔で  
歩き始める。マヤは迷ったが、すぐにその後続いた。

「お前らのお姉ちゃんによろしく」

双子の背中に正邪が放った言葉に、はた、とマヤが足を止めた。結  
局彼女は何も言わず、刺すような視線を一瞬送って寄越しただけだっ  
た。

「可愛くないチビ共め」

扉が閉まって尚留まろうとする生徒たちを手で追い払うと、正邪は  
窓を開け放つ。生温い夜の風を胸いっぱい吸い込んで、吐く。

「ぬるいな。だが、風向きは悪くない」

息とともに何もかも体の中から吐き出して、どこかへ飛んでいけそ  
うな気分だった。正邪は絶好調だ。

「来い、鳴無響子。お前と私で下克上だ」

◆◆◆  
「おわーッ!」

静寂と暗闇とを、勇儀の絶叫がつんざいた。

「ぎゃあー!」 「ぎゃあー!」

続いて、甲高い悲鳴がふたつ。

「何よ。きゃあきゃあ騒いじゃって」

床に転がった懐中電灯を拾って、萃香は埃が濃密に漂う廊下に光を放つ。

「……あら」

白目をむいて倒れる勇儀の上に折り重なっているのは、まぎれもなく、追いかけていた双子だった。

「よ。だいじよぶ?」

「あ、ありがと」

萃香が差し出した手を、オルガが取った。

「やい星熊。だらしなく伸びてるんじゃない!」

「きゆう」

したたかに後頭部を打った勇儀は、ガマガエルのように腹を見せて床に転がっている。

「ええと、あなたは」

「私? 私は伊吹萃香。こっちのデカいのは知ってるだろ?」

勇儀のタフさを知っている萃香は、さして心配しない。手早く自己紹介しつつ、爪先で勇儀を蹴り起こす。

「な——なんだいアンタたち、いきなり人サマを尻に敷くたあ、いい度胸じゃないかい」

座布団の役に徹していた勇儀が、意識を取り戻した。

「ご、ごめん」

双子が慌てて、勇儀の上から退いた。

「ガキの尻に敷かれるたあ、大層な趣味だねえ、星熊あ」

「何を言ってるやがる。こいつらが急に現れて」

頭をさする勇儀の背後から、猛然とした足音が聞こえてくる。

「だ、だいじよぶ? 急に、悲鳴が聞こえたから」

身構える一同の前に現れたのは、キョーコだった。

よほど急いで駆けてきたと見えて、息は荒く、汗ばんだシャツ越しに下着が透けて見えた。

「お、お姉さま?」

「キョーコ? あんた、今日はバイトじゃあ」

「代役立ててきた。大丈夫」

「いや、バイトの代役って」

「……取り敢えず、外に出ようよ」

収集憑かなくなりつつある一回を制して、萃香が言った。



「へえ。正邪って名乗ったのか、ソイツ」

グラウンドで萃香と双子たちの話を聞くキョーコの表情は、暗い。いやな予感が、当たってしまった。

「キョーコ、大丈夫か?」

「……うん」

旧校舎の壁に寄り掛かったキョーコのもとへ、勇儀がやってくる。

「バイトさ、クビだって」

「そうだろうなあ」

キョーコに握られたスマートホンには大小の亀裂が走っている。ここ数日の大騒ぎによるものと、キョーコの怪力で破壊されたもの。それらは、幻想を拒絶する現代で意図せず鬼となってしまったキョーコの生きづらさを現しているように、勇儀には見えた。

「お姉さん、ずっと僕たちを探してくれたの?」

それまで二人の会話を見守っていたオルガが、おずおずと訊いた。

「うん。ずっとって言っても、一時間くらいだけ」

「オルガちゃん」

双子は不安げに顔を見合わせて頷き合う。

「私達、ずっとあの中にいたんです」

「ずっと?」

「半日くらいかな。細かい時間は分からないけど、本当に、ずっとって感じ」

その言葉を裏付けるように、双子の手首に巻かれた可愛らしいキラクターものの腕時計は間違った時間を刻んでいた。

「分かったかい」

萃香だった。

呆氣にとられる一同に、彼女は校門の方を指し示す。

「ここにいるのは、そういうことが出来るヤツなんだ」

「なら、なおさら帰るわけにはいかないよ」

「いいから。今日は撤退だ」

キョーコと勇儀の尻をせっついて校門まで歩いていくと、萃香は一度振り返った。

「あんたなのかい、正邪」

旧校舎三階の一角で窓が開いており、白いカーテンが月光を受けて幽霊の手のように揺れているのが見えた。

第8話『アマノジャク様、存分に双子をもてなす』 おわり

## 5 『鬼人正邪と旧校舎王国（上）』

「キョーコちゃんて、意外と不真面目なのな」

食堂で扇風機が勢いよく回っている。

風間がガハハと笑うたび、金づちで打たれる釘のようにキョーコはテーブルの下に引っこんでいった。

「面目次第もございませぬ……」

「いいっていいって。又、いいバイトを探してきてやるよ。あ？　なんじゃこら」

寮母のミヨシが、風間の茶碗に山盛りの白米をよそって寄越す。その視線は、どこか批難がましい。

「おいおいおい、俺は仏壇かよ！」

「みっちゃん、私も大盛りで。おくれ！」

すっかりレギュラーメンバーと化した萃香の掲げたお椀をにこやかに受け取って、ミヨシは飯を盛る。優しく優しく、ふんわりと。中年フリーターにしてやる時とは大違いだ。

「差別すんなよお、こいつと違ってカネ払って住んでるんだぜえ、オレはよお」

風間の必死の抗議は功を奏さない。

ミヨシは他の住人の世話に忙しく飛び回り、耳を貸さないし目もくれない。

「黙って食えないのか、あんたは」

あげく、目玉焼きをつついていたスバルまでもが冷ややかな非難の声を浴びせてくる始末。

「俺はキョーコちゃんをいじめてなんかいないぞ」

「そうは見えないな」

「嘘じゃねえ。お前らにも分かるよな。なあ？」

風間は鬼娘たちに助けを求める。

しかし、彼女たちは小さくなったままのキョーコの隣で笑うだけで加勢しようとしなない。

「……あのな、キョーコちゃんはいいい子だろう」



「うん」

「でもいい子も過ぎると段々心配になってくるだろうが。そんなキョーコちゃんがようやく非行に走ったのが嬉しくて嬉しくて」

「分かってたまるか、そんな理屈」

「理解しろよ。俺の親心をさ。ミヨっちゃんだってそう思——わねえのかよ、クソ！」

腕組みするスバル。その後ろに守護霊のように佇むミヨシ。二段構えの圧力に、風間がひるんだ。

「退かねえ。俺は絶対に退かねえからな！」

そこまでして、風間は一体何を勝ち取りたいと言うのか。ともかく、朝の風物詩のバトルが白熱してきたところに、萃香が「ちよいちよい」と手招きした。

「お二人さん。お耳拝借。しばらく旧校舎に近づくのは禁止ね」

「そりゃ一体どうして」

テーブルの向こうでは三人が戦っている——のだろうか。表情こそ鬼気迫るものがあつたが、じゃれ合っているようにも見える。

「アマノジャク様の正体に目星がついたよ」

「本当に？ ……危ない、相手なの？」

「まだはつきりとは言えない。同じ名前を騙る別人って可能性もある。だから、奴が尻尾を出すまで暫く様子を見て」

「こら、そっ—！」

スバルだった。平家蟹のような憤怒の形相を浮かべた彼女の後ろで、死んだ魚の目をした風間が白飯をもちやもちやと食べている。

「キョーコとナイシヨ話とか、許さないから」

スバルの矛先が変わって風間がほつと胸を撫で下ろしたもつかの間。空になったお椀に、間髪入れずミヨシが山盛りに飯をよそい直す。

「そんなに俺が憎いのか」

「ごん、と風間の額がテーブルを打った音が響いた。

「私のキョーコとの間に秘密を作るな。私のキョーコと仲良くするな。私のキョーコの隣に座るな」

スバルの周りにはライバルだらけだ。最近では勇儀に加えて萃香までもキョーコに纏わりつくようになってしまったせいで気が気でないのだ。

「へーえ。ずいぶん大事にされてるんだねえ」

意地のわるい顔で萃香は笑った。

「はあ、まあ。大事にされてます」

その顔を見ていると、やはり萃香は鬼なんだな、と実感する。

「で？ 私の私のもってうるさいけど、どっかに名前でも書いてあるの？ ん？」

萃香はすりすりキョーコの顔を撫でまわした。むろん、キョーコに名前欄など付いていない。

「ぐぬぬう」

スバルが殺意のこもったうなり声を上げる。

ハラハラするばかりのキョーコの前髪を持ち上げて、勇儀も鬼の微笑を浮かべて見せた。

「それよかあんた、綺麗なおデコしてるじゃないかい。ここに今書いてやるよ、名前。あたしらの！」

「え、ちよつと待ってよ」

「冴えてるねえ星熊。いいぞやれやれ」

腰を浮かせたキョーコを萃香が羽交い絞めにする。

悲鳴を上げる暇もなかった。

「お、お前ら、キョーコに乱暴するな」

慌てて立ち上がったスバルがテーブルに膝をぶつけた。慌ただしく打ち鳴らされる食器の音が、第二ラウンド開始のゴングだ。

「おい風間つつあん、だらしなく伸びてないでペン持つてきな、ペン！」

「や、やめてー」

今日も早稲川荘では騒がしく、当たり前前の日常が続いている。

これはずっとずっと続けばいいなあ——額に迫ったサインペンの先を見ながら、キョーコは願った。



「朝からいい仕事しちやったねえ」

細い路地を軽トラックが走り抜けていく。尻に火が点いた牛のよ  
うな勢いで、よくもまあ車体を擦らないものだと感じした。

「さて、今日は間に合うかな？」

「遅刻だろ。キョーコのやつ、悠長に顔洗ってるんだから」

「女がなつてないよねー。化粧と洗顔は一日の初めにやつとくもの  
じゃない？」

言いたい放題であるが、原因は言うまでもなく彼女たちだ。

「で、結局ラクガキは落ちたのかな」

「油性だったからねえ」

半ベソのキョーコは洗面台の前で時間いっぱい粘っていったが。  
下宿を飛び出していく瞬間までタオルを手放さなかったせいで額の  
「ゆうぎ」と「すいか」の字が消えたかどうかは分からず仕舞いだった。  
「さて。とにかく休みだ休み。何をしようかね」

キョーコのことなどさっさと忘れて、勇儀は背筋を伸ばした。気持  
ちのよい朝だ。路地を吹き抜ける風はまだ涼やかだ。七月の朝日は  
相変わらず強烈だが、かえって路地に残った昨晚の夜気が肌に優しく  
感じられた。

「こういう日は酒盛りだよねー」

「昨日飲んだろ、あたしの酒。あんたが、全部」

そうだったつけ、と萃香は首を傾げる。どうやら彼女の記憶は、ア  
ルコール並みに揮発しやすくてきているらしい。

「仕方ないねえ。買いに行くから付き合いな」

ひいきの酒屋は下宿から歩いて半刻ほどの距離にある。今から歩  
けば、丁度開店時間だ。ちなみに朝から酒を買い込みに来る客が店員  
の目にどう映るかは、さておく。

「勇儀ねえさん」

意気揚々と歩き始めた勇儀を引き留める声があった。

「おや。昨日ぶりだね」

鬼の双子だった。

勇儀と萃香相手ではキョーコと勝手が違うのか、仕草には、はにか  
みが見える。

「それと確か、伊吹萃香」

「さん、ですよオルガちゃん」

「ごめん、萃香さん。昨日は迷惑かけちゃった」

「ところで私は「萃香ねえさん」じゃないの？」

双子は困ったように顔を見合わせた。

「萃香ちゃん、でいいかなって思うんだけど」

見えない糸で引つ張られているように、萃香の笑顔がヒクついていく。

「いいよ。言いなよ。構わないから」

不安げに顔を見合わせる双子に、彼女は顎をしゃくった。

「その……同じくらいに、見えますから。私達と」

「なにが」

「せ、せたけが」

「が」

雷に打たれたように、萃香は固まった。

ややあつて、ふらふらと下宿屋の方へ歩いていった彼女は、門にもたれてよれよれとしおれていった。

「……小さくて何が悪いんじゃない」

蚊の鳴くような声だった。

「なあ萃香、こいつら、別に背が低いことが悪いとは言っていないだろ」

「小さい方が便利だもん。でっかくなつて、つかえて大変なだけだもん」

「構わないって言った口でそれかい」

こうなつては仕方ない。声の届かない場所に行つてしまった萃香にさっさと見切りをつけて、勇儀は双子に向きなおる。

「ボクたち、お姉さんのことで話があるんだ」

「生憎だね。キョーコなら学校だよ」

「分かっています。お姉さま抜きで、勇儀ねえさまに伝えなければいけないことがあるのです」

昨日の今日だ。それが鬼人正邪に関する事。二人が旧校舎の中で見聞きしたことに関係しているのは、この場の誰にも明らかだっ

た。

「とにかく入りな。麦茶が冷えてる」

下宿の門に張り付いた萃香をひっぺがして、勇儀は双子を招き入れた。



「キョーコさまー!」

三年の教室の戸を蹴破ったアンリを見て、誰もがおののいた。

留守番と言ってバイト先に一晚放置プレイ。この瞬間まで怒りを煮えたぎらせてきたアンリの形相は、羅生門の鬼が裸足で逃げ出すほど恐ろしかった。

「……少し、お痩せになったのではなくて?」

しかし、彼女の怒りはさっそく萎むことになる。

彼女がじつくりコトコト煮込む前に、既にキョーコは押し花のようにしおれて机に張り付いているのだった。

「ごめんね、昨日。うっかりしてた」

何度も擦ったように、キョーコの額が赤い。

泣きはらした目元があまりに哀れっぽく、次の瞬間にはアンリは「もういいです」と口走る自分に気付くのだった。

「……それで、アマノジャク様には会えましたの?」

「ダメだった。双子ちゃんには追いつけたんだけどね」

そういえば、と、キョーコは辺りを見渡した。

「キョーコ様、なにか?」

「スバルちゃんがないから」

最近、随分仲良くアンリと話し込んでいる気がする。

朝の様子を見るに、いつスバルが突撃してきてもおかしくないのだが。

「スバル……陸上部の吾妻スバル様なら、部室棟の方でお見掛けしましたわ」

考えてみれば、大会が近い。今だけでも部長のチヅルとの確執を忘れて陸上に専念するのなら、それに越したことはないのだが。

なにか引つかかるものを感じていると、アンリが言った。

「にしても、キョーコ様は三年なのでしたね」

そういうアンリは一学年下だ。

上級生の教室に押しかけてきて、実に堂々としている。空いた席に座ってスナック菓子を昼食代わりに頬張る姿には、ふてぶてしさすら漂っていた。

「来年はいよいよ受験。キョーコ様の備えは万全ですか？」

「あー、そっかあ。受験かあ。血みどろの受験戦争。やだなあ。世の中平和が一番だよねえ」

「人生、点数で争える内が一番幸せで平和でしてよ」

そもそも、学費の足りないキョーコは戦場に辿り着けるのだろうか。

「そういえば大学はどちらへ？」

「実はまだ決めてないんだよね。いい所、ないかな」

「あら。いけませんわ」

自分の進路を他人事のように言っていることに気付いて、キョーコはおかしくなった。アンリもつられて笑う。

「では、将来の夢などは？」

ひとしきり笑って、アンリは問いを重ねた。

「夢かあ」

なんてことない、雑談の延長みたいなものだとは分かっていても、腿の薄れたスマイリーをなぞるキョーコの指先には迷いが見えた。

「もう一度走ること、かな」

その先は、どうなるんだろう。

椅子を傾けて天井を見つめる。敷き詰められた合板は、キョーコの未来予想図と同じ、空白の白さだ。あまりの白さに、めまいを覚える。

「およ。キミってアンリちゃん？」

隣の席の主が戻ってきたのは、そんな時だった。

「え、ええ。お見知りおきを……どこかで、お会いしましたか？」

「それはないけど、キミ、ハーフでしょ？ やっぱり目立つじゃん。

あ、いいよいいよ、そのまま座ってて。いやー、おねえさん参ったよ、購買行ったんだけどね、道がメチャ混みでさ」

二人の前にどざりとレジ袋を置いて、彼女は聞かれてもいないことをぺらぺらと喋り始めた。話題の転校生と知り合いになれたことで得意になっているようだが、ぶしつけな振る舞いにアンリは早くも辟易している。

(なんですの、この方!)

アンリが目くばせしてくる。

「大変だよ。購買、いつも繁盛してるから」

「いや、今日はそうじゃなくなってるね」

話題を合わせたキョーコは、小首をかしげた。

「生徒会長が理事長捕まえてバトってるの。びっくりしたわ」

「生徒会長……チヅルちゃんが?」

「なんでも旧校舎の話らしいよ。詳しいことは知らないけど、あの子、やっぱ怖いわ」

旧校舎。そのワードを聞いた瞬間、キョーコとアンリは素早く立ち上がっていた。

「それ、どこで?」

「昇降口。あ、でも本当に人凄いから、今は行かない方が」

「ありがとう」

礼を言うな否や駆け出した二人の後に、隣の席の生徒だけがぽつねんと取り残される。

「……………いいと、思うんだけどなあ」



昇降口には、既に黒山の人だかりが出来ていた。

「納得できません!」

チヅルの声がよく響く。

T女学院の昇降口は三階まで続く巨大な吹き抜けになっている。

どの階でも電線のカラスのように手すりの上に生徒が黒い頭を並べ、眼下の出来事を見逃すまいとしていた。

「ははあ、あれが理事長様。随分たくましいお方なこと」

「わたしも見るのは初めてかも」

理事長は熊のような大男だった。人垣越しにもその姿が見える。

「まあまあ、そう声を荒げちゃいけない。お客様もみんなも、びっくりしているじゃないか」

「理事長、学校は分譲地じゃありません。部外者に切り売りできるものではないでしょう」

「まあまあまあまあ、この方は部外者なんかじゃない。スポンサーなんだよ、スポンサー」

脂汗にまみれた理事長が隣を示した。しかし、いくらキョーコたちが背伸びしても、そこにいるはずの「スポンサー」の姿は見えない。

「もう少し前に出ましょう」

キョーコの手を掴むと、アンリは肩を使ってぐいぐいと強引に人垣へ分け入っていく。

「ふう、困ったなあ。こんなことになるはずじゃなかったのになあ」

梶子でも動かない様子のチヅルに弱り切ったのだろう、理事長は汗まみれだ。彼の手にしたハンカチを絞れば、小さな池ができそうだった。

「それじゃ、私の出番かな」

「あ——」

その瞬間に最前列に出たキョーコは、真正面から彼女と相對することになった。理事長の隣で不敵な笑みを浮かべてよこす、奇妙な風体の美少女に。

「はじめまして。私の名前は鬼人正邪」

含みのある笑いは、間違いなくキョーコに向けられたものだった。

「お知り合い？」

「うん。まあ、弁当をめぐって色々、ってかんじ」

「弁当？」

それだけじゃない。

鬼人正邪は、双子の前に姿を現した「アマノジャク様」が自ら名乗った名前だ。それがこうして表に出てきたことに、キョーコは不穏な気配を感じ取った。

「祭りは好きかい？」



少女の外見からは想像もできないくらい堂々とした振る舞いに、生徒たちは顔を見合わせた。まばらだが、彼女に頷きを返す生徒も見えた。

「私も大好き。粉モノのにおいとか、朝起きたら町が煙臭い感じとか、予算折衝とか、祭りの前後で起こる男女の過ちとか全部ひつくるめて大好き。このガツコ、毎年派手にやるんでしょ?」

「ですの?」

アンリはきよとんとしている。

この瞬間までT女学院に学園祭があること自体知らなかったのかもしれない。彼女に耳打ちされたキョーコは頷いた。

「花火とか野外ライブとか。あと、ミスコンかな」

「ミスコン? 女の子同士でクスクス笑いながら水着の審査?」

「うちのはちよつとヘンな感じ。父兄とか他校の男の子たちも沢山来るから。毎年けっこう盛り上がるよ」

外見に関していえば非の打ちどころのないアンリが舞台に飛び出せば、きつと優勝も狙えると思うのだが——キョーコも体のことをとやかく言われるのは好きでないので、黙っておく。

「だが残念だったな! 今年の学園祭は花火無し、模擬店なし、ミスコンなんてもつてのほかだ!」

どよめきが起こった。正邪は騒ぎを止めようとせず、目を細めて生徒たちの混乱を楽しんでいる。

「勘違いしないでくれよ。私だって祭りを楽しみたい。これは誰が悪いとかじゃない。しいて言うならお金の問題だ」

「どこからその話を……」

正邪はチヅルには応えず、ただ、ひねくれた笑みを浮かべて見せた。

「T女学院と言えば音に聞こえたお嬢様学校だが、金回りはよくない。きみたちがバカみたい高い学費を払っているにも関わらず、だ」

グラウンドを正邪は指差す。

「あれが、この学校の金食い虫だ」

彼女の指が見えない操り糸を手繰ったように、居合わせた生徒たちは同じ方向——鬱蒼とした雑木林の向こうに佇む旧校舎へと視線を

馳せていた。

「文化財だかなんだか知らないが、毎年莫大な維持費がかかっている。その出所は言うまでもないな」

黙り込んだチヅルと理事長の様子を見る限り、正邪の言葉に嘘はないようだ。

「だが安心しろ。カネならこれから私がいくらでも出す。ジャンジャン出す。そのかわり旧校舎の管理は私に一任してもらう。それが出資の条件だ」

正邪の身振りには、次第と熱が入っていった。炎を煽り立てるうちのようだ。

「カネなんて大人の事情で個性を潰されていいのか。自由を取り上げられてだんまりか？ 選んでくれ。私はキミたちのピンチをひっくり返すためにやってきたんだ」

にわかに群衆は静まり返る。

ややあつて、その中から正邪に賛同する声がポツリ、ポツリと上がり始めた。

「何、アレ」「あの人、いい人なのかな？」「変わってるだけのような……」「まあおカネくれるっていうんなら、エライ人ではあるんじゃない？」「何が目的？」「どこかの実業家とか」「でも、まだ小さいよ」「暇持て余したご令嬢とか、そういうのでしょ」「旧校舎なんて使っていないし、いいじゃん。あげちゃえば」

言いたい放題だった生徒たちは、正邪が理事長から何かを受け取ったのを見てぴたりと話をやめる。

「ここには理事長、校長、それに役員全員分の署名がある。あとは生徒の代表の選択しだい」

正邪はチヅルの手を取った。

子供に箸の持ち方を教えるように、丁寧丁寧に書類を握らせてやって、最後にもう一方の手も添える。彼女が生徒会長を小馬鹿にしているのは明らかだった。

「なにせ、会長がハンコをついた瞬間、あの場所は旧校舎じゃなくなってしまう」んだ。よく考えて、決断してくれ」

契約書の束を受け取るなり、チヅルは床に叩きつけた。解けた紙が宙を舞い、二人の足元に雪のように降り積もる。

「いけませんわね。あれは」

顔をしかめたアンリには、真昼の決闘の結末が既に見えるようだった。

「私は断固反対です。こんな、いかがわしい——」

「しつかりしてよ、会長！」

鋭い声がチヅルを背後から貫いた。

「——え？」

キョーコとチヅルは、信じられないというように声を上げていた。「学園祭なくなっちゃうじゃん。ダメだよ、そんなの！」

学園にとつて、正邪は異物だ。

権力をかさに土足でルールの中に踏み込み、掻き乱し、無茶な要求を突き通そうとしている。それを突っぱねるのは、生徒の代表として当然の行いだ。義務だ。

「あの方は、正義に一途すぎた」

ただただ、アンリは残念そうだった。

「どうして。私はちゃんと、皆のために！」

ブーイングの雨に打たれて、チヅルは呆然と立ち尽くす。いかにも見るに見かねたという様子で正邪が生徒とチヅルの間に割って入った。

「大丈夫だ、だいじょーぶ。落ち着いてくれ、みんな。生徒会はよくやってるし、会長は正気だ。多分な」

「……あなた、何者なんですか」

始業のチャイムが鳴り響いた。質疑応答の時間は終わってしまった。

「それじゃあ諸君、八月の学祭で」

拾い集めた書類を後ろ手に持って、正邪はまたぶらぶら歩き始めた。奔放な飼い猫に悩まされる主人のように、小走りに理事長がその後を追う。

「どうして……チヅルちゃんは、間違っていないじゃないか。正しいこ

とを言つて……なのに」

「あのパフオーマンズはいただけません」

「それだけ？ それだけで」

「ぐつと耐えるべきだった。既にみんなの心は正邪という少女のもの。頭に血を登らせたなら、そこでおしまいです」

アンリの言葉を裏付けるように、足早に去っていくチヅルを顧みる者などいない。

「キョーコ様。いけなくつてよ」

唯一の例外を、アンリが引き留めた。

「あなた様に出来ることは何もありません。さ、行きましょう」  
その通りだった。

こんな時に、鬼の力は何もしてくれない。

「なんとかしなきゃ」

アンリの後が続いてその場を後にしながら、ぼつりとキョーコが呟いた。



「これ、は」

夏だというのに、部室の中は暗く、冷えていた。

部員の代わりにチヅルを出迎えたのは、箱だった。なんの変哲もない、駅前のアーケードにある和菓子屋の饅頭の箱。しかし、それを見ているチヅルの中で嫌な予感が膨れ上がっていく。

箱を手にとると、底に敷かれていた一枚の紙がはらりと足元に舞い降りた。

人間関係がもつれました。モチベーションが上がらないので退部を願います——3—F 吾妻スバル

この頃になると退部届は見慣れたものだったが、氏名欄を見てチヅルは愕然とした。

「吾妻、先輩……」

部室が揺れていると思ったが、それは違う。退部届を手にしたチヅルの手が震えていたのだ。

「あーあ、恐れていたことが起きちゃったね」

弾かれたようにチヅルが振り返ると、正邪がドアの枠に体をもたれて立っていた。

「あなたの仕業ですか」

「人間きが悪いな……お、ウマそ」

箱を奪い取り、正邪はさつそく包装紙を剥ぎ取りにかかる。それを咎める気力でさえ、今のチヅルには残されていない。

「薄々、こうなるんじゃないかと思ってたんだ」

正邪がつまみあげたのは茶色い、しっとりした皮の小さな餡饅頭だった。

「部長のリタイア。後輩はお前を虫けらみたいに嫌ってるし、生徒会活動も思わしくなく、頼みの綱の三年生が全滅」

次々と饅頭を放り込んでいく正邪の口には、サメを思い起こさせる牙がびっしり生えている。

「どう。ここから立て直せそう?」

正邪が顔を寄せてくると、甘ったるい臭いが鼻をついた。後ずさつたチヅルの背後には壁。がらりとした教室に大きな音が響いた。

「そう嫌ってくれるな。傷つく」

「あなたがどう思おうと、私は一向にかまいません」

「それが人離れの原因なんだよ。ったく」

正邪は顎をしゃくる。鼻につく仕草だった。

「だが、私は寛大で慈悲深い。お前に青春の最適解を教えてやることもやぶさかではない——こいつにさえ、納得してもらえれば」

「なんででしょう?」

「ハンコだよ。はーんーこ。シラ切るんじゃないねえ」

チヅルの胸元に契約書押し付けて、正邪は立ち上がる。彼女の脇を通って部室を出て行く時に、ぞつとするような声で囁きかけた。

「いいな。もう二度と私にモノを拾わせるなよ」

象のように巨大な気配が横を通り過ぎていく気配に、チヅルは、はっとした。しかし饅頭の箱を抱えて去っていく正邪の後ろ姿は、やはり少女のものではない。恐怖と屈辱がないまぜになった表情で、チヅルは彼女を見送った。

## 6 『鬼人正邪と旧校舎王国（下）』

「いくなくなくな」と呼びかけるような雑木林のヒグラシの鳴き声はもう聞こえない。埃と湿気がわだかまる廊下で振り返ると、昇降口から差し込む光がぼんやりと滲んで見えた。

「確かめなきゃ」

旧校舎に近寄るなという萃香の言葉を忘れた訳ではない。しかしアマノジャク様と正邪という鬼の関係をはつきりさせておきたかった。もし同一人物であった時、わたしは——わたしは、どうするのだろうか？

答えが出ないままに辿り着いた階段は、一步登るたびにきしきしと音を立てた。古いが、戦前に建てられたということを考えれば、相当モダンな造りだろう。木造の階段は幅が広く、ゆとりをもって設計された踊り場は西に向かって大きな窓が切られている。ガラスはすっかり白く濁っていたが、K市の歴史を映してきた古ガラスを通して差し込む夕日は、光を受けて舞い散る埃を粉雪と錯覚させるほど穏やかだった。

「来ると思ったよ」

背後。階上からかけられた声に、キョーコは小動物のように驚いて飛び跳ねた。

「そう怖がってくれるな。取って食いはしない。誰であれ客は大事にする主義だし、お前には恩がある」

踊り場と三階。数える度に段数が増えたり減ったりする逸話があってもおかしくないほど年代物の階段を挟んで、キョーコは正邪を見上げた。

「教えて鬼人正邪。あなたがアマノジャク様なの？」



受話器を耳に当てたまま、ミヨシは心配顔で首を横に振った。

「そりゃ繋がらないよな。こういう時ってよ」

無精ひげにまみれた頬を風間はかきむしる。

「どこかに寄り道してるのかもよ。キョーコって、まだまだ子供で

しよ」

「どうだろうねえ。あのよいこちゃん、遅れる時は律儀にミヨシに連絡してたからねえ」

食堂の畳の上に転がっていた萃香が顔を上げると、泡盛のグラスを中途半端に傾けたままのポーズで勇儀は壁を睨んでいた。

「となると電話が届かない場所ってこと？」

「もしくは、電話できないような状況にいるかだな」

双子の帰ったタイムミングでこの状況。口に出さずとも、その場の誰もが嫌な予感を覚えていた。

「カザマつつあん、クルマ回せるかい？」

「悪い。祭りの一件であのメスガキがへそ曲げてな、カギ取られた」

「そうかい。仕方ないね」

勇儀は結局グラスに口をつけずに立ちあがった。全く、休日だというのに身も心も休まらない。

「おい、学校に乗り込むんなら俺たちも行くぞ」

「いいや。留守を頼む。あたしたちの取り越し苦労だつてこともあるじゃないか」

しかし勇儀の表情は硬い。彼女自身の言葉を否定しているようだった。

「あの子が腹空かして帰ってきて、誰もいなかったらそれこそ大事になるからね。任せたよ」

食堂を出た勇儀の後を、ペたペたと裸足の足音が追いかけてきた。

「あんたもだよ、萃香。大人しく留守番しときな」

「私は誰の指図も受けないのさ。ついてくよ」

「あたしはただ、学校に様子を見に行くだけだ。鬼の出る幕じゃない」  
下足入れから安全靴を取り出して振り返ると、そこに小鬼の姿はない。

「むしろ、お留守番は勇儀の仕事だろう？」

妙な聞き分けの良さに感心していた勇儀は、度肝を抜かれた。つい今しがたまで背後で話していたはずの萃香は、気づけばちゃっかり靴を履いて門前の扉に背中を預けている。

「そんな体じゃキョーコどころか、自分の身だつて守れやしないじゃない。何かあつてからじゃ遅いんだし。黙つて伊吹萃香サマを後ろにつけときなつて」

動揺を悟られまいと、何食わぬ食わぬ顔で勇儀が歩き出す。その沈黙を肯定と受け取つて、萃香は大柄な後ろ姿を追つた。

「キョーコは既にアマノジャク様と会つていた。なのに、どうして私達にそのことを打ち明けなかつたんだろう」

双子の話を聞く限り、二人の間には浅からぬ縁があるようだった。「自分の目でアマノジャク様の正体を確かめるまで、誰にも手出しはさせない。あの子はそういうやつだろ」

「私の言いつけを破つてまで、か。寿命短そうだね、キョーコつて」  
「だから目が離せないんだよ」

駅に辿り着いた勇儀は市電の時刻表を目でなぞる。と、折よく一台の車両が交差点の曲がり角からぬつと顔を出してきた。

「あんたも他人事じゃないつて」

「あたしが？」

「その面倒見の良さは今でも好きだよ。だけど、力も記憶も失つたあんたにとって、それは危険なことなのかもしれない」

こんな時だからだろうか。のろのろとレールの上を歩む電車が焦らしをかけているように勇儀の目には映る。

「私の中の勇儀は、今でも強い鬼のままだ。頭では分かっているも、体はそうじゃない。だから覚悟してほしい。あんたとキョーコと、同時に危険が迫つた時、とつさに私があんたを助けるなんて期待しないことだ」

「構わないよ。キョーコさえ無事なら」

「へえ。どうしてそこまで入れ込むのさ」

ホームに滑り込んだ電車で飛び乗ると、汗ばんだ二人の肌を冷やさされた空気が撫でた。車内には彼女たちだけ。帰宅ラッシュの時間にしては不気味なほど空いている。

「あの子の傍にいるって約束したからね」

二人の背後でドアが閉じ、市電は軽く揺れて進み始める。学校は、



まだ遠い。



「あなたがアマノジャク様なの？」

キョーコ自身、馬鹿馬鹿しい質問だと思う。それでも本人の口から「そうだ」の一言を聞きだすまで納得したくなかった。弱り、追いつめられていた正邪と、アマノジャク様とを結びつけたくなかった。

「ふ——ふふふ。あはははははッ」

しかし。

「ずいぶん下らないことを聞くんだな。だが、聞かれれば答えよう。縫われれば応えて進ぜよう。それが今の私だからな」

教室から、階下から、巢を突かれた黒アリののように生徒たちが現れ、正邪の周りに集う。彼女たちの、王のもとに。

「家族に、血で結ばれたすべての姉妹に」

兵隊のように整列した生徒たちの唇が、一斉に同じ言葉を口にする。

「そして私、アマノジャク様に」

ばんざい。

おどろおどろしい斉唱が旧校舎を揺らした。

振り返ったキョーコは目を見張る。既に彼女の背後まで詰め寄った生徒たちの先頭に、顔面に絆創膏を張り付けた後輩たちの姿が見えた。

「これで満足したか？」

「……………どうして」

「質問攻めだな。まあいいさ。今日の私は気分がいい。なんたって、お前が自らの足でここに出向いてくれたんだからな」

「どうして、こんな酷いことをするの」

「ヒドい？」

「みんなの記憶を操って、人形みたいにして。それは悪いことだ。いけないことだよ！」

質問の意味が分からないとでも言いたげに、正邪は口をぽかんと開けた。少しして、その口から、くつくつという笑い声が漏れ始める。

「教えてよ！ なんでも答えるアマノジャク様なんですよ！」

耐え切れず、正邪が腹を抱えて笑い始める。

周りの生徒も混ざった哄笑が、蝉しぐれのようにキョーコの頭の中でぐわんぐわんと反響した。

「お前は何かを勘違いしているな」

正邪が笑うのをやめると、生徒たちも口を閉ざす。

糸の切れた人形のように立ち尽くす様は痛々しく、物悲しいものにキョーコの目には映る。

「上がって来いよ。話はそれからだ」

そっと、背中が押される。

黒い海のように背後に迫った生徒たちを見れば、キョーコに拒否権がないことは明白だった。



階段を最後まで登り切ると、大きなホールに辿り着く。正邪の手によって窓が開け放たれると、雑木林の緑の香りを拾った風が、白いカーテンを舞い上げた。

「暑かったら、こっちに来て風にあたれよ」

いつの間にか正邪は奇妙なものを手にしていた。

人の物とも獣の物ともつかぬ、奇妙な骸骨。額に切株のような一對の突起が見えるしやれこうべを手に、彼女は眼下のグラウンドを指差した。

「セーシュンっていうものは残酷だな。強いものとそうでないものはつきり区別されている」

グラウンドの隅で部員から遠巻きにされ、用具を準備するチヅルの姿が見える。思わず食い入るように見つめるキョーコの太腿に見えるスマイリーマークを、正邪は視線で撫ぜた。

「弱者は必ず存在する。存在するだけで疎まれ、忘れられ。まるでこの旧校舎みたいだとは思わないか？」

もの言わぬ生徒たちの列を、正邪は示す。

「こいつらもそうした弱者だ。抱えきれない悩みを持って、ウワサ話なんて不確かなものにすがって私のもとを訪れた」

「だからあなたは、その願いを叶える代わりに」「いいや。私は願いなんで叶えちゃいない。実を言うと叶えるための力だつてないんだ」

キョーコの顔が余程面白かったのだろう。正邪は天井を仰ぐほど仰け反ると、大口を開いて笑った。

「私の力は物事を『ひっくりかえす』だけ。不安、不幸、不条理——私はいつらのマイナスの気持ちをひっくり返してプラスにしてやってただけに過ぎん」

「そんなのって!」

言いようのないムカつきを覚えて、キョーコは自分の胸元を掴んだ。アマノジャク様は奇跡なんて起こしてはいない。嘘で飾り立てた現実で目を眩ませているだけだ。

「そんなの、サギじゃないか」

「サギじゃなくて契約だ。私も幸せ、みんなも幸せ。その何が悪いんだ。こいつらは記憶と自由、そして信仰、すべて自分の意志で差し出した。それをどう使おうが私の勝手だろう」

正邪の弄ぶ骸骨がカタカタと揺れた。笑っているように、聞こえる。

「旧校舎は有意義に使わせてもらう。ここから私の下克上を始めるんだ」

「下克上?」

「来い、キョーコ。お前は嫌いじゃない」

正邪は手を差し出した。

「ここ数日、ずっと見ていた。お前は私と同じ匂いがする。土の味を知っている本物の弱者だ。この手を取れ。お前を軽んじた部活に、学園に、世界に、ともに反旗を翻そうじゃないか」

乾いた音がホールに響いた。

「———そうかい」

「わたしは、よいこだ」

青白く輝くキョーコの指先で、紫電が閃いた。

壁となった生徒たちが、二人の間に割り込む。振り払われた手を抱

いて、正邪が下がる。

「よいこか。よいこ……本当、くだらない事にこだわるな」

「くだらなくなんかないよ。大事なことなんだ」

「憧れのセンパイと約束したから？」

心臓を殴りつけられたように拍が飛んだ。

しゃっくりのような音を立てて息を呑んだキョーコに向かって生徒たちが輪を狭めてくる。

「どうして……サキちゃんのことを知ってるの？」

「ウワサってのは怖いだろ。こいつらに聞いたんだ。何でも知ってたぞ」

これで心を乱すなど言うのは、指を折られて痛がるなど言うのと一緒だ。サキの名前は、キョーコにとってあまりに重すぎる。

「ずいぶん仲が良かったみたいだな。常識から考えると、仲良くしすぎってくらいには。そこらへん、よいこととしてはどうなんだ？」

「あの人とは、そういうのじゃ……」

「へえ。じゃあ、どうなりたかった？」

見えない拳で殴りつけられるように、キョーコは後ろへ後ろへと後ずさった。

「教えてくれよ。女の子同士ってやつ、私にもさ。愛とか友情とか、そういうの、今まで興味なかったんだ」

生徒の壁と一緒に正邪が前に進むと、キョーコはかすれた悲鳴を上げて後ずさった。

「よいこのお前は人を傷つけられない」

「で、できる。だってあなたは、悪い鬼だから。だから」

「萃香のことを忘れたのか」

能力の覚醒。渴望にも似た衝動。肉を断つ生々しい感覚がよみがえってきた指先からは、既に輝きが失われている。

「そういうばあのかタナはどうした。まさか捨てたんじゃないだろ？」

「持ってきてないよ。今日は話をしに来たんだ」

「あれを放り出してきたのか。そりゃよくないな」

「あのかタナは一体何なの。あれは、何をするものなの」

「答えてやりたいが、名残惜しいことに今日は時間切れだ」

びよう、と勢いよく吹き込んだ風が、汗に濡れたキョーコの首筋は凍てつきそうなほど冷やした。いつの間にか窓際に追い込まれたキョーコが地面を見下ろすと、固くひび割れた地肌が何百メートルも彼方にあるように見える。

「鬼人、正邪……あなたは……」

「交渉事は最後の1押しが肝心って言うだろ？」

「せんぱい」

キョーコの前に進み出たのは、顔の生傷が痛々しい陸上部の後輩だった。

おそらく自分のやっていることですら理解できないのだろう。呆けた笑みを浮かべた彼女の両手が、キョーコの胸元に添えられる。暗雲が立ち込めたように真つ黒な瞳には、怯えた自分の顔が反射していた。

「おちて」



最悪のタイミングか、最高のタイミングか。

雑木林をかきわけてきた勇儀たちの前で、旧校舎の三階から身を躍らせた人影があった。

「キョーコー」

まただ。どうしてこうなる。

気付けば勇儀の体は全力で疾走していた。祭りの夜、キョーコを追って濁流に飛び込んだときのように。

高い所からやたらと飛び降りるキョーコもキョーコだが、ボールを投げられた犬のように毎回彼女を拾いに行く勇儀も勇儀だ。

「待って。私が行くー」

背後から萃香の声が聞こえたような気がしたが、構っている余裕はない。

「間——に——合——ええッー」

キョーコの真下に滑り込んだ瞬間、細かいことはどうでもよくなっていた。三階から落ちた彼女を抱き留めた勇儀は、全力疾走の勢いも

余って、もつれるように地面を転がった。

「キョーコ、しっかりおしよ」

「あ」

額から滴った血がキョーコの頬を打った。

口の中は砂ぼこりの味がしたし、残された腕もひどく擦り？けている。

「ゆー、ぎゅー」

痛くないと言えば嘘になるが、キョーコの無事を確認した瞬間、またしても、それらはどうでもよくなってしまった。

「いやあ。ご立派ご立派」

心底ほっとした勇儀に、耳障りが拍手が浴びせられる。

「あんたが鬼人正邪か。見下げ果てたやつだね」

「度胸だけじゃなく威勢もいいな。一体どこの鬼さんやら」

三階の窓からわざとらしく目を凝らした正邪は、勇儀の姿を検めるにしたがって徐々に青ざめていった。

「お、お、お山の鬼のお歴々がどうしてここにいやが、いらっしやるのでしょうか!?!」

怪訝そうにする勇儀。色めき立った正邪は手をぱたぱた振り回した。

「お山の鬼い?」

「星熊勇儀に伊吹萃香と言ったら最強の鬼じゃないですか。こんな片田舎にお越しとは存じ申し上げござらん次第でして……」

「鬼退治だよ。とにかく下りといで。話はそれからだ」

「にしても随分と人が、いや、鬼が悪い。鬼が悪いモノなのは元からですが、こいつらが勇儀さんの身内と知っていればこんなことは——なんてしおらしくすると思っただか、ぶあーツか!!」

「にやにおう!?!」

「お前が記憶も力も無くしているのは先刻承知よ。抜け殻のあんたの何を恐れろっていうんだ!」

「おい、こつち来な。ぶつとばしてやるよ!」

まさか正邪の猿芝居に騙されたとは思いたくないが、勇儀の煽り耐

性の低さには萃香を呆然とさせるものがあつた。野犬のように牙を剥いて威嚇する勇儀の横を抜けると、ひょうたんを背負った小鬼は校舎を見上げた。

「変わっちゃいないねえ。あんたがブレてないようで、なんだか安心したよ」

「お前らも相変わらずだな。とはいえ、いささか縮んだような気もするけど。何かあつた?」

束の間、萃香も正邪もある一点を見つめていた。ぐるぐると包帯で巻かれた萃香の腕を。

「さあてねえ。そんな高いところにいれば、何だって小さく見えるだろうさ」

「そりやそうか。で、どうさ。そこらの天邪鬼にくりくりのつむじを見下ろされる気分は」

「私、そんなので腹立てないことにしたから」

思ったような反応が得られなかったことに対する落胆をオーバーなため息で表現して、正邪はキョーコに目を戻す。勇儀に抱き留められたままの姿で、呆けたように視線を彷徨わせていた。

「お前に一日の猶予をやろう」

すぐ隣にいた生徒の首に正邪が手を回した。彼女の唇の隙間から顔を出した舌は、ぞつとするほど赤い。

「明日の暮れ、お前が縦以外の方向に首を振ったらこいつに飛んでもらう」

「おい、正邪。あんた本気で言ってるのかい」

「黙れ勇儀。お前や萃香がここに踏み込んできた瞬間に全員飛ばしてやるからな」

「目を覚ましなよアマノジャク」

「あん?」

萃香に水を差され、正邪は露骨に顔をしかめた。

「幻想郷はもう無い。分かってるでしょ」

「それがどうした。あそこが消えても遺恨は消えない。奴らが諦めるまで私は戦わなければいけない。叛逆し続けなければいけない」

「みんな外の世界で生きていくのに必死だよ。いまさら復讐にうつつを抜かすのは誰？」

正邪の目はひたすらに醒めていた。まるで、熱心に読んでいた本のオチをバラされたような、そんな目だった。

「……見え透いた嘘だな。生憎私は天邪鬼。やめろと言われてやめるほどいい子でもないんでね」

「正邪、お前」

「この話はもう終わりだ。キョーコ、必ず一人で来い。あのカタナを忘れるんじゃないぞ」

言いたいことを吐き捨てた正邪の後に続いて、生徒たちも窓辺から姿を消していった。最後にぴしゃりと音を立てて窓が締め切られても、三人は呆然と校舎を見上げ続ける。

「っ」

恐る恐る鳴きはじめて蝉しぐれに包まれて、萃香が頭を掻いた。

「困っちゃうよねー、ああいうのはきー」

おどけてもおどけても、空気は重くなるばかり。いい加減いたたまれなくなった萃香が走って逃げだしたくなったところに、息を吹き返したキョーコが口を開いた。

「教えて欲しいことがあるの」

「これからどうするか、でしょ。正邪のやつ、頭使わせるのはいい加減やめて欲しくなるよ」

「それもだけど。今はもっと、別のこと」

キョーコは勇儀に肩を貸して立ち上がらせる。砂ぼこりにまみれた二人はわらびもちそつくりで、シリアスなキョーコの表情と相まって萃香を大いに困惑させる。

「わたしはそろそろ知らなきゃいけない。鬼人正邪のこと、幻想郷のこと。全部、教えて」

第9話『鬼人正邪と旧校舎王国』おわり



## 7 『願い星が堕ちる速度で（上）』

「よオお嬢さん方。本日は神より賜りし土曜日。最高気温は38℃、湿度60パーセント。絶好の整地日和だな！」

河川敷のグラウンド。やたらテンションの高い風間の足元には、禍々しい気配を放つ物体が鎮座し、繋がれた番犬のように己の出番を待っていた。

「風間さん張り切ってるなあ」

「こないだの乱闘騒ぎ、あつたでしょ？」

「あんたと風間つつあんがグラウンド利用停止になったやつかい」

「そう。こういう雑用すると、刑期短縮になるの」

「ケナゲなもんだねえ」

ミラーボールのように輝く太陽の元で、脂ぎった風間の表情もぎらぎらと光を放つ。またしてもオトナの事情が見え隠れしているが、キョーコは黙って汗をぬぐった。

「キョーコちゃん、しつかり休めたかい？」

「はい。ゆーぎのおかげでケガも無かったんで。よく眠れたし、ご飯も食べたし。わたし、全開ですー！」

体とは現金なもので、三階から落とされた直後だというのにキョーコはよく食べ、よく眠った。気づけば翌日の太陽は入道雲と競うように空の高みに昇りつめている。

「じゃ、夕方様子を見に来るからさ。サボンなよ」

「安心しなよ。あたしの見ている前で中途半端な仕事はさせない」

「それが心配なんだよ。お前の視野、半分じゃねえか」

「そういうことじゃないだろう、まったく！」

ぽりぽりと眼帯をかく勇儀を残して、風間はママチャリにまたがった。

「無理だけはするなよ」

それは、どういう意味だったのだろうか。

颯爽たる立ち漕ぎ姿で風間が遠ざかっていく。キョーコたちは何も口にしなかったが、彼には全てお見通しだったのだろうか。

「いいんだね、キョーコ」

キョーコは頷きで返す。たとえ鬼たちの事情に通じているとはいえ、風間やミヨシはしよせんただの人間だ。これ以上巻き込んで危険にさらしては、よいこを名乗れない。

「さ、工事現場では派手にやらかしたらしいけど。力自慢のキョーコちゃんにお手並みを見せてもらおうか」

萃香が顎をしゃくった先で重力が歪んでいた。

もちろんそれは錯覚だが、金属とコンクリートからなる異様な塊を前にすると、思わず喉を鳴らすような圧迫感を覚える。

「なんだかカワイイよね。整地ローラーっていうの。キョーコ、知ってる?」

「うん。人並み以上には知ってる……」

整地ローラー。通称コンダラ。

元陸上部のキョーコには馴染みある道具だ。とはいえ彼女の学校では道路工事に使うような重機がグラウンドを均すのが常で、人間が引っ張るための取っ手を付けたものを見たのは久しぶりだった。

「今からキョーコちゃんにコイツを引いてもらいます」

ここに連れてこられた瞬間から、薄々、そうなるような気はしていた。

「理由、聞いていい?」

「なんだかオモシロそうじゃん」

「お、オモシロ?」

「ウソウソ。体力作りに役立ちそう。キョーコ、走るんだろ?」

重々しい足取りで歩いてくキョーコは、背中に別のローラーが乗っているのではないかと思う程の項垂れっぷりだった。

「こんなことしてる場合じゃないような」

「それじゃあ、一体何をすべきなんだい」

赤錆でざらつく取っ手は、呪いのようによく掌に張り付く。既に身も心も重い、本当にキョーコの動きを止めたのは勇儀の言葉だった。

「日暮れまで正邪のぶん殴り方を考えて過ごすなんて、あんたらしく

ないよ。見据えるべきはもつと先だろう」

「先」

「ほらほら。考え事なら体動かしながらも出来るっしょ？」

けんけんぱ、と地面を蹴った萃香が、勇儀の頭を越えて飛び上がる。くるりと宙を舞った彼女は、ローラーに飛び乗ってバランスを取った。

「で、どう。やってみる？」



「いい、鬼の先輩としてアドバイス。友情、努力、勝利。友情、努力、勝利だよ」

萃香の言葉に思うことは色々あったが、キョーコはそれどころではない。

「なんだい、その前時代的なスローガンは」

「およ。知らないの？ 勝利の方程式だよ」

「ソロバン弾いて勝てるものかい」

歯を食いしばったキョーコに引かれて、重いコンダラは日向のなめくじのような速度で進んでいく。彼女の苦労などお構いなしに、お山の鬼たちは暢気なものだった。

「こつちに来てすぐ教えてもらったんだけどね、コレ守ると絶対勝つんだって」

「へえ」興味深そうに勇儀は頷いて、大粒の汗を滴らせるキョーコを観察した。

「友情についてはバッチリだろう」

顔を真っ赤にしたキョーコに鬼共は手も貸しちやくない。

「努力も言うことなし。完璧だね」

この場で汗を流しているのはキョーコだけである。

「となると結果は見えてるね」

「今日はあたしたちの大勝利だ」

キョーコの頭上でハイタッチが交わされる。

方程式に代入される数値がそもそも間違っているような気がする。寡黙に鉄塊を引き摺り続けたキョーコを虚無感が支配しつつあった。

「――痛っ」

気を抜いた瞬間に太腿の傷が痛んだ。顔をしかめたキョーコに、勇儀がタオルを差し出した。

「そろそろ休憩しとこうか。まだまだ日は高いんだ」



昼過ぎにミヨシがやってきて、弁当と麦茶を差し入れた。

「しみるねー」

よく冷えた麦茶を飲み干してキョーコはため息をつく。あれほど苦しませてくれたヌルい風は、木陰に入った途端心地よいものへと変わる。

「労働の後の飯は格別だね」

砲丸のようなおにぎりにかぶりつく勇儀は無視することにした。昼間から酒をあおった萃香は高いびきをかき、ミヨシは日向で指先に集った蝶を見つめている。

「ねえ。そろそろ教えてくれないかな」

「幻想郷のこと、正邪のこと、だったね」

もぞり、と萃香が身じろぎした。

「もう無いものや、これから戦うかもしれない相手のことを知ったところ足しになるかい？」

キョーコは草の上で姿勢を正した。しばらく面倒くさそうにそれを眺めていた萃香は、彼女の決心が一向に揺らがないのを見て取って、諦めたように体を起こした。

「――もともと私たちは幻想郷という異世界の住人だった。ということとは知っていたね」

可憐な少女の声と姿を持つ萃香だが、一度口を開けば老練の吟遊詩人のように滔々と言葉が溢れ出る。この瞬間、騒がしく鳴いていたアブラゼミまで声をひそめて彼女の話に聞き入っているようだった。

「とはいえ他の星というほど遠くはない。あくまでこの地球とは地続きの、隔絶された、隠れ里のような場所。その仕切りが博麗大結界」

「結界っていうと、神社とかの、あれ？」

「それのおバケ。果ては知れず、中の世界は風船のようにどんどん膨

らみ続けているようでもあった。住むのはいずれも外の世界に居場所をなくした怪異にアヤカシ——私や勇儀、それに正邪のあほんだらもそうだった」

「あん。あたしも?」

勇儀があまりに素っ頓狂な声を上げたので、萃香は話を中断しなければいけないかった。

「地底に輝く一番星、怪力乱神の星熊勇儀。向こうじゃ知れた名なんだから。もつとそれらしくしなよ」

「ねえ、ゆーぎって地底人だったの?」

「ちていじん?」

ふと固まったと思うと、次の瞬間に萃香は呵々大笑していた。その声の大きさをたるや、遠く見えるビルの屋上から驚いたハトが飛び立つほどだった。

「だ、だって前も地底の友達が心配してるとか何とか言ってたじゃない?」

何かと振り返ったミヨシが首を傾げた。なんでもないよと手を振ってやって、萃香は話の穂を継いだ。

「いやまあ、そういう言い方もあるね。こいつ人間と暮らすのに飽きちゃってさ。荒くればつかの地底に引越したのさ」

「なんだい。昔のあたしは、どうしてそんな無茶苦茶ばかりしていたんだい」

「私に聞かないで。自分の胸に耳を傾けてごらん」

馬鹿正直に胸に手を当てて「むむむ」と唸り始めた勇儀に肩をすくめて、萃香はミヨシの持ってきた紙袋の中を探った。

「お。ラムネだ。ラッキー」

うつすら結露した瓶を頬に当て、萃香は微笑んだ。しかし彼女が押しでも引いてもビー玉は中に落ちない。

「キョーコ、あけて」

「うん。任せて」

歴戦の鬼の手からキョーコに瓶が渡るのを、勇儀はぼんやりと見つめていた。

「私たちは外の世界では生きられない。結界で仕切ること、私達は守られていたんだね」

「あなたたちは外では忘れられたものだから」

「お。いいね。どこかで勉強した？」

キョーコの脳裏に蘇るのは数日前のアンリとの話だった。信仰が怪異の存在感を強めるのなら、逆のことも言えるはずだ。

「あたしにやイマイチよく分からないね」

雲を掴むような話だ。ピンと来ない勇儀を責めることはできないだろう。

「難しく考えなくていいんだよ。結界がラムネの瓶だとしたら、私たちはこの、しゅわしゅわ」

「炭酸」

「そう。炭酸みたいなものだと思えばいいんだ。やっぱ頭いいじゃん、キョーコったらあ」

「いやあ、それほどでも——あつ、あーあー」

キョーコの手元で炭酸の泡が弾けた。乾いた音を立ててビー玉が落ちるそばから、とめどなく吹き出した中身が地面に落ちて染みを作る。

「瓶の中身は圧力が保たれているけど、外に出ればこの通り。薄れて、いずれ消えていく宿命が待っている」

「ごめん、減っちゃった」

「それほど量はいらさないよ。ちよつとこいつを試してみようと思ったのだよ」

伊吹瓢がツンとした香りを立ち昇らせた。大方日本酒のソーダ割にするつもりなのだろう。無限に酒が湧き出る魔法のひょうたんは謎に包まれていたが、それを飲み干す萃香の胃袋も神秘という他ない。ひよつとしたらどこかで繋がって、ぐるぐると酒が循環しているのかもしれない。

「理屈が通らないねえ」

なんだかんだ熱心に聞いていた勇儀が意を唱える。

「だとしたら私たちはどうやって存在してるんだい。それだけじゃな

い。双子は、大きな犬のバケモノはどう説明する」

「順を追ってやるから安心しな」

麦茶を飲むために用意されたコップの中には酒が半分。そこにラムネを注ぎ込んで、萃香は小指で混ぜ始める。

「まず私達のことだけど。どうせ消えるなら何かに混ぜ込んでしまえと考えたやつが現れた。そう、たとえば人間の無意識とかにね」

「無意識について、どうやって」

「逆の発想。幻想を隠すのではなく、最後の最後で派手にぶちまけてやったの。全世界の人間の前でね」

「それって、いつの話？」

「今年の梅雨が明けたころ」

微妙な表情で日本酒のラムネ割りを舐め始めた萃香を前に、キョーコも勇儀も呆気にとられた。たった数週間前のことじゃないか。

「でも、そんなことがあったなら、いくらわたしでも覚えているような」

「人の記憶ほど不確かなものはない。強力な妖怪にかかればキョーコよ、キョーコ」

にわかには信じがたい——とは言いい切れないのが実情だ。特に勇儀は少し前に数百年分の記憶を無くしたばかり。苦虫をかみつぶした顔で萃香に先を促す。

「で、あの子たちや犬については」

「正直憶測になるけどね」

前置きして、萃香は伊吹瓢から直飲みした酒で口をゆすいだ。キョーコがせっかく開けたラムネは、彼女のお気に召さなかったらしい。

「二つ目の可能性は人の意識が影響しないくらい最近に生まれた怪異だつてこと。キョーコみたいだね」

「あ、そっか。わたし人間やメてたんだよね」

「他人事かい。で、二つ目と三つ目だけど、幻想郷のような隔離されたセカイで生きてきたか。そもそも人の信仰に頼らないくらい力があつたか」

三者三様に黙り込み、同時に思い出したのは月の光を帯びた大狗の怪異の姿だった。特に直接剣を交えたキョーコには、対峙の瞬間に覚えた恐怖や威圧感を、つい昨日のことのように思い出すことができる。あれは強い。あれはもつと、色々なことが出来る。それは「お手」や「おすわり」なんてチャチな代物じゃない。

「とまあ、こうして幻想郷は消滅。バラ撒かれた住人たちは、人の世界に戸惑いながら生きていくのでした」

まるで「めでたしめでたし」と締めくくりそうな語り口であったが、正直キョーコにはそう思えなかった。

「萃香ちゃん。これまで、大変だった?」

「それなりにはね」

「正邪も、そうなのかな?」

「辛いのは皆同じ、と言いたいんだけど。あいつは色々複雑でさ」

萃香の話はまだまだ続きそうだったが、キョーコは腰を上げた。

「おや。また頑張ってみる?」

「ううん。そうじゃなくて」

河川敷の土手の上。

カバンを背に走っていく小柄な人影がキョーコの目を奪った。今なら見なかったことにも、知らんぷりを決め込むこともできる。

「チヅルちゃん!」

それでも、声を張り上げずにはいられなかった。



このまま走りぬけてしまおうか。

「はい。騒々しい人ですね」

そう考えて、チヅルは結局足を止めていた。待つてやるのだからのんびり歩いてくればいいものを、足を引きずってまで走ることは無いだろうと思う。

「お、おはよう。違うね。こんにちは、かな」

「もうお昼の時間ですからね」

「チヅルちゃんはこれから練習?」

「大会が近いですから。しょうがないですね」



「そっか。そうだよね」

「先輩は何を？」

「えっと、整地してた」

「はあ？」

カタブツのチヅルを象徴するような、スクエアフレームの赤いメガネ。レンズの向こうから寄越される視線もエツジが利いていて、キョーコの言葉を詰まらせる。

「それで……なんですか。とりあえず呼び止めただけなら、もう行きませけど」

「あのね。そうじゃなくて。わたし、一言いっておきたくて」  
「なに」

「う。ええと、ええとね？」

後輩相手に何を緊張しているのだろうか。しどろもどろになったキョーコの言うことは要領を得ず、チヅルの苛立ちを加速させる。

——しっかりとしてください。

言ってしまうばいいのにと、チヅルは思う。代わりの憎まれ口ならいくらでも出てくるのに、一番大事な言葉は埋もれたままだ。

「あの、やっぱりなんでもない、かも」

「そうですか」

チヅルは俯く。衝動的に、足元に差したキョーコの影法師を、無茶苦茶に踏みつけたくなる。

「しっかりとしないかい。あなた、その子の先輩ってヤツなんだろう」

考えていた通りの言葉が聞こえた。

はっとしてチヅルが顔を上げると、キョーコの背後に大柄な女が立っている。派手につんのめったキョーコが拳を振り上げた。

「いつ、痛い！ 何するのさ！」

「あなたがおでんの大根みたいに煮え切らないから出てきてやったのさ。怒る前に礼の一つも言ってみな！」

思い切り背中を引っぱたかれたのだろう。背中をさするキョーコは目尻に涙さえ浮かべている。

「ふ」

その有様があまりに面白くて。その関係に既視感を覚えすぎて。チヅルはプラスチックのように固まった頬に、数カ月ぶりの笑みを浮かべていた。

「失礼ですが、ご友人の方ですか？」

「あー、いや。キョーコの親戚でね。こいつの面倒を色々見させてもらってるのさ」

「ねえちよつと」

「うるせえ。黙っときな」

「せんぱい、手がかかるでしょう」

「話せるねえ。あんたも苦労したクチかい」

キョーコは呆然とした。勇儀とチヅルが会うなり親しげに言葉を交わしていることもそうだが、何より、チヅルが笑っている。

「なんででしょう。じろじろ見ないでください」

彼女の表情を遠い記憶に残った微笑に重ねていたキョーコは、思わず飛び跳ねた。やはりというか、キョーコに向けられる視線は冷たく、鋭い。

「あ、いや。別に大したことじゃ」

「おら、キョーコ」

ひるんだキョーコをもう一度勇儀が小突いた。とはいえ、先の一撃に比べればずっと優しい。

「逃げるんじゃない」

「そんなこと」

とつさに反発しそうになって、キョーコは口をつぐんだ。勇儀の言うことは正しい。そろそろ、覚悟しなければいけないのかもしれない。

チヅルに向きなおって、息を深く吸う。チヅルの鋭い視線も、敵意のにじむ顔つきも変わらない。変わらないといけないのはキョーコの方なのだ。

「……部活、大変そうだね」

「そう思いますか」

「うん。後輩の子たちがちよつとね。それにスバルちゃんもあんなだ

からさ」

「そうかもしれないですね」

チヅルの表情は動かない。とはいえ、気の弱い言葉を掛けたのなら、彼女はさっさと踵を返していただろう。

「ありがとう」

「私は何もしていませんが」

キョーコがそうしているように、ヂルヅも辛抱強く向き合ってくれ。それに対する「ありがとう」だ。

「それで、部活」

キョーコの喉元に銃弾が装填される。ひよつとすれば、すべてを突き崩してしまうかもしれない一言。

「部活、やめたい?」

「いいえ」

恐る恐る放った質問への答えは、一瞬だった。

「私がピンチに強い女だということ、お忘れですか」

「チヅルちゃん……」

「それにこんな所で折れていては、先代の部長に示しがつきませんか」

一度だけ。

そう自分に言い聞かせて、チヅルはキョーコに微笑みを向ける。

「ですから心配しないでください。先輩は、先輩のするべきことをしてください」

それが地ならしだとは思えませんが、と。憎まれ口をぶちそうになつて、チヅルは口をつぐむ。

「そっか。ありがとう」

「こちらこそ。お話は以上ですね」

照れ笑いを浮かべるキョーコにチヅルは背を向ける。今度こそ駆け出さんと彼女は踵を持ち上げ——そして、もう一度地面に降ろした。

「そうそう。大会で思い出したことが」

たいしたことじゃないんだけど、というような眩きだった。

「先輩がお得意だった短距離走に欠員が出まして、困っていたのです」  
「え」

「このままでは陸上名門の名折れ。四方手を尽くして駆けずり回っています。後任の選手が見つからないのです。ですから、もし、仮にですが」

肩越しに振り返って、チヅルはもう一度笑いたくなくなった。驚きのあまり、顔のパーツがてんでバラバラになった福笑い人間が立ち尽くしていた。

「では。よしなに」

チヅルは風のように軽やかに走り去る。背後でキョーコが何か言っていた気もしたが、風のうなりだと思ふことにした。



「絶対、ゼツタイ、ゼーったいに、イヤですわ」

久しぶりに再会したアンリはかたくなだった。

「群れるのは好きじゃありません。部活に入ってわいわいキャッチボールだなんて、ああ、おぞまし」

「それで、休日の暇を肌を焼いて潰していたと」

学園のグラウンドの端に、一脚の白いビーチチェアが引つ張り出されていた。

「む。また人の視線」

サングラスを押し下げ、アンリはちらちらと視線を送ってよこしたテニス部を睨み返す。気まずそうにラリーに戻っていく彼女たちは、どう考えても午後の練習に集中できるとは思えなかった。

「失礼しちやいます。そんなにこの髪や目が珍しいのかしら」

「それはどちらかと言うと、あなたの格好に問題があるのでは……?」

小股の切れ上がった体を惜しげもなく夏日と衆目に晒すアンリ。身に纏ったストライプのビキニは、同性のチヅルでさえ赤面しそうなほど布面積が小さい。

「町に出られてはどうですか?」

午前中からこの格好でこの場所にアンリが存在していたと考えるだけでチヅルを頭痛が襲う。

「なんてことを！ 会長様はわたくしに死ねと仰いますのね！」  
「ええ……」

とにかくこの場からいなくなって欲しい一心の提案だった。しかし、話しを聞くなりアンリはものすごい剣幕でまくしたてる。校内から出られない理由でもあるのか、それとも街歩きに嫌な思い出があるのか。チヅルには分からない。

「せんばい、せんばーい！」

「あ、子犬ですわ」

失礼極まるアンリの眩きに、チヅルはうつかり頷き返すところだった。

「ツルマキさん。自主練、終わったんですか」

「違います。それと、いい加減名前くらい覚えてくださいよ」

息を切らせて駆けてきたチヅルの後輩は、ジャージに刺繍された名前を引っ張って鼻先に突きつけた。

「分かりましたから。ちよつと、汗臭いですよ」

「うへへ。それぞれ。名前覚えるまで続けますよ」

彼女は、チヅルが受け持った初めての後輩だ。だからなのかチヅルによく懐き、日に日に部員が目減りする陸上部にも毎日顔を出していた。

「タイム縮まりました。ほめてください！」

そして、アンリの言葉通り犬に似ている。

「はいはい。貸してもらえますか」

ストップウオッチを受け取って、チヅルは液晶に目を走らせる。束ねていた髪を解きながら、アンリが手元を覗き込んだ。

「あら。大したものですね」

「わっ、なんですかこの人！」

「——こういう人です。とりあえず実害はありませんから、そつとしておいてください」

「ちよつと、チヅルさ……ま？」

おそらく神は、大堀チヅルを作るときに素材の配合を間違えたに違いない。合成樹脂でできた顔はめったなことでは表情を浮かべず、今

日のように口の端が微かに吊り上がっていることでさえ、珍しい。「よくできましたね」

しかし、この瞬間のチヅルはマネキンを通り越して石仏のようだった。

「そうでしょ、そうでしょ。こりや来年のエースは決まりましたね」「気が早いです。せめて私を越えてみなさい」

ただひたすら、異様な光景だった。終始無表情のチヅルも、それを前にして嬉しそうに尻尾を振る何某の姿も。

「ツレイシさん」

「ほらまた違う。なんですか」

「最近何かありましたね」

「はい。アマノジャク様に会ったんです！」

チヅルの指先が強張った。

灼熱のグラウンドの温度が、一気に二度も三度も下がったようだった。ぐつと唇を噛んだチヅルの後ろで、アンリは眉を顰める。

「もし、あなた様の願いをお聞かせ願えて？」

「え？ えーと、忘れちゃいました。何だかお悩み相談みたいなことした気もするんですけど」

「悩みがあったのですか」

「やだなあ。そんな顔しないでください。願いも悩みも、みーんな忘れちゃいましたから。今はシアワセ。とつてもシアワセなんです」

「戻って、自主練の続きをしないなさい」

言うな否やで二人を後に残すと、チヅルは決断的な足取りで歩き始めた。その先には、旧校舎がある。

「か、会長様。お待ちになつて！」

「いつてらっしやーいー！」

サンダルをつつかけたアンリがその後を追う。残された後輩はいつまでもいつまでも、枯れたヒマワリのように首を傾げ、虚ろな笑みを浮かべていた。

## 8 『願い星が墮ちる速度で（下）』

「なあるほど、ですわね」

旧校舎の壁も、アンリの白い尻も、虎のように目を吊り上げたチツルの横顔も。多分に傾いた陽は地上の一切を茜色に染め上げつつあった。

「旧式のストップウォッチで叩き出した新記録。ただし、それはゼロコンマ数秒の差」

スタートを見て、手で計測を開始し、ゴールを確認して、手でスイッチを押す。それでは、どうやっても記録に誤差が出る。

「だから、公式な記録は写真や機械で計るんです」

「はあ。なんてハイテクなのかしら」

「常識ですよ、陸上をやるなら」

もちろん、それはチツルの後輩にとっての常識でもあるはずなのだ。

「ズブの素人だってあんな風には喜びません」

「では何かが、あの子の認識を捻じ曲げていると?」

一見してチツルは無表情だ。しかし、ストップウォッチを握る指先は白く染まっている。プラスチックのフレームが歪んで軋む音が聞こえた。

「たとえば、催眠術」

「クスリを使うという話を聞いたことがあります」

「洗脳とか。おっかないですわね」

「そもそも、アマノジャク様が実在すると?」

きわどい水着姿のままのアンリは、サンオイルの香りを振りまきながら髪をかき上げる。傍らで旧校舎を見上げるチツルの眉間に、また一本縦ジワが刻まれた。

「ここへは、それを確かめるために来たのでは?」

「確かに」

チツルは正面口の戸に近づく。もはや当たり前のように壊された錠を放り捨てて、扉を開く。カビ臭い空気が押し寄せてきた。

「ここから先は生徒会が受け持ちます。二階堂さんは日焼けの続きを楽しんでください」

「いけなくってよ、会長様」

アンリの指がチツルの眼前で振れる。

「愉快ごことを一人占するめおつもりかしら？ いけなくってよ、会長サマ。本当にイケナイ」

もはや持病になりつつある片頭痛が押し寄せてきて、チツルはこめかみを押さえる。アンリは何か勘違いしているのか。これは遊びでも何でもないので。

「そもそも、旧校舎は一般生徒の本来立ち入りを禁止しています」

「ふふ。そう遠慮しないでくださいな。あの桃太郎様も鬼ヶ島の戦いでは数を頼ったものですよ。この二階堂アンリ、今は頼もしきイヌとでも思ってお連れになってくださいな？」

遠のいていく声にチツルが顔を上げれば、アンリは既に廊下を歩き始めている。踵の高いサンダルの足音が、空っぽの校舎に高らかに響いた。

「きびだんごが……欲しくなりますね……」

そうであれば、二階堂アンリというどこに突っ込むか分からない猛犬も、幾らか御しやすくなるだろうに。



「にしても、意外でしたわね」

埃の上に残る大小無数の足跡を蹴散らして、二人は旧校舎の奥を目指す。理由は分からない。だが、前に進めば進むほど、あたりに漂う異様な気配は濃密になっていった。

「たいへん恐れ入りますが、会長様は、もっと冷たい血の通ったお方だと思っておりました」

「どんな理由があろうと人の意志を捻じ曲げることだけは許されなし」

大股に歩くチツルに、アンリは影の如く、平素の足取りで苦も無くついてくる。

「何よりあの子が悩みを抱えているのに気付けなかった。そんな私に



腹が立ってしょうがない」

「相変わらず不器用な正義を振りかざしますのね」

「正義とかじゃありません。ただ、腹に据えかねただけです」

埃のカーペットが赤いバラの絨毯に変わったことにも、すすけた柱が大理石の輝きを帯びていくのにも、二人はさしたる関心を寄せずに進み続けた。

「ふふ」

「まだなにか？」

「昔、会長様のようなお方にお仕えたことがありまして。こうして  
いると、色々と思いついてしまいますの」

いつの間にか、あたりに濃い霧が立ち込めていた。一直線とはいえ  
一寸先の視界も危うい廊下を歩く足取りは、自然と遅くなる。

「今、昔話するような状況ですか」

「いいえ。ここは虎穴。ですから虎の児を得んとする前に、ひとつ忠  
告でも、と」

「……耳だけは傾けておきますが」

「それは何より。老婆心の甲斐があるというものです」

くすくす、という笑い声がチツルの背中をくすぐる。

「にしても仕える、とは。妙な言い方をしますね」

「立派な主従でしたのよ？」

アンリの考えが、チツルには分からない。今のイカれた状況をきち  
んと理解しているのかどうかですら、謎だ。

「誰よりも強く、誰よりも優しく。そして、誰よりも孤独なお方でし  
た」

「私は強くも優しくもないはずですが」

「ですが、孤独でしょう」

「むう」

「それに、やはりお優しい方と存じます。ゆえに、どうか狂気に飲まれ  
ることだけはごさいませぬよう」

いつの間にか足を止め、チツルは聞き入っていた。

「狂気？」

「ええ。あのお方も狂気の虜となってしまうわね。それはそれは、見事なまでに」

ギイ、と音を立てて頭上のシャンデリアが揺れる。蠟燭の茫漠とした光が生み出したアンリの影は暗く、長く、獲物に忍び寄る獣のように、チツルの足元にまで伸びてきていた。

「……その人は、今どこで、何を？」

「何も。首が飛んでは、それでお終いでしよう」

張り巡らせた緊張の糸が、不意に音を立てて千切れた。

「——え？」

「やあやあ、誰かと思えば！」

だしぬけに響いた甲高い声。弾かれたように顔を上げたチツルの頬を、突風が張る。その暴力的なまでの勢いに、メガネがずれる。

「こちらへ」

言われるがまま、チツルはアンリの体に寄り掛かって暴風に耐える。

「二階堂さん、これは」

「ええ。どうやらお出ましのようです」

霧も花卉も、見えざる巨大な手に払いのけられるようにして掻き消えていく。そして現れたのは一息に両端を見渡せないほどの大階段。

「色いい返事を携えて、つてワケじゃないみたいだな」

その最上段。大理石の白と金無垢の、目を焼かんばかりの輝きを背負って玉座が一つ据えられている。

「初めまして、は違うか。とはいえ久しぶり、なんて言葉を掛け合うほど気安い仲でもない。これは中々難しいぞ」

そこから立ち上がった異様な風体の少女に、チツルもアンリも見覚えがある。

「やはり、アマノジャク様はあなたでしたか」

思えば、彼女が理事長を引き連れて学園を訪問した瞬間から、チツルの中に予感があった。

「名乗りがまだだったな。私は正邪。お察しの通り、アマノジャク様をやらせてもらっている」

と、そこで正邪はアンリの存在に気付いたらしい。

「で、そっちの痴女は？」

「二階堂アンリと申します。今はこちらの会長様のお犬をやらせていただきますの」

「お、お犬、だあ？」

怪訝の目で見られても表情一つ崩さず、アンリはチヅルの隣でこやかに立ち続ける。

「時に……わたくし達、以前どこかでお会いしたような気がいたしますが」

「ないな。気のせいだろう」

「ねえ、本当に？　すっかりわたくしを見て。ほら」

「ああ？」

大儀そうに、正邪はビキニ姿のアンリへと目を凝らす。楽しげに細められた瞼の奥へ。

「っ」

その、地獄めいた碧の色に、束の間心を奪われていた。

「くだいな。無いものは、無いんだよ」

「そうですね。思い違いだったようですわ」

慌てて目を離れた後も、その色はしばらく正邪の網膜にこびり付いてきた。

「単刀直入に言います。あなたがやろうとしていること。そして、生徒たちに対して既にやってしまったこと。即刻やめて、ここを立ち去っていただきたい」

「へえ。出てけ、だ？」

「素直に従ってくださいるのなら、事を荒立てたりはしません。約束します」

「じゃあここで私が食い下がったら？　荒立てるって、どんなことをしてくれるんだ？」

チヅルは、ポケットから取り出したケータイを掲げて見せる。

「警察に通報します」

現代においては最強の言葉だ。しかし、正邪は歪んだ笑いを崩しも

せず、玉座のひじ掛けに置いた手に、頭を預けた。

「それで？」

「学園の土地の占領に生徒の監禁、洗脳。その他諸々、言い逃れ出来ないだけの証拠がこの場にあると思えますが」

「は。ケーサツにどうこう出来るかねえ」

「国家権力を甘く見ると痛い目見ますよ」

「そっちこそ私を甘く見ないことだ——おい」

正邪の合図に合わせ、チヅルたちの背後からゾロゾロと生徒たちが押し寄せてきて、二人を取り囲む。

「ずいぶん汚い手を使いますね」

「打てる手は打つ。そこに汚いもキレイもないんだよ」

生徒たちは武装していた。それは尖らせた何かの柄だつたり、ガラスの破片だつたり、錆びたバールのようなものだつたり。なまじ日常に溶け込んだ凶器である分、かえって生々しく身の危険を突きつけられる。

「あらあらあら。まあまあまあ。随分としよっぱい余興を用意してくれたものですわねえ」

だが、それはあくまでチヅルのはなし。

「この人数でわたくしとやり合おうだなんて。桁が違うんじゃないありませんこと、桁が」

指の関節を鳴らしながら進み出た水着女。それを目にした途端、ほとんど反射的にチヅルは彼女を取り押さえていた。

「会長様、アマノジャク様が血をぐ所望ですわ」

思いの外強い力に、チヅルは面食らう。

「この子たちの血も、あなたの血も。一滴たりとも流すことは許しません」

「それは、命令ですの？」

「あくまでお願いですが。ただ主様とやらを私に重ねているのなら、少しは言うことを聞いてくれませんか」

「チヅル様」

ふっと、アンリの体のこわばりが解けた。恐る恐る手を離すチヅル

と、正邪を交互に見比べ、僅かに肩を落とす。

「命を拾いましたわね。この方に感謝なさい」

生徒たちは一言も発しない。諸手を上げた二人を見て、彼女たちも武器を下ろしただけだ。依然として包囲は解けていない。

「感謝か。考えるだけでじんましんが出来そうだ」

だが、正邪の口元は笑っている。鳴無響子との対面を前に飛び込んできた二人組。口にせずとも、自覚せずとも。その巡り合わせに、確かに正邪は感謝していた。

「倉庫に閉じ込めておけ。こいつらは利用できる」

「会長様、やはり暴れちゃった方がよろしいのではないかしら？」

「大丈夫です。彼女は私達に手出しできない」

音も無く近づいた生徒たちが、二人を拘束する。日に焼けた腕を古い荒縄が擦る感覚に顔をしかめながら、チヅルは冷静に言い放った。「ほう。どうしてそう思うんだ？」

「あなたの欲しがる旧校舎は、私の許可なしに絶対手に入りませんか」

鼻で笑って、正邪はチヅルの得意顔に手を伸ばす。頬を撫でさする鋭い爪を前に、彼女は瞬きもしない。

「それもそうだが。お前には餌になってもらう」

「エサ？」

「そう。キョーコ。出来損ないの鬼。あいつを怒らせたい。あいつの力を確かめたいんだ。もう一度」

「鬼？ キョーコ、先輩が？ あなた、一体何を」

「会長。私と共に来る気は無いか」

流石に動揺を隠しきれないチヅルを正邪が遮る。離れていく彼女の手には、赤いフレームのメガネが握られていた。

「人のことなど滅多に、いや、曲り間違っても誉めるつもりはない。だが、お前はそこの学生とは違う。せつかく出た芽がこのまま踏みにじられていくのは、あまり勿体ない」

「今度はどんな魂胆ですか」

「悔しくなったのさ。それだけだ」

チヅルはドの付く近眼だ。メガネなしでは正邪の表情を確かめることはできない。ぼやけた像を結ぶので精一杯だ。

「例えるならば、人も通わないような深山の谷間に紅を差す一輪の花」  
「——なに？」

それでもかろうじて、正邪が足を止めたことは分かった。

「私から芽吹くのは、そういうものです。踏みにじられようが、無視されようが、私は私が正しいと思うことをするだけ——あなたの誘いは乗りません」

「お前、その目」

ろくに焦点も合わせられないチヅルの瞳。その奥にあったものは、正邪が忘れもしない、あの輝きだ。

「いつもだ。ことを成そうとすると、いつもお前のような連中が現れる」

チヅルは黙る。正邪は睨む。

「……連れていけ。すぐに」

やがて放たれた、ためいきのような正邪の声。縛られたチヅルとアンリを小突きながら、生徒たちは廊下に渦巻く霧の中へ進んでいく。

「正しくてイイコちゃんの会長に一つ教えてやる」

罪人のように引つ立てられながら、チヅルはその声を聞く。

「私の華は、お前のようにはいかないんだよ」

背後で大扉が閉まる音が響き、あとには微かな息遣いと、降り積もった花卉を踏む音だけが残された。

「ごめんなさい。やはり、連れてくるべきではなかった」

視覚を失うと、アンリの存在感は途端に希薄になる。それでも辛うじて、彼女がチヅルに微笑んだ気配は感じ取れた。

「会長様が謝ることではありませんわ。それにわたくし、縛られるのは嫌いではありませんから」

思えばアンリは全裸といっても過言ではないような水着一枚を身に着けたただけだ。

「寒いですか」

「いいえ。これっぽっちも」

アンリの声が、僅かに震えている。夏だというのに廊下に漂う冷氣は冷たく、チツルですら鳥肌が立つほどだった。

「それはさておき、今は別のことに考えを巡らせるべきでは？」

アンリの言う通りだった。正邪の口ぶりからすると、間もなくキョーコがこの場にやってくる。

「先輩まで、危険な目に遭わせるワケには……」

「ふふ。キョーコ様。あのお方がいらして、怒りのままに大暴れしてくれるというのなら」

焦燥に駆られるチツル。その隣でひそかな笑い声を漏らすアンリの頬が大きく深く裂けていく。

「願ったり、叶ったりですわねえ」

その奥でカチカチと打ち鳴らされる鋭い牙。その震えの源は寒さなどではない。もつと獯猛で、血なまぐさい衝動だ。



「鬼人正邪はそれほど強い鬼じゃない」

夏日に焼かれたグラウンド。ついに動きの止まったローラーに腰掛けて、萃香は白い素足をぶらぶら揺らす。

「うーん……じゃない、ハズなんだけどなあ」

「ハズって。しっかりしとくれよ」

勇儀が指についた泡を舐める。近場で買ってきた缶ビールを手にした彼女は、あまり楽しそうな様子ではない。

「幻想郷のことも、正邪のことも、あんただけが頼りなんだからね」

「文句たれるな。勇儀が記憶を無くさなきゃ、私がこうして頭をひねる必要はなかったんだよ」

「ケンカ、しないで……ね？」

二体の鬼は足元に目をやる。炎天下での過酷な労働の末、ついにぶつ潰れたキョーコは陸に打ち上げられたクラゲのように伸びていた。

「正邪が幻想郷に対して戦いを挑んだのは二度」

萃香がキョーコの手を取り、離す。なんの抵抗もなく、手はくたりと落ちる。

「二度だつて?」

勇儀が驚くのも無理はない。幻想郷は一つの世界だ。それを相手にして二度。尚も生き延びて新しい革命を企てる正邪という存在は、明らかに只者ではない。

「とある一族の末裔。そいつに有ること無いこと吹き込んで起こした大混乱。それが一度目」

「その一族だつて?」

「コビトだよ、小人。お椀の船に箸の權つてやつ」

そして萃香に寄せられる、明らかに困惑したまなざし。二人にとつて信じがたい話であることは承知の上なので、無視して彼女は続ける。

「二度目はあいつと幻想郷の連中との追いかけっこ。とはいえ、どいつもこいつもやる気満々でね。よく凌いだもんだよ、あいつ」

「おいおい。そのどこが『それほどでもない』んだい?」

「一度目はあくまで影から糸を引いていたわけだし。二度目だつて、反則級のアイテムを使い捨てながら、なんとか逃げ切ったみたいだからね」

「つまり?」

「こと権謀術数を繰る力と悪運にかけては鬼の中で最強。あとはからつきし」

だからこそ、萃香は改めて首を捻らなければいけない。

「勇儀、はじめてアマノジャク様の噂を聞いたのはいつだい?」

「細かいこたあ覚えちゃいないが、先週くらいのことだったかな。野球チームのチビ助どもが急に騒ぎ出して」

「キョーコは?」

「大体ゆーぎと同じくらい」

「つまり、噂の発端はおおよそ一週間前。そこから爆発的にK市中に広がっていったことになる」

「ウワサは、怪異を強くする」

ようやく喋る程度の体力が戻ってきたが、キョーコの頭は霞がかかったように朦朧としている。そんな状態で発したうわごとのよう



な言葉に、萃香は頷きを返した。

「だけど、それにしても影響の規模もスピードもおかしすぎる。チビ鬼たちから聞いた話じゃあ、旧校舎の中には城が建っているって言うし、時間の流れまで狂っているそうじゃないか」

「正邪の能力ってことは？」

「あいつの能力は『ひっくりかえす』だけ。まして、人間の認識を操ることなんて」

「新しい能力に目覚めたってことはないかな？」

「ふむ」萃香は伊吹瓢を取り出した。「キョーコ、能力っていうものは鏡なのさ」

「能力が、カガミ？」

紫色の瓢箪が傾く。こんな夏日の下で飲む酒はさぞかし回りが早いのだろう。ふはあと息をついた萃香の影法師が、早くも千鳥足を踏み始める。

「そう。能力が映し出すのはね、持ち主の本質なんだ」

そこまで言われてもキョーコに実感はない。大狗の怪物と戦う最中、遮二無二呼び出した青白い稲妻。あの激しく荒れ狂う力のどこに、自分の本質が現れているのだろうか。

「鏡の像が変わるのは、自分の姿が変わった時だ。そして本質とは往々にして不変のもの。そう簡単に変わったりはしない」

ドロドロに溶けた鉄から作り出した一本の棒。それを別の形に変えるためには途轍もないエネルギーを必要とするのと一緒だ。

「それにホラ、正邪ってへそ曲がりだから。一朝一夕で心を改めるとか。ないでしょ？」

「うーん、確かにそうかも」

だが、そうなると正邪が操る力の説明がつかない。

「誰かが力を貸しているってのは、ないかい」

「実はね。私も同じことを考えていた」

打って変わって、萃香は真剣な表情を浮かべる。

「キョーコ。覚えはないかい。あいつが能力を使う時、すぐ傍に変な奴はいなかった？」

記憶の糸を、必死にたぐる。たぐればたぐるほど、キョーコの脳裏には全く別のものが像を結び始めていた。

「ナマクビ」

「首、だつて?」

「あ——ごめん。誰かじゃなくて、何か、なんだけど」

違う、とキョーコの頭は否定する。しかし、記憶の中の正邪の腕に抱かれたしやれこうべは見る間に姿を変えていく。

「鬼みたいな角が生えた」

少女の、

「白い」

薄ら笑みを浮かべた、

「ガイコツ」

生首。

「キョーコ、大丈夫かい?」

勇儀の言葉に我を取り戻すと、キョーコの全身を氷雨のように冷たい汗が覆っていた。

「急に遠くを見詰めたと思ったら真っ青になってき。日陰、行く?」

肌に感覚が戻ってきた。体がゆっくりと温まるのを感じながら、うるさい程だった蝉の声を、懐かしく感じる。

「……ううん。大丈夫」

「にしてもガイコツか。メチャクチャ怪しい。あいつとやり合う時は注意しなきゃね」

やり合う——キョーコは、何気ない一言を噛み締める。それは、戦うということだ。

「あの子を殴ったり、できないかもしれない」

「向こうは手加減しないよ。まして相手は鬼人正邪。旧校舎自体、あいつの仕掛けた罠とかかかってもいいくらいだ」

それは、キョーコも理解している。正邪がカタナを使って何かをする気だということも、今や、生徒の命運は彼女の手握られているということも。

「目的のためなら手段を選ばない。そこだけなら、私は正邪をちよっ

とだけ尊敬しているよ」

これからキョーコが立ち向かうのは、そういう相手だ。三人が見上げた空は気が早いもので、日も暮れないというのに宵の色を浮かべつつある。

「行かなきゃねえ」

勇儀の声を合図に腰を上げたのは、しかし、二人の鬼だけだった。

「ねえ、最後は？」

ぴたり。萃香の足が止まる。

「それは、どういう意味の質問？」

「正邪は最後に、どうなってしまったの」

萃香があえて結末を省いたということを、キョーコは分かっていた。彼女は言葉にせず問うていたのかもしれない。聞く勇気はあるか、と。

「大方の想像はついているんじゃないかい」

「うん。でも、教えて欲しい。知らなきゃいけない気がするの」

キョーコはまっすぐに萃香を見つめていた。

「ひとりだよ。たったひとり」

そうして小さな唇から語られたのは、あまりに当たり前で、あまりに虚しい事実だった。

「あいつはついに、ひとりになってしまった。それだけ。あいつの物語はそこでお終いなんだ。本当に」

「そんなのって」

キョーコの握りこぶしの下で、腿のスマイリーがひしゃげている。

「寂しそうっ」

幻想郷は、ハグレモノ達が集う場所だ。そこでも世間に忘れられ、更には仲間たちからも見放され。自らの周りに埋めがたい堀を巡らせた後に、彼女は何を感じたのだろうか。

「それとも、カワイソウ？」

萃香が問う間、キョーコは唇を真一文字に引き結んだまま、一言も発さなかった。

「そんなんじゃないんだ」

哀れみにまみれた言葉をかけたなら、今度こそ完全に正邪は心を閉ざしてしまう気がする。だが、どう歩み寄ってやればいいのか、キョーコにはわからない。

「なんだか胸のあたりが、ぎゅってする」

日焼けした肌がじりじりと痛む。勇儀を見捨てた時も、萃香を斬りつけたときも、キョーコは同じ痛みを、体のもつと内側で感じていた。

「キョーコは正邪をどうしたい?」

「ずるいね」

思わず、キョーコは呟いた。

「ごめんね。でも、こうしないとキョーコの本音ってのは聞けないと思ったから」

今日一日ローラーを引かされて、骨の髄までクタクタだ。今すぐ寮に帰って布団に入りたくらいなのに、これから正邪との対決が待っている。

「身も心も限界まで疲れれば、正直なことしか言えなくなるだろう?」

キョーコはよいこだ。そして、心のどこかでは、正邪を倒さなければいけないということも理解している。

「答えたく、ないな」

「ダメだよ。今決めて」

戦ってよいこをやめるか。それとも皆を見捨ててよいこをやめるか。キョーコは誰も傷つけられないという正邪の言葉は正しい。だからこそ、決断できないのだ。

「簡単なことじゃないか」

堂々巡りに手を差し伸べたのは、勇儀だった。

「これはキョーコと私の問答なんだけど?」

「手助けをしてやるだけさ」

何か言いたげな萃香を後に残して、勇儀はキョーコの前にしやがみ込む。目線の高さを合わせてみると、彼女はずっとずっと大きく見えた。

「嘘偽りなくって言うんなら、先にあたしの質問に答えな。あんたの夢ってなんだい?」

「夢。わたしの夢は」

数日前にアンリと同じ話をした。空白の未来の前に浮かぶ自分の夢は、なんてささやかで、なんてちつぽけなのだろうと。キョーコは自分という人間に絶望しそうになった。

「夢に大きいも小さいも無いんだよ」

勇儀のたった一声が、その疑念を打ち砕くまでは。

「あたしには記憶がない。正邪が言う通り、中身の無いただの抜け殻なのかもしれない」

そんなことはない——キョーコが必死に掛けようとした言葉は、かすれて上手く出てこない。

「だけど。この空っぽさを感じていると、あたしはワクワクしてくるんだ」

「……それは、どうして?」

「夢を失ったわけじゃない。だって、あたしの夢は、あんたを送り出す時、あんたの夢に上乘せされたはずなんだから」

その瞬間、豪雨と雷鳴の音がキョーコの頭の中を埋め尽くした。それはあの日、きさらぎの駅で感じたもの。黒い鬼。大狗。サキの面影。勇儀の血の香り。そして彼女の決意。今まで忘れていたものが、全てが戻ってきた。この瞬間に!

「わたし、の」

長い夢から覚めたようだった。

「なあ、教えておくれよ。あたしを夢中にさせた、あんたの夢を」

「わたしの夢は、もう一度走ること」

それこそが嘘偽りのない本心。あの日の勇儀とキョーコが、暗黒の世界に光明を見出したものなのだ。

「わたしはこの足で走るんだ。誰かと戦うのが、わたしの夢じゃない」  
もう一度、はつきり言い放つ。

「だから、正邪——せーちゃんを傷つけることはできない。いや、しない」  
「い」

「ふうん。で、具体的にキョーコはどうするのかな?」  
「仲良しになるよ。あの子と」

勇儀が言っていた、見据えるべき『先』。それが、この瞬間はつきり見えた気がした。

「本当によいこバカなんだから。きつと骨が折れるよお」

しかし、言葉でそう言いながらも萃香は笑っている。キョーコは彼女が予想だにできなかった答えを、見事に導き出して見せたのだ。

「そう。それが一番、あんたらしいよ」

固く強張った勇儀の顔にも、かすかな笑みが浮かんだ。

「走りな、キョーコ。走っている限り、あんたには誰も追いつけない。誰もあんたの夢を邪魔できないんだから」

勇儀は立ち上がり、汗でキョーコの額に張り付いた前髪を優しく除けてやる。

「眩しいね、あんたは」

勇儀を見上げるキョーコの瞳。その潤みが、夕日を受けて星のようなきらめきを宿していた。

「……ゆーぎ、あのね」

「なんだい。ガラにもないとか何とか、その飲んだくれみたいなことを抜かすつもりかい」

「違うの。ありがとう」

口を半開きにしたまま勇儀が固まった。

「ま………参ったね。礼を言われるほど、大したことは言っていないはずなんだけど」

「大したことあるよ。ゆーぎがいなかったら、また取り返しのつかないことをしていたかもしれない。せーちゃんを、萃香のように斬り捨てていたかもしれない」

勇儀の手は、キョーコのそれと比べ物にならないほど逞しく固い。しかし、きゅつと握りしめていると、優しい温かさを感じた。

「だから、ありがとう。ゆーぎの夢も、きつといつか取り戻そう。一緒に」

「分かった、分かったから。顔っ、近っ、少し離れてってばー」

勇儀が何度振り払っても、キョーコは吸盤で吸い付いたように離れない。そうして、不思議そうに見上げてくるのだ。

「具合、悪いの？」

もはや勇儀の額は脂汗でびっちよりだ。尚も心配げに顔を寄せようとするキョーコを、萃香が引き留めた。

「そこいらでやめとき。あたりが火の海になる」「え？」

「いい加減火を噴くってこと。顔が」

勇儀が、実にぼつの悪そうな舌打ちをする。

「照れてるのさ、こいつ」

キョトンとしていたキョーコが、ようやくすべてを理解して吹き出した。そこに萃香まで加わって馬鹿笑いを浴びせかけられるうちに、勇儀は大きな体をどんどん縮めていく。

「何だよう。よいこが人様を笑っていいのかよう」

「そういうわけじゃないよ。ないけどさ」

とまれ、気持ちは大分軽くなった。しかしこれ以上礼を言つて勇儀の顔からマグマが噴出しても困るので、キョーコは微笑を浮かべるに留める。

いじける勇儀を背にキョーコは木陰に置いていた荷物をかき分ける。取り出したものは細長い包み。巻きつけられた汗臭いツナギの上からでも、薄皮を撫で削るような鋭い気配を感じる。

「戦いに行くわけじゃない」

自分に言い聞かせるように呟いて、包みを持つ。準備完了だ。

「我々の力は特別だよ」

歩き出したキョーコと勇儀に半歩遅れて、萃香が続く。

「力とは本質。だけど、鬼の場合はそれだけじゃない。『どうありがたいか』はね。『どうありたくないか』でもあるんだからね」

足元はふら付いているというのに、萃香の言葉はまっすぐキョーコの心を捉えて離さない。その意味も、理由も、今のキョーコに知るすべは無いというのに。



「なんだよォー！」

風間風太郎は吠えた。

「全ッ然終わってねえじゃん！」

河川敷の片隅に、うち捨てられたローラーが物悲しく転がっている。中途半端に作業がなされたグラウンドに三人娘は影も形もない。

「……ま。そんな気はしてたんだよな」

しかし、風間の身を焦がした憤怒の炎は、すぐに消え失せた。代わりにタバコに火を灯すと、夕風に紫煙の帯をなびかせる。

「あんたもそう思ったんだろ。だから来た」

返事の代わりに、あたり一面の木々が嵐に吹かれたようにさざめいた。暮れ合いの空に飛び交う木の葉と鳥影。それらに紛れ、巨大なヒトガタのシルエットが、飛んだ。

「やれやれ。モテすぎるのも考えものだけ、キョーコちゃん」

不意に吹きつけた冷風に、風間はドテラの襟元に首を埋める。グラウンドにはうっすらと、季節はずれの霜が降りていた。



## 9 『虚飾（上）』

「馬鹿正直に約束を守るとはな」

玉座の端に乗せられた盆から葡萄の房を掴み取って、正邪はキョーコを見据える。武装した傀儡の生徒たちが衛兵のように立ち並ぶ大階段にあつて、彼女の表情には恐れ of 欠片も見えない。

「勇儀や萃香はどうした？」

「外で待ってるよ。あんまり、時間をかける気はないから」

「へえ。面白い」

正邪は盆を差し出す。キョーコは首を横に振る。

「おかしいな。普通、家来っていうのは、主の差し出すものを断つたりはしないはずなんだが」

「わたしはあなたの家来になつたりしない」

「つまり、敵陣に一人で乗り込んできたってことか。私を倒して、こいつらを助けるために？」

ブラツクな皮肉に、正邪は嗤う。キョーコが助けに来た生徒たちは、今や武器を手に彼女をなます切りにしようとしているのだ。

「あなたを倒すつもりはない。傷つけるつもりもない」

それでも凜と、キョーコは言い放つ。

「わたしはトモダチになりに来たんだよ、せーちゃん」

「せーちゃん」だあ？ トモダチだあ？」

あたりに積み上げられた菓子や玩具を乱暴に蹴散らして立ち上がった正邪は、狂人でも見るような目をキョーコに向ける。

「いいか、私は追われているんだ。いつも命の危険に晒されてる。トモダチになりたいなら、まずは家来として私を守ってもらおうか」

「もういいんだよ、せーちゃん」

足元に転がってきた葡萄を一粒拾い上げ、キョーコは口に含む。渋い。

「何だよ、キョーコ、その顔」

「知ってるんだ。せーちゃんはもう自由だ。追いかけてくる人達なんて、とつくの昔にいなかったんだ。そうでしょ？」

「お前……」

正邪の口の端が吊り上がった。笑っているのではない。剥き出しになった牙の切っ先で、憎悪と怒りが輝いている。

「お前までそんなことを言うのか」

自分が押ししてはいけけないスイツチを次々と押ししているのは分かる。それでも今更やめる訳にはいかない。正邪に現実と向き合ってもらうためには、避けては通れない。

「だから、わたしと一緒に帰ろう。安心して暮らせるよ」

「以前……私が騙した小人もそんなことを言つて手を差し伸べてきたっけな」

ぞわり。

重力の方向を狂わせて、正邪の体が浮かび上がる。その手には角のある髑髏<sup>ドクロ</sup>。青紫色に煌めく炎に焦がされるそれが、只ならぬ気配を放っている。

「そいつは気に食わないから簀巻きにして叩き出してやったが」

戦闘態勢の正邪の前に、キョーコの両手はだらりと垂れたままだ。隠し玉で意表を突く気も、騙し討ちの気配も感じられない。混じりつけないの無抵抗。

「家来になるつもりもなければ、戦うつもりもないってか」

それは、正邪が初めて見せた怒りの形相だった。

「だったらくれてやるよ。戦う理由つてやつをな」

正邪が上着のポケットから取り出したものは何てことのない、ありふれた眼鏡だった。スクエアフレームの、赤い、まるでどこかの誰かのカタブツさを象徴するような。

「さつき向こうから乗り込んできたんでな。捕まえさせてもらったよ」

「せーちゃん、それは」

メガネのつるを啜えた正邪が、フレームをぐにやりと曲げて見せる。今やキョーコは顔面蒼白だ。

「それだけは、ダメだ」

「そうだ。少しは鬼らしい顔になったじゃないか」

「それだけはやっちゃダメだったんだ」

既にキョーコの背後に刃物を手にした生徒たちが迫っていた。完全に彼女の死角。不意を打たれれば、鬼だつて危うい位置だ。

「かかれ」

邪悪に笑つた正邪の一声で、彼女たちは一斉に飛び掛かった。

「お前、自分が何やってるのか分かつてるのかよッ！」

キョーコの怒号と共に、無数の機関銃が火を噴くような爆音が広間を満たした。彼女から飛んだ青白い放電が柱を舐め回し、正邪は全身の毛が逆立つのを感じる。

「あははっ、いいぞ、キョーコ。その怒りだ。その憤怒こそお前なんだよ。もつと私に見せつけろ！」

「違う、こんなの！」

数日ぶりに思い切り能力をぶつ放した気分は、最悪だ。

「いいや違わないね。鬼は元々悪いモノ。見ろよ、そこに転がっているのがお前の本質なんだ」

黒く焼け焦げたカーペットの上に燃える花卉が降り注ぐ。バタバタと折り重なつて倒れ込んだ生徒たちに駆け寄つたキョーコを、正邪はせせら笑つた。

「ああ、よかつた」

脈を確かめて、胸を撫でおろす。まだ能力に覚醒して間もないキョーコには、十分に力を使いこなすことができない。出力全開で放電していたら、今頃床には炭の塊が転がっていただろう。

「お前はどうしようもなく歪んでるよ。そのイビツさと言つたら、この私といい勝負だ」

そつと、見知つた顔の生徒を床に寝かせて、キョーコは正邪に向き直る。

「鬼でありながらキレイゴトを抜かすお前は、間違つてる」

「わたしは、サキちゃんは間違つてない！」

その怒気に反応して、キョーコの全身から火花が散る。うって変わつて上機嫌の正邪はメガネを弄んだ。

「教えて。チツルちゃんはどこ？」

「そうだなあ。このメガネを私から取り返したら」  
空気が破裂する音がした。

「——教えてやろうか」

音を感じた瞬間には、正邪の目と鼻の先までキョーコが迫っていた。振り上げた拳の爪が、鋭い輝きを放っている。

「へえ。知恵を付けたか」

——ごめん、せーちゃん。ゆーぎ、萃香。

たった一発、全力で打ち込ませてもらう。狙いは余裕の笑みを崩さない口元でも、眼鏡を握る指先でもない。髑髏だ。

「力の源を見破ったのは誉めてやろう。だが」

電撃の爪が髑髏の頭蓋を叩き割る寸前、正邪も、髑髏も、キョーコの視界から完全に消失した。

「遅すぎるよ、お前」

耳元にふっと息を吹きかけられた瞬間、キョーコは背中に鈍い痛みを感じた。そこから襲い来る、胃袋を掴んで揺すられるような急加速と、衝撃、轟音、激痛。

キョーコを蹴り飛ばした正邪の足。優雅な曲線を描く太腿をうっとり撫でて、彼女は髑髏に口づけする。

「今の私は無敵だ」



「ぐえっ」

何度目かの衝撃が倉庫を揺らした後、重い物同士をぶつける音に混じって、くぐもった悲鳴が聞こえた。

「始まったようですわね」

見張りを手早く片づけたアンリは、チヅルの縄を解きにかかった。

「に、二階堂さん？ どうやって……」

「武術の心得がありますの。縄抜けはまあ、趣味が高じて、ということ  
で納得していただければ」

我が身の一部同然である眼鏡を失ったチヅルには、大正時代から存在する倉庫の風景も、薄汚れた床に落ちた荒縄も、その鋭すぎる断面も見えなかった。

「ここから動きますわね。手をお取りになつて」

それでも、旧校舎で何か良くないことが起こっていることくらいは分かる。

「ところで二階堂さん、まだ水着のままなんですか」

ぼやけた視界のせいで、前に行く二階堂の後ろ姿は殆ど肌色一色に見える。

「ええ。制服はきゆうくつで困ります。特に、今日みたいな日は」

「周りの人間が窮屈な思いをするとか、考えないんですか」

「いいえ。わたくしの一番は、わたくしが気持ちいいかどうかですよ。他は二の次三の次といったところですよ」

チヅルは呆れる。呆れるが、今はこの痴女のポジティブさが心の支えだ。手を引いて、迷わず進み続ける足取りも心強い。

「ところで、どこに向かつてるんですか」

「騒ぎの火元を確かめようと存じます」

やっぱりそんなことはなかった。野次馬根性丸出しのただの変態だ。

「ひ、火元って！ 明らかに異常事態じゃないですか。ケガしたいんですか、死にたいんですか!？」

「うふふ。会長様は心配性でいけないわ」

「あなたがチャレンジャーすぎるんです！ いいから外に出て、警察を呼びましょう。これは犯罪です。テロ行為です!」

及び腰のチヅルをずるずる引つ張つて、アンリは粉碎された大理石の壁をなぞつて歩く。延々と続く廊下を真つ二つに引き裂くように、破壊の跡も長々と続いていた。

「もう、いい加減にしてください。これは私達の手には終えませぬ。二階堂さん、あなたも私も、ただの学生なんですよ」

「しっ!」

アンリの手が、チヅルの口元をぴしやりと打った。

「っ、なんなんですか、もう」

「恐れ入りますが、音が」

「音?」

アンリに倣って耳を澄ませば、遠くから響いてくる奇妙な騒音に気付く。硬質の物体同士がぶつかり合う鋭い高鳴りや、壁や床を打ち砕くどどろろき。

「戦っておいですわ」

その音はどちらかと言えば工場の騒音を思い出させたが、実際に目にするアンリがそう言うなら、間違いないのだろう。

「戦い？ 一体何と何が」

「鬼と鬼。同族の戦いです」

「オニ……」

『キョーコ。出来損ないの鬼。あいつを怒らせたい』

どうしても正邪の言葉が思い出されて、チヅルはアンリの肩越しに首を出す。

「教えてください。キョーコ先輩なんですか。あの人、ここにいるんですか。どうして!？」

その肩を乱暴に掴んで、アンリが瓦礫の間に二人の体を滑り込ませる。

「伏せて！」

恐ろしく速いものが二人の頭上を通過していった。温室のように廊下を覆うガラスが一斉に砕かれ、瓦礫と共にアンリの背中に降り注ぐ。

「チヅル様、お怪我は？」

「はい。おかげで。二階堂さん……それは？」

「大事ございませんわ。石くずが降りかかっただけですの」

手の甲を貫通した破片を顔色一つ変えずに引っこ抜いて、アンリは戦い続ける天邪鬼と雷神に視線を馳せる。戦況は、極端に傾いているようだった。



「驚いただろう」

顎をカタカタ鳴らしながら、正邪の周りを燃えるドクロが旋回する。嘲笑の二重奏を浴びせられながら立ち上がるキョーコの全身に刻まれた傷が、ゆつくりと癒えていった。

「出来るアマノジャクは頭脳で殺す。今どんな気持ちだ？ ん？」

食物連鎖ヒエラルキーのどん底に叩き落とされた気分は？」

「強いんだね、せーちゃんは」

「あ？」

正邪の舌打ちに合わせて、天井から崩れ落ちた巨大な岩の塊がキョーコを押し潰した。

「その名前で呼ぶな、虫唾が走る」

もうもうと立ち込める砂埃の中で、折れた牙と血の混じった唾を吐く。勇儀や萃香はああ言っていたが、キョーコは一瞬たりとも正邪を侮ったりはしていない。それでもここまで追い込まれるのは予想外だった。

「なあ、時にキョーコちゃんよお。どうして旧校舎と私の名前をセツトで広めたと思う？」

体制を立て直す暇も与えず、天井から岩石の雨がキョーコに降り注ぐ。砂塵の中を疾走する青い稲妻を、＼とるに足らない鬼＼である正邪の瞳が追えている。

「どうしてここを抜けると記憶が無くなる？ どうして学生共はここでしか私のことを覚えていられない？ このご時世に神様は出張営業もしてくれないのか？」

計算づくで配置した岩の牢獄にキョーコを誘い込んで、本命の一撃を叩きつける。煙幕の中で断末魔のように散った青い光を見て、正邪は強者の感覚に打ち震えた。

「教えてやろう。ここは私の聖域。私への信仰をあえて限定して集中させた場所。この場所が、旧校舎である限り、私は絶対に負けることはない！」

勝ち誇る正邪の背後から、砂塵に紛れて忍び寄ったキョーコが飛び掛かる。

「それに、お前と私じゃ潜ってきた修羅場の数が違い過ぎるな」

ひらりと身を捻った正邪が、キョーコの横っ面に踵を叩き込む。ピンボールのようにバウンドしながら壁にぶち当たった彼女の上に大理石の柱が倒れ込んだのを見て、正邪は腹を抱えた。

「あ、ぐ……い、ったあ……」

痛いと言つて痛みが無くなるわけではないが、声に出して状況を認識することは大事だ。特に、窮地に立たされている時ほど。

「まだやるのかよ。そろそろ見てるこっちが痛くなつてくるんだケド？」

勝手極まることを言う正邪を尻目に、キョーコは瓦礫の山から這い出す。正邪の言葉が真実でも嘘でも、このままでは勝ち目がない。



埃にむせるチヅルは、しきりに押し殺した咳をしていた。

彼女を背後に、アンリは注意深く瓦礫の間を移動する。暴風雨のように攻撃を吹かせる天邪鬼は、幸いにもキョーコに首っただけで足元の二人に気付いた様子はない。

「キョーコ……先輩が、ここにいますか。どうして、教えてくれないますか」

「恐れ入りますが、わたくしの口からは何とも申し上げられません」

あくまで答えず、アンリはチヅルを抱きかかえる。すらりとしたモデルのような体型にも関わらず、彼女の手足は軽々とチヅルを支えた。

「え、ちよ、二階堂、さん。自分で走れますから！」

「ごめんあそばせ。こちらの方が早くつてよ」

言うが早いかサンダルを脱ぎ捨て、アンリは疾風のように駆け始める。彼女の素足はガラスの破片の上に血の足跡を残しながら、決して止まることは無い。

「む」

煙幕のように立ち込める砂塵の中に道を嗅ぎ取っていたアンリが不意に飛び退った直後、青い稲光が彼女たちの鼻先を擦っていった。

「うわあ！ 何ですか、今の」

「カミナリ」

アンリは瞼を閉じている。驚くべきことに、視界の一切が利かない砂塵に包まれた彼女が頼りにするのは耳と鼻。そのもたらす情報 は、方向音痴という欠点を補って余りある精密な地図を彼女の頭に描



き出す。

「か、かみなり?」

「ええ。速くて強くておっかない、現代の鬼」

チヅルには謎めいたアンリの言葉を半分も理解できない。それでも、今日の前を掠めていった砲丸のようなものが天邪鬼と戦っているのなら。

「敵の、敵は」

「味方、となれば心強いのでしようけれど」

ガラスを踏みしだいて、アンリが飛ぶ。

「心して聞いて頂きたいことがございますの。よろしくつて?」

暴風圏の外側に逃れたアンリは、チヅルを降ろして足の裏を眺める。ズタズタに引き裂かれた肉が激しく蠢き、奥深く埋め込まれたガラスを次々と吐き出していった。

「今更改まって、なんですか」

常人には不可能な慣れ業をやつてのけたアンリより、状況を上手く把握できないチヅルの方が緊張で息が切れている。それが常識なのだ。ごくごく当たり前の女の子の姿は、理外の理がしのぎを削る戦場ではあまりに頼りない。

「アマノジャクの言葉をお聞きになったことと存じますが、確かにわたくし達は勝ちを見込めそうにございませぬ。このままでは」

しかし、アンリはその頼りなさに勝機を見出したようだった。

「あのにつくきアマノジャクを玉座から引きずり落とし、ぎやふんと言わせることが出来るのは、この手だけですの。今この瞬間、チヅル様のお手に、切り札が握られておりますの」

「私に、これを收拾できるって言うんですか」

「左様に存じますわ」

月の香りがする銀の髪。毛先をつまんで弄びながら、アンリはチヅルを値踏みする。碧眼の深淵は、どこまでも冷たい光を灯していた。

「今朝は」

いつの間にか真一文字に切り裂いた掌を握ったり閉じたりしながら、チヅルは心細く呟いた。

「今朝の内は、結構いい気分でいられたんです。上手く行っていない人とか少しだけ話せたりして。ここからようやく始められるんだって思ってた」

「それにしてもはぶっ飛んだ一日になったものですわねえ」

「ええ、本当に」

血を流したのは久しぶりだった。皮膚と一緒に、自分の体をすっぱり覆って、感情も感覚も鈍らせていた重いゴムの膜が、切り裂かれていったような気がした。

「大袈裟なことを言いますが、個人的に生徒会長の仕事は生徒の日常を守ることで考えています」

アンリは何も言わない。それでもいいとチヅルは思う。得体の知れない彼女が何を考え、何を企んでいるのだとしても。自分さえブレなければそれでいい。

「こんなケバケバしく飾り立てられた虚<sup>ウツ</sup>は我が校に相応しくない」

決意を宿したチヅルの瞳の中で、アンリが口の端を吊り上げた。



「よくないねえ。こりゃあ、よくない」

旧校舎の屋根の一部が粉々に吹き飛んだ。そこから迸った青い稲妻が薄闇の空を真白に染め上げ、グラウンドに立つ勇儀たちと、うつろに佇む生徒の輪郭を闇夜に浮かび上がらせた。

「正邪のヤツ、何か手を打ったみたいだね」

ちゃぽり、と伊吹瓢の傾く音がする。高みの見物を決め込むことにした萃香は、さっそく一杯やりはじめていた。

「キョーコが心配じゃないのかい」

「だって、如何しようもないじゃないか。私たちが旧校舎に入ったら人質がジサツするっていうんだ。任せるしかないでしょ」

「あの子がまた、誰かにカタナを向けることになっただら？」

「私はキョーコを信じてる。この傷に誓ったっていいよ」

「おお、やってるやってる。遠くからでも目立つなあ、コレ」

言葉に詰まった勇儀の背後から聞き覚えのあるギョギョ耳障りな音。

「おうおうお前ら。整地ほったらかして何処行ったかと思えば。こういう見世物には俺を呼べたら。ズルいぞ」

ママチャリでグラウンドに乗り入れた風間の手にはビールのケース。この修羅場で完全に花見気分 of 二人に挟まれて、勇儀はじりじりと焦りを募らせていく。

「そうかい。真面目ちゃんはあたしだけってか」

更に連続した爆発音が数度。地獄から吹き出したような紫炎に叩き破られた窓ガラスの破片が、月の光を乱反射する。

「ゆっぴー行くなー!」

堪らず旧校舎に駆け出した勇儀を、鋭く風間が制止した。

「止めるな風間つつあん!」

「お前が行っても足手まといだ。悪いがな」

「だけど、けどあたしは約束したんだよ。どんな時でもキョーコと一緒にだ。それしかしてやれないんだ」

巨大な梁が回転しながら飛んできて二人の間の地面に突き立った。それを蹴倒して腰を下ろした風間は、勇儀に手招きした。

「信じて待つのも女房の仕事だぞ」

「誰が女房だい、誰が」

「ま、座れよ。んで頭冷やせ」

端の燻る梁から火種を貰って、風間が煙草をふかし始める。

「少し、昔話でもしようや」

息を吹き返したように割れ砕けた旧校舎の窓が輝く。数条の雷光が校舎を直撃し、雷鳴が三人の鼓膜を殴りつけた。



「本当に、こんなもので?」

部室から持ってきたスペアの眼鏡は度が合っていない。書類にびっしり印刷された文面を呼んでいると、目の奥がチカチカしてきた。

「当たるも当たたらぬも八卦と申しますもの。当たって砕けろ、清水の舞台から飛び降りるヤバレ!カバレの輝きこそ、青春の華ですことよ」

アンリのうそぶくトンデモ青春論が高らかに響き渡るほど、校舎の中は静まり返っていた。休日ということ差し引いても、この静寂は異質すぎる。

「虎穴は新校舎の方だったようですが」

例えるならば、虫の巣。教室の中にうごめく無数の気配が、息を殺してこちらを見ている。

「ええ。皆さん真面目でいらっしやるのね」

「せえんぱあい。どこへ行くんですかあ？」

やがて、暗がりの教室からぬるりと生徒が現れる。黒い闇が膜を張った瞳は、さながら昆虫の複眼のようだった。

「……自主練していると、言っただけですが」

その手元で、チキチキと顎を鳴らすような音を立ててカッターナイフの刃が伸びていった。

「しましたよお。そんなマジメな後輩をほったらかしてサボりだなんて、こりやあ部長にはお仕置が必要ですよねえええ」

へろへろと力ない動作で上がった腕が、猛烈な勢いで振り下ろされる。ろくすっぽ狙いもつけていなかったのだろう、刃は壁にはじかれ、彼女はバランスを崩して大きくよろける。

「もお、どうして避けるんですかあ」

これなら一晩続けても当たらないだろうが、問題はその後に見えるものだ。

「今日はよく袋にされる日ですわねえ」

あたりにひしめく生徒たちの手には金属バットに鉋やノコギリ。殺意の配分が、旧校舎の比ではない。

「会長様、あれが見えまして？」

アンリの指さした先に広がる薄闇の中に、チヅルはかろうじてドアを見出す。彼我の距離はおよそ50m。チヅルの足なら六秒強。

「殿はわたくしにお任せになって。合図を致しますから、チヅル様はただ只管、脇目も振らず猪の如く駆けてくださいませ」

「二階堂さんはどうするんですか」

「わたくしには野暮用がございますの」

もはやアンリを止めるのは無駄だと悟ったチヅルはカバンの中に書類の束を突っ込んで、廊下の先を睨みつける。

「それも、キョーコ先輩が関係することですか」

On your mark.  
「いちについて」

こんなハチャメチャな状況だというのに体に染みついた習慣とは恐ろしいもので、有無を言わさずアンリが唱えた呪文を耳にしたチヅルの全神経は、既に扉に向けて収束されている。

Get set.  
「よーい———どん」

アンリのフィンガースナップが軽やかに響いた。

片や放送室。叛逆への叛逆へと最初のステップを踏み始めたチヅル。片や雲霞の如く殺到する生徒。奇怪に歪んでいくアンリのプロポーション。

「はっ、はあっ」

ただ走るということが、これほど怖いと感じたのは初めてだ。

ビン底眼鏡で歪んだ景色。背後で次々と開いていく扉から生徒たちが飛び出してくる気配。バタバタと、不揃いで、奇妙な足音が追いかけてくる。

「はあっ——」

背中に忍び寄った恐怖の手を、邪険に振りほどく。そんなものにバトンをくれてやるものか。旧校舎が正邪の聖域というのなら、この50mはチヅルの絶対領域だ。

「どうだ、このっ—」

鋼の心臓に鉄の腱。引き絞った弦のようになやかな筋肉で、更に速く、更に先へ。

『放送室』のプレートを弾き飛ばしてドアを開け放ったチヅルは、一度振り向いてアンリの無事を確かめる。

「せんぱあああ、待ってくださいっいたらあああ」

「わあああ!」

廊下の奥で躍動する銀の光を見付けた直後、目の前に生氣のない顔が又つと現れた。

「ッ、ツルサキさん、離してくださいー!」

「だから名前が違うんですつたらああ。ぶちよおおおう、私のこと、どうでもいいヤツとか思ってますよねええええ」

「……………え？」

放り出されたカッターナイフが床に突き立った。チヅルにすがりついた彼女は、泣いている。

「知ってるんですよ。私がバカでぶさいくで出来ない戦力外だつてことくらいいい。だからいっつもテキトーにあしらってるんですよ!?」

黒い涙と鼻汁がチヅルのジャージに染みていく。がくがくと揺さぶられながら、チヅルは自分の表情が和らいでいくのを感じていた。「そんなことは、ありませんよ」

「え、ええ？　ほんとうですかあ？」

袖を使って顔を拭つてやる。結果的に煤のような汚れが顔じゅうに広がっただけだったが、彼女の瞳を塞いでいた黒いモヤは徐々に薄れて、消えていった。

「本当です。私は嘘をつきません」

「で、でも。私、使えない子だし。インターだつて、エースだつて、遠い遠い、また遠い夢のまた夢のはなしだし」

「焦らなくていいんですよ」

愛おしさを込めて、チヅルは彼女の肩に触れた。

きつと今夜が終われば彼女はすべてを忘れてしまっただろうが、自分だけは、この会話を覚えていようと胸に刻む。

「ゆっくりゆっくり、走ればいいじゃないですか。私はずっと、待っていますから」

「じゃあ……………えと……………なあんだ……………私、ずっと勘違いしていたんですね……………」

「はい。ですから誤解も解けたところで」

彼女の背後から無数の足音が迫ってくる。本当はもう少し話したいところだが、仕方がない。

「今は取り敢えず、眠っていてください」

後ろ手に持っていたバッグを、脳天めがけて思い切り振り下ろす。

ごす、と鈍い音が響いた。真面目一辺倒で本当によかったと思った。休日でも持ち歩く分厚い参考書が、絶妙のエッジをヒットさせたのだ。

「え、えええ、そんなあ……？」

意識を失って倒れる寸前、彼女は明らかに正気だったような気もしたが、深く考えないことにする。チヅルはその体をドアの外に優しく蹴り出して、カギを閉めた。

「さあ、アマノジャク様。いや、鬼人正邪」

狂ったように叩かれ始めたドアを無視して、チヅルはマイクのスィッチを入れる。スピーカーから流れだした低いうなりを聞きながら、深呼吸を一つ。

「私の華を活けて差し上げます」

10 『虚飾（中）』

「とにかく笑わない子でさ」

旧校舎が燃えている。

火影で真っ赤に染まった校庭は、どことなくキャンプファイアーの夜を思わせる。マイムマイムでも流してやれば、立ち尽くす正邪の傀儡たちも陽気に踊り出すかもしれない。

「ミヨつちちゃんが腕にヨリかけたメシ持って行っても、俺がどんなにふざけ倒しても苦笑いの一つも返しちゃくれねえ。正直、愛想悪いクソガキだつて思ったよ」

潰れたビールの空缶に、風間はちびたタバコを突っ込んだ。じゆう、と断末魔が聞こえた。

「それ……キョーコのこと、だよな？」

困った顔で、萃香が問うた。

彫りの深い顔立ちに濃い影を垂らして、風間がこくりと頷く。

「う、うっそだあ。あのノーテンキが？ どうせなら、もつと上手いウソ吐けよなー」

へらへら笑つて萃香が脇を小突いたが、風間は黙つて次のタバコを啜えただけだった。

「今思うと、笑い方を知らなかったんだらうな」

「はん。そんなバカな話があるかい」

思わず勇儀は口を挟んでいた。

「あたしを引き留めようつて魂胆なんだろうけど、時間稼ぎにしても上手い作り話をしちゃくれなにかねえ」

信じられないし、信じたくない。あの、脳味噌の代わりに金平糖が詰まっているようなキョーコが。暗く塞いだ少女だったなど。

「人は誰でも生まれつき、笑い方を知ってるもんさ。笑えないのはあなたの冗談だ」

「信じる信じないはお前さんに任せるよ」

いつものように風間が意地を張つたなら、まだこの話を笑い飛ばす余地もあつたらうに。妙な潔さを見せつけられて、勇儀も萃香も、顔



を見合わせて肩を竦めることしかできない。

「それに、人は笑い方を忘れる」

古い木材が焼けて爆ぜる音に紛れるように、風間がぼつりと付け足した。

「忘れる？ なにそれ、どういうこと？」

風間は答える代わりに、心の澱を絞り出すように、細く長く煙を吐いた。

「あの子が推薦受かったT女に通い始めて、陸上やらせたサキって奴に再会して。すべてが変わったのは、それからだったな」

タバコに火事。煙っぽい空気から逃れるように勇儀が空を仰ぐと、満点の星空が目に見えた。



幾度、打ち込んだらうか。

幾度、はじき返されたらうか。

「お前は確かに速い。が、馬鹿のひとつ覚えだ」

あまりに出来過ぎたワンサイドゲーム。没頭するうち、キョーコは足算する余裕すら無くしていた。

「もつと全力で私を潰しに来い。かつて幻想郷の連中がそうしたようにな」

拒絶の言葉と共に、正邪が大きく体を開く。蹴りだ。ここまで散々足癖の悪さを披露されてきたキョーコの脳裏に選択肢が提示される。

即ち——受けるか、守るか、退くか。

しかし、いつになつても正邪が攻撃を仕掛けることはない。キョーコも同じく、膠着を保つ。

「……なんだ？」

「月が」

二人同時に、ガラスの天井を見上げる。

視線の先には丸い月。そこにポツリと浮かんだ、針の先で刺したような小さな小さな陰り。

それが高速でこちらに落ちてくる何かであることを気付いた瞬間、二体の鬼は全力で距離を取った。

「ごきげんよう。アマノジャク様  
ばりり。」

天井に亀裂が入った次の瞬間、ガラスは無数のナイフとなって二人の鬼へと降り注ぐ。

殺意の雨の中から一際異様で、巨大な切っ先がぬつと顔を出した。

「お前、あの時の……！」

二人の鬼が固唾を呑んで見守る先に、銀色の塊が着地した。衝撃でガラスと花卉が嵐と渦巻く中で、それが長い首をもたげる。

「その節は大変なご無礼を致しました」

「ゆーぎを斬った、悪い犬……」

「ええ。悪い、わるーい狗ですことよ」

「忘れてくても忘れられない。」

乗用車ほどもある大きな犬。割れた天井から降り注ぐ月光に、銀の毛並が濡れたように輝いている。

「お二方、こうして参って早々に大変不躰とは存じますが——」

落下の一撃のまま床に突き立てられていた西洋剣を、大狗は器用に口で引き抜いた。

波打つような、炎のような、特徴的な加工を施された刃がキラリと光る。

「——どうぞ、ここで、おっ死ちにあそばせ」

再び、烈風が吹きすすさんだ。

「そうか。勇儀を斬った鬼つてのはお前だったか」

ひとつ飛びで目の前に迫った大狗。首に向かって流れ来る太刀筋を前に、正邪は焦るでもなく呟く。

「まああ」

ぎしり、と音が響いた。

「器用でいらつしやいますこと」

「剣と犬の相手は初めてじゃない。宴会芸の一つも披露しようと思つてな」

真一文字に振りぬかれた刃を足場に、正邪は冷たく大狗を見下す。  
「せーちゃん、大丈夫!?!」

「……………ああ。ま、あ。いや」

能天気な呼びかけに、巧みにバランスを取っていた正邪は危うく転げ落ちるところだった。

「お前、敵の心配するのかよ！」

「敵じゃない。トモダチだよ！」

「へえ。ならわたくしは？」

攻撃の起こりを察知して、正邪が飛び上がる。

「わたくしは敵ですよ、味方ですよ？ それとも、トモダチにしてくださいる？」

「わたしはあなたのこと、何も知らない」

「はくじようですわねえ。色々世話焼き合った仲ではありませんこと？」

「……………なんのこと」

「ニブいふりはおやめになったら？」

「行ったぞ、キョーコッ！」

正邪が叫ぶが、会話に気を逸らされたキョーコの反応は完全に遅れた。意識の間隙を貫くように肉薄した大狗が、キョーコの胴めがけて刃を翻す。

「よくつてよ。敵と言いつつ、情はお捨てになられない」

慌てて大狗から離れていく青い稲妻。赤い筋が、じわり、とその通り道に滲みだす。

「ぐっ」

壁際に膝をついて、キョーコは血で染まったブラウスの脇腹を押さえた。

「いいわ、アマノジャク様。そういうのは、実にいい」

「——お前、馬鹿か？」

だが、正邪が狼狽えたのは一瞬のこと。剃刀もかくやというほど鋭利な笑みを浮かべて、正邪は空中でくるりと宙がえりを見せて見せた。

「そいつに死なれちゃ、あのカタナの担い手がいなくなるんだ」

大狗が、低く唸った。

そこから高笑いの一つでも飛ばすかと思えば、正邪に向けるのは鋭

く研いだ剥き身の殺意だ。

「どういう仕組みかは知らんが、あれはキョーコにしか使えない。だからお前はこいつを消したい。違うか？」

「……驚かせてくれますわね。さすが、邪知暴虐を極めるアマノジャク様ですこと」

「吐き気がするくらいの誉めっぷりだな。生憎キョーコは我が王国の尖兵だ。お前の好きにはさせないぞ」

あくまで天邪鬼っぷりを発揮する正邪。大狗は、今にも飛び掛からんばかりに全身を張りつめている。

「それを知るなら猶のこと。アマノジャク様にも消えていただかなくては」

「いいよ、来いよ。出来るものなら」

「わたしにしか、使えない？ どういうこと？」

「うるさい。鬼のクセして甘い台詞ばかり吐きやがって。こっちが終わるまで引っこんでろ」

地を擦り、火花を散らす大狗の刃は、形状も相まって本当に燃えているように見える。

「お覚悟はよろしくつて？」

「お前の方はどうなんだ？」

正邪の手中で紫炎が沸き立つ。地獄めいた低さの唸りをあげて、大狗の体がぼんやり光り始める。御互いに、唯我独尊の笑みを浮かべていた。

「うるる」

「なん、だど？」

しかし、両者の激突は起こらない。

「あれは。ききさうぎ駅で見た」

突如、床から黒い炎が立ち昇った。

戦いの余波を受けて倒れ伏した生徒たちの体から、それは沸き出してくる。呆気にとられる鬼たちの前で、黒い渦は徐々に形を成していった。

「業鬼」

ずちやり、と湿った音を響かせて、はじめの一体が立ち上がる。手足をバタつかせて関節の馴染みを確認する仕草は、妙に人間くさい。「うー、きつー」

「人の悪が織りなす鬼。誰もが持ちうる悪業は、時として形を成すことがございますの」

勇儀と駆け抜けた暗黒の世界。

大狗に追われた祭りの夜。

「このK市では、とりわけ激しい形で」

思い返せば業鬼は、どこにだって現れた。

瓦礫の隙間、月の光を逃れた暗闇。ありとあらゆる場所から、業鬼たちは際限なく生まれ出てくる。無貌の頭部に生えた赤い角をアンテナのように揺らして、キョーコたちの居所を探っているようだ。

「なあるほど。学生の中に様子の可怪しいヤツがいると思ったら、そういうことだったか」

ほん、と手を打つ正邪にも、じわりじわりと業鬼が迫る。ただひたすらに悪食を極めようとする彼らには、それがかつての主人かどうかなど、些細な問題でしかないのだろう。

「おいおい、見境なしかよ」

「悪業は悪しきに集う。我々鬼に食指が動くのは当然のことですわね」

「鬼は、悪いものだから……」

「その通り、ですわ」

大狗が無造作に剣を薙ぎ払う。

体を両断された業鬼たちは床の上を這いずり回り、互いを喰らい合っぴとつに戻ろうとする。

正邪は暫く面白そうにその様を眺めていたが、すぐに飽きをきたして階上をおおいだ。

「ここも手狭になったもんだ。場所を変えよう」

「ま、待ってー!」

シャボン玉のようにフワフワ漂っていく正邪の後を、業鬼たちの合間を縫うようにしてキョーコが追いかける。

「逃がしませんわよ」

無数の業鬼を切り刻みながら、大狗が続いた。



長い、長い廊下を、正邪を追ってキョーコは駆ける。

——で、あの鬼を捕まえてどうするんだ？

脚のスマイリーが目で問いかけてくる。キョーコは彼を黙らせるようにスピードを上げた。

「ごんな、時に！」

廊下も業鬼でひしめき合っている。舞い散る花卉を追いかけていた彼らは、キョーコたちの姿を目にした途端に我先へと押し寄せてきた。

「質問の答えがまだでしてよ」

殺人旋風がキョーコの背後に追い上げる。

「ねえ。仲間外れはいけないわ。わたくし、キョーコ様と仲良しになってはいけないのかしら。ねえ、ねえ、ねえ」

ならまず、その物騒なものを仕舞えと叫びたかった。しかし今のキョーコは走るのに精一杯。大理石の壁に黒い体液が飛沫く。業鬼も壁も床も無残に引き裂いて、大狗が吼えた。

「せーちゃん！」

影鬼たちの頭の向こうに、正邪の姿が見える。

「ねえ、せーちゃん。こんなことに意味があるの。いくら戦っても、傷付くだけなの！」

「私は私を守るために戦っている」

「だから戦う相手なんて、もう」

ごう、と音を立てて古びた学習机が飛んできた。

「あぐっ」

避ける暇もなかった。顔面に一撃もらったキョーコが体制を崩す。床に寝そべる業鬼に足を取られ、彼女はごろごろ転げていった。

「相手ならいるさ」

不思議と、今の正邪はその無様さを嘲笑うことはしない。ただ、無表情のままに淡々と言葉を吐き連ねた。

「私の華とは悪の華。失って、ようやく気付いた」  
「待つ、うわあ！」

大階段に辿り着いた正邪が別れを告げるように手を振る。重力がひっくり返った。

「この先でお前を待つ。犬に負けたら、笑ってやる」

ほとんど垂直に傾いていく廊下に、キョーコと大狗はしがみつく。無数の業鬼たちが人形のようにその周りをごろごろと転げ落ちていった。

「キョーコ様」

床、というか今では断崖だが。

板目に剣を突き刺した大狗はその上に「おすわり」して、大階段向けてよじ登っていくキョーコを見上げた。

「あのカタナはわたくしの主の忘れ形見」

大狗は、深々と頭を下げて見せる。

「どうか、返して頂きたく存じます」

そこには確かに切実な響きがあった。しかし、キョーコは振り返りもしない。

「カタナを取り返して、どうするの？」

大狗が、碧い目を細めた。

「成すべきことを、成すだけですわ」

「それは、誰かを傷つけること？」

「必要があれば」

壁に、キョーコの爪が深々と突き刺さる。

「人を傷つける必要だって？」

忘れかけていた憤怒が、腹の底から沸き出してきた

「勇儀を、双子ちゃんを殺そうとしたことに、ちゃんとした理由があったってこと？」

「恐れ入ります。わたくし——」

「何と言おうが絶対にお断りだ。お前にだけは、死んだって渡してやるもんか」

大狗を振り切るように、キョーコは力強く壁を蹴った。弾丸のよう

に飛んだ彼女の前に、大階段がぐんぐん迫る。

「愚かなお方」

しかし、下方から異様な気配が迫りくる。

あと一息で大階段の縁にかけようとした手を引つ込めると、キョーコは真横に飛ぶ。

直後に奏でられた大音響。キョーコのすぐ傍で爆発した昏い光が、大階段の一部をくり抜くように消滅させていた。

『月に執り着く』わたくしの力は、宵闇の中でこそ最も明るく輝く。これは導きの月光。あなた様の死出の旅路を飾る」

足下に目をやれば、大狗も、西洋剣も、今や狂おしいばかりの碧光を纏っている。

「脅かしても無駄だよ」

大狗の力には底知れないものが有ったが、今更キョーコは恐れない。正邪と手を取り合うのだ。日和った選択肢は自ら切る。

「わたしは、絶対お前に負けてやれない」

「ハ」

大狗が剣先で天頂を指す。不気味な響きを奏でる光波が、ゆらりと刀身の上に漂った。

「大した吠えつぷりですわね鳴無響子！」

その光が解き放たれた瞬間、キョーコはカギ爪で壁を掴んで飛び上がった。

「吐いた唾飲むんじゃありませんことよ、ほらア！」

迫りくる光波の渦。触れようものなら即ジ・エンド級の破壊力を秘めた光の嵐の中を、危うげにキョーコは飛び回る。

「くうっ」

廊下は、既にこれ以上破壊できないくらい蹂躪されていた。あばた面の焼け野原。炭化したクレーターを伝って逃げるキョーコの運も、すぐに尽きた。

「もらったッ！」

構造的耐久性の限界に達した廊下が、偽りの重力方向へと崩落を始める。急に足場を失ったキョーコが体制を整える隙を与えず、全てを



焼き尽くす月光がその身に迫った。

「――出やがりましたわね」

だが。

「た」

そのの介入が無ければ、間違いなく死んでいた。

命を拾ったキョーコが目と口を開くと、異様に冷たい空気が粘膜を凍て付かせる。

「助けて、くれたの？」

月の色の炎を突き破って、巨大な腕が現れる。その色は、果てしなく黒い。キョーコと大狗の間の虚空に翼も支えもなく浮かんでいるのは、うつすら霜を纏った、鎧の鬼。以前にもキョーコと大狗の死合に割って入ったそれが、僅かに兜を揺らして頷いた。

「あ、ありがと……ごごい、ます？」

「ねえ、あなた。どこから沸いて出やがりましたの？」

寡黙な鎧の鬼に対し、お喋りな大狗は、既に限界まで苛立ちを募らせていた。

「あなた、お名前は？」

当然というか、返事はない。

「お住まいは？　ご趣味は？　自己アピールなどごごいまして？」

ふざけた問いの数々。返答は、あくまで沈黙。

「静かな方ですのねえ、ええ!」

怒号と光波が迸った。二発目の光波の直撃に、鎧の鬼の体が大きく揺れる。砕けた鎧の欠片がバラバラと飛び散った。

「――氷？」

キョーコは目を剥く。頬に触れた鎧の破片が、彼女の掌であつという間に水になる。

「思い出しました。随分昔のことと、わたくしとしたことが、今までコロっと忘れていましたわ」

大きくひしゃげた鎧が瞬く間に元の姿を取り戻していく。欠けた装飾を補うのは、また、氷だ。

「主の傍に、似たような鬼がおりましたわねえ」

それ以上、喋ることは許されなかった。透明な拳で殴りつけられたように、大狗の体が大きくひしゃげた。

「氷……だけじゃない。一人に二つの能力……やはり、あなた様は……」

壁に叩きつけられた大狗の目には、これまでの比ではない殺気が込められている。

その片隅に宿る僅かな郷愁が、キョーコをひどく困惑させる。

「ふふ……今更どの面下げて腰抜けがお出ましに？」

大狗の体が反対側の壁に激突する。次はまた反対へ。交互に、交互に、戦意を手折る様に丁寧丁寧に廊下を血染めにしていく鎧の鬼は、指の先すら動かしていない。

「あ、あのっ」

鎧の鬼は攻撃の手を休める。馬鹿丁寧に靴を脱いだキョーコが、小鳥のように肩の上にとまっている。

「そのくらいに、しませんか？」

そつと兜に触れたキョーコと、今や虫の息の大狗。それらを交互に見比べて、やがて鎧の鬼は静かに頷いた。それを見て、キョーコはついに、微笑む。

「よかった。あなた、優しい人なんだね」

「勝手に……矛を収めた気に……なっつてんじやねえですわよ……」

肉団子寸前だというのに、大狗はよく喋った。

「もう、やめようよ」

「ぐふふふ。見くびつてもらっちゃあ困ります。わたくし、まったくと、これっぽっちも草くた臥たれておりませんことよ」

「……………はあー」

呆れというか、憐れみというか。

兜の下から聞こえた微かな溜息。それが、この鎧の鬼が初めて見せた感情の片鱗だった。

「あ」

鎧の鬼は壁の窪みにそつとキョーコを降ろす。次にその剛腕で掴んだものは、壁に磔にされていた大狗の頭。

「よくつてよ。わたくしたちの仲ですもの。チリになるまで——ほぐうえっ」

壁に押し付けられ、大狗の顔も、その声も奇怪にひしゃげる。直後、鎧の鬼は自らを空中に固定する見えない糸をプツリと断ち切った。後はすべて、重力が解決してくれる。

「がああああッ！ キョーコさまああああ……！」  
がりがりがり、と激しく壁を削る音に、悲鳴にも似た大狗の叫びが混ざる。

猛烈な勢いで落ちていった一鬼と一匹はあつという間に遠ざかり、見えなくなつた。

「殺さない、よね？」

不思議と、あの巨大な鬼からは敵意を感じなかった。無口な鬼が最低限の手心くらいは加えてくれることを祈つたキョーコが気を取り直して頭上を仰いだ直後、遥か下方でズンという重い音が響き、校舎が揺れる。

「いや、本当……大丈夫かな」



「そのサキつてやつと私、どっちが仲良かった？」

「答えるまでもないな」

風間の答えに、萃香は一気に機嫌を悪くしたようだった。見ている方が心配になるくらい勢いで瓢箪をあおつて、少女の物とは思えないくらい汚いげっぷをぶつ放す。

「グエエエエ——プ」

「ゲツプで抗議するんじゃないやねえ。酒くせえ」

「私とキョーコの仲良しこよしっぷりを甘く見るなよ。何を隠そう、一度斬られてるんだぞ」

「どんな価値観の中で育てば友情と刀傷を結び付けられるようになるんだ」

風間の背中を叩くのは、包帯に巻かれた萃香の手。細腕でぽこぽこ  
と軽い音をいくら奏でたところで、風間は涼しい顔だ。

「ん。ゆっぴー、どうした？」

「あん？」

猛烈なデジャヴユに襲われていた勇儀は、風間の言葉で我に返る。キョーコに「よいこ三原則」を仕込んだという紅坂サキ。その名前が、妙に引っかかっていた。

「……なんでもないよ。ちよいと、考えゴトさ」

前の「星熊勇儀」は、知っていたのだろうか。サキの名。キョーコにとつての、彼女の立ち位置。いくら考えても、当然答えは見つからない。

「なあなあ。どういうことだよ。これ以上キョーコと仲良くしたら溶けてくっついちゃうぞ。たいへんだぞ」

「そういうことだったんだよ」

「はあ？」

平安の貴族は月を愛で、虫の音に風流を見出したという。果たして本当にそれが楽しかったかどうかは置いておいて、今宵の勇儀は燃え盛る旧校舎とサイレンの音を肴にビールを飲む。こんなに味気ない酒は久しぶりだ。ビールは生温いし、泡は油膜のように口の中にへばりつく。

「鬼のお姫様は純粹無垢でいらっしやる」

「なんだよ、馬鹿にしてるのか、風間」

頬を膨らませる萃香。今までその隣で静かに酒を飲んでいた勇儀が、おもむろに口を開いた。

「教えてくれよ、風間つつあん。女の子同士で唇を触り合ったり、抱き合ったり。それって、悪いことなのかい？」

「え、仲良しって……そういう、こと……？」

風間の言う通り、萃香は無垢なのかもしれない。すっかり置いてきぼりを喰った彼女が、火影の中でも分かるほど頬を赤らめる。

「さあな。おっちゃんは見ての通り男だから」

無精ひげが輝く頬を、風間は搔いた。

「じゃあ男同士はどうだと聞かれればモチロン無理だ。とにかく俺は絶対ご免こうむる」

「じゃあ、悪いことなの？」

「別にそうとは言ってねえよ」

「逃げるなよ、風間あ」

「……うるせえな。悪いことなら鬼の専門分野だろうが。お前らさつきから中学生みたいなことばかり聞きやがってよお」

自棄になってビールを飲み干す風間の足元には空き缶の山。今夜の酒の回りの悪さは、彼も感じているらしかった。

「まあ、でも確かに。あの子は少しだけ後ろめたいのかもしれないな」  
キョーコは、よいこだ。

「あの子、少しおかしいだろ」

「あんたはそう思うのかい」

「まあな。少なくとも普通じゃない」

結局、キョーコは未来であろうが、夢であろうが、よいこであるためなら、いかな代償でも差し出すだろう。それは清廉潔白というよりも、無菌室や漂白剤のような、どこか不健全な純粹さを思わせる。

「一年前に紅坂サキが行方をくらませた時も、あの子はニコニコ笑ったまま。足をやっても、部活をやメても、ずっと」

サキの「よいこ三原則」が善意の産物だったとしても、それはキョーコを縛る重い枷だ。手足を縛られ、彼女はどこまでも沈んでいく。はずだった。

「こりやそろそろヤバいなって思った時に現れたのが、ゆっぴー、お前だ」

「あたし？」

筆舌に尽くしがたいキョーコの過去。いつしか静かに耳を傾けていた自分の名前が急に織り交ぜられたので、勇儀は思わず聞き返していた。

「言つたら。あの子のよいこは筋金入りだ」

ここに来て、風間は打って変わって愉快そうだ。夜風に吹かれる口元から、歌うように彼の言葉が溢れ出す。

「あのキョーコちゃんが、だぜ。お前が来てから泣くし怒るし。ケンカした時なんか、本当にムナクソ悪そうにしてるんだ。こりや、ノーベル賞ものの快拳だよ。さすが鬼だっと思ってたね」

啞然。そうする他ない。同じように呆然と立ち尽くす萃香と目を合わせてから、勇儀はおずおず口を開く。

「そ、それは……風間つつあん。あたしは一体、けなされてるのか？ 褒められてるのか？」

豪快な風間の笑いが響く。

あつはつはつ、と。燃え爆ぜる木の音も、激戦の音も、彼の濁声にかき消されていった。

「色っぽいよなあ。年甲斐もなくそそっちまったよ。あの子が怒ってる顔にさあ」



それは、一切が白によって構成された世界だった。

「お前、本はあまり読まないだろ？」

壁が白なら床も白。果てしなく広がり続ける空間に点々と屹立する建造物も同じく真白だ。

「ここは昔、図書室ってやつだったらしい。とはいえ棚だけで本もなくてな。見ていて寒々しいからこうして詰めものをしてやったわけだ」

正邪の言葉で、初めてわかる。

墓標のように立ち並ぶそれは、超巨大な書架だった。そこに並ぶ背表紙も、また白い。

「優しいんだね、せーちゃんは」

「お前、本当はわざとやってるだろ」

「ふえ。何を？」

「もういい。少し、黙ってくれないか」

虚白きよはくの世界の中で、ただ、室内に広がる一面の青空と書架の上に腰掛けた正邪だけが色鮮やかだった。

「弱者とは、開かれざる本だよ」

バタム、と大きな音を立てて本を閉じ、正邪はそれを無造作に放り捨てる。本は空中で回転すると、鳥のようにページを羽ばたかせながら二人の頭上を旋回し始めた。

「誰からも見向きされず、いずれ埃を被って朽ちていく。そこに、ただ

有るだけなんだ」

チヅルの眼鏡が、正邪の膝の上で光を反射する。

外見こそ煌びやかに飾り立て、肌も髪も綺麗に整えられてはいたものの。キョーコの目には、彼女が出会った時以上に弱っているように見えた。

「堪らないな。忘れられていくというのは」

「じゃあ。やっぱり、せーちゃんは」

低く、低く、まるで、朽ちかけた木のうろが風に啼くような。キョーコはそれが笑い声だと言うことに気付くまで、時間がかかった。

「まったく、寝覚めの悪い夢だ」

鬼人正邪は、孤独な鬼だ。

古今東西で尽くした悪逆非道の限り。果てに無関心と忘却が有るとすれば、それは望ましい悪の姿だと、かつての彼女は考えていた。「悪の華とは、人の屍の上に憎しみを浴び続けてようやく芽吹くものだというのに」

すると、絹が滑るように正邪は書架の上から落ちた。

頭から床めがけて真つ逆さま。床に激突すると思われた矢先に、彼女はキョーコの目と鼻の先で静止する。

「敵がないのなら、新しく作るしかない。私がこれから始める戦いは、そういうものだ」

そつと、正邪はキョーコの頬に手を添える。

「驚天動地の大騒乱。この世界への下克上」

「待つてよ。死んじやうよ、そんなの」

鬼人正邪がいかに力を増したところで、たった一人の鬼に現代世界という敵は大きすぎる。もちろん、彼女だってそれは承知のはずだ。「生きるか死ぬかは問題じゃない」

唇に、柔らかいものが触れた。

いたずらに小鳥がついばむようなキスをして、正邪はクスクス笑った。砂糖菓子のように甘い香りがキョーコを包む。

「これは私の存在証明だ」

正邪の目の色が変わる。頬にヒヤリとしたものを感じた直後、持て

る力を総動員してキョーコは後退していた。

「お前はどうせ、私の前に立ちはだかるのだろう?」

直後、正邪の両手から迸った炎は地獄の色。空間も現実も歪曲する温度で燃え盛る紫炎の中で、無数の虚が煮えたぎる。

「ええ。わたしはあなたと戦いたい」

方針を、改めねばなるまい。

逃れられぬ戦いを決意したキョーコの体は、既に雷光の青に輝く。その右手で凝集していく光が象るのは、禍々しい拵えの日本刀だ。

「私をぶちのめすか。それでいい。らしくなってきたじゃないか」

「あなたが憎いからじゃない。死なせたくないからだ。下克上の夢は、ここで捨ててもらおう」

虚飾の炎と、憤怒の雷。焦熱の地獄から逃れようと、無数の本が書架から飛び立つ。

「いい顔だ。本当にいい顔だ、キョーコ。憎らしすぎて愛おしくなる」

翼を焼かれて落ちる本。炎の雨が降りしきる地獄絵図で、髑髏を抱きしめた正邪が手招きする。

「さあ来い。我が名は正邪。生まれもつてのアマノジャクだ!」

鬼は地獄で踊るのだ。



## 11 『虚飾（下）』

髑髏が歌う。炎が盛る。

「時間が無いのを忘れるなよ！」

紫炎の帯はどこまでも伸び、今や稲光を纏って疾走するキョーコに食いつこうとしていた。

「旧校舎は燃えている。モタモタしていると学生共が全員焼け死ぬぞ！」

その様はまさに蛇だ。あと一步で追いつけないキョーコを足止めするように、墓石めいて地中から突きあげてくる書架を足場にしつつ、キョーコはひとときわ高い書架の上から睥睨する正邪への攻撃のチャンスを伺った。

狙いは髑髏。それが纏う異様な気配を目にして確信した。炎も虚飾の世界も、あれが作り上げたものだ。

「時間はかからないよ。初めにそう言った」

「同感だ。手下も聖域も、今失うわけにはいかない」

青い光が天を引き裂く。

キョーコがカタナを振るうたび、偽りの空を破いて稲妻が降り注いだ。しかし虚飾の炎にいくら雷を浴びせたところで、その火勢が衰える様子はない。

「そのカタナ、使いこなしてきたみたいだな」

「こんなの振り回してるだけだよ」

「謙遜はよくないぞ。それを使いこなせるのはどうやらお前だけなんだ」

地面に降り立ったキョーコが、再び加速する。ドレスのように纏った三角雲をぶち破り、全身を音の世界に放り込む。その速さは階下で正邪のサッカーボールにされていた時とは段違いに速い。青いカタナの残光が、その後を追って地を這った。

「鬼の力を手に入れてどう思った？」

打ち上がる書架の一つが、ついにキョーコを空高く放り投げた。

彼女は、高速ゆえに急なコントロールが利かない。手足をばたつか

せた彼女を大蛇が飲み込み、もろともに地面に叩き付ける。

「肉が裂けても、骨が折れても、じつとしていればすぐ治る。痛みが無ければ最高だが、便利なことに変わりはない」

正邪の言葉を裏付けるように、雷神はダメージを感じさせない動きで走り出した。

「だが、おかしいよな?」

ちらり、とキョーコは正邪の位置を確認する。もう少し。もう少しだけ速度を稼げば、宙に浮かぶ書架を蹴って、彼女に手が届く。

「おかしい? 何が?」

「伊吹萃香の怪我のことだ」

正邪の言葉は、相手の心を揺さぶるための武器でしかない。

そう分かっているても、キョーコは自分の足の動きが鈍るのを感じた。地面に真つ黒な靴底の焼け跡を残して鋭く切り返す。間一髪、すれ違いに傍を掠めていった大蛇が大爆発を起こした。

爆風に背中をあおられるようにして、キョーコは再び力強く大地を蹴る。

「鬼の四天王ともあろうあいつが、いつまでかすり傷に包帯を巻いてるんだ?」

「だって、あんなに深く斬ったら……」

「妙と言えばお前の力もそうだ」

正邪は、ずっとキョーコを観察していた。

祭りの夜の一件を経て彼女の力は格段に強化されていった。それこそ日常生活に支障をきたすほどのスピードで。

「私のように信仰を集めたわけではない。まして、バイトに精を出したくらいで鬼が強くなるわけもない」

聞くな聞くなと思う程、正邪の言葉は耳の奥深くに垂れ込んでくる。

「そのカタナは幻想を喰らうためのものなのさ」

「カタナが、喰らう?」

「もちろんすべては憶測だ。だが、事実お前は有り得ないほどの強さを手にしたはずだ」

「もしそれが本当なら、わたしは、萃香ちゃんを」

完全に心の虚を突かれた瞬間、キョーコの足が大きくもつれた。間髪入れずに降り注いだ紫の焰が、彼女を火だるまにする。

「そう。お前は伊吹萃香の力を貪った」

『キョーコ、あけて』

鉄球を投げれば電車の車体を貫通するほどの剛力を誇っていた彼女は、どうしてガラスの瓶に苦戦していたのだろう。

「心当たりがあるみたいだな」

「わたしの力は……萃香ちゃんのもの……?」

火の玉となって地面を削りながら体制を立て直す。カタナを握る拳を固めてみれば、確かに今なら月でも砕いてやれそうな気がする。

「だったら」

どうして彼女は口をつぐんだのか、とか。どうしてあの大狗はキョーコの力を狙うのか、とか。思う所は、たくさんあるが。とにかく今は。

「あの子と一緒にいてくれるって考えると、心強い。かな」

地面に深々と足跡を刻んで、キョーコが跳躍する。標的を見失った大蛇が地を食んだ。

「そのドクロ、叩き落とす!」

「粹がるなよ泥棒猫!」

足下から書架が打ち出される。その勢いすら利用して、キョーコは鳥のように舞い上がる。

狙いはあくまで正邪の罅縫。改めて肝に銘じて、刃を構える。

——終わらせる!

「甘いんだよ。ここは私の聖域だと言ったはずだ!」

カタナの切っ先が、不意にブレた。疾走の高揚感も、酸欠の恍惚も、瞬時に困惑と内臓の浮く感覚に取って代わる。

落ちている。

ここは虚飾の王国。全ては正邪の掌の上。足場にするはずのビルは煙のように消え去り、空中でコントローラを失ったキョーコに容赦なく紫炎が迫る。

「カタナは貰う。燃え尽きろ、キョーゴ！」

「ごめんね。思い通りにはさせないよ！」

視界に白い蝶がよぎった。

「おやおや。親切にしてやった筈なんだがな」

しゃらら、と音を立てるのは、キョーゴを守って立つ小鬼の背丈より巨大な剣。幅広の刀身が左右に開くにつれて、その本性が明らかになる。

「せんす？」

「はい。歌も踊りも得意ですから」

あどけない顔でマヤが笑った。

彼女は、目前に迫った炎蛇の横っ面を煽ぐように鉄扇を閃かせる。

途端に炎蛇は標的を見失い、明後日の方向の地面を延々とほじくり始めた。

「ボクとしてはお姉さんの戦いっぷりを見ていたかったんだけどね」

それまで苦も無く抱えていたキョーゴをひよいと降ろすと、オルガは肩を竦めて見せる。

「心配性のマヤちゃんがどうしてもって言うから」

「オルガちゃんは薄情ですからね。もちろん私は違いますよ」

マヤが携える鉄扇は二つ。その片方を無造作に放り渡されて、慌てて受け取ったオルガがよろける。

「べ、別にそんなことはないけど。マヤちゃんの言うこと信じちゃダメだからね、お姉さん」

一曲舞い始めるような足運びで彼女たちが目の前に庇い立つと、どこからともなく紙吹雪のように無数の蝶が舞い飛んだ。

「鬼の喧嘩に鬼が出るか」

「あれ。アマノジャク様、意外そう」

「そりゃあそうだ。鬼というのは昔から身勝手に暴れん坊ばかりの一族。それが手を取り合って戦うとはな」

「別におかしなところはないですよ？」

「ボクたち、お姉さんが心配なだけだから」

鬼人正邪といえ、数々のイレギュラーを力でねじ伏せ、大妖怪に

すら舌を巻かせた即興役者。

「その心配が不思議なんだよ」

にもかかわらず、双子の乱入に彼女は攻撃の手を休めるほど驚いたようだった。

「ところでお姉さま、今来たところで状況を掴み切れていないのですが」

「要するにあのドクロを奪っちゃえばいいのかな？」

「う、うん。そうみたい。だけど」

「じゃ、ボクたちが邪魔者を引き付けるよ」

「その際にお姉さまは本命を叩いてください」

「そんなの」

ダメだ、と言うことはできなかった。

「お姉さま、ようやく分かったみたいです」

「ボクたちとってもガンコなんだよ」

そして義理堅い。祭りの夜から彼女たちはそうだった。

「うん。ありがとう」

正直一人の戦いに限界が見えていた。炎ですら退ける彼女たちが加勢してくれるなら、これほどありがたいことは無い。

だからこそ、負けることは許されないと。キョーコは肝に銘じる。

「ふふ。なんか、おかしいな」

「どうしたの？」

「今日はよく、鬼に助けてもらおうから」

思い出し笑いするキョーコの前で、双子も顔を見合わせて笑い合う。

「当然じゃないか」

「お姉さまのお人よしパワーなら、どんな鬼でも骨抜きです」

「言ったなあ」

黄色い笑い声を残して双子が駆けだす。キョーコがその後を追う。正邪めがけて一直線に走る彼女たちを阻むように、地中に身を潜めていた炎蛇が姿を現す。紫に輝く巨体がうねるたび、周囲の空気がぐつぐつと沸騰した。

「お姉さま、失礼します！」

キョーコの背を蹴って、マヤが飛び上がる。大きな動きに釣られた大蛇が、鎌首をもたげた。

「マヤちゃん」

そして彼女の小柄な姿はあつけなく大蛇の口の中へ。夕日の色を映した彼女の瞳が、煮えて爆ぜる様子が確かに見えた。

「へいきです。さ、止まらないで！」

しかし直後に聞こえた声は確かにマヤのもの。出所を確かめようと振り向いたキョーコの視線の先で、燃える尻尾にオルガが打たれる。

「あつ、ちゃあ。当たるか、今の」

粉々になりながら、彼女は口だけで喋っていた。

「オルガちゃん、気を抜かないで」

「なっ、なんだよう。最初にやられたのはマヤちゃんじゃなか」

「あえてやられてみせたのです。そうすれば、お姉さまも安心して戦えるでしょう？」

「本当かなあ。意外と抜けたところあるからなあ」

気が付けば、そこかしこから双子の声がする。

どこか間の抜けたトーンで交わされるそれは、会話というより斉唱だった。

「なんだあ。お前ら」

大蛇の吹きあげた炎の膜を吹っ切れば、白の地平をカラフルに染めるオルガとマヤ「たち」の姿。

もう驚かないぞ、と思うたび鬼の所業に仰天するのはお約束であったが、今回もキョーコは肝をつぶすことになった。

「これは幻術ってやつか？」

「それは言えません。企業秘密というやつです」

「謎の多いアイドルって魅力的でしょ？」

正邪が足場とする書架に、マヤの鉄扇が深々と斬り込む。

「いくら増えても本体を叩くだけだ。やれ！」

ぐらり揺れながら正邪が髑髏を突き出すと、吹き出した炎がマヤを

包む。悲鳴を上げて倒れる彼女を見下ろしていると、また足場に衝撃が走る。

「もう怒りました。泣いたってやめてあげませんよ」  
にこやかに、別のマヤが凶器を振るう。

ドカドカと足場に打ち込まれていく鉄扇は、信じられないことにすべてが本物だ。どれひとつとして幻などではない。

「まさか、お前ら、この能力は」  
「今だ、やっちゃえー！」

乱れ飛ぶ蝶の群れの中に、正邪は何かを見たようだった。狼狽えた彼女が足場ごと大きく傾いた隙を見計らって、オルガが叫んだ。

「あああああッー！」  
群れた双子たちがざつと退く。

「くつ、まさか、ここまでだというのか？」  
その中にキョーコを見つけたときには、もはや押しも引きもできぬ距離。

刃先とともに敗北を突きつけられた正邪は、顔を歪める。

「なーんちゃってなー！」  
がちり。

キョーコに誰かの頭蓋骨を割った経験など当然あるはずもないが、もつと軽い手ごたえがするものとはかり思っていた。実際に響いた音は重く、鈍く。丸みの上を滑った刃先から激しく火花が散る。

「えっ」  
「な、何だよコレ!?!」

「お、おじぞうさま、でしょうか」  
書架の上に乗り上げた三人が見下ろす先には、あまりにこの世界には似つかわしくない物体が鎮座していた。

「冥土の土産に教えてやろうー！」  
それは、優しい、優しい顔をしたお地蔵様であった。

その額にはキョーコの会心の一撃のままに刃が叩きつけられているのだが、柔和な笑みは微塵もゆるがない。啞然とする三人の頭を、甲高い正邪の笑い声が殴りつけた。

「そいつは身代わり地蔵。私にとって致命的な一撃を肩代わりする便利なアイテムだ」

一瞬とはいえピンチに陥ったアマノジャク様を取り出したのは、荒唐無稽なマジックアイテム。当然勝利を確信していた双子たちは、顔を真っ赤にして拳を振り上げる。

「なんだよそれ！ 反則だろ！」

「有り得ません。やり直しを要求します！」

「くあー、ぺっ！ お前達だって数の暴力で押しに押しまくっていただろうが。おあいこだ！」

キョーコは己を責める。完全に自分の手ばかりだ。

かつて幻想郷を混乱の渦に叩き込んだアマノジャク。その手には無数の反則級アイテムが握られていた——前もって萃香からその話を聞いていたというのに。なぜ、この展開を想定しておけなかったのか。

「ばーか、ふぎけんな！ いい歳こいた鬼のくせして恥ずかしくないのかよ！」

「はん。こういう時だけ子供ぶりやがって。見かけだけで甘い顔するとでも思ったか！」

「あなただつて見かけは子供じゃないですか！」

「私は好きでこのカツコしてるだけなの。背丈も頭も足りないガキとは違うんだ！」

舌戦で言えば双子は正邪といい戦いを繰り広げていたが、実際はキョーコたちの大ピンチだ。

「さあ。足を止めてやったぞ」

ずぶり。

嫌な音を立てて足が地面に沈み込む。見れば、大地は一面が底なし沼と化していた。

「延長試合はできないぞ。ここでお前たちはお終いだ。何か言い残すことはあるか？」

粥のように温い地面に呑み込まれてあがくキョーコの手にはカタナ。それをむしり取って、正邪はしげしげ眺めた。



「せーちゃん……」

「よつと。こんな感じでいいのかな？」

振り上げて、その意外な重みに正邪はよろめく。照れ笑いを浮かべる姿には愛嬌すらあったが、その視線はずっとキョーコの首筋に向いていた。

「生憎私はこいつを使いこなせない。だが、あのイヌでさえ勇儀を再起不能にしたんだ」

——ああ、終わってしまおう。

「なるべく苦しまないよう努力はするさ。だが、期待はするなよ？」

キョーコはこれから起こることを考えて震える。自分の身を案じたのではない。

自分のために体を張ってくれた双子。そして、宣言通り下克上に乗り出した正邪がどうなるか考えると、不甲斐なさで涙が出そうだった。

「笑えよキョーコ、最後くらい」

『あーあー』

その刹那であった。

『あ、あー、あー。テス、テス。マイクテス』

緊張のクライマックス。張りつめた空気をぶち壊しにしたのは、唐突に始まった校内放送。

「……へ？」

『よし、おほん……こんばんは。突然ですが生徒会です』

名乗られるまでもない。キョーコにも正邪にも、その声には聞き覚えがある。

「え。チツル、ちゃん？」

『クラブ活動中の皆さま、今日もお疲れ様です。夜間練習中は足元に気をつけてくださいね。水分をこまめに摂って怪我の予防に努めましょう』

その場の誰もが我を忘れ、よく響くチツルの声に耳を傾けていた。

「なんだ……あいつ……アタマおかしくなっちゃったのか……？」



『今日は学祭のお話をします。もうすでに、皆さんは規模縮小の噂を聞いているかもしれません』

あれだけ激しい落雷も爆発も、今は静かなものだった。

キョーコと正邪の戦いは終わりに近づいているようで、旧校舎は緩やかに焼け落ちていく。

「ゆっぴー、逆立ちしたってお前じゃサキの代わりにはなれん」

『非常に残念なことですが、これは真実です』

「……今更だね、そんなことは」

「だが俺はお前を買ってるんだ。ひよつとすると、お前は本当の意味であの子を幸せにできるのかもしれない」

『しかし安心してください。状況は変わりました』

「何だい。コロコロ話を変えてくれるじゃないか」

鶯が鳴くような透き通ったチツルの声。

学園中のスピーカーによって増幅された彼女の声は、どこまでもどこまでも響いていく。もちろん、旧校舎の中も例外ではないだろう。

『思えば我が校は、ずっと過去に縛られてきました。他でもない私自身も』

「個人的には、だ。俺はサキの子育ては大失敗に終わったと考えてる」  
「どうしてだい。キョーコは笑えるようになったんだろ。だったら――」

「映画も人生もエンターテイメントだけ。笑って泣いて、初めて人だ。片方っきりの役者が舞台の上に立つ資格はない」

『過去に向き合うことと、過去に縛られることとは違う。私はこの勘違いで、大切な人たちを傷つけてきました』

ふつり、ふつり、と。

校舎に佇む人影は、糸が切れた人形のように倒れていく。その合間を窮屈そうに走り抜けていく消防車は、勇儀たちのことなど見えてもいないようだ。

『私たちはもっと自由にならなければいけない』

「だからこそ、ゆっぴー、このままあの子をたくさん怒らせてくれ。たくさん泣かせてやれ。それで初めてあの子は」

風間の口元から赤い虫が地面に落ちた。

「あの子は人間らしく生きていける。の、かもしれん」

いつの間にかビールの缶は吸殻であふれていた。

最後の一本を丹念に丹念に踏みつぶす風間の顔は、闇に紛れてよく見えない。まるで、黒い帳が下りたようだ。

「あんた、あたしを誰だと思ってるんだい。あんな面倒なヤツの保護者を、自分から買って出てやったんだぞ」

その肩を、優しく勇儀が小突いた

「要するに、あの大根役者に演技指導してやりやいいわけだ。他の誰でもない、あたしだけの悪の道の歩き方ってやつをさ」

「悪の道か。我知らず、大変なことを押し付けちまったかもな」

黒幕の向こうから、くつくつという笑いが漏れる。次に顔を上げた風間は、すっかりいつもの調子を取り戻していた。

「にしてもあんた、マジメな事も言えたんだ」

「んだとお。俺はいつだってみんなのこと考えてるんだからな」

馬鹿笑いしながら小突き合う勇儀と風間。

それを静かに見守っていた萃香が、一番早く背後で響いた音に気付いた。

どざり。

「あ、みっちゃんだ。やつほー」

いつから、そしてどこから現れたのか。褐色の美人は両肩に背負ったソレを降ろし、頬にこびり付いた煤を拭う。

「あんた、いつの間に」

「ミヨっちゃんか。そっちはもういいのかい？」

答えは不器用なピースサイン。

その背後にはズラリと校庭一杯に彼女の仕事ぶりが並べられ、この瞬間も苦しげに咳き込んだり、呆然と空を見上げたりしていた。

『それでは、前置きも済んだところで本題に移りましょう』

「うわあ。これ全部みっちゃんがやったの？」

「こりやおっさんも何かしないとなあ」

驚きの声を上げる萃香の隣で風間はケータイを取り出した。

房のようにぶら下がったストラップをかき分けながら、とある番号にコールする。その口元は、悪鬼もかくやという悪い笑みに彩られていた。

『我々は確かにピンチでした。ですが、数日前に颯爽と善意のスポンサーが現れたのです』



『その名は鬼人正邪さん』

「ぜ………ぜんい………？」

その言葉を聞いて、正邪がよろけた。

「すぼんさあ？」

彼女は哀れなくらい動揺していた。感謝やポジティブな言葉だけで体調を崩すアマノジャクというものは、なかなか難儀な生を送っているに違いない。

『数日前、彼女は言いました。私が許可を出した瞬間から、旧校舎は旧校舎でなくなる』と』

「お前………まさか、今、アレをやるつもりなのか？」

急に色を失った正邪の下で、キョーコは身じろぎする。

「やめろ。それだけはやめろ。これからって時に、お前はいくら水を差せば気が済むんだ！」

『私の考え過ぎかもしれませんが、正邪さんはあのメッセージを通して、古き伝統を捨て去れ、という激励をくださったのかもしれない』  
「お前絶対そんなこと思ってないだろ！ 生徒会長のクセに嘘八百を吹きやがって。それでいいのかよ!？」

「わたしも、負けられないや」

キョーコは歯を食いしばる。力み過ぎてどこかが切れたのか、口の中に鉄の味が広がった。

「お、おい。妙なマネするなよ！」

懸命に泥をかくキョーコの額に刃が突きつけられる。だが、言葉や脅しで引き下がる段階は、既に超えている。

「そそ、そうだ、学生共だ。私の号令一つで奴らに火の中を歩いてもらうことだって出来るんだからな！」

『古い学園は今日でお終いにしましょう』

鬼気迫る正邪の背後で、電子音が奏でる「365日のマーチ」が流れ始める。激戦の中でキョーコのポケットから転げ落ちたケータイが、画面を光らせていた。

『私も、もう一度やり直してみようと思います。小さなことから、一歩一歩』

「——お。やっと繋がった」

いつの間にか震えだした手で正邪が通話口に出れば、酒臭さを感じるくらいアルコールに焼けた声が鼓膜と脳を揺さぶってくる。

「だだ、誰だ、お前」

「そういうおたくは……あ、分かった。アマノジャク様だ？ お噂はかねがね。俺、風間ってんだ」

「何の用だ。お前、キョーコの仲間か」

「いやあ、用って程のことでもないんだが。一つ、キョーコちゃんに伝言お願いできる？」

「伝言だと？」

一瞥くれたキョーコは、首を捻っている。伝え聞くまでもない。この距離ではすべて筒抜けだ。

「旧校舎はもぬけの殻。気兼ねなくぶっ飛ばせ、と」

「なん——」

「じゃ、頼んだからね」

一方的に通話の切れた電話を、呆然と見下ろす。

待ち受けは、キョーコと、彼女の肩を抱くサキの姿。その屈託のない笑みが、腹立たしくて仕方ない。

「一体全体。どこで何を間違った？」

『何もかも、はじめから』

「お前一人を誘い出して、どうしようもないくらい有利な条件で戦っていたはずだ。それなのに、いつの間に私はお前のオトモダチ全員を相手にしていたんだ……？」

「そうだね。みんな、戦ってくれてる。こんなちっぽけな、わたしの意地のためなんか」

空気の焦げるにおいがする。

見れば、キョーコの周囲で白い泥沼が沸騰を始めている。あぶくの間で青白い電撃が閃いた。

「わたしだけ、のんびりしてちゃダメだよね」

「やめろ。動くな。おあつ」

それまで握りしめていたカタナが意思を持ったようにすつぽ抜けて、正邪はよろめいた。代わってそれを握るのは、泥から抜け出したキョーコの手だ。

『それでは長々お話ししましたが。最後に。アマノジャク様、これ、聞いてますよね』

「たのむ、後生だ。まだ、私の王国も、野望も、夢も。何も始まっていないんだ。これからなんだ！」

放送と、尋常ではない正邪の慌てっぷり。ようやく、キョーコにもチヅルの目論見が見えてきた。

聖域に玉座を構える、最強のアマノジャク様。その布陣に空いた、たった一つのほころびが。

「私にはここしか残されてないんだ！」

そう、アマノジャク様は、

『こうしてスピーカー越しなのが残念です』

あくまで旧校舎の中でのみ、

『色々、言ってやりたいことはありますが。あなたのおかげで私が大事なことを思い出したのもまた事実。最後はお礼で締めくりたいと思います』

「やめろ、会長オ！」

無敵、だったのだ。

『本当に本当にありがとうございませし——たッ！』  
どすつ。

重い音がスピーカーから発せられた直後、T女学院は完璧な静寂に包まれた。



「ぜーったい許しませんからね、鬼人正邪」

独り言を呟いただけで激しくむせる。緊張で口の中がカラカラだ。「こんな汚いハンコ突かせるなんて。私の美意識が許さないんですから」

放送卓の上にはしわくちやの書類束。紙がひきつるほど豪快にぶちかまされた『大堀』の押印は、ほとんど真横になっていた。

度の合わない眼鏡にはもうウンザリだ。目頭を揉みながら椅子に体を預けると、不思議なくらい座り心地が良い。

「ああ……生徒会長でよかった」

よく考えたら、クツション付きのオフィスチェアの購入に許可を出したのはチヅルだ。それが自分を労う日が来るとは。奇妙な巡り合わせに、彼女は思わず笑い、そしてまたひどくむせる。

「……二階堂さん。そして、キョーコ先輩」

人心地ついて、この場にはいない二人の名を呼ぶ。

「あなた達は、何者ですか」

もちろん返答はない。その答えが欲しいなら自分で求めなければいけないのだろう。

気づけばドアの向こうは静かになっていた。

対照的に騒がしくなり始めたのは、校庭だ。放送室からひよいと顔を出せば、校庭は真っ赤だ。赤いパトランプを乗せた車が渋滞を成している。

その車体のカラーが赤だけならまだいいものの、白や白黒が混ざっているから頭が痛い。

「誰が、一部始終を説明できるんでしょうね……」

この状況で誰に白羽の矢が立つなど、火を見るよりも明らかなのだが。

「……私か。そりゃ、そうだ」

そろそろ独り相撲にも飽きてきて、チヅルは目を閉じる。どうせ今日は帰れまい。だったら自棄にもなろうというものだ。



噂が、信仰が、実態を伴った怪異を現出させるように。

“ 会長がハンコをついた瞬間、あの場所は旧校舎じゃなくなっ

まう」という唯一絶対のルールもまた、言葉遊び以上の意味を持つていた。

たった一つのハンコの音で、虚飾の聖域は陽炎のようにぐにやりと揺らぎ始めた。

「あ。ああ、あああ……！」

正邪の纏っていた炎が消える。

その手から髑髏が転げ落ちると、虚飾の王国は古びたレース細工のようにはつれ、消えはじめた。

「終わりだね」

「ばかな。私の王国が。下克上の野望が」

書架が、地面が、崩れた本が。すべてが髑髏に覆いかぶさるように吸い込まれていく。吹き荒れる風は殴りつけるようだ。

もはや飛ぶ力も残されていない正邪を抱きかかえてキョーコは耐えた。

「ばかな。こんな、こんなことが」

キョーコの胸元で正邪が吐いた弱弱しい声も風鳴りにかき消され。

ついに髑髏ですら自ら作り出した渦に吸い込まれていく。排水口から水が抜けるような音を残して渦が閉じると、辺りは一気に静かになった。

「すごいや。どうなってんだろ、これ」

すべてが元通りだった。そこは真紅の宮殿ではなく、ただの荒れ果てた旧校舎の一室だ。

『さてさて雷の子よ。剣の時間だ』

「え。今、何か言った？」

「お姉さん、一体何してるのさ」

急に耳に指を突っ込まれたようだった。

双子の言葉は不鮮明になり、必死に訴えかける口元をどれだけ見つめても意味が脳に入っていない。

「きこえないよ」

傾げた首がぎこちない。何か背中に張り付いているみたいだ。

『きみの憤怒で世界を壊せ。正しい地獄を作るんだ』



穴の開いた天井から差し込む月光を、ひらめく刃が乱反射する。彼女たちの表所はすぐに恐怖にひきつった。

「ダメですよ、お姉さま。カタナを離して！」

「何だよ。ボクたちを騙したのかよ。アマノジャク様となかよしになるんじゃないのか——あっ!?!」

引き留める手を振り払うと、子鬼たちは静かになった。

キョーコは刀を振りかぶる。背後から伸びてきた白い手が柄を握る手に添えられる。言いようのない快感が、キョーコの背骨を貫いた。

『鬼を斬るんだ』

「鬼は斬らなきや」

素晴らしい感覚だった。この手に触れられていれば、どこまでも昇りつめていけそうな気がした。

「ああ……なんだよ、おまえ……」

キョーコは正邪の上に落ちた影を見つめる。

大きく、黒く、その色はどこまでも濃い。恐ろしい悪鬼のものと思われたそれは、実は自分のものなのだ。それを知っても、今のキョーコの心は微塵も動きはしない。

「弱者なんかじゃ、ないじゃないか……」

その、打ちひしがれた正邪の顔。キョーコはどこかで見たような気がしたのだが。

## 12 『意地と勝手と正邪のゆくえ（上）』

旧校舎が、ずれた。

その日一番の稲妻が辺りを真っ白に染め上げた直後だった。

「ひゃあー！」

不意に迸った悲鳴に、勇儀は声の出所を探す。

彼女の背後で、地鳴りのような音を立てて旧校舎の三階が横にずれ込んでいった。まるで、ショートケーキをナイフで切り崩すように。

「あんたら、正気に戻ったのかい」

勇儀に掴まれた生徒は、可哀そうなくらい取り乱していた。今まで正邪の見せる幻の中にあっただの。無理もない。

「えひやつ、だっ、誰ですか。ていうかどうなってるんですか、これっ！」

彼女を生徒を放り出して辺りを見れば、グラウンドはすっかり恐慌状態だった。そのせいかな、消火活動も思うように進んでいないようだ。

「アマノジャク様の噂が、もう噂以上の意味も力も持つことは無い」  
「むぐぐ」

「そー暴れなさんな。ただの魔法の水だよ。こいつをぐーつとやって落ち着くといい」

生徒たちの一人に無理やり酒を飲ませてやりながら、萃香がもうもうと煙る砂塵の向こうに視線を馳せる。

「鬼人正邪は敗れた。強いよね、私達のキョーコは」  
「そうだ——キョーコ!?!」

弾かれたように走り出した勇儀には、おそらく煙も炎も見えていないのだろう。消防隊を押しつけて、彼女の姿はあつという間に砂塵の中へ。

「やれやれ。相変わらず活きがいいねえ」

「お前は行かなくていいのか」

肩をすくめた萃香のもとへ、じやりじやりと砂を蹴散らしながら風間がやってくる。

「あんたの話に、少し思う所があつてね」

「……おかしいな。俺あ二人に何もかも、包み隠さず話した筈だが」

「じゃあ、私の疑問にも当然答えてくれるよな」

その瞳は炎よりも熱く赤く輝く。

「何が聞きたい？」

目線を合わせるように腰を落とした風間は、萃香の放つ熱にほんの少し顔を背けた。

「キョーコには親がいるんだろう」

「おそろくな」

「おそろく？」

「ああ。おそろく」

——お前、いい子だなあ。

「なんだよ。その顔」

「いんや。思い出し笑いだよ」

口をつきかけた言葉を、風間はヤニ臭い唾と一緒に飲み込んだ。ライバルチームの選手を褒めるなんて、とうとうヤキが回っただろうか。

「私はまだ、知りたいことを聞けてない」

信じられないことだが、萃香は怒っていた。

いつもニコニコしているのが当たり前の彼女が、この時ばかりはぐっと下唇を噛んで地面を睨みつけている。

「言つたろう。知っていることは全て話した、と——だから、ここからは下衆<sup>ゲス</sup>の勘繰りつてやつになるぞ」

「構わない。お前の考えを聞かせろ」

ともすれば風間にも矛先が向きかねない怒りをかみ砕くように、萃香はこくりと頷いて見せた。

「ヒトには家族つてもんがあるんだろ」

「大抵はな。だけどおっちゃんなんか酷い男だから——」

「いいんだよ、そんなこと。キョーコは。あの子の親共は何をやっているんだ？」

「そりゃ、どういう意味の質問かな」

「とぼけるなよ。娘が走れなくなっても、学校に行けなくなるかもつてドン詰まりにも、手を差し伸べるどころか顔も見せやしない」

突き付けられたのは、今にも解けてしまいそうな、小さな拳だった。包帯の裾が夜風に泳ぐ。その下、月の光のもとで露わになったものは。

「答えるよ、おっさん。ヒトの親子の絆ってな、そんなものなのか。これじゃあ鬼の方がまだまだ有情だろ」

萃香の包帯の下には、何も無かった。腕という形をした、ただの空白でしかなかった。それが風間の胸ぐらを、ぎゅつと掴んで離さない。

「あの子を育てたのは、そういう家族なのさ」

「だから……キョーコは笑い方を忘れたって？」

硝子のように透けた腕の異常。

その理由は語られず、決して風間も問わず。只、火影の作る地獄めいた色彩の中で二人は冷たい視線を交わし合う。

ややあつて、風間はゆっくりかぶりを振った。

「——言ったら、下衆の勘繰りだ。これはあくまでキョーコちゃんの家の話だ。俺達にはどうすることもできない」

「思ったより薄情なんだね、あんた」

「お前さんより分別があるだけさ」

萃香の言うことはもつともだ。その怒りも、とても正しい。訳知った顔の大人でいることが急に後ろめたくなって、風間は奥歯を噛み締める。

「俺たちは所詮、赤の他人だ」

ぶん殴られても文句を言うつもりはなかった。

「なら、これから私達があの子の本当の家族になってやればいい」

だからこそ、風間は意表を突かれた思いだった。包帯を巻きなおしながら空を仰いだ萃香は、心地よさそうに月の光に打たれている。

「あの子はずっと、虐げられて生きてきた」

空前の忘却と、絶後の無関心。

それは、かつて小さな世界に引きこもることになった幻想たちに突

きつけられた現実そのものだった。

「だからこそ、忘れられていく者、消えていく私たち鬼の痛みを誰よりも理解できる」

そして包帯をキツく結び直したなら、もう彼女はいつもの伊吹萃香だった。

「鬼人正邪の痛みも、ひよっとすれば。だから私も、あの子の痛みを知ってやりたい」

すっかり泥酔した生徒から瓢箪を奪い取って、萃香は「くああ」と軽くあくびをする。

「本当はあんたもそう思ってるんだろ、風間」

火に照らされた萃香の小粒な歯が、真珠のように光っている。答えは要らぬと知って、風間は彼女の横顔を見つめ続けた。

「うん。私、明日からがんばる。ペったりくつつくまでやってみようかな、あの子と」

勇儀を追って、旧校舎へ向かう彼女は何か可愛らしいことを言っていたような気がした。

風間は苦笑する。その笑みが、唐突に凍り付いた。

「そだ。ミヨちゃん、俺やっぱウソついた。あいつらに言っていないこと、あったわ」

暗がりの中に蝙蝠のように佇んでいた美女が顔を上げた。彼女の小麦色の肌を、うっすら霜が覆っていた。

「おっちゃん嫌いだったんだよね。あのサキって女」



「わたしは一体……何を？」

目を開ければ、満点の星空。

校舎の屋根は粉々に吹き飛び、双子も、正邪もその場にはいなかった。ただ、手の中に納まった刃の、しんとした感覚だけが実感を呼び起こしてくる。

『キミの憤怒で世界を壊せ。正しい地獄を作るんだ』

その、虚無じみた響きを宿した声。

ぞつとするような衝動に身を任せ、正邪を斬ろうとしたことを。

「オルガちゃん？」

斬っては、いない。

「マヤちゃん？」

いない、はずだ。

「せーちゃん」

キョーコは思い出したのだ。

正邪を一刀両断しかけた刹那。その顔と、その声に感じた不思議な既視感の理由を。

「ねえ、答えてよ、せーちゃん」

あれは間違いなく、かつてのキョーコだった。家族から忘れられうち捨てられ、毎朝絶望と共に見つめた鏡に映る、自分の顔だった。

だからこそ、あの不気味な呪縛を振り払って我を取り戻すことができた。

咄嗟に真横に払いのけた光刃は途方もない威力と共に校舎を切り崩し、夜空を真白に染め上げて——その後のことは、よく覚えていない。

「せーちゃん！」

「……その名前で呼ぶんじゃない」

今にも消え入りそうな返事が返ってきたのは、絶望に駆られたキョーコが膝をつきそうになる一歩手前だった。

「今回の下克上も失敗か。そもそも、私の計画が上手くいったためしなんか無いけどね」

焼け落ちた本棚に背中を預けて座っていた正邪は、校庭に乗り入れてきた消防車が放水の準備をするさまを眺めていた。

その向こうには、この一大事に我関せずを決め込むK市の夜景が見える。

「さっきのは手心を加えたつもりか？」

金糸銀糸が光るドレスの装飾は、もはやただただ重いだけ。正邪がそれをむしって次々床に投げ捨てていくうちに、彼女はかつてキョーコと出会った時の、襤褸切れのような姿に戻っていった。

「脆いものだよな、私も、私の王国も」

立ち上がって、正邪は呻く。

白いドレスはほとんど血染め。直撃せずとも、カタナの一撃の余波だけでこのありさまだ。

おまけに、傷の治りは途方もなく遅い。

「一緒に帰ろう」

それは今のキョーコも変わらない。

血肉を電力に変えてカタナに与え続けたのだ。

もはや、二体の鬼は会話が出来ることですら不思議なくらいの満身創痍っぷりを発揮していた。

「この期に及んでよく言うものだ」

「何度だって言うよ。わたしはせーちゃんのトモダチになりたいんだ」

「見なよ、キョーコ」

崩れた壁から顔を出せば、煙臭い空気が吹きあげてきた。

煤で真っ黒な顔が、グラウンド中に見える。現実に絶望し、正邪を頼り、虚飾を受け入れ、そしてキョーコの手によってふたたび現実に直面させられた、生徒たちの顔が。

「お前の善意ってやつが私の嘘を払いのけた。だが、あいつらの顔と来たら。夢うつつの時の方が、よっぽど生き生きしていたじゃないか」

「でも、わたしは」

「寄るんじゃない」

キョーコが一歩進めば、当然正邪は一步退く。その先に待ち受けるのは、奇しくも、かつて彼女がキョーコを突き落とした高みだ。

「結局お前も私もそう変わらないのさ。自分の気持ちいいと思うことを力で他人に押し付けているだけだ」

「うん。わたしの「よいこ」が結局押し付けでしかないってことくらい、よく分かってるよ」

意外な反応だった。お気に入りの「よいこ」を否定してやればすぐに頭に血を昇らせるとばかり思っていたキョーコは、重々しく頷いた

だけだった。

「だけど、わたし達の間には大きな違いがある。あなたは負けて、わたしは勝ったってこと」

正邪が僅かに目を見開いた。

「へえ……存外、言えるもんだ」

「せーちゃんは押し付けの「よいこ」の中では絶対に幸せになれない。だけど、このままあなたを放っておくわけにもいかない」

もはやカタナは用済みだ。

キョーコが床に投げ捨てた瞬間から刀身は光に還元され、青い蛍のように瞬きながら散って消えていく。

「だから、わたしは勝者の特権を行使することにした」

「特権だと?」

「そう。あなたにわたしを押し付ける。わたしの、よいこを。身勝手な幸せを」

青い燐光舞い散る中で、キョーコの髪と瞳も、またぼんやりと輝きを帯びていた。

「あなたには、わたしの身勝手の中に溺れてもらう」

その意味が、一瞬分からなかった。

キョーコが諸手を差し出した意味も、その真意も。

「お前。ほんとうにキョーコなのか」

「うん。わたしは間違いなく鳴無響子だ」

正邪はキョーコを鬼にも人にもなれない、どっちつかずの出来損ないとばかり見積もっていた。

だが、どうだろう。今の彼女が纏う得体の知れなさは、歴戦の怪異が放つものにも等しい。

「私のしでかしたことを忘れるなよ」

動揺を悟られたくない。正邪は暗がり顔を背ける。

「バカな学生共を騙してやった。いけ好かない生徒会長には大恥かせてやったし、旧校舎を買い取るカネにしたって元は私の下僕共から搾り取ったものだ。私は身銭を切らない主義だからな。わはは!」

やけっぱちに正邪が笑えば、張りも自信もない声が廃墟に響く。



ガラガラと、どこかで校舎の崩れた音が、その虚しさを一層ひきたてた。

「分かるだろう。世間一般から見た私は邪悪というやつだ」

「そうなのかな」

「そうなのさ。望んでこの道を歩いてきた……なあ、お前。こんな悪くて愉快なやつを助けたら、正義の名折れというものだ」

「よいこは正義の味方じゃないよ」

更にキョーコが近づいて、正邪は思わず後ろに転げ落ちそうになった。もう、彼女の背後には奈落が控えているだけだ。

「よいこは皆を幸せにする」

とつさにキョーコがその腕を掴む。

正邪は爪先を校舎の壁に引っかけただけの宙ぶらりんの状態だというのに、不思議なくらい落ち着いていた。それは、真つ青に輝くキョーコの瞳が目の前にあるから、なのだろうか。

「わたしの前で、誰一人として不幸にするもんか」

「そこまで……言うのか」

その色に心を奪われていた正邪が言葉を取り戻すまで、長い沈黙の時間が必要だった。

「だったらキョーコ、試してみるか」

散らばった単語をかき集めるように、薄い氷の上を渡るように、正邪はゆっくり、ゆっくりと煙る空に言葉を浮かべていく。

「お前の身勝手で、果たして私を貫けるのか。その、よいこってやつで」

「それって。じゃあ」

固く引き締まったキョーコの顔が一瞬でふやけた。

「せーちゃんっ！」

「うわ。なんだお前、やめろ、くつつくなー！」

砂と汗と血のにおいが正邪の鼻腔を満たした。

朝もはよから整地に精を出し、着替えずその足で正邪の城へ殴り込み。今のキョーコは、正直クサイ。

それでも彼女の腕の中で安堵の息を聞いていると、自然正邪の体の

強張りも解けていった。

「やつと、やつとなかよしになれるね」

両手を取り合えば、あとはお約束。死闘を繰り広げたなかよしの鬼たちは、熱いハグで友情を確かめ合うのだ。

「ね。もつとぎゅつとしていい？ なんだか夢みたいで」

「そういうのはお断りだ。お前、いいか、私は。はは。あははははっ」

「何さあ。いきなり笑っちゃってえ」

「だっておかしいじゃないか。この私が幸せとか仲良しとか友達とか」

「さあさ皆さんお立合い。ここに見えます友情物語は、これでめでたし拍手喝采。鬼同士の戦は一人も泣かぬ大団円——」

「安い言葉で飼いならせる、ありきたりな小物と思われていたとは」

ずん、とキョーコの両腕が重くなった。

「耳障りのいいコトバばかり吐くじゃないか。ちよつと大人しく聞いてりゃ、ウンザリさせやがって」

「——身代わり、地蔵」

正邪を抱きしめていた腕の中には穏やかな笑みを浮かべる地蔵が一尊。正邪の高笑いが、夜空高く昇っていく。

「ダメだよ。そんなことしたら！」

「ああそうさ。これは最後の贈り物だ」

高く高く、天女のように美しく雲海を泳いだアマノジャク。

その哀れな飛翔に、最後に残された一欠けの力まで使い果たせば、ついに彼女は散々騙してきた重力の手に捕まってしまう。

「お前のよいこを否定してやる！」

月に別れを告げたなら、地上の星々はあつという間に冷たい夜景へと姿を変える。

風を切りながら見えてくるのは固い地面と、地蔵を手に正邪を見上げるキョーコ。

「さらばだ、偽善者」

そのマヌケ面に、たった一言吐きかけて。正邪は自分の周りに立ち込める黒いものを知る。それはきつと光をとぎす黒雲であり、舞台を

締めくくるための幕だ。

生まれながらに一人の正邪。最後の最後の瞬間まで、この幕の中で一人、孤独に舞台は終わっていく。

嘲笑と忘却で閉ざされるはずの独り舞台。その客席で、たった一人の少女が立ち上がった。

「わたしは認めない」

地上まで、残り五十メートルといったところか。

「こんな幕引き、認めてやるものか」

身代わり地蔵はもう使えない。

勝ち誇った笑みを浮かべて死を覚悟した正邪は、我知らず、その世界に踏み入っていた。

「わたしのよいこを見くびるなよ、アマノジャク！」

最速の雷神、鳴無響子が支配する世界へと。

月に吼えた彼女が力強く足を踏み切れば、校舎は振るえ、大地が揺れる。

計り知れない力の喚起に、足の縫い目が爆ぜる。血を吐きながらスマイリーが笑う。

彼女の姿が霞んで消える。

「鬼人正邪の物語を、ここで終わらせたりしない」

地上から遡ったイカズチが、天を貫いた。

「つかまえたよ。せーちゃん」

キョーコは、我が身可愛さに指をくわえて正邪の落下を見守ったりはしなかった。

世界がハッピーエンドを拒絶するのなら、キョーコは何度でもアンコールをし続ける。出来の悪い脚本があるというのなら、カギ爪で引き裂いてやる。

そしてその手は、確かに正邪に届いたのだ。

「前から思っていたけれどー」

ふわり、という浮遊感はたった一瞬。

落ちる正邪を受け止めて、キョーコが浮きあがったのはたったの数メートル。

「お前何も考えてないな!? バカのフリとかじゃなくて、本当に行き当たりばったりだろ!」

二人は力を使い果たした。後はただただ、落ちるだけだ。

「ふふ」

「ふふ、じゃなくて!」

もう地獄の閻魔もお目こぼしのしようがない距離だ。砂粒が見えるほど地面が近い。

「ねえ、せーちゃん」

わななく天邪鬼を抱きすくめ、優しくキョーコは囁いた。

「あなたはどこに落ちたい?」



「能力とは鎧だ」

あたりに白煙が立ち込めている。火消は上手くいったようだ。

「世の理を越えた力が、世の理からその身を守る。それが発揮できないければ、しよせん鬼は角の生えたヒトでしかない」

ささくれた木材を杖にやってきた正邪は、うつぶせに倒れていたキョーコを爪先で蹴って転がす。

鈍い痛みが足首に走って、正邪は小声で悪態をついていた。

「私を守って自分も助かる気だったのか? 救いようのない馬鹿め」

涙が零れるほどの痛みが全身を襲っている。

意識を失ったらしいキョーコは怪我も出血も明らかに正邪より酷い物だというのに、それでも笑ったままだった。

「お前と私は、どうあっても相容れない」

正邪は焼け落ちた旧校舎の中から、キラリと光るものを引っ張り出す。折れて砕けた西洋剣の切っ先だ。

キョーコの傍らに膝をついた正邪は、白い喉元に刃をあてがった。

「そして、お前のようなやつは何度でも何度でも私の前に立ち塞がるだろう。私の夢を、葬りにくるだろう」

キョーコの喉に刃先が触れる。

「だから、やることをやっておかないと」

溢れる血糊がそのシャツを汚す。赤く赤く、染め上げていく。

「……それなのに、な」

しかし、正邪の頬を汚すのは返り血ではなく煤だけだ。相変わらずキョーコは安らかに眠っている。

「なあ……身代わり地蔵ってあったろ？」

——想像の中では何度でも殺せたのにな。

キョーコの首筋に散った鮮血は正邪のものだ。あまりに強く握りしめた刃が、彼女の掌を食い破っていた。

「アレが引き受けるのは、私にとって本当に致命的なミスだけだ。タンスの角に小指をぶつけたくらいで地蔵と入れ替わっていたら、きりがないからな」

どうして気を失った相手にジョークを飛ばしているのか、正邪自身も分からなかった。

——こいつ、起きてたらこんな下らない冗談でも笑ってくれたのかな。

他愛のないことを考える正邪の手は、キョーコに垂れた血を拭う。ほとんど無意識の行動だった。

「……だったら。お前の手を取った時、私は」

「キョーコー！」

白煙の中から声が迸って、正邪は弾かれたように顔を上げた。

「キョーコ？ おい、キョーコ、いるんだろ。さっさと返事しな！」

「は。相変わらず声の大きいやつだな」

校庭の明かりに照らされて、どこかのお節介鬼の大柄な影がブロッケンの怪物じみて白煙の中に浮かび上がる。

潮時を察した正邪は、結局刃を放り出して腰を上げた。

「そもそも邪魔者あつての天邪鬼だ。勿体ないが他に適任がいらない。その役目はお前にくれてやる」

痛めた足首を引きずって、正邪はひとり歩きはじめる。

体を寄せあう生徒たちも、首を捻る警官たちに何事か力説する生徒会長も、顔面にガーゼをあてがわれて救急車に運ばれていく水着の痴女も、誰も彼女にかかずらうことはない。

校門で、一度だけ正邪は振り返る。

「目障りな鬼共よ。汝らに悪運あれ、だ」

楽しげにキョーコと言葉を交わし合う勇儀を見ていれば、自然そんな言葉が口をついたりするわけで。

薄い笑みを浮かべて、正邪はK市の闇へと還っていった。

### 13 『意地と勝手と正邪のゆくえ（下）』

『——学院の火事については未だ出火の原因が突き止められていませんが——』

一週間が経った。

土曜の朝となれば熟練のアウンサーにも辛い時間であるに違いない。ケータイのスピーカーから流れ出す眠たげな声を聴きつつ、キョーコはハミガキ粉のチューブを絞る。

『——休日にもかかわらず多くの生徒が残っていたことから、消防関係者は学生の火の不始末として——』

気付けば、大人たちは旧校舎の火事を彼らの現実にとって都合のいい物に整形しはじめていた。

「チヅルちゃん、大変だったろうなあ」

本当は自分もあの場に残るべきだったろうかと考えてみたが、キョーコが口出したところで焼け石に水どころか火に油だったに違いない。

面倒事のおいを嗅ぎつけて、さっさとキョーコを連れ出した勇儀たちの判断は正しかったのだろう。

『続きましては速報です。本日未明、K市のA川にて女性のものと思われる遺体が——』

大きな事件の記憶はもっと大きな事件のインパクトによって忘却されていく。

「なんか、ヤなかんじ」

ラジオを消して、キョーコは寮の共同水場の外から差し込む朝日に目を細める。

頬の絆創膏を剥がす。鬼の治療力とはやはり凄まじいもので、普通の人間なら一生残るような傷跡も、数日寝てれば跡形も無く消えてしまう。

だが、記憶の治療力というものは鬼も人も変わらない。どれだけ辛い事故も、悲しい別れも、喜びも、出会いも。キョーコの傷と同じく、いずれまっさらになってしまう。

——あの子は、それが怖かったのだろうか。

それは、忘却だ。

太腿のスマイリーを無意識になぞりながら、キョーコは姿を消した天邪鬼へと思いを馳せる。

「せーちゃん……」

忘却。

そんな化け物を相手に、たった一人で戦いを挑んだ鬼は、きつと今もこの世界のどこかを彷徨っているのだろうか——なんてことを考えながら、キョーコは口に突っ込んだ歯ブラシをしゃしゃこと動かし始めた。

水場の天井板がパカリと外れたのはその時だった。

「だからその名前で呼ぶなど言ったら、ばか」

目の前にぶら下がってきたのは黒髪を逆立てた少女。

「あびゃあッー！」

彼女が何者か認識する前に、キョーコの口から白い飛沫が噴射された。

「何をしゃが——ぶええ」

何も鬼の力が優れるのは治癒力だけではない。肺活量だってそうだ。

まるで特上のケーキの上にデコレーションされるホイップクリームのごとくきめ細やかなハミガキ粉によって水場のガラスが一瞬にして真っ白に染まった。

「どうしたんだい、キョーコ！」

「泥棒か、痴漢か。私も混ぜろ殴らせろ！」

ほうきを、丸めた新聞紙を、年季の入ったハエ叩きを手に騒ぎを聞きつけた住人達が駆けつけるとそこには腰を抜かしたキョーコ。

「うああ、汚いよう。前が見えないよう。口に入っちゃったよう」

「あ、あ、あんた、正邪——だよ、な？」

そして、つい数分前までキョーコが身を案じていた相手。鬼人正邪らしき人物が懸命に目元を擦っていた。

なにぶん極上の泡によって白塗り状態なので今一つ正体がかめ



ないのだが。

「おんやあ。一体全体、どうして俺らの巣穴にアマノジャク様がいるのかね」

「ミヨシい、拭くものくれえ」

へたりこんだままのキョーコの頭越しに、すつとタオルが差し出される。

「なるほどねえ。みっちゃんが犯人ってわけだ」

この場で唯一事情を知るらしい黒い肌の美女は、唾然とする住人達の視線などどこ吹く風で、天邪鬼にこびり付いた泡を拭ってやる。

「ああもう、何しやがる！ 第二ラウンドっていうならこつちも容赦しないんだから……わぶっ」

口元にタオルをあてがわれて尚モゴモゴ不平の声を上げ続ける正邪。

その面倒を見てやるミヨシは、どこまでも楽しそうだった。



チヅルは馬鹿じゃない。

学園の重役を総ナメにしながらやってきた彼女の経歴からも察せられる通り、むしろその対極だろう。

「あなたも懲りない人ですね」

だから、アマノジャク様をめぐる不可思議現象については口をつぐんだ。

賢く立ち回ったつもりだ。消防にも警察にも、彼らが納得できる範囲で旧校舎火災について話した。それでも、事情聴取と現場検証の立ち合いでほぼ一週間の拘束。

やっとひと段落ついて帰ってきてみれば、彼女を置いてけぼりにして、T女学院は夏休みに突入していた。

「会長様からあれこれ指図される覚えはねえのですわ」

気付けばインターハイまで残り二週間。気合を入れて練習するかと学園に足を運ぶと、グラウンドには見覚えのある光景が広がっていた。

「グラウンドは公共の場です」

「だからこそ、ですわよ。パブリックスペースで何しようがわたくしの勝手ですわ」

「みんなの場所はあなたの庭ではありません」

白いビーチチェアのすぐ横をテニスボールが跳ねていく。

「このへタクソ！」

銀髪の転校生、二階堂アンリのヤジがグラウンドに響き渡った。

かわいそうに、テニス部のメンバーたちは言われっぱなしだ。エビのように背を丸めて、窮屈なラリーに精を出すほかないようだった。

「迷惑だからやめてください」

「うるせえですわよ」

チヅルがたしなめたところで、急角度に傾いたアンリのご機嫌が直ることはない。むしろ、悪化の一途を辿るようだ。

「で？　ここへはわざわざ世間話にでも？　お茶の一つも差し上げたのですが、あいにくこのザマですの」

その理由は明白だった。

アンリが持ち上げた左腕は、すっぽりギプスに覆われている。顔面の半分はガーゼに覆われ、水着を脱ぎ捨てても何ら問題ない密度で全身に巻きつけられた包帯が痛々しい。

そんな状態での日光浴にどれほどの意味があるのだろうか。

「ひどくやられたものですね」

チヅルは一応、人間らしい心配はしておくことにする。それにしても随分控えめな表現をしたものだった。

「全ツ然。わたくしが主様のお傍にいた時に比べれば、への河童ですことよ」

「随分と荒っぽい方に仕えていたようで」

「……あのお方は優しい方と申し上げたはずですわ。ただ、敵が多かっただけで」

肩をすかすような会話を続けるのには、ワケがある。

「それに比べればあんな脳筋バカ」

「あなたをそんな姿にした相手ですか？」

「次に遭ったら容赦いたしません。けちよんけちよんにしてそこらに

バラ撒いてやりますわよ。ふんだ」

旧校舎での出来事を、それ以上深く掘り下げることはいらない。

もはやアンリが常ならざる者であることにチヅルは気付いており、アンリもそうした機微を嗅ぎつけている。

二人の間には無数の地雷が埋まっている。真相を知りたいならそれを掘り起こすこともしなければならぬだろうが、それは今、この場ですることではない。返す返すだが、チヅルは馬鹿ではないのだ。

「二応、誤解ないよう申し上げておきますわね」

じりじりと照りつける日光を浴びて、アンリはサングラスの下で目を細めた。

「わたくし決して負けたわけじゃなくってよ」

「何を言い出すかと思えば、そんなことですか。どうでもいい」

「よくない」

ツンとそっぽをむいたアンリは、今度こそチヅルと話す気がなくなつたようだった。

「二階堂さん。提案があるのですが」

それは十分承知の上で、チヅルはバインダーに挟まれた一枚の用紙を取り出した。

「入部届をお持ちしました。陸上部への」

「はあ？ どうしてそんなモノをわたくしに？」

「勝った負けたに拘る気持ちは競技者として尊重します。ですが、汗より血を多く流す現状はいただけくない」

アンリの碧い視線が、入部届とチヅルの顔との間をせわしなく行き来した。

「生活態度の改善を提案します」

「それは……生徒会長としての忠告？ 陸上部部長としての勧誘？」

「あくまで友人としてのアドバイスです」

T女学院の入部届は至つて簡素なものだった。おまけに必要な事項はチヅルの手で記入済み。あとは名前を書くだけだ。

「……はあ。バカバカし」

そこまでお膳立てされても、一匹狼の心は揺るがなかったようだ

が。

「何度も申し上げた通り、わたくし、群れるのは嫌いでしたよ」

「頑なですね」

「当たり前ですわ。うわべだけの友情ごっこなんて——」

「せんぱーい！」

と、アンリの言葉を遮る、澁刺とした声。

「出ましたわね。子犬ちゃん」

二人が目を向けると、小柄な一年生がストップウォッチ片手にぱたぱたと駆けてくるところだ。

「名前くらい覚えてあげてください。ねえ、ツルガサキさん」

「全然惜しくないし字余りもいいところですけどね。そんなことより

センパイ、これ、これ！」

「これって、どれです」

「だからタイムですよ。私の新記録！」

ストップウォッチを受け取って、チヅルはにわかには黙り込んだ。

——あの時と一緒。

アンリは黙って様子を見る。チヅルの表情は、相変わらず固い。まるで、学園がアマノジャク様の影響下にあった時の再現を見るようだった。

「ど、どうでしょうか」

唯一の違いは、部長の反応を見守る後輩の顔にも緊張がみなぎっているという点だ。

「……ふむ。悪くないですね」

後輩にとつては、長い長い沈黙であったに違いない。

再び彼女の顔へと視線を移したチヅルは肩をいからせ大股に旧校舎を指すでもなく、依然としてその場に残った。

「あら。珍しいこともあるものですわね」

彼女の微妙な、そして大きな変化にアンリですら驚きの声を上げた。

炎天下のグラウンドに渦巻く熱気がプラスチックをとろかしてしまっただろうか。チヅルの口元には、確かに笑みが浮かんでいた。

た。

「や、やたっ！ 記録更新ですよね！」

「ですが調子に乗らないこと」

飛び跳ねて喜ぶ後輩に、チヅルは素早く釘刺した。

「記録は気分屋。モノにするには時間と根気が必要ですよ。ちょうど、その二階堂さんのように」

「わあ。またこの人だ！」

後輩は今になってアンリの存在を認識したようだった。

よほど緊張していたのだろう。そのぶり返しのようには大げさに驚いて見せる彼女を、アンリは醒めた目で見つめた。

「そうだ。あなたからも何か言ってやってください」

「い、言ってるよ、何をですう？」

「ちようどこの方——二階堂アンリさんが陸上部に入るかどうかの瀬戸際だったのです。何か一押し、あればと」

「うええっ!？」

「ですから先刻から、他人の汗の臭いに塗れるつもりは毛頭ねえって言うてるのですわ」

「そそそそ、そうですよ。やめましようよ。この人を入れると、何かよくない気が……」

「あら。聞き捨てなりませんわね」

木製のチェアが悲鳴のような音を立てた。

「どうしてそうお思いになられるのかしら？」

立ち上がったアンリの長い影法師から逃れる様に、「子犬ちゃん」は身をすくめ、チヅルの背後にこそそこそと隠れはじめた。

「だ、だって、怖いし。軽そうなんだもん」

「軽薄？ このわたくしが!？」

「ひいっ」

ドスの効いたアンリの声に震えあがったのは後輩だけではない。

たまったもんじやないのは流れ弾に晒されるテニス部だ。彼女たちはラリーを止め、固唾を呑んで陸上部とミイラの戦いを見守っていた。

「怖いよう。食べられちゃうよう」

「この失礼チビ。誰がアンタなんか食べるもんですか！」

アンリは怒り心頭だ。

もはや取り繕ったお嬢様言葉すらかなぐり捨て、悪鬼のような形相で迫る彼女の前に、チヅルが立ちふさがった。

「そうですねえ。軽いかどうかはさておいて、二階堂さんには忍耐が足りていないように思えますねえ」

「は？ それはどういう」

その言葉がよほど予想外だったのだろう。瞬間、怒りを忘れるほどの呆気に囚われたアンリの手から、チヅルはさっとバインダーを取り返した。

「実は勝負に向いていない方なんじゃないかな」

「ああ?」

燃え盛るガソリンにナパームを投入するような一言だった。そのくせ、炎天下のグラウンドにいた面々を襲うのは永久凍土を吹き渡る風のような悪寒でしかない。

「向いてない？ 今向いてないとおっしゃいました？ このわたくしが、勝負に?」

「二階堂さん、怒りっぽい方みたいですから」

早口でまくしたてるアンリに飄々と付き合うチヅルは、そんな寒さでもまだまだ物足りないと言いたげだ。

——ほんとう、ほんとうに頼むからやめてくれ。

必死に目で訴えかけるテニス部たちなど目にも入っていない様子で、チヅルは首筋をバインダーであおいで見せる。

「スポーツは日々の地道な努力が結果に直結しますから。それをこなす忍耐が無いようなので、実はそれほど勝利に貪欲ではないのかなー、と」

「かいちようさまあああ」

ついにアンリの怒りが爆発した。

びゅるん、という風切り音を立てて彼女の腕が霞む。

「ぎゃあっ」

「子犬ちゃん」が、実に小動物じみた悲鳴を上げた。  
「よくってよ。ええ、よくってよ」

しかし、それだけだった。

チツルの顔面にお約束の烈風ビンタが炸裂するようなことはなく、代わりに彼女の手からバインダーが消え失せている。

「無理にとは言いませんよ」

「おだまり！」

鬼気迫る表情で入部届にペンを走らせながら、アンリが吠えた。

「会長様、あなた様の一番を教えてくださいさる？」

「一番とは？」

「陸上とは走るだけではないのでしよう？ 投げたり、飛んだり」

「はあ。得意分野ということなら短距離走ですね」

「では今から走りますわ。それ」

「いや、でも先輩、そのケガじゃ」

怪訝な表情を浮かべる後輩を後ろに、チツルは全身の包帯を脱ぎ捨てていくアンリをじっと見つめた。

「会長様の記録、全部塗り替えてご覧に入れますわ」

「それはそれは。楽しみですわね」

力任せにギプスを引っ抜き、ガーゼは丸めてボールにしてテニスコートにシュートする。

一週間前にアンリが病院に担ぎ込まれた時は身動きもできないほどの重症だったとチツルは聞いている。だというのに、露わになった肌には傷の一つも見当たらない。

「では、もしそれが出来なかったら？」

傷のかわりに、アンリの額にはぶつとい青筋。あくまで挑発的なチツルの言葉に、それが凶暴に脈打った。

「その入部届、煮るなり焼くなりして下さって結構ですことよ。いち部員として、会長様のどんな命令でも聞いてやりますわ」

「ツキシロさん、とりあえず50メートルからタイム測ってあげてください」

「は、はあい。名前違うけど、よろこんでー」

ヘリコプターのように空めがけて吹っ飛んでいくのではないかと心配になる勢いで肩を回すアンリの後を、子犬ちゃんがおっかなびっくりついていく。

「目ん玉かっぽじってご覧になるがいいですわ！」

相変わらず声のでかいアンリにひらひらと手を振って、チヅルはビーチチェアに体を横たえた。

そうしていると、今日の運動らしい運動は自宅から学園までの道のりを走っただけにも関わらず、身をとっぷり浸すような眠気が襲ってくる。

「思えば一週間、ほとんど休んでませんでしたね」

生徒会長の仕事は生徒たちの生活を守ることに。

そのために骨も身も砕いて頑張ったのだ。少しくらい寝てもバチは当たるまい。

「あの……チヅルさ、いえ、部長」

こんなことなら念入りに日焼け止めを塗っておくんだなあ、と考えて目を閉じた矢先だった。

自分の名前を呼ばれていることに気付いたチヅルが薄目を開けると、面持ちの固い数人の生徒がこちらにあるいてくるどころだ。

「もう部長と呼ぶ必要はないと思いますが」

自分の口から飛び出た言葉の刺々しさに、チヅル自身が驚いていた。

「その、悪かったよ」

先頭に立つ三年生が、気まずそうに頭を下げた。

「ヤメた時の私達はどうかしてた、頭に血が昇ってたっつーか。でも部長、もとはと言えばあんただって」

「ちよつと待って」

大柄な三年生を押しのかけた別の生徒にも見覚えがある。

当然だ。皆、アマノジャク様の噂が流行り出した時期に陸上部をやめていった部員たちだった。

そんな彼女たちが、今は揃って陸上部のユニフォームに身を包んでこの場に集合している。



「口悪いけど、謝りに行こうって言い出したのはこの子なの。この子、乱暴でガサツでぶきつちよだから。こういうことしか言えないみたいで」

「おい。言わなくていいんだよ、そんなこと」

束になった書類が、チヅルに差し出される。

それはチヅルが手にしたものと同じ、入部届だ。風もないと言うのに、その端がわずかに震えて見える。

「部長、ムシのいい話だったのは分かってる。でも、もう一度、私たちにチャンスをくれないか」

「雑用でも何でもします。私からも、お願いします」

エライ役職についたところで、感謝や尊敬が必ずしも伴ってくるとは限らない。

これまでの数週間で、それを痛いほど味わってきたチヅルにとって、こんな風に深々と頭を下げられてしまったのは初めての経験だった。

「あの……もう、それはいいですから」

当然、途方に暮れる。チヅルが何と返事していいやら迷いながら彼女たちの顔を見渡すうちに、三年生が一人足りないことに気付いた。

「吾妻先輩は？」

チヅルの問いかけに、彼女たちは顔を見合わせた。戸惑うような表情が、答えだった。

「そう、ですか」

鬼神正邪の力が、彼女たちの退部にどのくらい影響したのかはチヅルの預かり知るところではない。

しかし彼女の王国が崩壊して尚戻ってこないというのなら、スバルは自らの意志で部を離れていったに違いない。

決してうまくやっていたとは言えない仲だったが、慣れた顔が減っていくことにチヅルは表情を曇らせていた。

「ダメか。部長」

その沈黙をノーと取って、先陣を切った三年生が呻くように言った。

「過去に向き合うことと、過去に縛られることは違う」

「なんだって？」

「私、ずっと結果を残す事ばかり考えていたんです。それが部長として、生徒会長として当たり前のことだって信じて」

チヅルは何度も拳を作っては開いていた。

旧校舎での戦闘。その中でこさえた真一文字の傷は未だ塞がらず、ズキズキという疼きを送ってよこす。

「そのせいで、本当にいろんな人を傷付けてしまった。部のみんなも、前の部長も」

『薄々、こうなるんじゃないかと思っていたんだ』

あれやこれやと策を弄し、嘘を弄し。

好き放題してくれた鬼神正邪だったが、この一言については全くの真実だった。

以前のチヅルでは絶対認めたくないことだったが、あの火事の後と成っては、不思議なくらいすつと納得できた。

「私にも、チャンスをくれますか」

ぎゅっと拳を固めれば、傷が痛む。きつとこの痛みは、ずっと続く。

過去を捨てて、やり直す——あの日放った宣言を。鬼神正邪との約束を果たし、真に彼女にチヅルが打ち克つ、その日まで。

「もう一度だけ、あなたたちの部長でいさせてください」

「チヅル、お前……」

静かに話を聞いていた三年生が、そつとチヅルの肩を抱いた。

ポーズなどではない。顔を見合わせて笑いあう部員たちの言葉通り、彼女は本当に不器用な性質なのだろう。

「ありがとう。よろしく頼むぞ。部長」

チヅルはその不器用さを噛みしめる。

「こちらこそ。頼りにしています」

こうして彼女の短すぎる休憩は終わった。

「さあ、やろうぜ皆。長い長いブランクだ。さっさと帳消しにしないと！」

この瞬間からチヅルはT女学院の名門陸上部を束ねる立場に返り

咲いた。スケージュeringとミーティングと練習に忙殺される日々が舞い戻ったのだ。

それでも部室へと駆けていく。『新入部員』たちを見送るチヅルの心は晴れやかだった。

「センパイ……よかったね……！」

遠くから固唾を呑んでやりとりを見守っていた子犬ちゃんが、夏日に輝く目尻を拭って微笑んだ。

「ホラよそ見しない！ 行きますわよ！」

「ひゃ、ひゃい！ ただいま！」

アンリの声が彼女の横つ面を引っ叩く。

驚いた後輩が、スターターピストルを取り落とし、見事に暴発させ、腰を抜かし——とんだあわてん坊劇場に肩をすくめながら、アンリの目もまた、チヅルの姿を追っていた。

「そこがスタートラインですわよ、チヅル様」



「え。倒れてたって」

「大げさなんだよ。腹を空かせてへばってただけだ」

未だに落ちないミントの匂いに文句を言いながら、正邪はグリーンロボトルを手を取った。狂気じみた量のシャンプーが、彼女の頭にひねり出される。

「あのミヨシってやつにすぐ捕まったよ」

激しくシャンプーを泡立てる正邪は、風呂とは無縁の数日間の穴埋めをしているようだった。湯船のへりに顎を乗せ、キョーコはその様子を見守る。

「でも、どうして屋根裏に？ 空き部屋は沢山あるけど」

「高い所じゃないと落ち着いて眠れないんだ」

しばらくキョーコが観察して分かったことだが、正邪の髪の中に見える色とりどりの房は、どうやら地毛であるらしい。

しかし濡れ髪を梳く彼女の指をいくら見つめたところで、ああも奇麗に色が分かれる仕組みは一向に分からなままだった。

「こら、ヘンタイ」

いつしか食い入るようにつめていたキョーコのすぐ傍で、水柱が上がった。正邪がセツケンを投げつけたのだ。

「人の裸をじろじろ見るな。非常識だろ」

「ご、ごめん」

まさか正邪に常識を解かれるとは思わなかったが、確かに彼女の言う通りだった。

仕方なく、キョーコは視線を逸らす。

ほとんど年中貸切の共同浴場に漂う湯気を見つめる内に、どうしても、正邪の王宮に漂っていた霧のことが思い出された。

「せーちゃん、あのドクロは一体なんだったの？」

「さあ。よく知らんね」

「でも」

「旧校舎の中庭に埋まっていたんだ。それを猫が掘り出して——あとはとにかく、知らん」

洗面器の湯を一気に被って、正邪は肩口に鼻を近づけて自分のにおいを嗅いだ。

「ま。こんなもんでいいや」

眩くなり、正邪はおもむろに腰を上げる。

「わ」

見るなど他人に言う割に、自分から隠そうと言う気はさらさらないらしい。タオルの一枚も巻かずに湯船までやってきた正邪は、ざんぶと音を立てて湯に浸かる。

「本当に……常識、あるのかな」

「こちとら天邪鬼だぞ。私にそつちが合わせりやいいのさ」

とことん勝手なことを言っつて、正邪は湯船の湯を蹴散らした。

「ただあのドクロ。あれは普通の生き物の骨じゃない」

「それは、例えばわたし達みたいな鬼とか？」

「そんな気はするがな。死んであも力が残るとは、只者でないのは確かだ」

共同浴場の湯船はそう大きくない。

キョーコが尻半分くらい横にのけてやっても、すぐ隣にいる正邪の

息遣いが分かるほどだった。

「記憶を操る力も、ヒトや獣を操る力も、すべてアレが寄越したものだ」

これからも知りようは無いのだろう。

角のような突起を持つ不気味なドクロは、正邪の王国の崩壊と共に消滅してしまった。

——だから、もう全部終わったんだ。

しかしいくら自分に言い聞かせても、正邪の手に握られて笑う不気味な少女の生首の姿が頭を離れない。

それを無理やり振り払うようにして、キョーコは明るい声を張り上げた。

「でも嬉しいなあ。歓迎会しなきゃね。せーちゃん、好きな食べ物とかある？」

「その呼び方、そろそろやめにしないか」

「だってさあ。こうしてトモダチになったわけだし」

「勘違いするなよカミナリ女」

キョーコの両手首を、正邪の手が掴んだ。

「大ボスを倒せば仲良しになれるってか？ 笑わせるなよ」

湯船の縁に置かれていた洗面器が転げ落ちた。二人っきりの浴場に、その音がいやに大きく反響した。

「確かに私はお前に負けた。気が済むまでその身勝手ってやつにも付き合ってやる。だが」

正邪に導かれるまま、キョーコの掌が熱い物に触れた。

「感じる、私を。この憎悪を」

女の子の体は本来暖かくて柔らかいはずなのに。

キョーコの掌の下で脈打つ心臓は、熱した鉄のように熱く、どくどくと煮えたぎっている。

「だから私は敵であるお前の傍にいてやる。私の下剋上を邪魔しやがったお前が分不相応な「よいこ」とやたらに潰される姿を、一番近くで見たいからな」

正邪の頬を、汗の粒が滑る。瞬きもせずじっと見つめる彼女は、人

形のように美しく、そして恐ろしい。

「私たちはぜったいにオトモダチとやらにはなれない。それでもお前との間に絆があるとすれば、それは憎悪というものだ」

肌に吸い付いたように離れなかった掌がゆっくり引きはがされていく間、キョーコは何も言わなかった。

彼女が薙ぎ払い、踏み潰したものは、確かに鬼人正邪の夢であり、野望だったのだ。

「最後に一つ言っておくぞ」

湯の中でふやけたスマイリーを見つめていたキョーコは、正邪の言葉にはっとして顔を上げた。

「私はお前のことが大嫌いだ」

夢を失うことの痛みと、奪われることの憎しみ。キョーコはそれをイヤというほど知っている。

だが、言っておかねばならないことなら、キョーコにもあった。

「それでもわたしは、せーちゃんの方だよ」

正邪は壁を覆うタイルを見つめたまま、湯に顔を沈める。そのままぽこぽこ音を立てて潜っていく彼女に、今度こそキョーコも掛ける言葉が無くなった。



『——近隣の住人に不安が広がっています。六件の事件において、いずれも犯人は鋭い刃物のような凶器で犯行に及んだとみられ、同一犯の——』

街頭のモニターには河川敷のグラウンド近くの空撮映像が映し出されている。

「お姉さまは、やはり」

荒い画素の中で運び出されていくブルーシートを見つめる双子は、根が生えたようにその場から動けずにいた。

「あーあ。あの人もしよせんは鬼つてことだよね」

軽い調子で言っただけのオルガ。

夏休み真っ盛りの中、混雑の中に立ち尽くす双子を、雑踏は小突き、怪訝と小声の罵りを放って寄越す。

オルガの腕を掴むマヤの手は、細く、冷たい。凍えにも似た震えをほぐすように、オルガは優しく指を絡めた。

「私にはオルガちゃんしかいません。あなたまでいなくなったら、私」  
「大丈夫だよ、マヤちゃん」

マヤを庇うように抱きしめたオルガの背中を、革のビジネスバッグが打ち据えた。

「おい」

「あはは。ゴメンナサイ。よそ見してた」

舌打ちだけを残して去って行った若いスーツの男の背中に、無邪気に笑ってオルガは手を伸ばす。

「ボクはどこへも行ったたりしない。ボクが生まれたことに意味があるのだとすれば、それはマヤちゃんを守るためだ」

オルガの皮膚が、指先からゆつくりと剥がれていく。やがて、ぱたぱたと体を二つに追って舞いあがったそれは、蝶の形をとっていた。

「だから、何も心配する必要はないんだよ——大事な大事な、ボクのいもうと」

陽炎にゆらめく町を、一匹の蝶が飛んでいく。

白い蝶が白いワイシャツの背中にふっと溶け込んだ直後、どさりと  
いう重い音が聞こえた。

### 3 『ワタシはノロワレ／ボクはイツワリ』 序章 『それは世界を置き去りにする速度』

子供の頃を思い出す。

とはいえ、今でも外見は十分に子供なのだけど。

怪異という曖昧な存在。その中でも鬼というとりわけ曖昧なものに生まれたせいで、年月の経過すら彼女に取っては曖昧だった。

背はちっちゃいままだし、シャツを軽くつまんだような胸の膨らみとか、お酒を受け付けなところとか。何ひとつ変わらないまま十とも百ともつかない冬を越して来たように思う。

小さな鬼は震える肩を抱き、石壁にもたれた。

この震えは寒さなのか、それとも恐怖なのだろうか。それすらも分からない。自分が何に恐怖しているのか——そもそも、恐怖とは一体なんだっただろうか。それすら満足に思い出せない。綿雲がほつれて千切れていくように、彼女の記憶も、知恵も、忘却の彼方に押し流されていく。

子供の姿でありながら徐々に白痴に近づいていく自分。

どうしようもない無力感と共に心を蝕むのは、彼女に課せられた『呪い』だ。

ねずみ色の空から粘り気のある雨が降り始めていた。

気付けば見知らぬ町の、見知らぬ通り。濡れた氷のような石畳は、真つ黒に擦り切れた彼女の素足に容赦しない。

あまりの冷たさに心が折れてへたり、と腰を下ろせば、今まで立っていたことが不思議なくらい精も根も尽きている自分に気付く。

ああ、この肌を突き刺す雨の、なんと冷たいことか。

故郷の麦穂を濡らしていた雨は、確かもっと暖かかった——はずだ。

あの麦穂。あの黄金の海。



薄暮の時間がやってくると、彼女はつと足を止めて振り返る。

薄紫に染まる家々と風車が遠くに見えて、それは、母が夜な夜な読み聞かせてくれる絵本の挿絵そのものだった。

星を数えながら辿る家路。

一番の高台にある赤い屋根の家。

檜の木のドアが軋む音。

そこには優しい母がいた——はずだ。

そこには威厳溢れる父がいた——はずだ。

彼女が生まれた場所。

故郷に有ったものは、彼女にとっての紛れもない日常だった。

外の世界では手に入らない、黄金に輝く時間だった。

毎晩母の膝に頭を預け、暖かなブランケットに包まれたまどろみの中で、この幸せが果てしなく続くものと彼女は疑いもしなかった。

それが、どうしたことだろう。

今、彼女は力の一滴まで使い果たし、見知らぬ町の路上に朽ち果てようとしていた。

マヤ。マヤ・カミンスカ。死に掛けた鬼の少女は、そういう名前を持っていた。

彼女は力なく壁に背中を預けたまま、濡れた膝の上に止まった蝶を眺めていた。

いつからそこにいたのか分からない。ぼろぼろの白い羽は風もないのにそよそよと動いている。感情を映さない複眼が、ずっと彼女を見上げてきていた。

「あなたも、帰れなくなっちゃったの？」

答える代わりに蝶は舞い上がった。

その羽はマヤに負けずボロボロだというのに風をはらみ、蝶は雨の中に飛んでいく。それがとうとう見えなくなってしまいうまで、マヤは呆けたように口を開いて視線で追い続けた。

後に取り残された彼女は崩れるように前にのめると、石畳にびったりと口をつけた。

雨はまだまだ強くなる。石畳の敷石の隙間を流れる雨粒に、灰色に

くすんだ舌を這わせる。野良犬のように水をすすすることに、もはや抵抗はない。

そういえば、最後に水を飲んだの時のことも思い出せないや——必死に水を舐める自分をどこか遠い所から俯瞰するように思った。

鬼の体は強靱で、素直にできている。

喉が渴いたり、お腹が空いた時の欲求は、人の比ではない。たとえ頭が拒否していても、暴力的なまでの衝動がマヤの頭を石畳に押しえつけた。ほんの少し水分があれば、それだけでしばらくは生きていける。それが、いたずらに苦痛を長引かせるだけだとしても。

「おかあさん」

雨のつぶてがマヤを打ち据えた。

こうしていると『呪い』をすぐ傍に感じる。大事な記憶が、毛糸の球を解くように消えていくのが分かる。

「おとうさん」

黄金の海も、星の数も、父も、母も、家族と過ごした故郷の風景も。途方もない絶望に苛まれながら、どうして自分がこんな目に遭わなければいけないのかと何度も自問した。しかし、答えは出ない。

ある日、急に世界が牙を剥いた。そうとしか言い様がなかった。

「おい」

こつり。

硬いものが、ごわごわに髪の毛の絡まったマヤの頭を小突いた。

「山から流れてきた鬼か。放っておけよ。病気かもしれない」

マヤが頭をもたげると、どす黒いシミのついた灰色の革靴が見えた。ネズミ色の町には似つかわしい、ネズミ色のコートを着た、ネズミのような顔をした男たちが、庭先に野良猫の死骸をみつけたような顔をして彼女を見下ろしている。

「ここで死なれても面倒だろう」

爪先を腹の下に入れられると、枯れ木のようにスカスカになったマヤの体は簡単に仰向けに転がされた。あまりにぞんざいな扱いを受けながら、それでもマヤは嬉しかった。路傍の石のように転がる自分を、誰かが気に留めてくれただけで十分だった。

「お前どうした。親はいないのか」

「待て、何か言おうとしてる」

たすけて。

懸命に言葉を絞ろうとする。

マヤの喉が、ごぼりと不吉な音を鳴らした。その口からこぼれ出したのは黒く濁った塊だった。慌てて口を押さえても、指の隙間から止め処なくヘドロのような塊があふれ出る。それが石畳のくぼみに溜まった水の中で、ぐるぐると影絵のように渦を描く。

「こいつ、呪われてる」

「どうする？」

「どうするもこうするも……」



「悪いな。死ぬなら一人でやってくれ」

ネズミ男たちが町外れまでマヤを引きずっていく間、誰も彼らの行く手を阻もうとはしなかった。

それが、当たり前前の時代だったのだ。

子供も大人も、それ以外も、何か厄介なものを抱えていればモノとして捨てられる。ましてや、それが呪いであれば尚更だ。

「私、何を期待してたんだろ」

男たちが行ってしまおうと、することも、他にできることもないので、マヤは再び泥をすすり始めた。

こうなることは分かっていたのに。あの人間たちにすがろうとして分かったことは、結局自分が愚かだということだけだった。

目を閉じると、泥の味を強く感じる。目の前に、湿った闇が見える。ざあざあという雨の音が、ごうごうという唸りに変わり——いつかこの渦が、すべてを真っ白に洗い流すのだろうか。マヤの中にとぐるを巻く呪いのように。

——どうして私がこんな目に遭わなくちゃいけないの？

闇の中に問いかける。

何かも曖昧になりつつあるマヤの中では、自分の背負う呪いこそが、今や最も確かで最も傍に存在を感じることができた。

しかし、やはり彼女の問いに答えるものはない。

いずれすべてを忘却の大河に押し流してしまう時が来るとすれば、その時私は何を思うのだろうか。

力ない動きで体をもたげたマヤが、今一口だけ泥水をすすろうと水溜りを覗き込んだとき、思わず息を呑んだ。

「やあ。こんなところにいたんだね」

水面に映し出された自分が語りかけてきた。

と、思ったが違う。彼女は生きて、息をして、確かに目の前にいる。

「探したよ、マヤ」

屈託なく笑うその顔は、マヤと瓜二つだった。



『わたしはカミナリ』

第三章・ワタシはノロワレ／ボクはイツワリ



「立てる?」

彼女が優しく小さな掌を開くと、まるで雨の中に白い花が咲いたように見えた。暖かく、柔らかい香りが立ち昇り、その笑顔に見入るうち、マヤは束の間、自分の苦しみをすべて忘れてしまっていた。

「お腹すいてない?」

輝くような少女は、実際に輝いていたのかもしれない。ねずみ色の空から降りしきる雨の中で、彼女の髪も瞳も、燃えるような光を放っている。

その色は、すりきれた記憶の中にある黄金の麦穂のものだ。

「ねえ、美味しいものを食べにいこうよ！」

白い蝶のあしらわれた小銭入れを取り出して、彼女は屈託なく笑いかけた。

「お小遣いあるからさ。丁度すぐその店がボクのおススメで」

「やめて」

少女に得体の知れないものを感じたマヤは、気付くと彼女を押しつけていた。

「私、呪われてる」

黙って手を差し伸べ続ける少女の前で、マヤはぼろきれのようなネグリジエの襟を掴むと、左肩をはだけて見せる。擦り切れた肌を滑る雨粒のせいで、皮膚の下に息づくその形がくつきり浮き出て見える。

「何もかも忘れていく呪い。お母さんの顔、お父さんの顔、家族も、みんなすべて無くなっちゃう」

自分の言葉に、マヤはひそかにぞつとした。

親の顔。故郷の風景。さつきまで確かに思い出せたのに。おぼろげな記憶の残り香ですら、もはやマヤの中から消えて失せようとしていた。

「だから……近づかないで」

「ボクはキミを助きたいんだ」

「やめてよ。見せ掛けだけの優しさなんて、もうたくさん」

しかし少女は何度も何度も。

「ねえ、ぎゅってしてあげる。いいでしょ」

「やめてよ。やめてったら」

何度も何度も何度も、うんざりするくらいの根気強さで。

「欲しいものはない？ 痛いところは？」

「やめて。やめてったら……もう、いいから」

「分かった」

それ以上の意固地さを発揮し続けることにマヤが辟易してきた頃合にようやく相手が折れた。

「じゃあ、ここに待ってて。すぐ戻るから」

小走りに遠ざかっていく小さな背中が、どうしてもさっきの白い蝶を連想させた。

「うん。待ってるね」

マヤは雨に囁いた。

止め処なく振り続ける雨が、伸びっぱなしの前髪を伝って胸に落ちるのを数える。

百数えて雨は止まず、二百数えて雨はもっともつと強くなった。

そして、どうやらあの少女は戻らない。元から期待していたわけではないが、マヤは雨の中に小さくため息ついた。

こういう出会いは初めてのことでない。さっきの男たちなんて、だいぶ親切なほうだ。人がすべてそうだとは思わないが、好い顔をして近づいて、手に負えないとわかるや彼女を投げ出したり、そもそも彼女を利用しようという魂胆が透けて見えたり。他人に振り回されて傷つけられることに、マヤはいい加減疲れ果てていたのだ。

「ぎゅってしてあげる、か」

それでも少しだけ、あの少女の態度に心は満たされてはいた。

「ありがとう」

「なにが？」

「ひゃあつ」

だから本当に彼女が戻ってきた時は、心底驚いた。それも、死角からコンニチワなんておまけつきだ。ただでさえ中身が残り少ないのだ。口から飛び出しそうになった心臓を必死に手で押さええているマヤを見て、少女はくすくす笑った。

「いやー、やっぱり大繁盛だったよ。すっごい行列でさ」

彼女は紙袋を抱えていた。

座ったままでも、マヤの嗅覚は袋を通して漂ってくる香ばしい香りを嗅ぎ取っていた。途端に、水だけでは膨れなかった腹の虫が猛烈に主張し始める。

「はずかしい、ね」

やはり、鬼の体とは素直なものだ。持ち主の恥じらいなぞお構い無

しにぐうぐうなり続けるお腹を抱えるマヤが血の気のない頬を赤らめるのを見て、少女はむしろ安心したように焼き菓子のひとつふたと手渡してきた。

「けほっ」

「急がないでいいからね。全部あげるから」

食べれば食べるほどお腹が膨らんだし、疑問はもっと膨らんだ。

「さつき、並んだって」

「うん」

「こんな雨の中、みんな真面目に列を作って？」

「そう。物好きだよねえ」

大袈裟に少女が肩を竦めて見せるとマヤは笑い声を洩らした。

「じゃあ、あなたも物好きの一人ってことね」

「キミのためなんだけど？」

一緒に笑っていると目の前の少女の正体なんてどうでもよくなった。最後に呪いのことを忘れて、こんなに大きく口を開いて笑ったのがいつだったのか、マヤには思い出せない。

「げほっ」

たったひとつの咳で、全てがぶち壊しになったが。

「そっか、飲み物も一緒に買ってくればよかつ……」

マヤの咳は収まるどころかどんどん激しくなる。とうとう地面に手をつけて喘ぎ始めた彼女の背を少女がさすってやっていると、腐臭を放つ黒い液体がマヤの口から溢れ出た。膝の間に黒い水溜りを広げながら、マヤはため息が出る思いだった。実際はそれどころではないが。

「ごめんなさい。せっかく買ってきてくれたのに」

マヤが口元を拭くと、頬に黒い筋が残った。

「私と一緒にいると、あなたも呪われちゃうかも」

「構わない」

「私は構う。ほら、行って。お母さんが心配してるよ。こんな天気だし、おうちに帰らないと」

「金の麦畑と星の海。赤い屋根の家に」

我知らず喉が鳴った。

それは、マヤが己の記憶の中にしかないと思っていたものだった。

「あなた、誰なの」

少女が泥の上に膝をついた。

「ボクはキミを知っているし、キミもボクを知っている」

鏡と向き合っているような錯覚を覚えていると、ふいに少女が手を伸ばしてきた。びくりと体を引きつらせて逃げようとするマヤの頬を掌で包み込んで、少女は優しく語り掛ける。

「さあ、ボクの名前を呼んで」

「知らないよ。そんなの」

「そんなはずがない。もっとよく見て」

マヤの視線が少女の目元をなぞる。目尻にうつすら浮かんだほくろも、尖った小さな角も、彼女の持つものとまったく同じ。

鏡像の少女を見つめるうちに、ひとつの名前が喉の奥からせり上がってきた。

「……オル、ガ」

口が勝手に動いていた。

知らないはずの名前のはずなのに、響きだけで胸の奥に電気が流れたように切なくなった。

目の前の少女もそうだったに違いない。マヤにはそれが手に取るように分かる。なにせ、彼女とは全てが一緒なのだから。

「そう。ボクはオルガ。キミのお姉ちゃんだよ」

雨を受け付けないオルガの頬が濡れている。

潤んだ目からこぼれた一粒の涙が彼女の頬を滑り落ちていく。

「おねえ、ちゃ……」

「おいで」

鬼の体は、正直にできている。

足りないものを補おうとする欲望は、なんのためらいもなく泥水をすすらせるくらい強い。だが、今のマヤを突き動かす衝動は、喉の渇きなんて比べ物にならないくらい強かった。

もう二度と立てないと思うほど萎えていたマヤの手足が、ばね仕掛



けのように跳ね上がる。抱擁を求める妹の勢いにオルガは泥の上に押し倒されたが、そんなことは気にも留めない。

「ごめんね。お洋服、汚しちゃうね……オルガ、ちゃん」

妹を胸に抱いていれば、泥濘の感触はむしろ心地良いくらいだった。

「ボクこそごめん。キミと出会うのに時間をかけすぎた」

マヤの気が済むまで優しく抱きしめてやると、オルガは立ち上がった。

これほど長い時間雨に打たれていたというのに、その服も肌も、まったく濡れていない。血色のいい頬を輝かせながら雨のカーテンの中でくると踊った彼女がハミングをはじめた。雨の中にかかる虹のように明るい歌声だった。マヤの世界が、僅かに輝きを帯びた。

「東の果てには、鬼の王様の国があるんだって」

「鬼の……王様？」

「そう。キミの呪いよりもずっと偉くて強い、鬼の王様」

未だ雨脚は強いが、雲間からは鈍い橙色の光が差し込み始めている。夕陽が出番を待っているようだった。

「王様なら呪いを解くことができるかもしれない」

しばらく間を置いてから、マヤは力なく笑った。口の端から、黒いへドロが流れ続けていた。

「きつと、私は王様に会う前に全部忘れちゃう」

「なら、忘れた分だけ奪い取ればいい」

あつけらかなとオルガが言った事は、マヤにはすぐに理解できなかった。

「キミはずっと奪われて生きてきた。今度はキミが奪うんだ」

「そんなことどうやって。私にはできないよ」

「出来るとも。だって、キミの声はこんなにも美しいのだから」

一小節か、二小節か。オルガの奏でる短い繰り返しはマヤの耳の中にするりと入り込み、頭の中で乱反射する。

忘れていたはずの、失われていたはずの記憶を揺り起こす。

「マヤ。歌ってよ」

「歌なんて、歌えない」

雨の作り出す霞のカーテンの中に、オルガの白い牙が煌いた。小さな形のいい唇から、細く長く流れ出した歌声がどうしようもなくマヤの心を揺さぶった。

「……知ってる」

オルガは雨に唄う。雨もオルガと共に唄う。

「……わたしは、この歌を覚えてる」

目の前で白い花が咲く。蝶が乱れ飛ぶ。オルガが差し出す手を、マヤが拒むことはもうない。

「雨に歌おう。世界に歌おう」

手を握る。暖かい。

久しぶりに感じる、生きた暖かさだった。

あの黄金色の海の中、煉瓦の家の中、母の膝、父の背中。そして、大好きな姉。

「マヤ。キミになら出来るよ」

自分の名前を誰かに呼んでもらえるだけで、心の中に陽光が差すようだった。春の陽気に誘われた蕾がゆつくりと膨らむように、マヤの唇が最初の音を紡ぎ出す。その瞬間、強い風に吹かれたような気がした。記憶の引き出しが一斉に解き放たれた。

止め処なく溢れるメロディと歌詞で頭が爆発しそうだ。世界の始まりから終わりまで歌い続けても尽きないほどの。自分がまるで自分ではなくなったような、浮遊感にも似た高揚の中でマヤは歌い始める。

「聞いたことがあるかい。雨は歌なんだ。天が世界に囁く歌」

本当に、この歌が永久に続けばいいのに。

願いながら想いを乗せて歌詞を飛ばすと、マヤの鼻先をかすめて白い蝶が飛んでいく。

彼女の足元では『呪い』が吐かせた黒いあぶくが冷たく沸騰していた。マヤが言葉を紡ぐたび、泡が一つ弾けるたび、白い蝶が花卉のよな羽をはためかせて舞い上がる。ガラス細工のような羽と羽の間で彼女の歌声は反響し、どこまでも広がっていった。

——もう一度、家族のもとへ帰りた。

歌詞にいつそう強い感情を乗せて歌い上げた時、ついに町が綻びはじめた。

今や町の空を覆って舞い飛ぶ蝶に紛れて石畳から黒い煤が立ち昇る。マヤの足元で、頑強に固められた地面がビスケットのように砕けていった。たった一枚の石畳から生まれた亀裂は蛇の舌のように素早く道を這い、漆喰で練り固められた建物の壁を登っていく。

——私の家族を、私のきおくを返して。

とうとう重みを支えきれなくなった壁が砕け散り、巨大な尖塔が二人の頭上に向かって崩れ落ちる。その瓦礫は二人を押しつぶすより早く空中で塵になり、言葉と旋律を練り上げながら、マヤは頬を撫でる塵を感じている。

彼女たちからは全てがよく見えた。

世界が砕け、崩れていく。人も町並みも消えていく。つんぎくような悲鳴でさえ、マヤの歌声を遮ることはできない。

「音より速いものなんて存在しない。僕たちの歌に、世界だつて追いつけない」

塵に還る焼き菓子を見ながらオルガが言い終わる頃には悲鳴も聞こえなくなつて、ただ、塵が降り積もるサラサラという音だけが辺りに響いていた。

「世界が僕らを忘れる前に、僕らが世界を置き去りにしてしまえばいいんだ」

不意に、言いようのないものが背筋を駆け上って、マヤの歌声が上ずった。

異様に硬く節くれだったものに手を包まれた気がした彼女が目も落とす、が、そこにはマヤの手を握って微笑むオルガがいるだけだ。柔らかく、暖かい香り。彼女は地球上、たった一人、マヤの味方でいてくれるお姉ちゃん——の、はず、なのだ。

「さあ、続けて」

オルガの奏でる音色に導かれるように、マヤは歌い続ける。

二人の音は、文字通りありとあらゆるものを置き去りにした。

「あ」

崩れる町並みを前に、オルガがぽつり呟いた。

「あの店、好きだったんだけどな」

「数え切れない死と滅びを弄びながらすることではないのだろうか、マヤは堪えきれず笑っていた。オルガも腹を抱えて笑う。ひたすらに無邪気な二人の笑い声が歌と共に空を満たしていく。」

「ねえ、マヤ」

「うん」

「愛してるよ」

「うん」

そして、一つの町が忘却の彼方に消え去った。

夕陽に染まる灰の平野に、ただ、二人分の足跡だけが残されている。

双子の鬼が極東の島国に流れ着く前の、遠い遠い日の出来事。